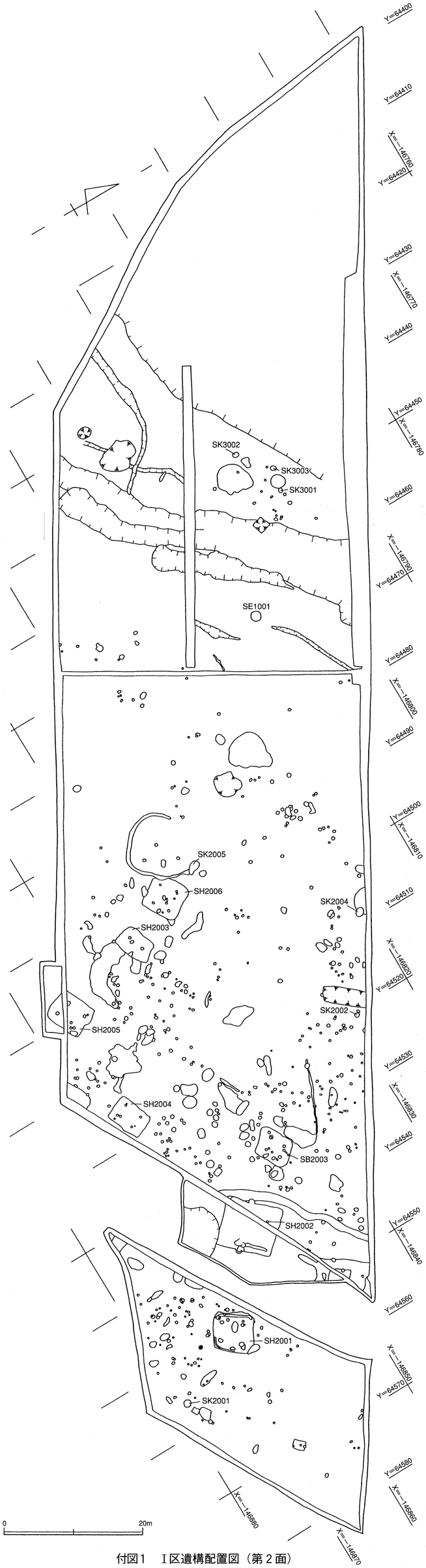
兵庫県文化財調査報告　第219冊

貴船神社遺跡

2001.3

兵庫県教育委員会



付図1　Ⅰ区遺構配置図（第２面）

Ⅲ－C区
Ⅲ－A区
Ⅲ－B区
1号炭窯
2号炭窯
谷状地形
土器
0
10m
Y=64690
Y=64700
Y=64710
Y=64720
Y=64730
Y=64740
X=−147080
X=−147070
X=−147060
X=−147050
X=−147040
X=−147030
X=−147020
X=−147010
X=−147000

付図２　Ⅲ区遺構配置図

兵庫県文化財調査報告　第219冊

貴船神社遺跡

2001.3

兵庫県教育委員会

貴船神社遺跡全景（南から、対岸は播磨町～明石市、右側崖は野島断層）

貴船神社遺跡全景　空中写真（北上空から）

例　　言

1．本書は、兵庫県津名郡北淡町野島平林に所在する貴船神社遺跡の発掘調査報告書である。

2．確認調査は、北淡町教育委員会による周囲の土地改良事業によって周辺を調査され、遺跡の範囲を確定している。その調査成果を参考にした。

3．確認調査は津名郡町村会埋蔵文化財専門職員伊藤宏幸が担当し、平成５年12月に実施した。

4．全面調査は兵庫県教育委員会が調査主体となり、平成７年７月17日～12月20日まで実働95日を費やして実施した。

5．本調査は、県道福良江井岩屋線道路緑化推進事業に起因するもので、兵庫県土木部洲本土木事務所の委託を受けて行った。

6．調査で使用した方位は国土座標第Ｖ系を使用した。また、標高は兵庫県土木部洲本土木事務所設置のＢ.Ｍ.を使っている。

7．現地での遺構写真は調査担当者が撮影したものである。図版１の空中写真は国土地理院のものを使用した。またその他の空中写真は㈱ワールドに委託して撮影したものである。

8．整理作業は、平成10～12年度に同じく兵庫県土木部洲本土木事務所と委託契約をかわして兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。

9．遺物写真は㈱衣川に委託して撮影したものである。

10. 本書にかかる遺物・図面やスライドなどの写真資料は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（078-531-7011）ならびに同魚住分館に保管している。

12. 執筆は木下晴一・伊藤宏幸・渡辺　昇が行い、編集は八木和子の協力を得て渡辺が担当した。

13. 表紙絵は小東憲朗氏によるものである。

14. 発掘調査・整理調査にあたって、下記の方々・機関のご協力・ご指導を得ました。感謝致します。

（敬称略）

渡辺　誠・山崎純男・広瀬和雄・積山　洋・大久保徹也・北淡町教育委員会・津名郡町村会

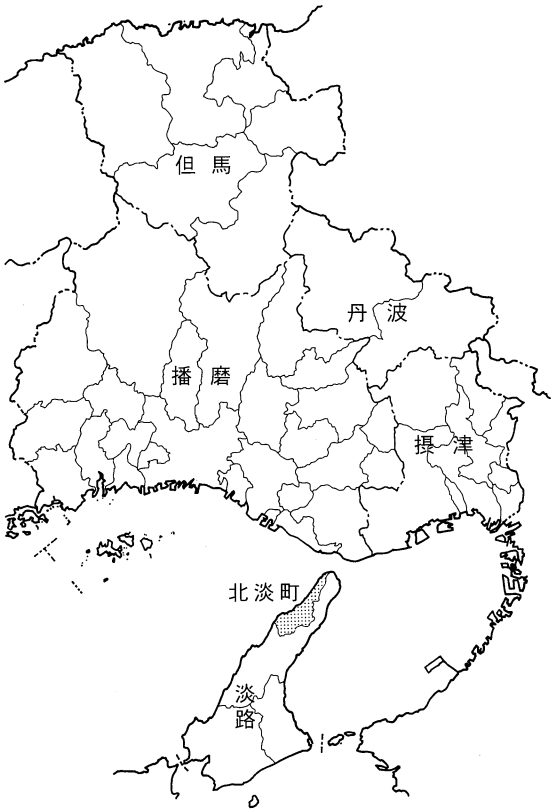


図１　北淡町の位置

貴船神社遺跡　本文目次

Ⅰ．はじめに
1．調査に至る経緯 …… 渡辺 …… 1
2．確認調査の経過と結果 …… 伊藤 …… 2
3．全面調査の経過 …… 渡辺 …… 5
4．整理作業の経過 …… 渡辺 …… 6
Ⅱ．位置と環境
1．地理的環境 …… 木下 …… 8
2．歴史的環境 …… 渡辺 …… 10
Ⅲ．調査結果の概要
1．調査の方法 …… 木下 …… 13
2．層序 …… 木下 …… 13
3．全面調査の概要 …… 渡辺 …… 16
Ⅳ．遺構
1．炉　ＳＬ１～６・11・14～22 …… 渡辺 …… 19
ＳＬ７～10・12・13 …… 木下
2．竪穴住居跡（ＳＨ０１・０２） …… 渡辺 …… 38
3．溝（ＳＤ０１） …… 木下 …… 43
4．土坑（ＳＫ０１） …… 木下 …… 43
土坑（ＳＫ０２） …… 渡辺 …… 44
5．石棺墓（ＳＴ０１） …… 渡辺 …… 44
6．落ち込み（ＳＸ０１～０４） …… 木下 …… 44
落ち込み（ＳＸ０５） …… 渡辺 …… 50
7．その他の遺構 …… 渡辺 …… 51
Ⅴ．遺物 …… 渡辺 …… 61
Ⅵ．おわりに …… 渡辺 …… 128

挿　図　目　次

図１　北淡町の位置
図２　確認調査区配置…… 3
図３　確認調査　出土遺物実測図…… 4
図４　貴船神社遺跡周辺の地形…… 8
図５　微地形模式断面図…… 9
図６　貴船神社遺跡の位置と周辺の遺跡…… 11
図７　グリッド配置図…… 14
図８　層序模式図…… 15
図９　貴船神社遺跡の位置…… 16
図10　上層　遺構平面図…… 17
図11　下層　遺構平面図…… 18
図12　炉（ＳＬ）０１　実測図…… 19
図13　調査区南西部　炉跡群　実測図…… 20
図14　炉（ＳＬ）０２　実測図…… 21
図15　ＳＬ０２・０３　出土遺物実測図…… 21
図16　炉（ＳＬ）０３　実測図…… 22
図17　炉（ＳＬ）０４　実測図…… 23
図18　炉（ＳＬ）０５　実測図…… 23
図19　炉（ＳＬ）０６　実測図…… 24
図20　炉（ＳＬ）０７　実測図…… 24
図21　炉（ＳＬ）０８　実測図…… 25
図22　炉（ＳＬ）０９　実測図…… 26
図23　炉（ＳＬ）１０　実測図…… 27
図24　炉（ＳＬ）１１　実測図…… 27
図25　炉（ＳＬ）１２・１３　実測図…… 28
図26　炉（ＳＬ）１４　実測図…… 30
図27　炉（ＳＬ）１４　出土遺物実測図…… 30
図28　炉（ＳＬ）１５　実測図…… 31
図29　炉（ＳＬ）１６　実測図…… 32
図30　炉（ＳＬ）１７　実測図…… 33
図31　炉（ＳＬ）１７　出土遺物実測図…… 33
図32　炉（ＳＬ）１８・１９　実測図…… 34
図33　炉（ＳＬ）２０　実測図…… 35
図34　炉（ＳＬ）２１　実測図…… 36
図35　炉（ＳＬ）２２　実測図…… 36
図36　炉（ＳＬ）２２　出土遺物実測図…… 36
図37　竪穴住居跡（ＳＨ）０１　実測図…… 38
図38　竪穴住居跡（ＳＨ）０２　実測図…… 39
図39　ＳＨ０１・０２　出土遺物実測図…… 40
図40　溝（ＳＤ）０１　実測図…… 41
図41　土坑（ＳＫ）０１　実測図…… 42
図42　遺構　出土遺物実測図…… 43
図43　土坑（ＳＫ）０２　実測図…… 44
図44　石棺墓（ＳＴ）０１　実測図…… 45
図45　落ち込み（ＳＸ）０１　実測図…… 46
図46　ＳＸ０２出土遺物　実測図…… 47
図47　落ち込み（ＳＸ）０３　実測図…… 48
図48　落ち込み（ＳＸ）０５　実測図…… 49
図49　ＳＸ０３・０４・０５出土遺物…… 50
図50　ＳＸ０６　実測図…… 52
図51　Ａ－１　実測図…… 53
図52　Ｂ－１・２　実測図…… 54
図53　Ｃ－２・３　実測図…… 55
図54　Ｂ－３　実測図…… 56
図55　Ｂ－４・５　実測図…… 57
図56　Ｂ－４　実測図…… 58
図57　Ｂ－５　実測図…… 59
図58　Ｃ－４・５　実測図…… 60
図59　製塩土器　実測図(1)…… 62
図60　製塩土器　実測図(2)…… 63
図61　製塩土器　実測図(3)…… 64
図62　製塩土器　実測図(4)…… 65
図63　製塩土器　実測図(5)…… 66
図64　製塩土器　実測図(6)…… 67
図65　製塩土器　拓本 …… 67
図66　縄文土器・弥生土器　実測図…… 68
図67　土師器　実測図(1)…… 69
図68　土師器　実測図(2)…… 70
図69　土師器　実測図(3)…… 71
図70　土師器　実測図(4)…… 72
図71　土師器　実測図(5)…… 73
図72　土師器　実測図(6)…… 74

図73　土師器　実測図(7)…… 75
図74　土師器　実測図(8)…… 76
図75　土師器　実測図(9)…… 77
図76　土師器　文様拓本(1)…… 78
図77　土師器　文様拓本(2)…… 79
図78　土製品　実測図…… 80
図79　須恵器　実測図(1)…… 81
図80　須恵器　実測図(2)…… 82
図81　須恵器　実測図(3)…… 83
図82　須恵器　実測図(4)…… 84
図83　須恵器　実測図(5)…… 85
図84　須恵器　実測図(6)…… 86
図85　須恵器文様拓本(1)…… 86
図86　須恵器文様拓本(2)…… 87
図87　イイダコ壺・実測図(1)…… 88
図88　イイダコ壺・実測図(2)…… 89
図89　イイダコ壺記号拓本…… 90
図90　土錘他　実測図…… 91
図91　鉄器　実測図…… 92
図92　石器　実測図(1)…… 93
図93　石器　実測図(2)…… 93
図94　石器　実測図(3)…… 94
図95　中近世遺物　実測図…… 95
図96　製塩土器編年図…… 131

表　目　次

表１　遺物観察表…… 96～114
表２　土錘計測表…… 115
表３　石器計測表…… 115
表４　鉄器計測表…… 116
表５　製塩土器（脚台式）計測表 …… 117～119
表６　製塩土器計測表 …… 120～127

図　版　目　次

巻頭カラー　（上）　貴船神社遺跡全景（南から、対岸は播磨町～明石市の東播磨海岸、右側崖は野島断層）
（下）　貴船神社遺跡　空中写真（北上空から）
カラー図版１（上）　炉跡群（西から）
（下）　炉（ＳＬ）１７（西から）
カラー図版２（上）　堆積状況（ＳＸ０５と炉８）
（下）　新羅陶器
カラー図版３（上）　製塩土器（脚台・丸底Ⅰ）
（下）　製塩土器（丸底Ⅱ）
カラー図版４（上）　製塩土器（丸底Ⅱ・Ⅲ）
（下）　出土遺物

図版１　国土地理院撮影　空中写真
図版２　（上）　貴船神社遺跡　空中写真（南東上空から）
（下）　貴船神社遺跡　空中写真（南西上空から）
図版３　（上）　貴船神社遺跡　空中写真（北東上空から）
（下）　貴船神社遺跡　垂直写真（上空から）
図版４　（左上）貴船神社遺跡　空中写真（南東上空から）
（左下）貴船神社遺跡　空中写真（南上空から）
（右上）貴船神社遺跡　空中写真（西上空から）
（右下）貴船神社遺跡　空中写真（北上空から）
図版５　（上）　調査地　全景　（北から）
（下）　調査地　全景　（南から）

図版６　（上）　Ｂ－３・４　礫検出状況（西から）
（下左）Ｂ－３　礫検出状況　（西から）
（下右）Ｂ－４　礫検出状況　（東から）
図版７　（上）　Ｃ－４　礫検出状況　（西から）
（下）　Ｂ－５　礫検出状況　（西から）
図版８　（上）　ＳＬ０１～０５　全景（西から）
（中）　ＳＬ０１～０５　全景（東から）
（下）　ＳＬ０１～０５　全景（南から）
図版９　（上）　ＳＬ０１～０３　検出状況（西から）
（中）　ＳＬ０１　全景（南から）
（下左）ＳＬ０１　全景（西から）
（下右）ＳＬ０１　断ち割り（西から）
図版１０（上）　ＳＬ０２・０３　検出状況（北西から）
（中左）ＳＬ０２・０３　全景（南から）
（中右）ＳＬ０４　（西から）
（下）　ＳＬ０１～０５　検出状況（西から）
図版１１（上左）炉跡群　（東から）
（上右）ＳＬ０３・採鹹土坑（ＳＫ０３）全景（西から）
（下）　ＳＬ０３　全景（西から）
図版１２（上）　ＳＬ０１～０５　全景（西から）
（中）　ＳＬ０５　全景（南から）
（下左）ＳＬ０５　全景（西から）
（下右）ＳＬ０５　断ち割り（西から）
図版１３（上）　ＳＬ０６・０７　全景（西から）
（中）　ＳＬ０６　全景（西から）
（下）　ＳＬ０７・０９　全景（北から）
図版１４（上）　ＳＬ０７・０９　全景（西から）
（中）　ＳＬ０７　堆積状況（西から）
（下）　ＳＬ０７　全景（東から）
図版１５（上）　ＳＬ０８・１０と黒凹地（西から）
（中左）ＳＬ０８　全景（西から）
（中右）ＳＬ１０　全景(北東から）
（下左）ＳＬ０８　全景（西から）
（下右）ＳＬ１０　下層（東から）
図版１６（上）　ＳＬ１１と黒凹地（北から）
（中左）ＳＬ１１　全景（東から）
（中右）ＳＬ１１　断ち割り（北から）
（下左）ＳＬ１１　全景（北から）
図版１７（上）　ＳＬ１２・１３　全景（北から）
（下）　ＳＬ１２・１３　全景（西から）
図版１８　南側　炉跡群　全景（西から）
図版１９（上）　南側　炉跡群　全景（西から）
（下）　南側　炉跡群　全景（西から）
図版２０（上）　南側　炉跡群　全景（西から）
（中）　ＳＬ０１とＳＬ１６（南西から）
（下左）南側　炉跡群　全景（西から）
（下右）ＳＬ１５（西から）
図版２１（上）　ＳＬ１５とＳＬ０２・ＳＬ０３の切り合い（西から）
（下）　ＳＬ０１とＳＬ１６（西から）
図版２２（上）　ＳＬ１７　全景（西から）
（下）　ＳＬ１７　全景（南から）
図版２３（上）　ＳＬ２２　全景（東から）
（下）　ＳＬ２２　全景（南から）
図版２４（上）　ＳＬ１４　全景（西から）
（下）　ＳＬ２０　全景（西から）
図版２５（上左）ＳＨ０１と炉跡群（西から）
（上右）ＳＨ０１　堆積状況（西から）
（中）　ＳＨ０１　遺物出土状態
（下）　ＳＨ０１　全景（西から）
図版２６（上）　ＳＨ０２　全景（南から）
（下）　ＳＨ０２　全景（西から）
図版２７（上左）ＳＴ０１　全景（北から）
（上右上）ＳＴ０１　全景（北から）
（下右下）ＳＴ０１　遺物出土状態（西から）
（下）　ＳＴ０１　全景（東から）
図版２８（上左）ＳＤ０１　全景（北から）
（上右上）ＳＫ０１　全景（南東から）

（下右下）ＳＫ０１　全景（南西から）
（下）　ＳＫ０２　全景（西から）
図版２９（上左）ＳＸ０１　検出状況（北から）
（上右）ＳＸ０１　遺物出土状況（西から）
（中）　ＳＸ０１　堆積状況（西から）
（下）　ＳＸ０２　全景（西から）
図版３０（上）　ＳＸ０２　堆積状況（東から）
（下左）ＳＸ０２　遺物出土状況（西から）
（下右）ＳＸ０３　全景（南から）
図版３１（上）　ＳＸ０５　堆積状況（西から）
（下）　ＳＸ０５　全景（西から）
図版３２（上）　ＳＸ０６　堆積状況（西から）
（下）　ＳＸ０６　検出状況（西から）
図版３３（上）　Ａ～Ｃ間　アゼ堆積状況（南西から）
（中左）Ａ～Ｃ間　アゼ堆積状況（南東から）
（中右）Ｃ～Ｄ間　アゼ堆積状況（南東から）
（下）　Ｂ－３・４　全景（西から）
図版３４（上）　Ｂ－４　全景（西から）
（中）　Ｂ－５　全景（西から）
（下左）Ｂ－４　礫群（東から）
（下右）Ｂ－４　礫群（北から）
図版３５（上左上）Ａ－２　石組（西から）
（上左下）Ａ－３　製塩土器出土状態（西から）
（上右上）Ｂ－１　弥生土器出土状態（西から）
（上右下）Ａ－１　鉄釣針　出土状態（西から）
（下左上）Ｂ－５　礫群検出状況（南西から）
（下左下）Ｂ－５　土器出土状況（北から）
（下右上）Ｂ－５　石組　（西から）
（下右下）Ｂ－２　須恵器出土状態（南から）
図版３６（上左）Ｃ－２　礫群　（西から）
（上右）Ｄ－６　礫群　（西から）
（中左）Ｄ－５　イイタコ壺出土状態（西から）
（中右）Ｄ－５　土師器出土状態（西から）
（下）　土層断面
図版３７（上）　Ｃ－５　土器出土状態（西から）
（下）　Ｃ－５　土器・礫出土状態
図版３８（上左）断ち割り　土層断面
（上右）断ち割り　土層断面
（下左）断ち割り　土層断面
（下右）下層　礫
図版３９　炉出土遺物(1)
図版４０　炉出土遺物(2)
図版４１　竪穴住居跡（ＳＨ０１・０２）出土遺物
図版４２　ＳＸ０２～０５　出土遺物
図版４３（上）遺構出土遺物
（下）製塩土器(1)
図版４４　製塩土器(2)
図版４５　製塩土器(3)
図版４６　製塩土器(4)
図版４７　製塩土器(5)
図版４８　製塩土器(6)
図版４９　製塩土器(7)
図版５０　製塩土器(8)
図版５１　縄文土器・弥生土器
図版５２　土師器(1)
図版５３　土師器(2)
図版５４　土師器(3)
図版５５　土師器(4)
図版５６　土師器(5)
図版５７　土師器(6)
図版５８　土師器(7)
図版５９　土師器(8)

図版６０　土師器(9)
図版６１　土師器(10)
図版６２　土師器(11)
図版６３　土師器(12)
図版６４　土師器(13)
図版６５　（上）土師器(14)
　　（下）土製品
図版６６　土師器(15)
図版６７　（上）土師器(16)
　　（下）須恵器(1)
図版６８　須恵器(2)
図版６９　須恵器(3)
図版７０　須恵器(4)
図版７１　須恵器(5)
図版７２　須恵器(6)
図版７３　須恵器(7)
図版７４　須恵器(8)
図版７５　須恵器(9)
図版７６　須恵器(10)
図版７７　須恵器(11)
図版７８　イイダコ壺(1)
図版７９　イイダコ壺(2)
図版８０　土錘・羽口
図版８１　鉄器
図版８２　石器(1)
図版８３　石器(2)
図版８４　（上）骨
　　（下）貝

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

貴船神社遺跡は、平成２年度に確認された遺跡である。兵庫県教育委員会では、県内の生産遺跡の分布調査を平成元年度から実施してきた。その一環として淡路地域の製塩遺跡の調査も実施することとなり、その調査によってはじめて確認された遺跡である。淡路地域の調査は当初２～３年で終了する計画であったが、進捗状況ははかばかしくなかった。海岸部の調査が地形が悪く予定通り進まない上に、その前年の土地改良事業の調査で現在の海岸線から離れた地点でも製塩土器が確認されることによって、製塩遺跡の分布対象が拡大することになった。そのため調査対象地が広くなったことから、津名郡で一度まとめることとし、平成４年度に刊行された「製塩遺跡Ⅰ（津名郡）」には北淡町No11貴船神社前遺跡として報告されている。

その後、遺跡周辺は土地改良事業が計画され、工事に先立ち北淡町教育委員会により平成５年度に確認調査が実施された。その結果、製塩土器の他にも通有の集落遺跡の遺物や古墳の副葬品かと思われる遺物も出土し、調査地周辺は製塩遺跡に限らず他の性格の遺跡も広がっていることが明らかになった。遺跡の規模は東西約60m・南北約200mと推定された。

兵庫県土木部洲本土木事務所では緑化推進事業の一環として、県道福良江井岩屋線の整備が策定された。「緑のみちしるべ」として県道沿いに緑化公園を建設するもので、その１つとして貴船神社遺跡周辺に（仮称）「野島平林公園」が計画された。そのため、工事に先立ち兵庫県土木部洲本土木事務所と兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所とで協議が繰り返され、平成7年度に公園予定地の全面調査を実施することとなった。

写真１　貴船神社遺跡遠景

２．確認調査の経過と結果

本遺跡は、平成２～４年度にかけて兵庫県教育委員会を調査主体として実施された生産遺跡分布調査（製塩）で発見された。調査当時、県道沿いの電柱立替工事に伴い掘削されていた穴で、製塩土器を多量に含む遺物包含層の存在が確認された。平成５年、遺跡を含む範囲で土地区画整理事業（ほ場整備事業）が計画されたことを契機として、遺跡の範囲確認調査を実施した。調査は、遺跡の範囲や性格を把握する目的で、２×２ｍの調査区12箇所を設定し実施した。（図２）

12箇所の調査区のうち、№５～７では耕作土直下で海浜砂が検出され、砂層中から多量の製塩土器が出土したが、製塩土器を含む砂層はいずれの調査区においてもおおむね上下２層に分かれることが確認された。上層からは脚台付と丸底の製塩土器が出土したが、量的には丸底が主体を占める。一方、下層から出土した製塩土器は脚台付のものがほとんどで、甕・高杯等の土器も伴出した。脚台付の製塩土器は脚台Ⅱ式のものが大半で、脚台Ⅲ式のものは数点であった。また、№６では、この２層の間に無遺物の砂層が存在し、その下層で落ち込み（ｓｘ-01・ｓｘ-02）が検出された。ｓｘ-01は調査区の西半分を南北に延びる溝あるいは土坑状の落ち込みで、丸底Ⅰ式の製塩土器が多量に出土した。製塩土器は、純粋に丸底Ⅰ式のみであり、他のタイプの混入は認められない。また、ｓｘ-02は平面的には検出できなかったものであるが、脚台Ⅱ式の製塩土器が出土した。脚台Ⅱ式の製塩土器は、これら落ち込みが検出された面を形成する砂層及びさらにその下層からも出土した。遺物の量は、№７が最も多く、丘陵に近い№５が最も希薄であった。

これに対し、№１・２・３・４・13・14・15は海浜砂が検出されず、砂礫層がベースとなる範囲であり、海浜から丘陵への移行点に相当する範囲と想定される。№３・４・15地点では、この砂礫上に遺物包含層である黒灰色の礫混じりシルト層が堆積する。№３・15地点では、この遺物包含層から、弥生時代末期（庄内期）の土器が多数出土した。特に№３では甕・器台などとともに脚台Ⅱ式の製塩土器、コップ型の飯蛸壺なども出土した。出土した器台は「淡路型器台」と呼ばれている独特のスタイルの器台であるが、受け部に４個の穿孔を施すこれまでに例をみないタイプのものである。№４における土層の堆積状況もこれらと同様の様相を呈するが、遺物包含層から出土した遺物は古墳時代後期（６世紀末）の須恵器・土師器であった。また、これらの遺物とともに耳環１点が出土している。

遺構としては、№３において、包含層直下の砂礫層上面で竪穴住居址状の遺構プランを検出し、床面と思われる面で焼土面が確認された。また、これより上層では調査区を斜めに横切る中世の溝状遺構も検出している。さらに、№３では遺物包含層を突き破る噴砂状の地割れも確認された。

また、№13でも現地表下約1.5ｍの地点で２層の遺物包含層を検出し、上層からは土師器とともに釣鐘型の飯蛸壺が、下層からは脚台付製塩土器の胴部が出土した。また、これら遺物包含層下で検出される面では溝状の遺構も検出している。本地点では、幾重にも堆積する盛土の結果、最終遺構面までは深さ2.5ｍを測る。この他、№１・２では少量の遺物が出土したが、№８・９は砂・河原石などが分厚く堆積し、遺物包含層は確認できなかった。河川の氾濫原とみられる。

これらの結果から、本遺跡の範囲は№８・９を除く調査区を設定した範囲のほぼ全域に及ぶことが確認された。出土遺物の多くは製塩土器であり、それらは大阪湾岸製塩土器編年でいうところの脚台Ⅱ・Ⅲ式、丸底Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式といった型式に分類される弥生時代末期（庄内期）から奈良時代に相当する時期の製塩土器であることから、本遺跡において長期間継続的に土器製塩が行われていたものと予想され

る。また、№５～７地点でみられるように、脚台Ⅱ式と丸底Ⅰ式、丸底Ⅱ・Ⅲ式製塩土器の出土状態がそれぞれ層位的にとらえられる可能性があり、さらには製塩土器とともに須恵器・土師器など数多くの土器が伴出していることから、製塩土器の年代決定についても貴重な資料を提供してくれるものと思われる。また、遺構の面からは、製塩作業の場である砂浜と居住域（あるいは作業区域）と考えられる場が存在し、さらには、№４地点で出土した須恵器や耳環などから周辺に古墳が存在する可能性も強く、一遺跡内で製塩作業域と居住域さらには墓域が確認できる可能性をもった遺跡である。

図２　確認調査区配置図

これまで、北淡路の野島については、『日本書紀』や『万葉集』において「野島の海人」なる記述がみられるなど、海に深く関わりをもつ人々の存在が知られていたが、考古学上それが明らかにされたことはなかった。今回の調査では、まさにその「野島」において海に生活基盤を置く人々の生活の跡が確認できたことになる。本遺跡が淡路島あるいは大阪湾岸における土器製塩の実体の解明に貴重な資料を提供しうる可能性をもった遺跡であるとともに、古くから語り継がれてきた淡路島の「海人」の実態の解明に手がかりを与えてくれる重要な遺跡といえよう。

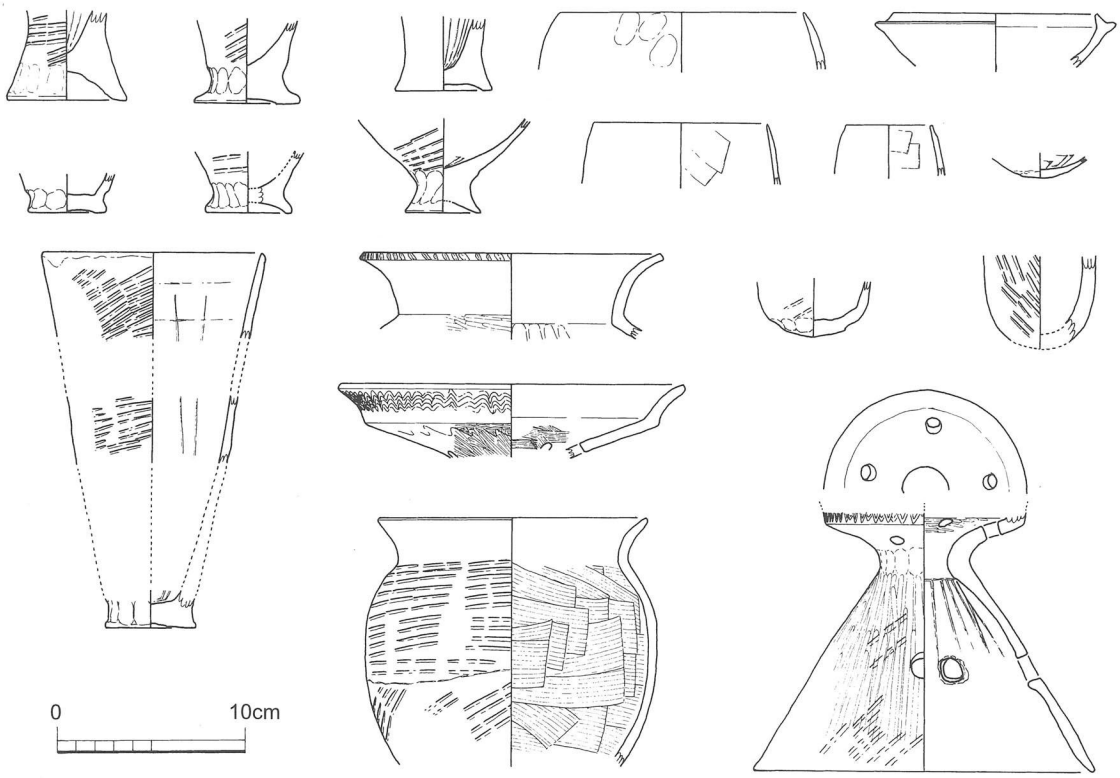


図３　確認調査　遺物実測図

調査の組織

調査主体　　北淡町教育委員会

調査担当　　津名郡町村会

　　埋蔵文化財専門職員　伊藤　宏幸

調査参加者　森脇京子

　　土井純子

写真２　確認調査　検出炉跡

3．全面調査の経過

確認調査の結果、公園予定地には全面に遺跡が広がっていることが明らかになったことから、事業予定地全面を対象として調査を行った。官民境界と現県道との間を残して全面調査を実施した。

調査は、平成6（1995）年6月　日から開始した。調査面積は確定しているものの、十分に調査土量が把握できていなかった。そのため、全面調査に先立ち確認グリッドを3ヶ所設けて、確実な土量を求めるための調査を行った。その結果に基づき全面調査を実施した。調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班が担当した。通常の調査形態と同じく1パーティー2名が担当者として調査に従事した。この年度は兵庫県にとって（ある意味で埋蔵文化財行政にとって）特別な意味をもつ年度であった。未曾有の被害を出した阪神淡路大震災の復興調査が開始された年で、全国から埋蔵文化財専門職員の支援を受け、発掘調査を開始した行政の垣根を越えて調査組織が形成された初年度であった。その調査の1つとして、調査が行われたのが貴船神社遺跡であった。貴船神社遺跡は兵庫県の受託事業であったことから、兵庫県の職員と支援職員がペアを組んで調査を行うこととなった。全般を通じて調査を担当したのは、香川県教育委員会から支援に来て戴いた木下晴一氏である。復興調査班全体の調査計画の都合から兵庫県職員は8月に交代している。前半を池田が、後半を渡辺が担当した。

晩夏の残暑厳しい頃から、炉跡が検出され兵庫県で最大規模の製塩遺跡であることが判明した。その段階で兵庫県洲本土木事務所と遺跡保存の協議に入った。兵庫県洲本土木事務所の理解を得て、設計変更による一部保存が可能となり、その方法やその後の活用方法等についても協議事項として検討された。地元の意向も酌み、より良い「緑のみちしるべ」として活用することを前提として、南西部分の炉跡集中部分の現地保存が確定した。工事に支障のない最低限の範囲を決定し、削平される部分については下層まで調査を実施した。保存が図れる部分については上層の部分で調査を終了している。現状保存した遺構を屋外展示する方法も考えたが、他遺跡の事例や当事業の性格から十分に利用されるとは思われないので、埋め戻して地下で現状保存し、別の形で活用できるよう、検討委員会を設置することとした。保存活用を図るための方法や施工については、引き続き協議事項となった。

調査は一部にしても保存という、復興調査関連として最高の結果となった。当初の予定の計画を大幅に変更し、野島海人と製塩遺跡（貴船神社遺跡）を中心とした「緑のみちしるべ」となることとなり、公園として残されることとなった。

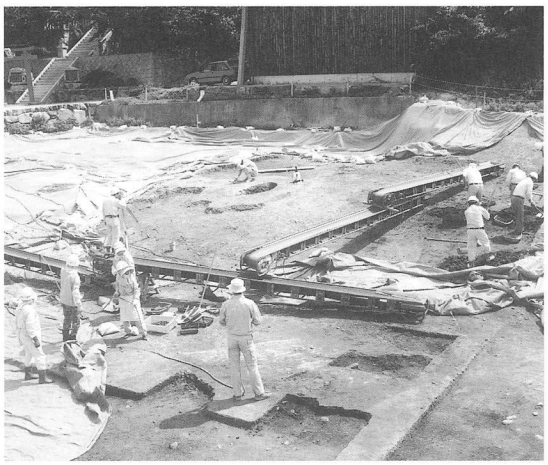


写真3　調　査　風　景

一部保存が決定したものの、全体的に遺跡は広がり、製塩土器の堆積は厚く、密度も高く調査は思うように進まなかった。明確な炉跡と断定できないものの、多量の被熱した礫群があり、その検出作業と写真撮影・実測などの記録作業に追われることとなった。調査終了まで、慌ただしい状態で日々が経過していった。その中に新たな事実を掴む資料もあろうと思い、少しでも多く資料化に努めた。10月29日の祝日に現地説明会を開催し、地元の方々を中心に遺跡を見て戴いた。遠く名古屋から山口県までの方々が来跡され、遺跡を見て戴いたことには驚いている。多数の学識経験者や研究者の方々にも足を運んで戴き、多くの教示を得た。十分に成果に反映出来たか、不安である。

現地説明会終了後、保存部分については最低限の断ち割り作業などを行った。それ以外の地点については下層の調査を行った。現地説明会以前に負けず劣らずの忙しい状況で、無事調査を終えることが出来た。12月20日に全ての器材・出土遺物を搬出し、調査を終了した。

写真４　現地説明会風景

調査の組織

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

	所　長	青木　正之
	主任調査専門員	大村　敬通
総務課	課　長	石井　守
	事務職員	飯尾　彦人
復興調査班	調査専門員	山本　三郎
	主　査	水口　富夫
	主　査	村上　泰樹

調査担当　兵庫県教育員会埋蔵文化財調査事務所

復興調査班

主　査	渡辺　昇
主　任	木下　晴一
技術職員	池田　征弘
調査参加者	前田　陽子・浜田　政美・菱谷　正代・菱谷　久美・小東　憲朗 森脇　京子・嘉戸　篤子・土井　純子
作業委託	（株）橋詰建設 現場代理人　向原　義統

４．整理作業の経過

整理作業は、発掘調査と平行して実施した。貴船神社遺跡発掘調査事務所で水洗い作業をはじめた。しかし、量が多いことから、すべての作業を行うことはできなかった。一部の水洗い作業と土器の補強作業を行った。

整理作業の委託契約は平成10年度から、発掘調査と同様に兵庫県土木部洲本土木事務所と兵庫県教育委員会の間で交わされ、平成12年度まで３ヵ年にまたがって作業を実施した。平成10年度は主に水洗い

作業と注記（ネーミング）作業を行い、翌平成11年度は接合作業から実測作業・一部の写真撮影を行った。平成12年度は調査報告書刊行までの作業を行った。

水洗い作業と注記（ネーミング）作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所魚住分館で行い、それ以降の作業は兵庫県教育員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。整理作業は調査担当者が行ったが、作業の管理工程は整理普及班職員によって行った。平成10年度は主査　村上賢治、平成11年度は主査　森内　秀造・菱田淳子、主任　中村　弘、平成12年度は主査　岡田章一・菱田淳子の指導によるものである。また保存処理は整理普及班　主査加古千恵子・技術職員岡本一秀によるものである。

各年度とも調査担当者は他遺跡の発掘調査を担当しており、十分な整理作業における進行を推し進めることはできなかった。各年度の整理普及班職員の協力と実作業を行って戴いた嘱託員の努力によるものである。感謝致します。

調査の組織

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

		平成10年度	平成11年度	平成12年度
	所　長	寺内　幸治	寺内　幸治	寺内　幸治
	副所長	木下　猛	吉田　昇	吉田　昇
	副所長	大村　敬通	大村　敬通	大村　敬通
	総務課長	岩澤　重則	岩澤　重則	森　　俊彦
整理普及班	調査専門員	岡崎　正雄	岡崎　正雄	岡崎　正雄
	主　査	森内　秀造	森内　秀造	岡田　章一
	主　査	村上　賢治	菱田　淳子	菱田　淳子

調査参加者（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　　嘱託員）

平成10年度

中村　睦・川上　啓子・家光　和子・小林　俊子・伊藤　ミネ子・衣笠　雅美・長谷川　洋子

江口　初美・渡辺　二三代

平成11年度

八木　和子・尾鷲　都美子・平松　ゆり・高田　健一・吉田　優子・木村　淑子・竹内　泰子

横山　キクエ・前田　千栄子・鈴木　まき子・小寺　恵美子

平成12年度

八木　和子・村上　京子・前川　悦子・眞子　ふさ恵

西口　由紀・竹内　泰子・中田　明美・西野　淳子

横山　キクエ・中西　睦子・嘉戸　篤子・宮野　正子

前田　恭子・神田　妙子

〔保存処理担当　嘱託員〕

栗山　美奈・和田　須佐子・藤川　紀子・前川　悦子

写真５　整理作業風景

Ⅱ．位置と環境

１．地理的環境

淡路島の北部は、北東－南西方向へ細長く延びる山地と、両側の山麓域に幅狭く付着する丘陵と台地・低地から構成される。この山地は両側が急斜面をなし、山頂部に緩やかな定高性（標高200～300m）のある小起伏の地形が広がる。地塁性の山地の典型例である。この急斜面の基部には活断層が発達し、西側が野島断層や浅野断層、東側が楠本断層や東浦断層によって限られている。

貴船神社遺跡は、津名郡北淡町野島平林に所在する。遺跡は箙川と呼ばれる小河川の河口左岸付近で、播磨灘と東側丘陵に挟まれた幅80m程の緩斜面に位置する。調査前の地目は、淡路島北部に多く見られる斜面に造られた棚田であった。標高は4.6～6.8mを測る。遺跡の西側は播磨灘に面し、北は明石市の林崎付近から姫路市にかけて、西は家島諸島や香川県の小豆島を、また、よく晴れた日には四国山地を遠望できる。北５km程には、潮流が強いことによって瀬戸内海航路の難所のひとつとされる明石海峡がある。

調査中、地元の方との雑談の中で、西浦（津名郡の西側沿岸部）の冬季の寒さが厳しいことをよく聞いた。瀬戸内海沿岸の港湾や集落は冬季の北西季節風を避ける位置に立地する傾向があるが、この地では播磨灘を渡る北西の季節風をまともに受けることが原因であろう。このような自然条件の厳しさの反面、前面の海域に所在する「鹿の瀬」と呼ばれる瀬戸内海最大級の漁場という豊かな恵みもある。「鹿の瀬」は東西約20km、南北５kmの範囲の浅瀬で、多くの魚類が生息し、ここから網漁の際に弥生時代以降の飯蛸壺などが多量に引き上げられている。これら「海あがり」資料は北淡町立歴史民俗資料館などに収蔵されているが、多量な遺物は当地において古来盛んに漁労活動が行われたことを示している。

貴船神社遺跡は、1995年１月17日早朝に発生した兵庫県南部地震の発生源となった野島断層の至近に所在する。野島断層はN60°Ｅ方向に約７kmの長さにわたって直線状に延び、三角末端面のほか、河谷の系統的な屈曲や段丘面の切断などの典型的な断層変位地形が認められる。図５は文献３に掲載される図に遺跡位置などを加えたものである。文献３によると箙川河岸には３面の河成段丘が分布する。上位の面にはＡＴ（姶良丹沢火山灰）が堆積しており、３面の形成時期はこれより新しい。これらは断層活動によって、段丘面に南東側隆起の鉛直変位と右横ずれ方向の水平変位が認められ、上位の面では鉛直約9.5m、水平方向約20mの

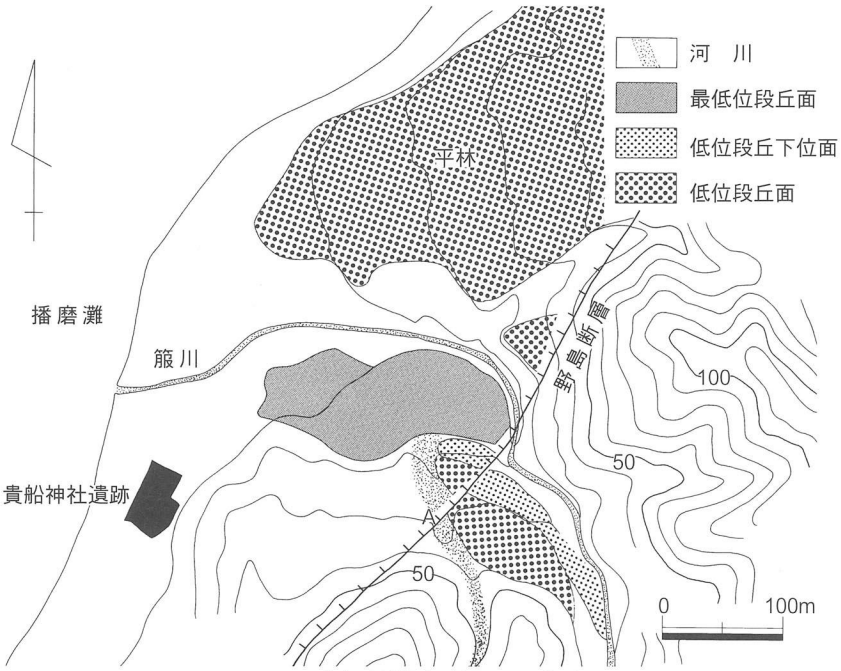


図４　貴船神社遺跡周辺の地形

変位量を測る。また、箙川河谷も断層によって屈曲している。なお、砂利採取後に造成された水田において（図中Ａ地点）、兵庫県南部地震の際にきわめて明瞭な低断層崖がＮ40°Ｅ方向に約60mにわたって出現した。畦道には南東側隆起1.2m、右ずれ2.1mという変位量が認められた。なお、この低断層崖は水田復旧工事により現在は消滅している。

遺跡の東側には貴船神社（通称寄神）が鎮座している。現状では孤立丘のような形状を呈するが、東側背後の砂利採取によるもので、元は断層の前面に付着する丘陵（小倉礫層）の先端部に鎮座していた。背後の山地は風化の進んだ花崗岩からなり、昭和40年代後半以降に関西新空港などの埋め立てのため大規模な砂利採取が行われ、山容を一変させている。また、小倉礫層は大阪層群に含められ、中～大礫大の円～亜角礫が主体で砂岩、酸性火砕岩類、チャート、花崗岩類などからなる。貴船神社遺跡で検出された製塩用の炉に用いられた石材の供給源と考えられる。

遺跡は砂層上に立地する。遺跡東北端での砂層の厚さは約３ｍで、以下に大阪層群が現れる。砂層は幾層にも細分され、河川の影響によるもの（分級されていない、砂粒が角張る）、風成のもの（淘汰される、多数の薄層よりなる）、海成のもの（級化あり、砂粒が円磨される）が複雑に堆積している。砂層中にはよく円磨された細～中礫が薄層となる部分があり、満潮時の海岸線付近に見られる礫層（ビーチグラベル）と考えられる。このように砂層は遺跡北側の箙川の影響、播磨灘の影響と季節風などの風の影響などにより形成されている。

遺跡は現状では播磨灘から最短で30m程の地点に位置し、地山中のビーチグラベルの存在から、遺跡の年代においても海岸から至近に位置していたと判断できる。しかし、淡路島北部においては浸食により海岸線が後退していることが指摘されている。文献３では、1836（天保７）年に山瀬佐蔵が中心となって完成させた「分限絵図」に記される寺社と1985年作製の1/25,000都市計画図との比較から、北淡町育波から岩屋町岩屋までの海岸線は最大70m近い後退が認められ、貴船神社でも約11mの後退が認められると指摘している。また、『味地草』（1857年）などの近世地誌には地震の影響による陸域の消滅の伝承を記載しており、現在の景観が遺跡の年代における状況をどの程度反映しているのか不明である。

なお、土層の観察には立命館大学助教授（当時）高橋学氏のご教示を得た。

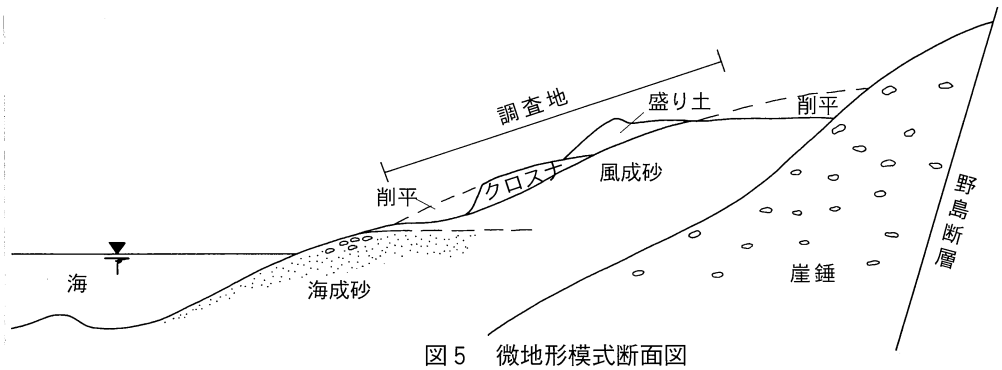


図５　微地形模式断面図

参考文献

１．竹内理三ほか編『角川日本地名大辞典　28　兵庫県』角川書店　1988

２．今井林太郎ほか編『日本歴史地名大系第29巻Ｉ　兵庫県の地名』平凡社　1999

３．水野清秀・服部仁・寒川旭・高橋浩『明石地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１地質図幅）』通商　産業省工業技術院地質調査所　1990

４．中田高・岡田篤正編『野島断層【写真と解説】兵庫県南部地震の地震断層』東京大学出版会　1999

2．歴史的環境

貴船神社遺跡の所在する津名郡北淡町野島は旧国でいうと淡路国になる。淡路国は京都の御食国として多くの食料を供給していたと思われる。同様に奈良時代に塩を献じていたことが記録に残されている。記紀にも野島海人として早くから記されており、長期間にわたって記載が認められる。百人一首を編纂した藤原定家の詩として『こぬ人を　松帆の浦の　夕凪に　やくやもしほの　身もこがれつつ』で代表されるようにこの地域一帯は塩づくりをしていたことが予測されていた。その裏付けとして周辺で製塩土器が多くの地点から採集されていた。しかし、明瞭な遺構は検出されることなく、沼島（三原郡南淡町）で炉跡と思われる石組が確認されていた程度であった。製塩遺跡の実態はなかなか明らかにはできなかったが、淡路島各地で製塩土器が採集・出土することから、淡路考古学研究会をはじめとする淡路島の研究者によって製塩形態などが製塩実験を含めて論じられていた。そのレベルは全国的にみても高いもので、実際の製塩遺構の検出が期待されていた。

淡路島はオノゴロ島と呼ばれ国産みの島として知られている。しかし、古い時期の遺跡は余り多く知られていなかった。最近の大規模調査で各時代の各種遺構や遺物が出土し、淡路島の歴史も多くの事実が加えられ、新たな検討をする時期にきている。

旧石器時代の遺物は単独出土例が多かったが、三原郡三原町長原遺跡で国府型ナイフや翼状剥片がまとまって出土している。地質学的な層位は明確にされていないが、良好な資料である。続いて津名郡淡路町のまるやま遺跡で縄文時代草創期の遺物がまとまって出土している。有舌尖頭器を含む石器群が出土している。縄文時代になると、今まで地道な採集資料から瀬戸内海文化圏の一翼で、同様な変化を辿ると考えられていたが、洲本市武山遺跡以外余り良好な資料はなかった。津名郡東浦町佃遺跡の発掘調査によって、大きく塗り替えられた。兵庫県を代表する縄文遺跡であるが、居住域が火山灰などの層位学にも調査されている。貯蔵穴も確認され、出土遺物から当時の食生活も復元されつつある。各種自然遺物も多くの事実を伝えている。

弥生時代になると、淡路島を代表するものとして青銅器がある。銅鐸・銅剣の出土量は兵庫県の中では高率を占める。特に南淡路の出土例は高率であり、複数出土例もあり注目される。前期の遺跡は洲本市竹山遺跡の方形周溝墓で代表されるが、それ以外にも洲本市下内膳遺跡などがあるが、まだ島内に普遍的であるというほど分布していない。

中期になると、遺跡数は増加するものの微増である。中期後半になってやや増加する。洲本市下内膳遺跡や波毛遺跡などが相当する。全体的には中期末から拡大する。津名郡では丘陵上に遺跡が立地されるようになる。代表的な集落である舟木遺跡も本格的に生活を営みはじめる。洲本市でも大森谷遺跡など丘陵上の遺跡がしたの平地から上がってきているが、本格的には後期になってからである。北淡路では、舟木遺跡を核とし、多くの集落が営まれる。播磨灘を望む丘陵上に生活基盤を置いているのは衆目される。東浦町では大阪湾を望む地点に集落が築かれている。現状では西浦の方が圧倒的に集落規模が大きいように思われる。標高の高い部分にも遺跡は存在している。これ

写真６　舟木遺跡

1．貴船神社遺跡　2．向遺跡　3．平林遺跡　4．大川遺跡　5．轟木遺跡
6．大石遺跡　7．小代呂遺跡　8．宮ノ前遺跡　9．石田北遺跡　10．上ノ開地遺跡
11．将軍遺跡　12．舟木遺跡　13．尼ヶ岡遺跡　14．禿山遺跡　15．白山真土遺跡
16．今出川遺跡　17．引野遺跡　18．並松遺跡　19．佃遺跡　20．井上遺跡　21．楠本塩入遺跡
22．楠本下林遺跡　23．まるやま遺跡　24．岡山遺跡　25．土穴遺跡　26．セサブ遺跡
27．石の寝屋古墳　28．ナキリ遺跡　29．給田遺跡　30．小磯遺跡　31．江崎遺跡　32．梶取遺跡

図6　貴船神社遺跡の位置と周辺の遺跡

ら集落の大きな特徴は、基本的に古墳時代に継続しないことである。また、古墳をほとんど築いていないのも特徴的である。

貴船神社遺跡では弥生時代前期の可能性のある土器片と中期後半以降の土器が出土している。中期の土器はほぼ完形であり、この時期の遺構は検出していないものの、この頃から生活をはじめていることは確実である。同じように野島から富島までの海岸部の砂堆上や微高地上に営まれた遺跡から土器の出土は確認されているが、集落は確認されていない。住居跡は尾根上の舟木遺跡や久野々遺跡などで検出されている。集落規模は100棟を超える可能性が高い。北側では明石海峡を望む尾根上に遺跡が営まれている。塩壺遺跡や塩壺西遺跡・丸山遺跡などである。ほぼ後期を中心とした単純遺跡が広がっている。

古墳時代になると遺跡の密度は疎密になる。明確な前期・中期古墳は確認されていない。唯一洲本市で三角縁神獣鏡がコヤダニ古墳から出土しているが、出土状況や共伴遺物などから古く遡ることに疑問を持つ声も聞こえている。五銖銭を出土した洲本市宇山牧場１号墳もあるが明確でない。最近、北淡町で前方後円墳の可能性のある古墳が再発見され注目されている。『味地草』に記載されていたものを貫益巳氏によって再発見されたものである。周辺にも同時期の古墳が存在している可能性があり、今後の詳細な調査に期待される。津名郡では、一宮町の郡家古墳が古い段階の古墳である。それ以外はすべて後期古墳に属するものである。淡路町の石の寝屋古墳は大型石室を主体部とするもので注目される。２号墳も存在するが、単独墳の状況を示している。北淡路を代表する古墳である。全長5.3m、最大幅1.3mの大型横穴式石室で明石海峡を望む好位置に立地していることから、関連氏族の墳墓と考えられている。津名郡では古墳は稀少である。津名町の奥穴見古墳や最近調査された北淡町の築鼻山古墳群ぐらいで、常に見学できる横穴式石室は石の寝屋古墳だけである。西浦の南側の一宮町と五色町にかけて大型の石室が存在した可能性がある。一宮町福満寺に家型石棺の蓋が安置されている。また、五色町都志の石櫃はその石棺身ではないかと考えられていた。ところが、石櫃周辺が公園として整備されることになり、確認調査を実施したところ、新たに棺蓋が隣接して出土した。セットとなるもので淡路を代表する石棺資料となった。現況では津名郡であるが、周囲の古墳分布を見る限り、北側に続いていると断言は不可能である。現状の事実からは西淡町にかけての横穴式石室分布地域の北端と考える方が妥当かと思われる。五色町では最近の調査で弥生時代から古墳時代にかけての集落が多数確認されつつあり、津名郡北側の丘陵上の集落とは異なる集団が存在した可能性も想定できる。

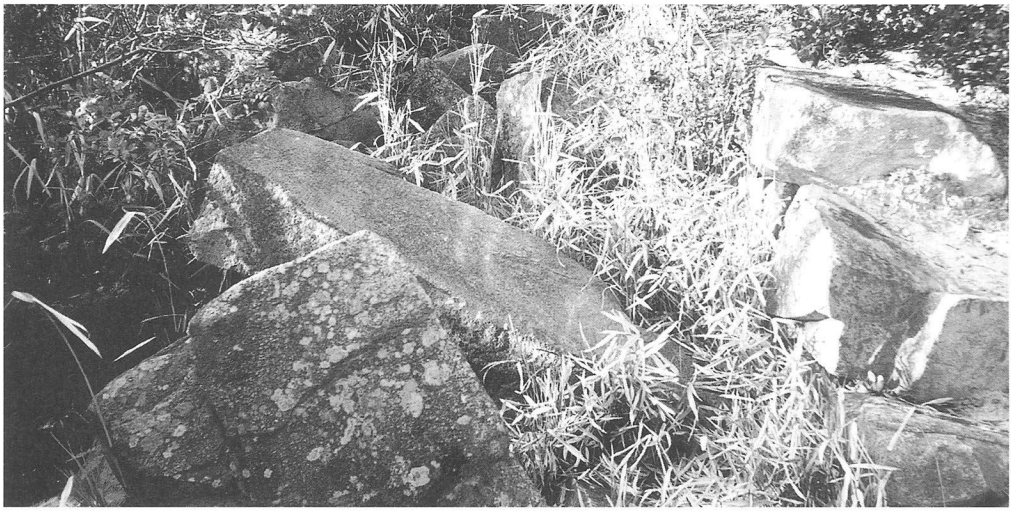


写真７　石の寝屋古墳

Ⅲ．調査成果の概要

１．調査の方法

兵庫県における発掘調査は「受託」という手法によって行われる。これは調査に伴う掘削や仮設の作業を土木業者に請け負わせる手法で、重機による掘削分と作業員による掘削分に分けて掘削土量を設計し、実際の掘削土量の出来高によって工事費を支払うものである。このため調査前、機械掘削の終了時、人力掘削の終了時に掘削断面の測量を行う必要がある。

貴船神社遺跡では、調査区の西側の県道福良江井岩屋線を基準に、それと直角方向に掘削断面の測量を行う設計であったため、これと合わせて調査用のグリッドを設定することとした。調査区西北端にＡ１杭を設置し、南方向に10ｍの間隔でＡ１～Ａ６杭を、東方向にも同様にＡ１～Ｄ１杭を設置し、10ｍ四方のグリッドを設定し、グリッド名は西北隅の杭名で呼称することとした。各杭の公共座標値を求め、Ａ１は国土座標第Ｖ系のX=-157.1540810、Y=58.2979049、Ａ６がX=-157.1990290、Y=58.2760029を得た。このためグリッドの南北方向は国土座標北から東に25度58分43秒振った方向となる。

遺物はグリッドと層位によって取り上げることとし、製塩土器が集中する地点ではグリッド内に２×２ｍの小グリッドを設定した（小グリッドはグリッドの西北隅を(1)とし、東方向に（1)～(5)、(1)の南側を(6)とし、東方向に(10)というように(25)グリッドを設定した)。以上の方針で、製塩土器の廃棄の単位の把握などを試みたが、層位の把握や記録などに手間取り、調査中に生じた様々な疑問点を充分に解決することは出来なかった。

２．層序

地理的環境で述べたとおり、調査地は３つの異なる営力からなる砂層が複雑に堆積して形成されている。このため細かな層相の違いを捨象して、巨視的に層序を把握するように努めた。調査区北壁、３ラインの東西断面図とＢライン、調査区東壁の南北断面図をもとに作製した調査区北半のパネルダイアグラムによって層序を解説する。

調査区は巨視的に南北４列の水田に造成されている。切り土と盛り土で造成されており、西端では包含層の上部は削平を受けている。Ｂ列のグリッドに重なる西から２列目の水田も、東側では包含層上部は削平されていると考えられる。西側は最も包含層の残りの良い部分である。完全な形の石敷炉の大半は、西端の水田との段差上段付近で検出されているが、このことと包含層の残存状況とは関係があると思われる。

①Ａ層は丸底Ⅱ式の製塩土器細片を多量に含む黒褐色礫まじり砂質土層である。後述する石敷炉は、この層の中位と②層の上面付近で検出したため厳密には細分される。局所的には分層できるが、一時期の面として把握することはできなかった。製塩土器片は部分的に廃棄ブロックと思われるまとまりが存在するものの、土器片包含率は『標準土色帖』に示される面積割合で10～20％程度であり、巨視的にはばらまかれたような状況で堆積している。調査時には、砂層上は歩きにくく、作業床を固める目的で意図的にばらまいたという印象を持った。①Ａ層は南側は調査区外に広がるが、調査区北には広がらない。また、西側は削平され、本来の範囲は不明である。②層は主として脚台式～丸底Ⅱ式の包含層、③層は主として脚台式～丸底Ⅰ式を包含する。両層とも土壌化している。④層はＳＸ０５の埋土（西側の立ち

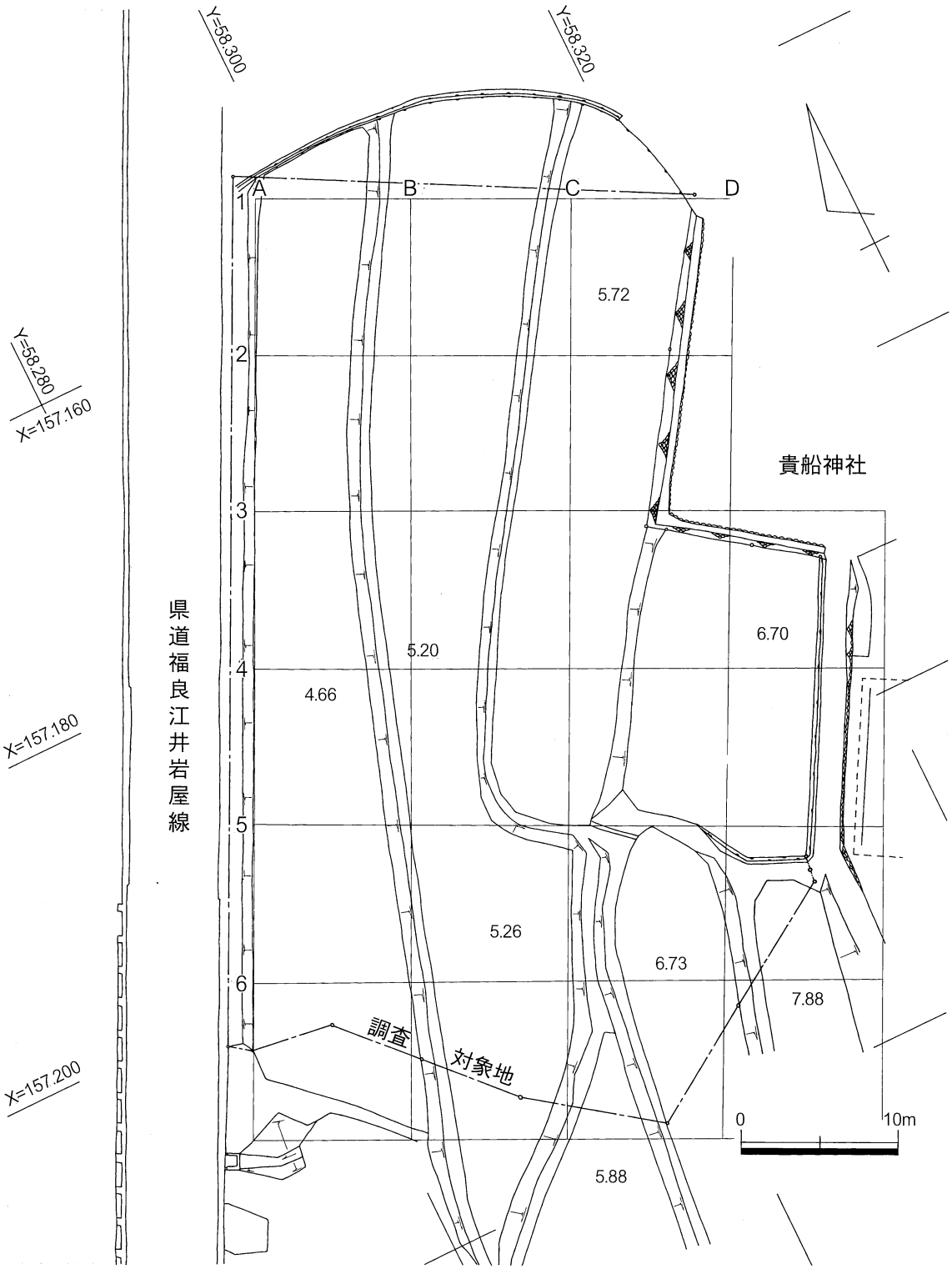


図７　グリッド配置図（各地筆の数値は調査前の標高）

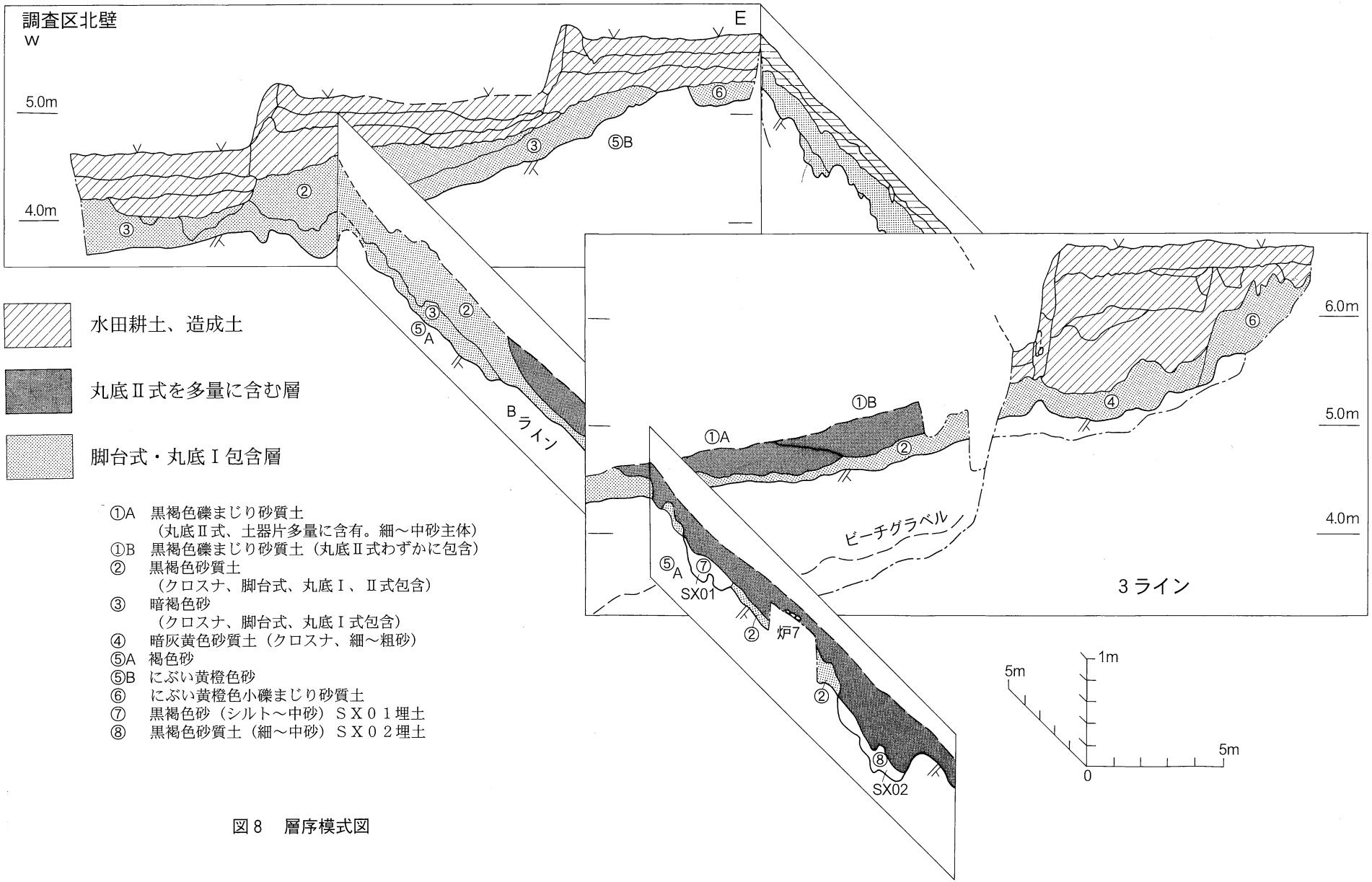

調査区北壁
W
E
5.0m
4.0m
6.0m
5.0m
4.0m
水田耕土、造成土
丸底Ⅱ式を多量に含む層
脚台式・丸底Ⅰ包含層
①A　黒褐色礫まじり砂質土
（丸底Ⅱ式、土器片多量に含有。細～中砂主体）
①B　黒褐色礫まじり砂質土（丸底Ⅱ式わずかに包含）
②　黒褐色砂質土
（クロスナ、脚台式、丸底Ⅰ、Ⅱ式包含）
③　暗褐色砂
（クロスナ、脚台式、丸底Ⅰ式包含）
④　暗灰黄色砂質土（クロスナ、細～粗砂）
⑤A　褐色砂
⑤B　にぶい黄橙色砂
⑥　にぶい黄橙色小礫まじり砂質土
⑦　黒褐色砂（シルト～中砂）ＳＸ０１埋土
⑧　黒褐色砂質土（細～中砂）ＳＸ０２埋土
Bライン
3ライン
ビーチグラベル
SX01
SX02
炉7
1m
5m
5m
0

図８　層序模式図

上がり不明瞭）である。⑥層は礫まじりの遺物包含層である。通常の集落遺跡に見られる土器片が多く、製塩土器はほとんど含まない。③層との層位関係は明確でない。⑤A層、⑤B層は地山と判断している。

3．全面調査の概要

調査期間約５ヵ月を費やして、1790㎡の発掘調査を実施した。その結果、県下ではじめてまとまった炉跡群を検出することができた。時期も古墳時代後期の単独時期ではなく、古墳時代中期から奈良時代にかけての遺構が調査された。出土遺物はさらに遡り、縄文時代後期からのものが確認されている。

炉跡は22基確認しているが、被熱した礫群は多量にあり、本来この数倍の炉が築かれていたことは想像に難くない。小型の集石は至る箇所で検出されている。炉跡の中には複数で有機的な関係があると認められるものもあり、粘土を貼った土坑とともに塩づくりの過程を検討する良好の資料である。製塩炉は円形や楕円形・隅円長方形の平面形態をした石敷炉が主体である。それ以外は、石を立てて使用した石囲炉や石を２列やＨ形に配置した石敷炉もある。22基のうち石囲炉は３基、石を配置する石敷炉は２基である。類似しているが、周囲に円形に並べ中央に強く被熱した礫を配する炉跡も１基調査している。石を並べた炉跡は下層から検出されており、古い段階の炉跡である。丸底Ⅰ式期の炉跡で、他は丸底Ⅰ～Ⅱ式期の遺構である。

炉跡周辺には土坑も数基確認されている。特にＳＬ０１～０５横にある粘土を敷いた土坑は採鹹土坑と考えられる遺構である。一体で塩づくりの過程を想定できる。他にも粘土を貼った長方形の土坑がある。これは炉跡と直接には結びつかないが、製塩過程の遺構であろうと思われる。

炉跡群の遺構面は製塩作業による土器廃棄層になっている。包含層の上に遺構は築かれている。それ以外に落ち込みに土器を廃棄している部分もある。一部廃棄プロックを把握できるところもある。下層の遺構面でも廃棄用の落ち込みがあり、他に溝が海岸線に平行に掘られている。埋土には丸底Ⅱの土器が多量に入っていた。

他の遺構として竪穴住居跡が２棟、石棺墓が１基調査されている。

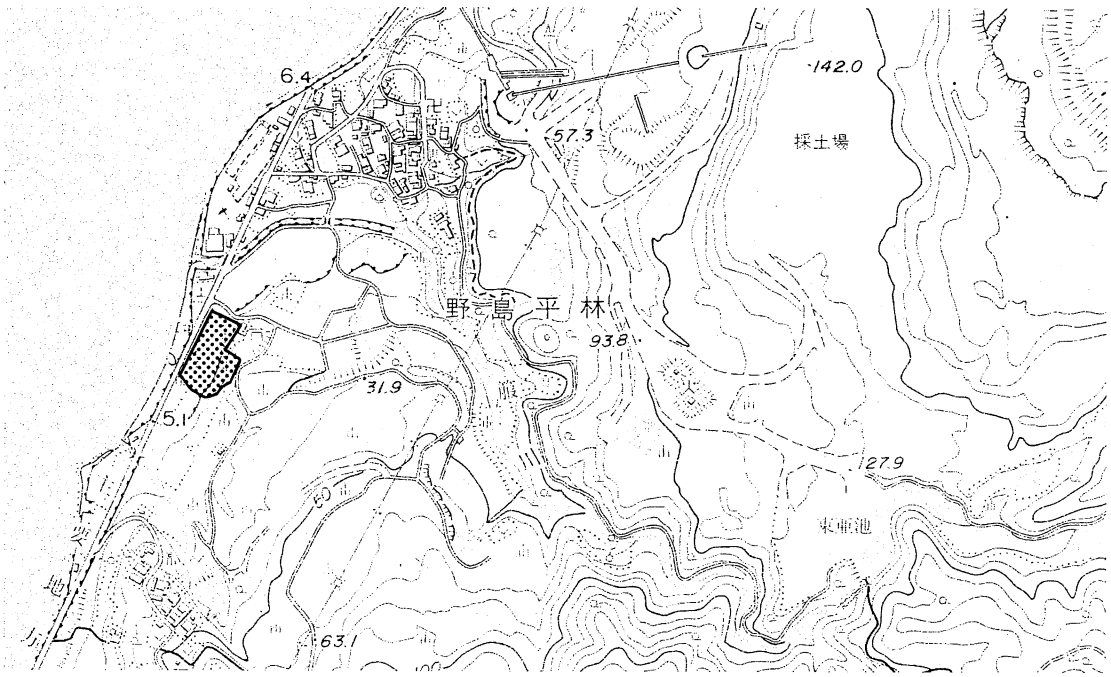


図９　貴船神社遺跡の位置

1
A
B
C
D
2
3
4
5
6
X=-157160
X=-157170
X=-157180
X=-157190
X=-157200
Y=58310
Y=58300
Y=58290
ST01
炉21
SX06
SX01
炉8
炉10
炉7
SX02
SH02
炉12
炉13
炉11
SK02
SX04
炉14
SK01
炉22
SH01
炉4
炉3
炉15
炉17
炉2
炉1
炉5
炉16
炉6
炉18
炉19
0
10m

図10　上層遺構　平面図

図11　下層遺構　平面図

Ⅳ．遺　　構

１．炉跡（ＳＬ）

被熱した礫群はほぼ全面で確認している。この中の大半は炉に伴う礫と考えられるが、すべてを断定することは不可能であった。単位として確実にまとまりのあるもののみを、炉跡として抽出した。同様に単位としてはまとまりがないが、本来単位としてあったものが、後世の改変で疎らになったと断定できたものは炉跡として認定している。確定したものは22基である。当然他にも炉跡と考えられるものもあるが、図を提示するにとどめる。調査段階でも礫群が集中している地点と、その中で空白部分が存在しており、炉とその工程過程や炉とその間の通路などと想定した箇所もある。今回は未確定なため、各礫集中地点の資料を図化したものを報告する。

炉跡は多量の廃棄された製塩土器の層の上に築かれている。同じように炉跡も数回の改修を行って使用に供していたようである。廃棄段階で放棄した炉跡の上に新たな炉跡を構築している例もある。調査区南西部は炉跡が集中しており、その状況が明確である。その意義もあって、南西部分は保存されることとなった。そのため、最低限の断ち割りしか行っていない。炉跡以外に採鹹関連の土坑と思われる遺構もあり興味深い。

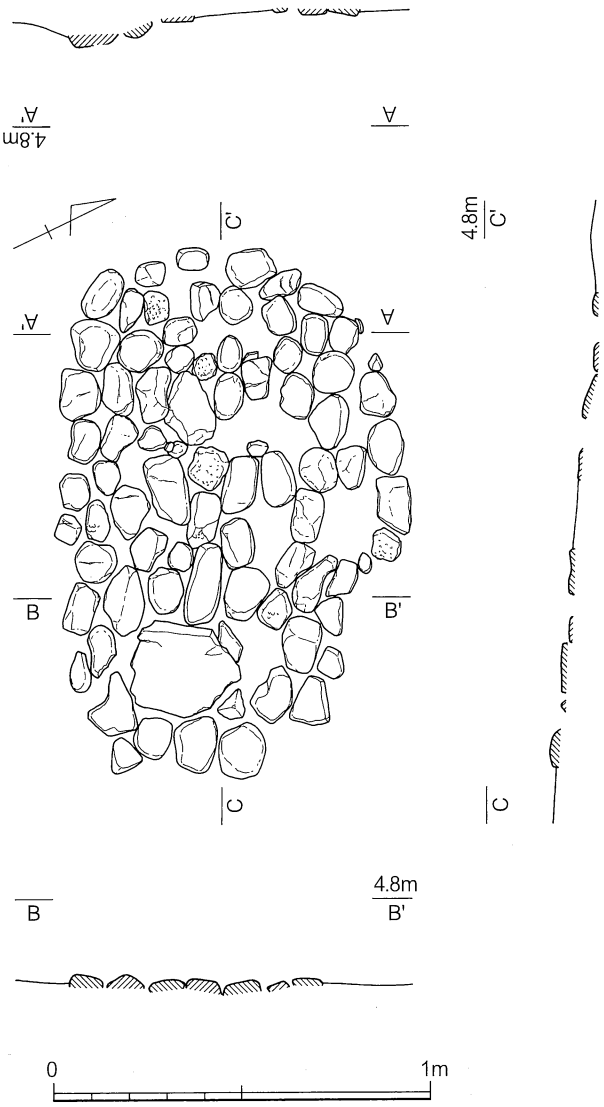


図12　ＳＬ０１　実測図

①　ＳＬ０１

調査区南西隅の製塩炉集中部分で検出された炉跡である。近接して北側にＳＬ０２が、南側にＳＬ１６が、東側にＳＬ０５が存在している。一般的な(典型的な)石敷炉である。隅円長方形のプランで、長辺140㎝、短辺92㎝を測り、主軸方向はＮ64°Ｗである。

この炉跡も修復されたものと思われ、西側に円形のプランが看取される。僅かに円形の中央部分がレンズ状に凹んでおり、礫もまとまりがある。被熱の状況も似通っており、花崗岩はボロボロになっている。この円形部分の東側に礫を付け足して隅円長方形にしている。大半の礫は拳大からやや大きめの石であるが、端から２石目は大型の石材が使われている。また、この石は角礫であることも特徴的である。西側が小型で集中して密度が高いが、東側は石材が大

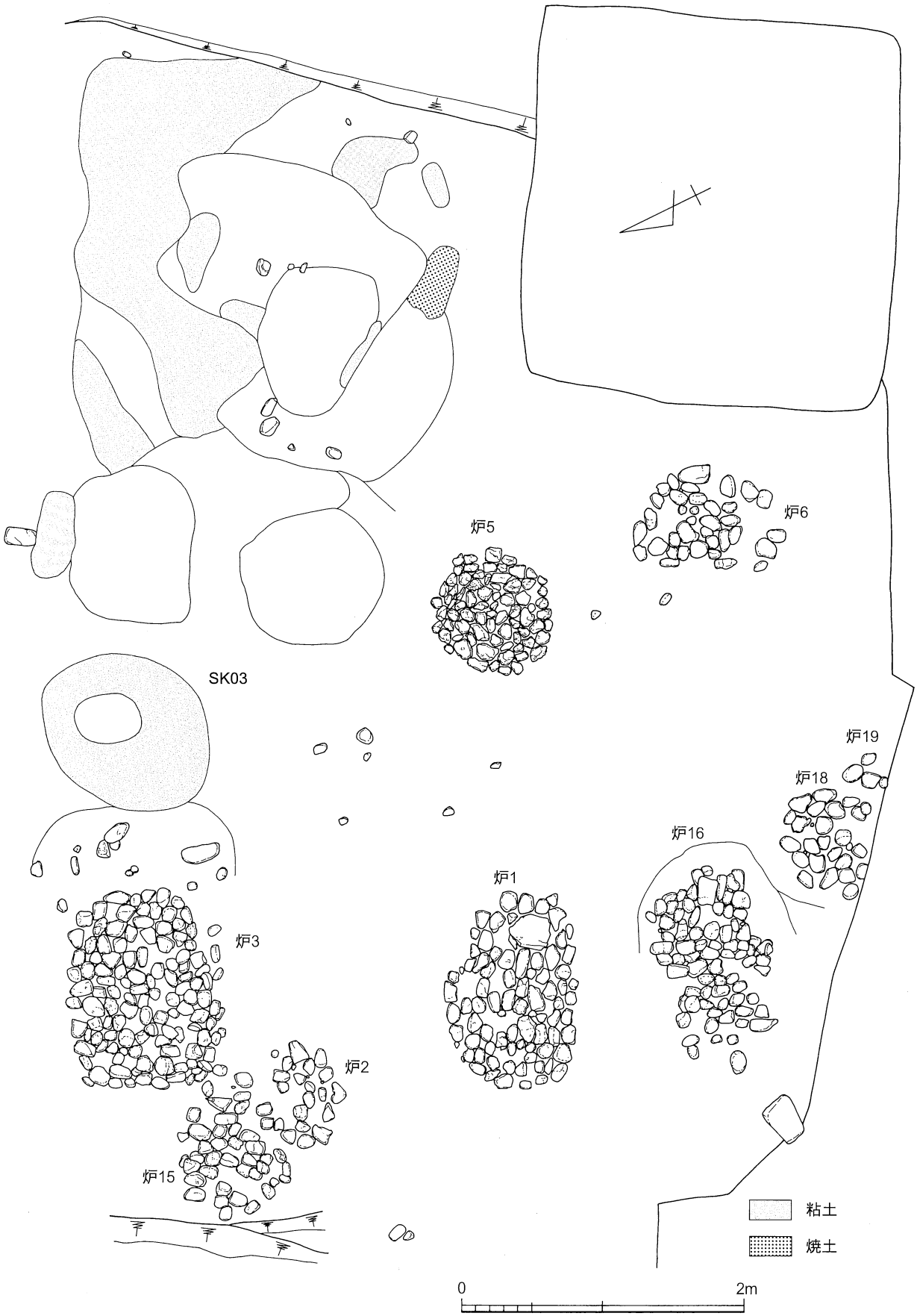


図13　調査区南西部　炉跡群　実測図

型で密度も低くなっている。幅も東側の方に向かってやや細くなっていく。被熱状況も弱く、炉跡の中で変化がある。

② ＳＬ０２

調査区南西隅の製塩炉集中部分で検出された炉跡である。西側の水田の開削によって大きく手が加わっている。削平された部分が多く一部が残存しているにすぎない。そのため、炉跡の形状などは不明である。残存する長径は75cm、短径は50cmを測る。近接して東側にＳＬ０３が、南側にＳＬ０１が存在している。やはり、下層には多量の製塩土器が廃棄された状況で出土しており、直接この炉の時期を決定資料にするのは困難である。遺構面からは周辺の炉跡群と有機的な関連があるものと思われる。現況からは円形にはならないかと思われる。礫の集中度はそう高くはなく、部分的に下の土器廃棄面が見られる。礫のレベルがレンズ状にならずに、高低差があることから、ＳＬ０５のような円形にはならないと考える。火を受けた状況は他の炉跡と変化はない。ただ、礫群のまとまりがあることから、炉跡の一部と考えて問題ないものと思われる。石材も他の炉跡同様に数種の石材が使われている。

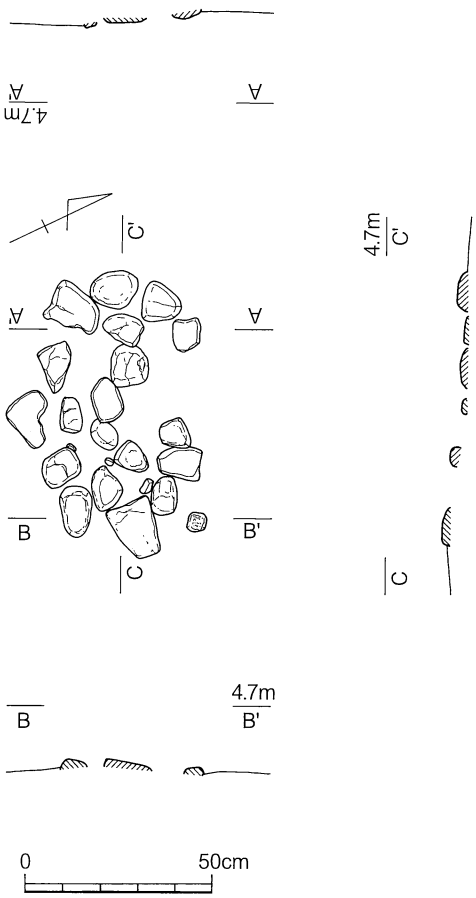


図14　ＳＬ０２　実測図

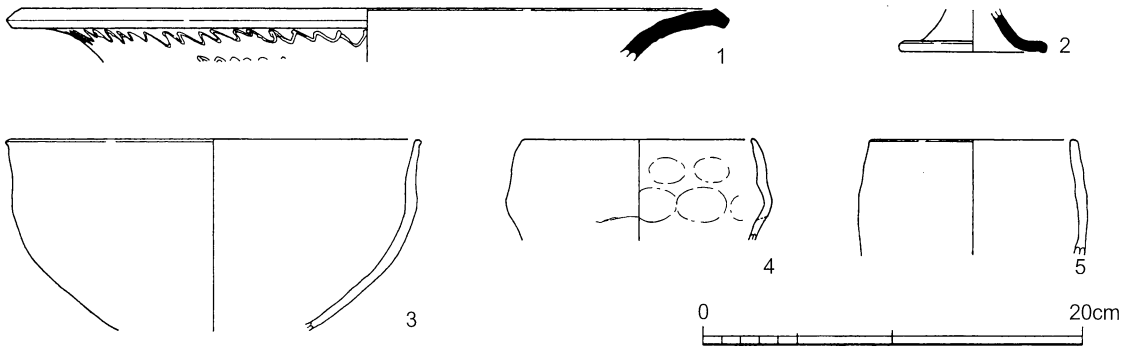


図15　ＳＬ０２・ＳＬ０３　出土遺物実測図

③ ＳＬ０３

ＳＬ０２などと同じく調査区南西隅の製塩炉集中部分で検出された炉跡である。南西方向に近接してＳＬ０２とＳＬ１５が築かれているが、同時期に操業したかは不明である。特にＳＬ１５は確実に下層で検出しており、１時期古い段階の炉跡である。南側に約1.5m離れたＳＬ０１は同時操業の可能性の高い炉跡である。ＳＬ０５も含めて複数で有機的な関係にあったものと思われる。平面形は隅円長方形の石敷炉である。西辺はやや直線的であることが特徴である。長径は140cm、短径は115cmを測る。

南側に位置するＳＬ０１とはいろいろな面で類似点が多い。規模においても、構築方法においても、

被熱状況においても似通っている。長さはともに140cmと同じで、その構築された位置関係においても２基は同時併存し、さらに有機的に関連のある炉跡と考えられる。短径は本炉跡の方が規模が大きい。ＳＬ０１が円形に作り足したような状態であるのに比べて、当初から計画的に築かれたようである。ただ、平面プランはＳＬ０１のように細くならず、僅かにすぼまる程度である。東側が細くなるのは、炉跡の機能として意味があるのかもしれない。石材は花崗岩とチャートなどを使用している。石材の片寄りは認められない。密度も極めて高い訳ではなく、地面が見られる部分もある。炉跡の上面は比較的レベルを揃えている。凹状にはなっていない。

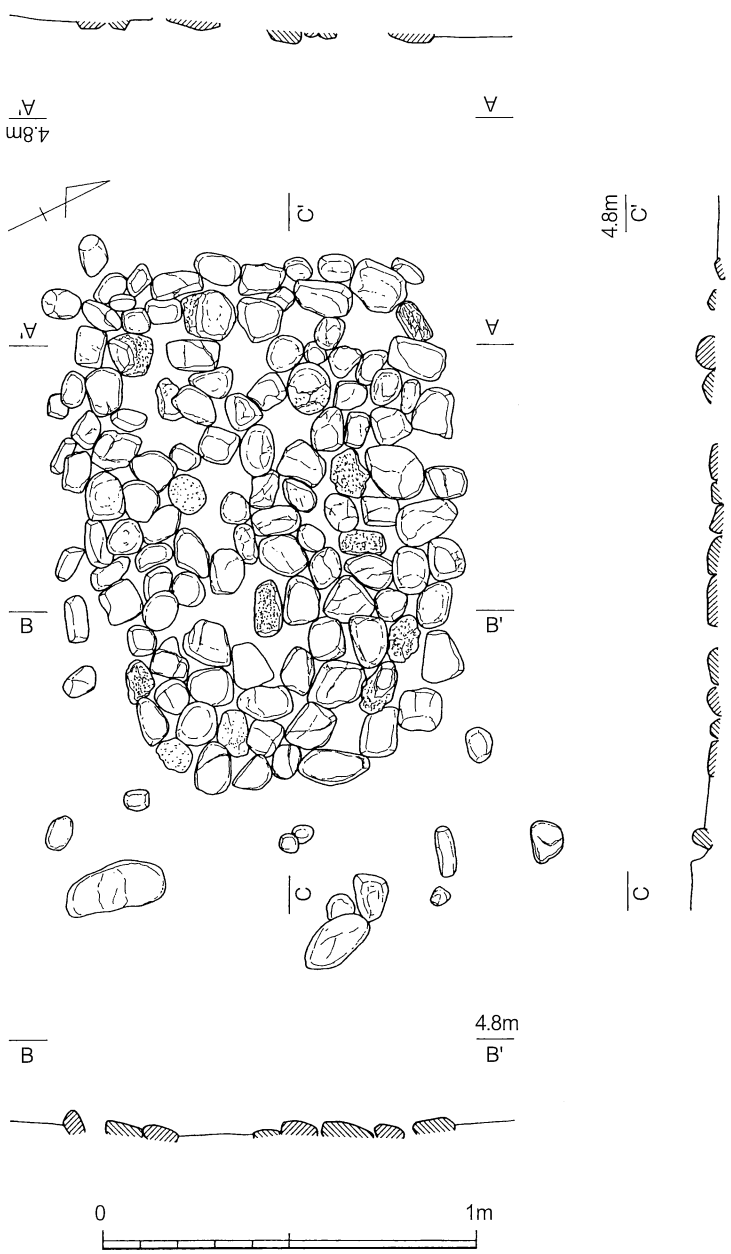


図16　ＳＬ０３　実測図

平面プランは、大きくは隅円長方形であるが、前記したように幅に変化がある。西側の海浜部寄りの幅が多少広くなっている。幅の広い西側の方が直線的である。それに対して東側の方は弧を呈している。東側だけ掘り方を検出している。石組の端から0.6m離れており、掘り方としては大きなものである。この掘り方ラインを切ってＳＫ０３が築かれている。本製塩炉を構築した後に採鹹土坑を築いたことになる。ただ、主軸方向はほぼ同じで、計画的に構築されたものと思われる。掘り方内にも幾つかの礫が散布しており、作り直した可能性も考えられる。同様に石組南側にも礫が見られる。ただ、中央部分の断ち割りを行ったが上下関係での作り直しは見られず，同一平面での改築（修築）と考えられる。製塩炉の下部構造は明確ではなかった。

④　ＳＬ０４

調査区南西隅の炉跡集中部分の北端で検出された炉跡である。ＳＬ０２同様に西側の水田の開削によって削平されている。残存状況は良好とは言えない。残存する長径は65cm、短径は40cmを測る。南側に約1.5m離れてＳＬ０３が位置している。形状は不明である。

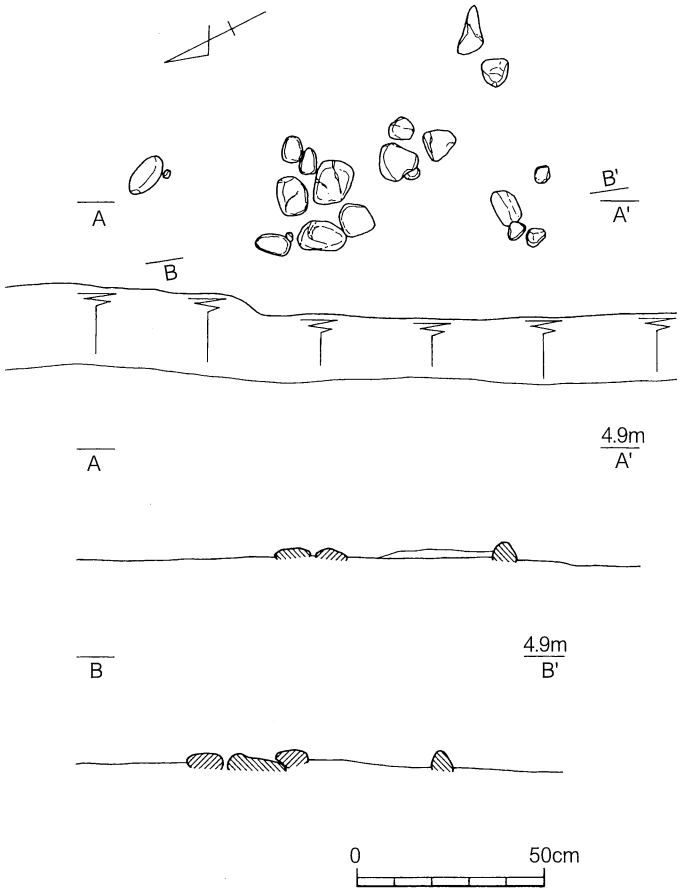


図17　ＳＬ０４　実測図

⑤　ＳＬ０５

やはり調査区南西隅の製塩炉集中部分で検出された炉跡である。円形の炉跡で、本遺跡の今回検出した中で最も残存状況の良好な炉跡である。平面形態は円形を呈している。断面形状は凹レンズ状の中央が窪んだ形である。正円ではなく、多少歪んでいる。地点によって多少の数値のばらつきはあるが、全体的には、長径90cm、短径85cmを測る。西側に約1.5m離れてＳＬ０１が位置しており、主軸方向が同一であることや、平面的な位置が並んでいることから、意図的に配置された関連の深い同時操業した炉跡と考えられる。明確にこの炉跡から出土したと断定できる遺物はない。

石材は他の炉跡と同じく花崗岩とチャートの両方が使われている。特に石材によって位置を決めている状況ではない。

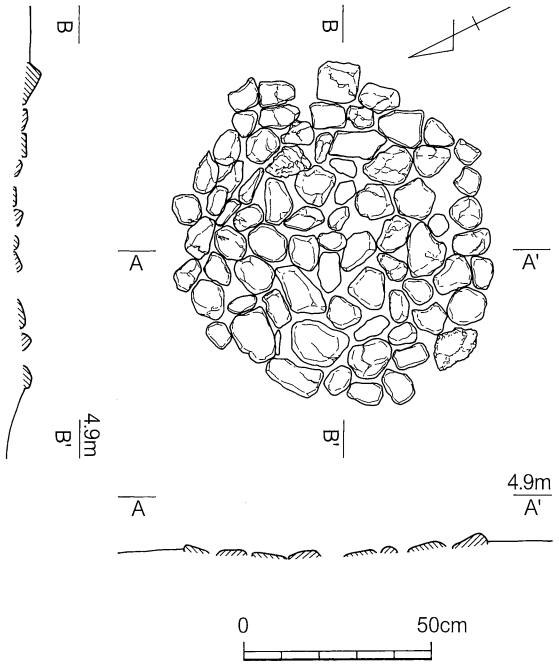


図18　ＳＬ０５　実測図

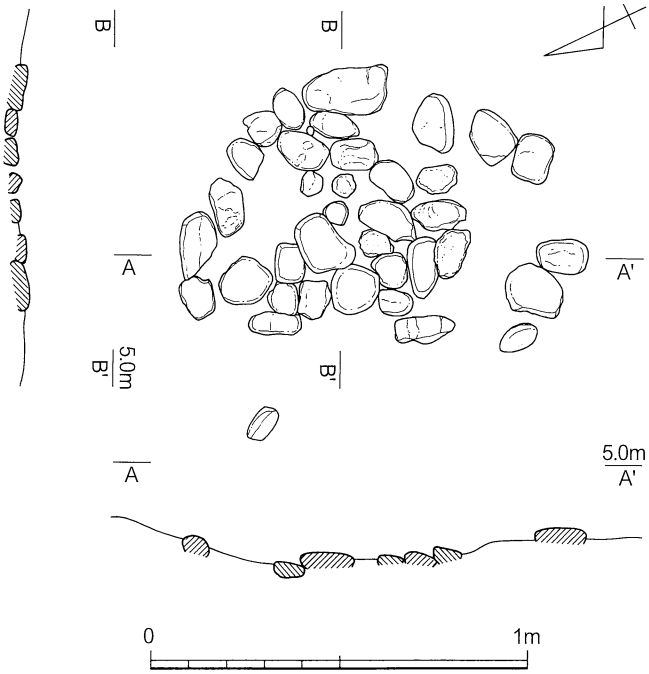


図19　ＳＬ０６　実測図

⑥　ＳＬ０６

調査区南西隅の製塩炉集中部分で検出された炉跡である。正円より僅かに楕円形の炉跡で、ＳＬ０５の南側約１ｍと近接している。形状的にはＳＬ０５と類似しており、位置も並んでいるようにも見えるが１段階古い時期の炉跡ではないかと思われる。ＳＬ０５ほどではないが、残存状況の良好な炉跡である。断面形状は凹レンズ状の中央が窪んだ形である。正円ではなく、多少歪んでいる。地点によって多少の数値のばらつきはあるが、全体的には、長径95cm、短径80cmを測る。明確にこの炉跡から出土したと断定できる遺物はない。

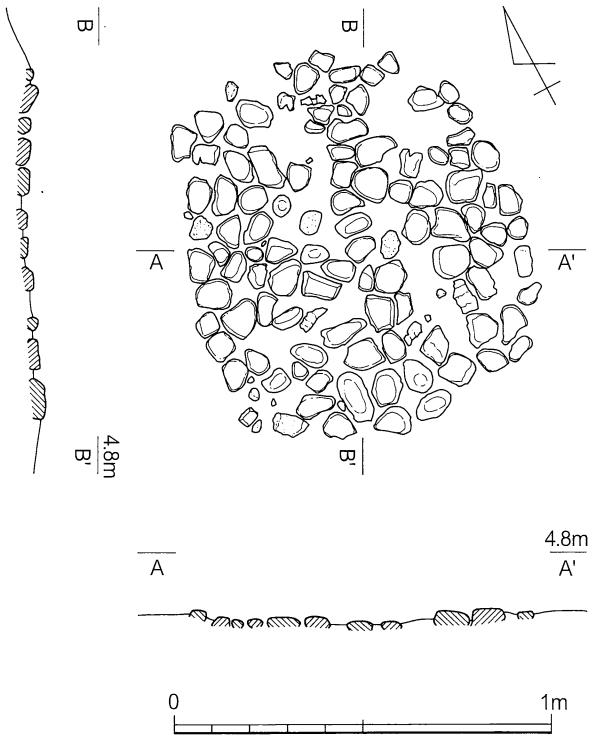


図20　ＳＬ０７　実測図

⑦　ＳＬ０７

Ｂ－４杭の北東側至近で検出した石敷炉である。丸底Ⅱ式土器片を多量に含む包含層中から検出した。石敷き部分はほぼ完存する。炉１～５と比して、やや小振りの礫を用い、径45～50cm程の円形に、礫の平らな面を揃えて敷き並べている。断面は中央部が最も低く、浅い椀状を呈する。ＳＬ０７は、完存する石敷炉の中では最も北側に位置し、炉０１～０６のように狭い範囲に集中せず、やや離れた位置に単独で所在している。

なお、本遺構は断ち割りなどは行わず、現状で保存している。

⑧　ＳＬ０８

製塩土器の包含層中（図９の①Ａ、②層）には多くの中～大礫の亜円～亜角礫が包含されていた。岩種は砂岩、花崗岩、チャートなどで、被熱によって赤変しているものが多くあること、礫の分布に粗密があることなどから、すべての礫についてではないが、とくに①Ａ層中のものは人間の行為（廃棄）の結果による堆積と考えた。このうち石敷炉の残骸の可能性のあるものがある。これは、ほぼ同じ標高で礫の平らな面を揃えていること、完形の石敷炉と同程度の規模に礫が集中することなどが根拠である。なお、他の遺跡での製塩炉には礫に飴色の不透明な薄膜が付着していることが確認されているが、貴船神社遺跡では、少なくとも肉眼観察では全く確認できなかった。

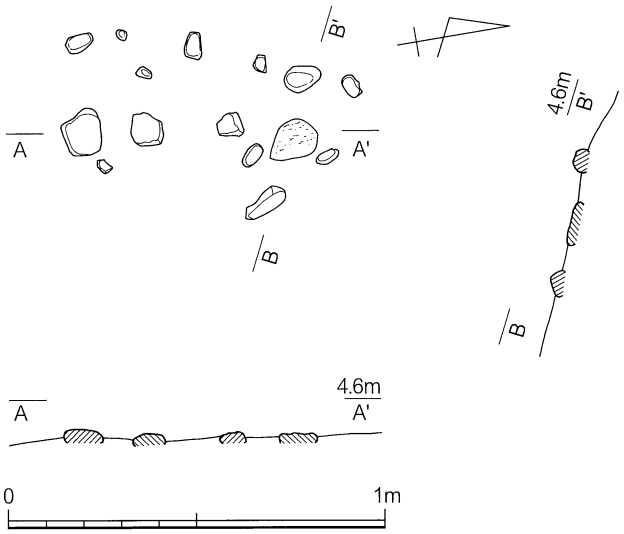


図21　ＳＬ０８　実測図

ＳＬ０８は、Ｂ－４杭の東4.5m北３m付近の丸底Ⅱ式土器片の包含層中で検出した。南北１m、東西0.4m程の範囲で15個程の礫が平らな面を揃えて集中し、１つの礫は赤変している。この周辺での礫の分布状況とも合わせ、石敷炉の残骸と判断した。

⑨　ＳＬ０９

Ｂ－４杭の西南至近で検出した炉の残骸である。他の石敷炉と異なり丸底Ⅱ式土器包含層の下面の黒褐色砂質土層上面で検出した。西側は削平されているため本来の規模は不明であるが、長軸２m、短軸１mの範囲に礫が集中し、半分は赤変している。当初は、原位置から動いた可能性の高い礫を除くと２列の石列が復原できると判断していた。これは図22で断面図を作製した礫の並びと、北側に80cm程離れてほぼ平行に並ぶ礫の並びである。そしてＳＬ０９については貴船神社遺跡での他の石敷炉とは異なるタイプの炉と考え、類例を山口県波雁が浜遺跡で検出されている石囲炉に求めていた（注１）。

波雁が浜遺跡で検出されている石囲炉は、長さ約2.35m、幅約1.0～1.5mで、長辺側に角礫の内側の面を揃えて並べたもので、礫の内側の面はかなり焼けただれていると報告されている（注２）。

しかし、その後の検討によって、ＳＬ０９の場合は礫の平らな面を高さを揃えて並べており、波雁が浜遺跡の炉のように、礫の内側を揃え上面は特に揃えられていない形状とは異なっている。貴船神社遺跡で検出された他の石敷炉と同じ形状の炉の残骸と考えたほうが妥当であろう。また、現地説明会ではＳＬ０９を検出層から丸底Ⅰ式期のものとしたが、明確な根拠はなく、丸底Ⅰ式もしくはⅡ式の炉と訂正する。

（注１）兵庫県教育委員会「貴船神社遺跡現地説明会資料」1995

（注２）本村豪章・小野忠熙「波雁が浜遺跡」『宇部の遺跡』宇部市　1968

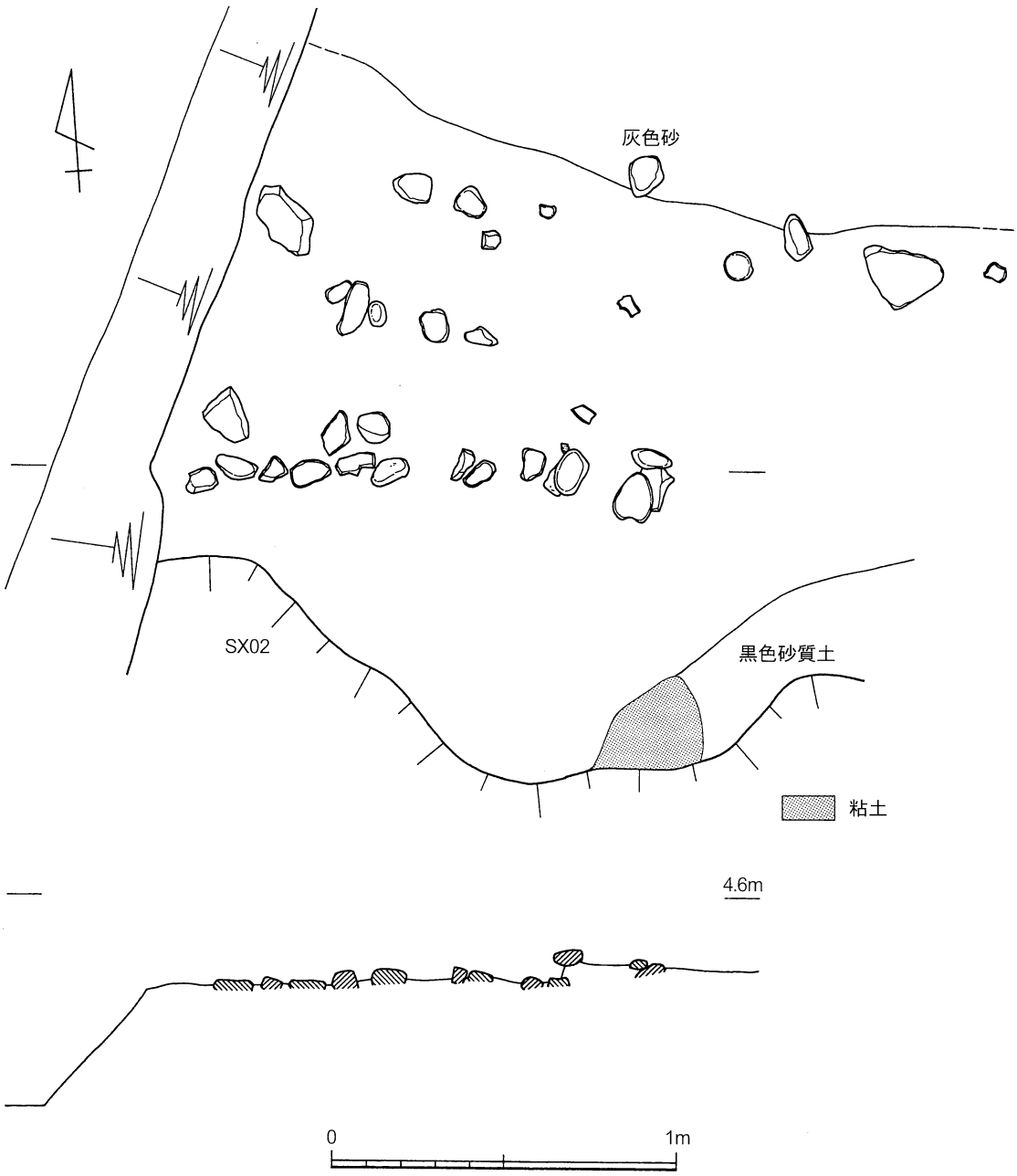


図22　ＳＬ０９　実測図

⑩　ＳＬ１０

Ｂ－４杭の東７ｍ、北2.5ｍ付近の丸底Ⅱ式土器片の包含層中で検出した。径50㎝の範囲に10個程の礫が平らな面を揃えて並んでいる。半分は赤変している。礫は疎らであるが周囲の礫の分布状況から面を揃える礫が集中すること、他の円形の石敷炉と規模が似ており、礫の並びも円形に復原できると考え、積極的に炉の残骸と判断した。

調査区中央に近いＢ－４区で検出された炉跡である。東側一帯にも多量に被熱した礫群が広がっているが、明確に炉跡と判断できるものは存在しない。西側にＳＬ０８が２ｍ離れて存在している。その２基の炉周辺は僅かに落ち込んだ地形となっており、やや廃棄された製塩土器の量は増えている。他の落ち込みのように明確な落ちは示していない。

平面の形状は円形である。径100×90cmと正円ではなく、やや歪である。また、直径部の断面形態も他の円形の炉跡のようなレンズ状にはなっていない。中央と周囲の礫がほぼ同じレベルである。周囲に円形の石組を施し、中央に周囲より１回り大きな礫を１石配置している。中央の礫は周囲の礫より、強く火を受けている。石材が花崗岩であることから、なおさら高熱を受けたように見えるのかもしれない。が、現況では被熱の状況は強いと思われる。

今回の調査では、この炉跡だけで他に類似する炉跡は確認されていない。石列だけが検出されていることからも、１段階古い時期と考える方が妥当であろうか。

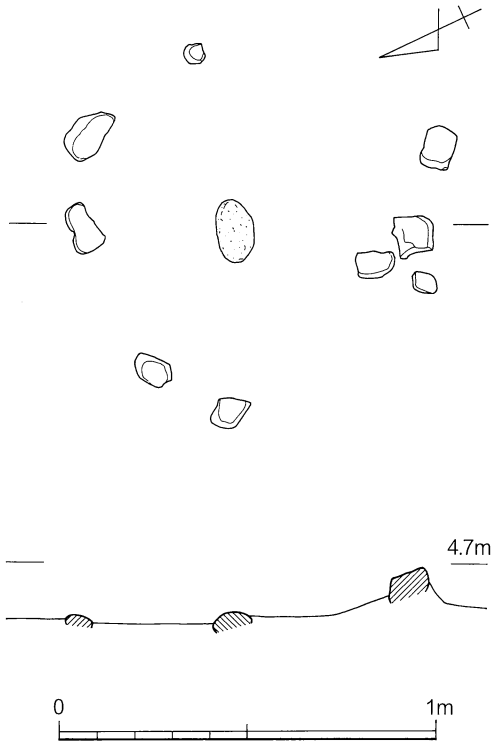


図23　ＳＬ１０　実測図

⑪　ＳＬ１１

南西隅の炉跡群の北側で確認された炉跡で、石囲炉である。南西隅の炉跡群がすべて石敷炉であるのに対して、数少ない石囲炉である。規模は小さく、残存長で長辺が65cm、短辺が55cmを測る。平面長方形ですべてが残っているわけではないが、平面規模はほとんど変わらないのではないかと推定される。石材は縦積みで利用している。石材は床面より上の方が強く焼けている。石敷炉と比べて石材は大きなものを使っている。

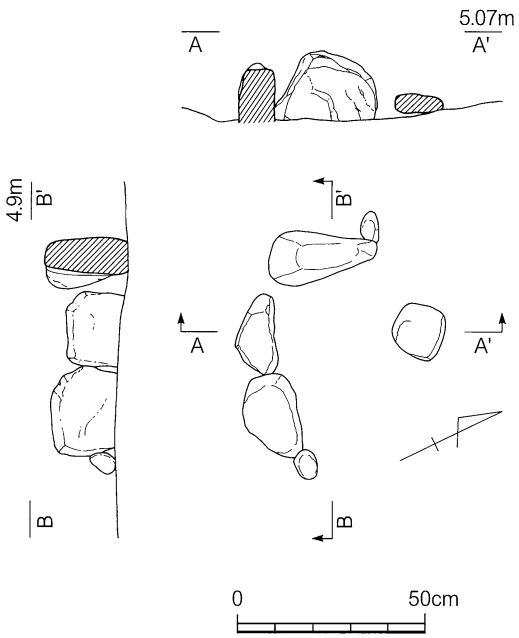


図24　ＳＬ１１　実測図

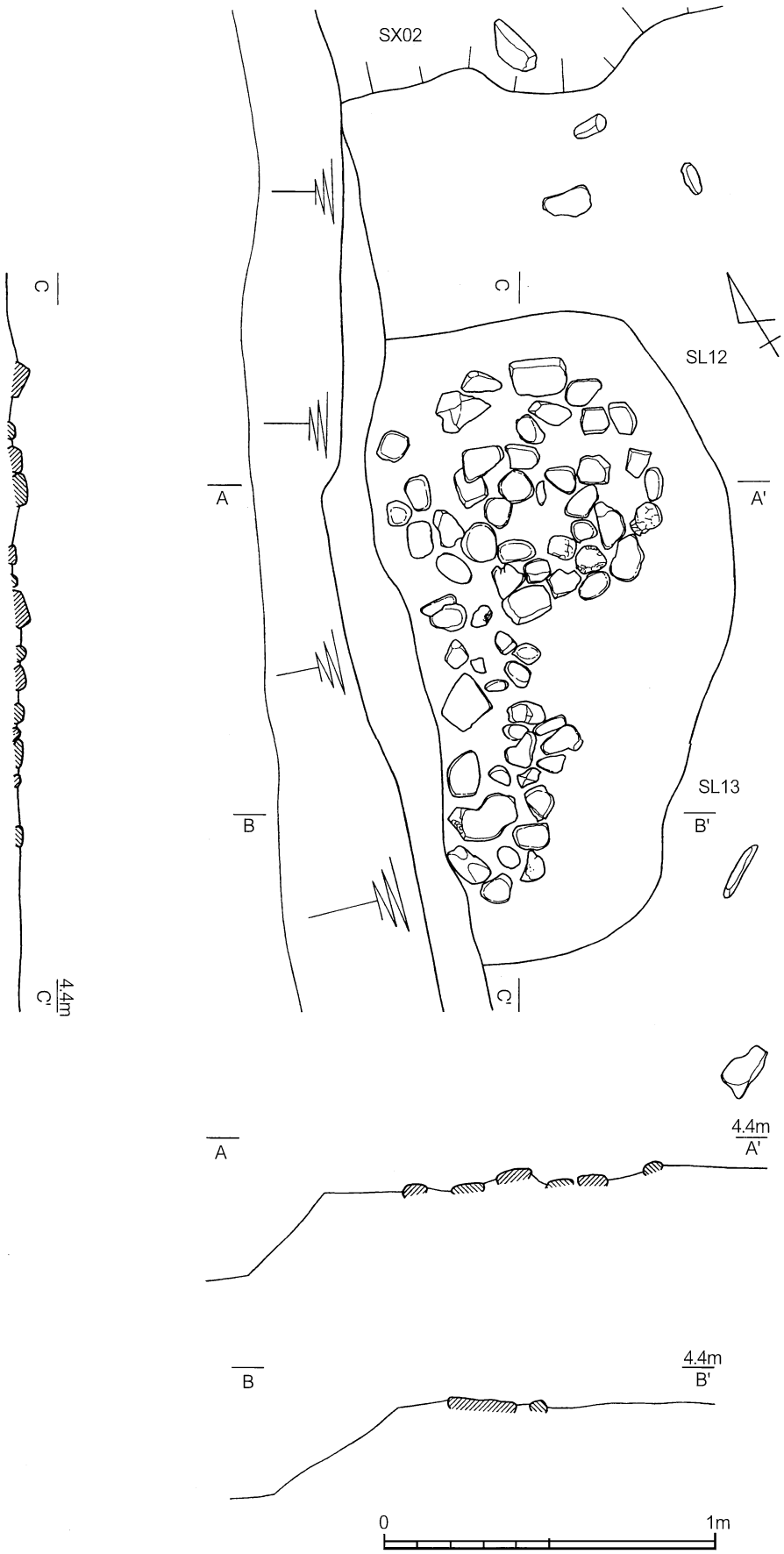


図25　ＳＬ１２・１３　実測図

⑫　ＳＬ１２

Ｂ－５杭の西１ｍ、北２ｍ付近で検出した石敷炉である。ＳＬ１３と接するが切り合い関係がありＳＬ１３が新しい。丸底Ⅱ式土器包含層の下面の黒褐色砂質土層上面で検出した。西側は削平されているため本来の形状は不明であるが、礫の並びから径40～45cmの円形のものと考えられる。他の石敷炉と同様に、礫の平らな面を高さを揃え、浅い椀状に敷き並べている。全体の1/5の礫は赤変し、花崗岩質のものはボロボロになっている。ＳＬ１２は後述のＳＬ１３とともに黒褐色砂質土層上面で検出したが、石敷きの外周の10cm程外側を巡る掘り方を検出している。炉の現状保存のため断面調査を行わなかったから確認は出来ていないが、本来は浅い窪みを掘り、底部に石を敷き並べる構造であったと推定される。

⑬　ＳＬ１３

ＳＬ１２の南西に接して検出した石敷炉である。西側は水田造成により削平されているため本来の規模、形状は不明である。円形であったとすると径50cm程に復原できるが、平面形状から隅丸長方形であった可能性がある。ＳＬ１２とはほとんど同じ標高で築かれているが、礫の並び方の切り合いからＳＬ１３が新しい。一辺20cm程の角礫など相対的に大きな礫を含み、半分は赤変している。

ＳＬ１３も検出した状態で保存している。

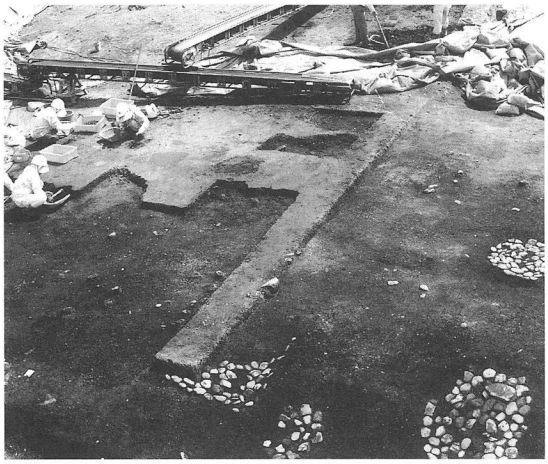


写真８　調　　査　　風　　景

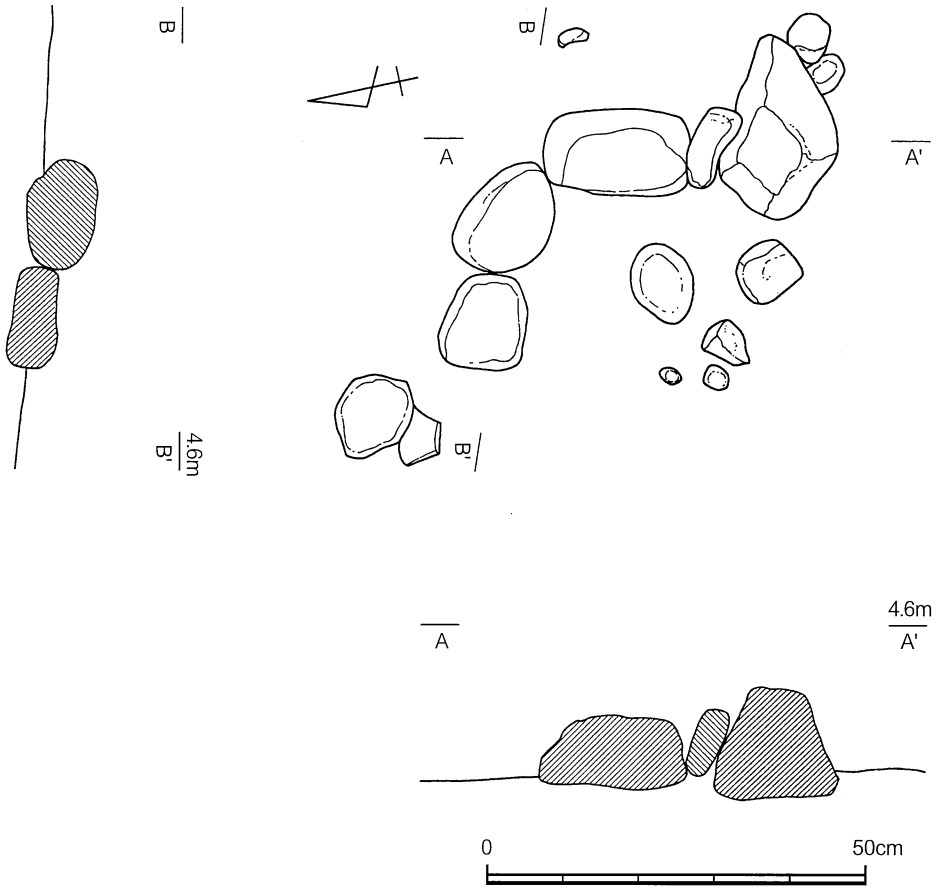


図26　ＳＬ１４　実測図

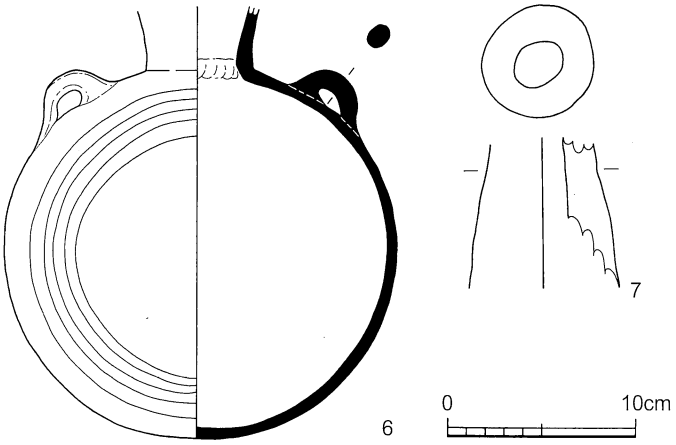


図27　ＳＬ１４　出土遺物実測図

⑭　ＳＬ14

調査区中央部のＢ－４区で検出された炉跡である。周囲の礫は多く分布しているが、明瞭な炉跡は存在しない。板石を立てた石囲炉である。西側に開口する炉跡であるが、南側は欠損している。北壁も開口部に近い部分は残りが悪い。床面の焼成状況などから、平面規模は現状で計測できるものと思われる。奥に当たる東壁は2石で構成されており、幅36cm、高さ14cmを測る。高さも２段以上にはならないと思われる。床面の規模は36×25cmと狭小である。床面部分は製塩土器の廃棄層になっていることは他の炉跡と共通している。炉跡の堀方は明確には確認できなかった。損壊を受けている南壁周辺には須恵器が集中して出土していた。図化した提瓶（６）をはじめ甕の破片が散乱していた。調査区東側の確認調査個所や調査区内でも標高の高い東側では須恵器が多く出土していることと関係があるかもしれない。耳環が出土していることも古墳が存在した可能性を想定させる。

損壊部分が、炉跡存続時期の後による要因の可能性を示している。

また、開口部手前から出土したフイゴ羽口の存在は注目される。包含層や炉周辺から鉄滓が出土していることも、遺跡内で鍛冶を行っている証拠になろう。

⑮　ＳＬ１５

調査区南西部の炉跡集中部分で検出された炉跡で、ＳＬ０２の下層に存在する。ＳＬ０２と平面空間を重複しており、ＳＬ０３の南西コーナーとほぼ接しているが、レベルでは５～15㎝下がっている。円形の炉跡で、掘り方は長径1.1ｍ、短径0.85ｍを測る。石敷きの規模は、長径0.9ｍ、短径0.75ｍを測る。石敷きの断面はレンズ状になっている。石の上面のレベル差で６㎝の差がある。使われた石材は他の炉跡と同様で各種石材が使用されている。他の炉跡と同じく廃棄土層の上に掘りこんで築かれている。さらに下層にも炉跡が存在する可能性があるが、確認はしていない。

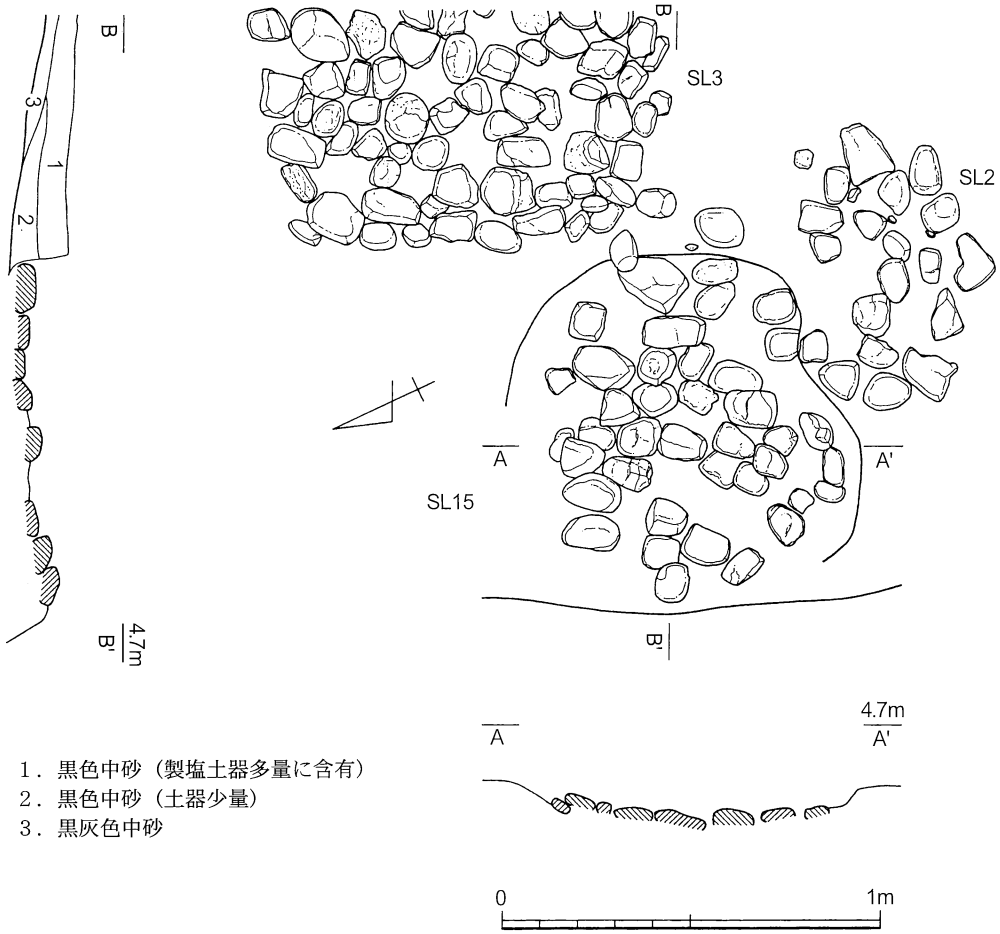


図28　ＳＬ１５　実測図

⑯　ＳＬ１６

調査区南西部の炉跡集中部分で検出された炉跡で、主軸方向をほぼ東西に持つ隅円長方形の炉跡である。北側に0.5ｍ離れてＳＬ０１が、南側に0.2ｍ離れてＳＬ１８が位置している。ただ，ＳＬ１８とは掘り方では切り合い関係があり、本炉跡の方が新しい。掘り方の西側は確実に把握することができなかった。短径は1.1ｍを測る。石敷き部分の長径は1.5ｍ，短径は0.8ｍを測る。石敷きの上面は比較的平坦に組んでおり、断面は凹状にはなっていない。

石敷きを詳細に観察すると、ＳＬ０１と同じように円形の単位が認められる。円形（長径0.7ｍ、短径0.65ｍ）の炉跡が先に存在した可能性が高い。ただ、円形部分についても断面形状は平坦である。掘り方も緩やかな肩部を示しており、円形炉の掘り方とは異なっている。ＳＬ０１と同じく東側に大型の角礫を据えており、共通している。

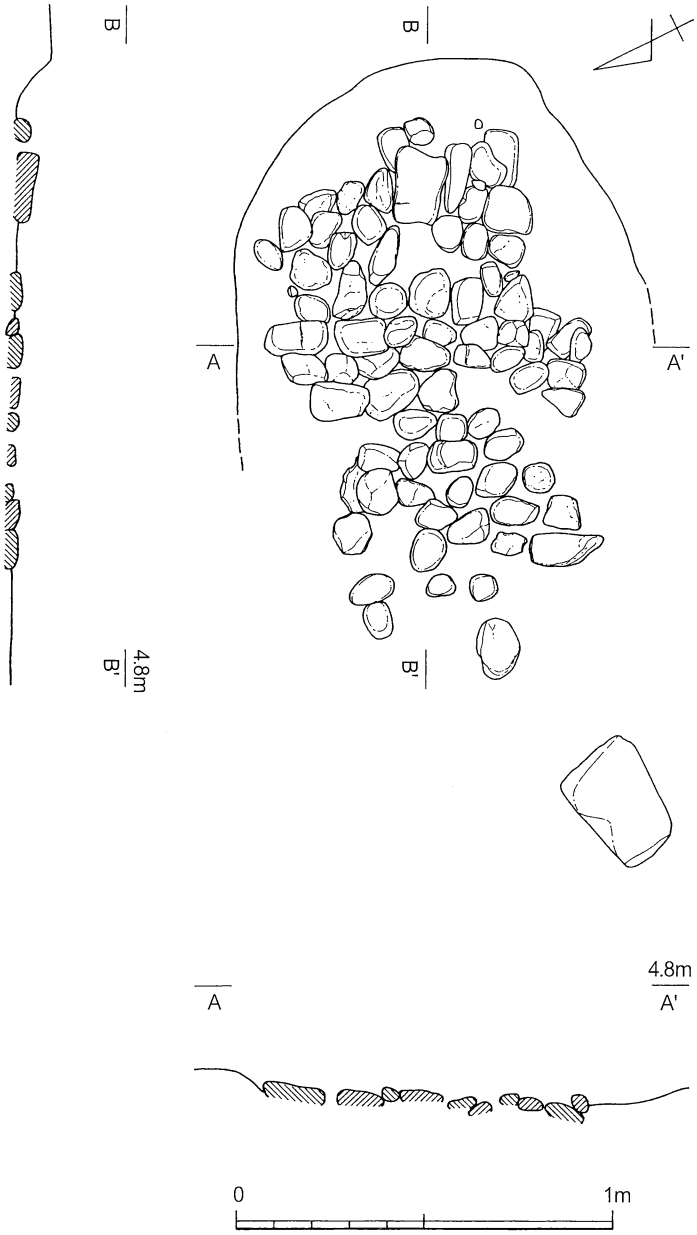


図29　ＳＬ１６　実測図

⑰　ＳＬ１７

Ｃ－６区で調査した石囲炉跡である。調査区南西部の炉跡集中部部からは東に離れている。周囲には礫群はあるが、確実な炉跡はなく単独で存在する。西側に開口する石囲炉で，開口方向は一致している。ＳＬ１７は掘り方が明確で、奥壁の据え付けはしっかりしている。奥壁は最大35cmの板石１石から成っている。北壁を中心に削平を受けている。床面には須恵器甕の胴部が置かれている。２次焼成を受けている。南側壁裏からも出土している。他の炉跡と異なり、炉跡内から遺物が出土している。須恵器甕以外に土師器甕・竈、製塩土器が出土している。破片は比較的大型のものが多く、廃棄状態ではないような気がする。他の炉跡のように丸底Ⅱ式の製塩土器が多量にあるわけではない。製塩土器は、丸底Ⅱ式の鉢で口径12cmと大型である。竈はもちろんのこと、土師器甕も製塩に関係する土器と思われる。

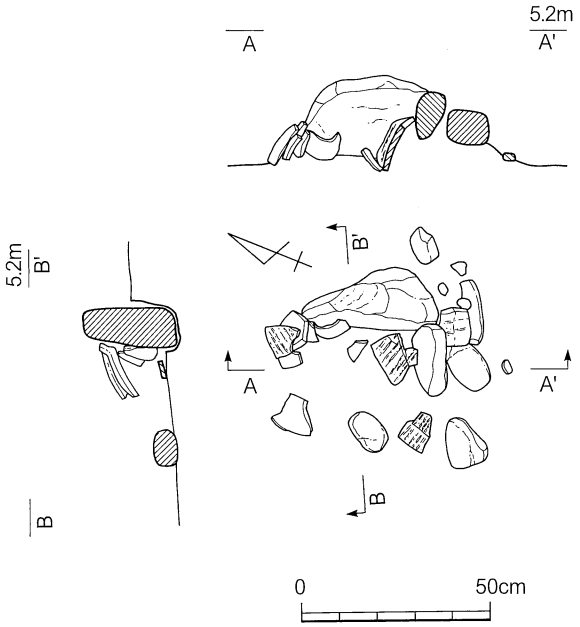


図30　ＳＬ１７　実測図

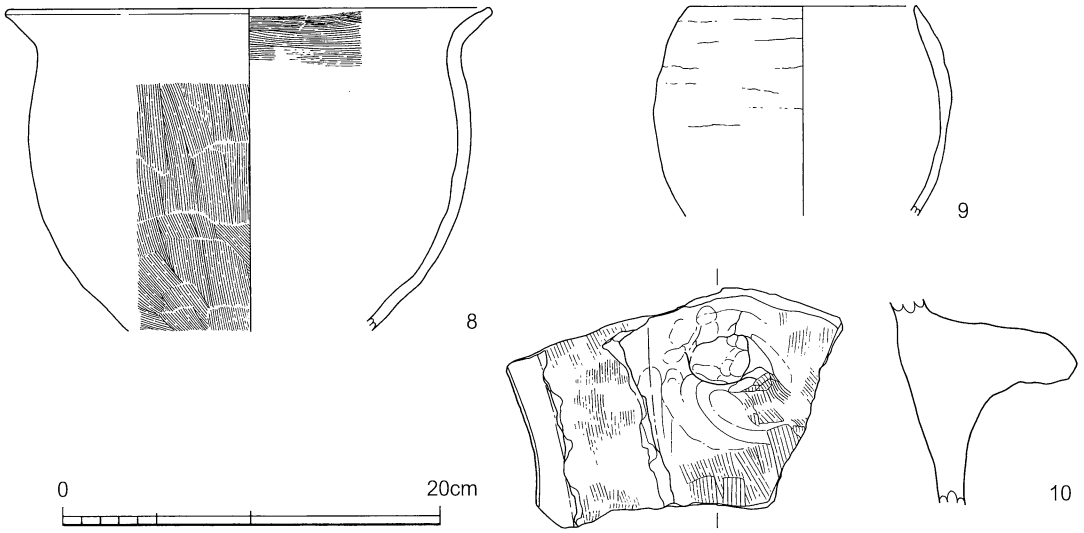


図31　ＳＬ１７　出土遺物実測図

⑱　ＳＬ１８

調査区南西部の炉跡集中部分の１基である。北側の掘り方をＳＬ１６に切られている。南東側にはほぼ接してＳＬ１９が築かれている。切り合いはあるものの、レベル的な差はない。南西側は調査区の壁面になり、面的に全体像はつかんでいない。ＳＬ１８とＳＬ１９の切り合いは明瞭でなく、２基を囲む掘り方は確認している。両者の掘り方の規模は長径1.75mを測る。２基併存している可能性が高い。石敷きの規模は長径0.8m、短径0.7mの歪な円形プランである。円形の炉跡であるが、断面は平坦で凹状

にはなっていない。北端の礫だけは斜めの角度を持って配置されており、ＳＬ１６によって立ち上がり部分が削られたかもしれない。礫も密度がやや低く疎らである。礫の大きさは拳大と通常の大きさの石材を使っている。

⑲　ＳＬ１９

ＳＬ１８の南側に位置する炉跡で、調査区外に続いている。5石だけを検出しているにすぎない。現状では平面形を決することはできない。炉跡上面は平坦である。

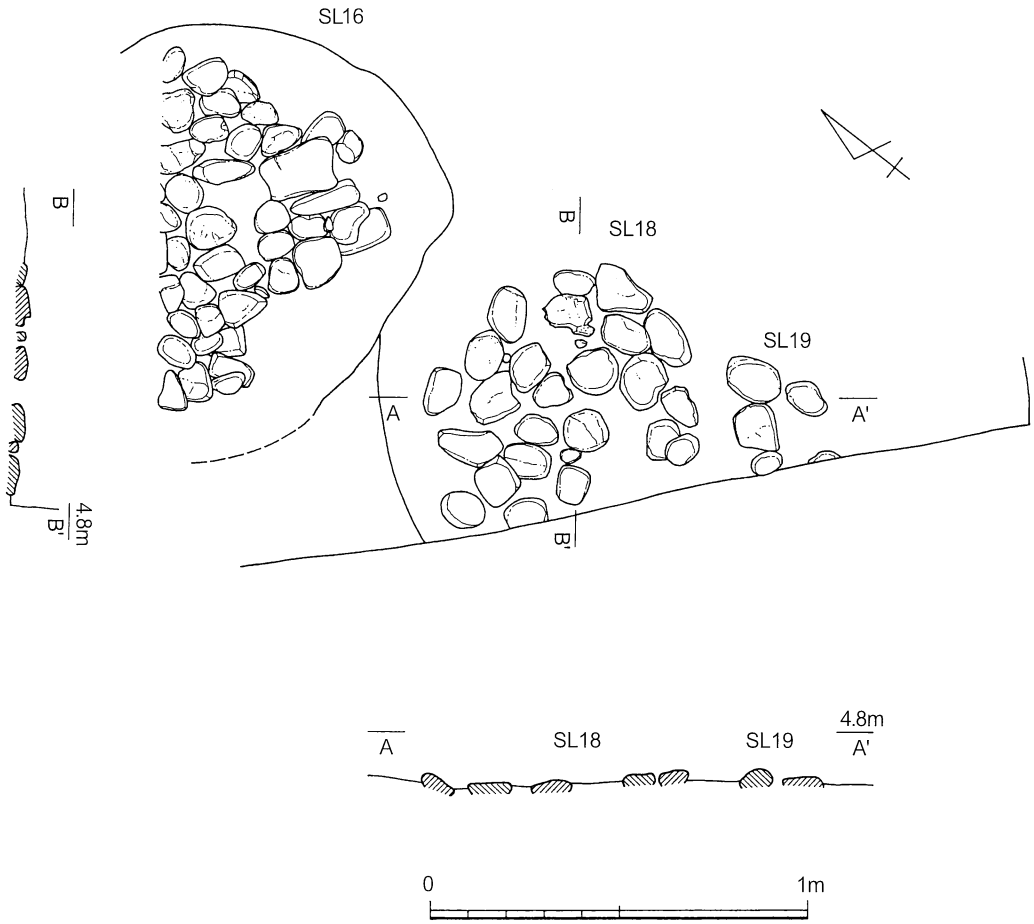


図32　ＳＬ１８・ＳＬ１９　実測図

⑳　ＳＬ２０

調査区北側のＡ－1区で確認した炉跡である。包含層の下層で確認している。周辺にも礫群が広がっていたが、明確に石組みは確認できなかった。北側では数少ない炉跡で、さらに下層で確認した希少な遺構である。平面プランはＨ字形をしている。石列は稠密ではなく、疎らである。石列の交差部分のみ礫が集中している。礫の被熱状況は石敷炉と大差ない。規模は、長辺の東辺が1.7ｍ，西辺が2.05ｍ、短辺が0.75ｍを測る。石材の種別にも変化はない。

㉑　ＳＬ２１

調査区北側のＡ－2区の東側で確認された一部損壊を受けた炉跡である。礫の配置状況などからは長方形のタイプであったと想定される。残存長は南北方向で1.1m、東西方向で0.65mを測る。東側の方が礫の集中が顕著で重なっている個所もある。製塩土器廃棄層の上に築かれていることや、床面の焼成状況などは他の炉跡と同じである。

西側に約1.5m離れて石棺墓（ＳＴ０１）が築かれている。ＳＴ０１には副葬品として丸底Ⅱ式の製塩土器を埋葬しており、時期が確定されている。ＳＬ２１はＳＴ０１の前に築かれていることから、丸底Ⅱ式より古いのは確実であるが、周辺の廃棄土器の時期からは大きな時期差はなく丸底Ⅱ式の範疇の時期と思われる。

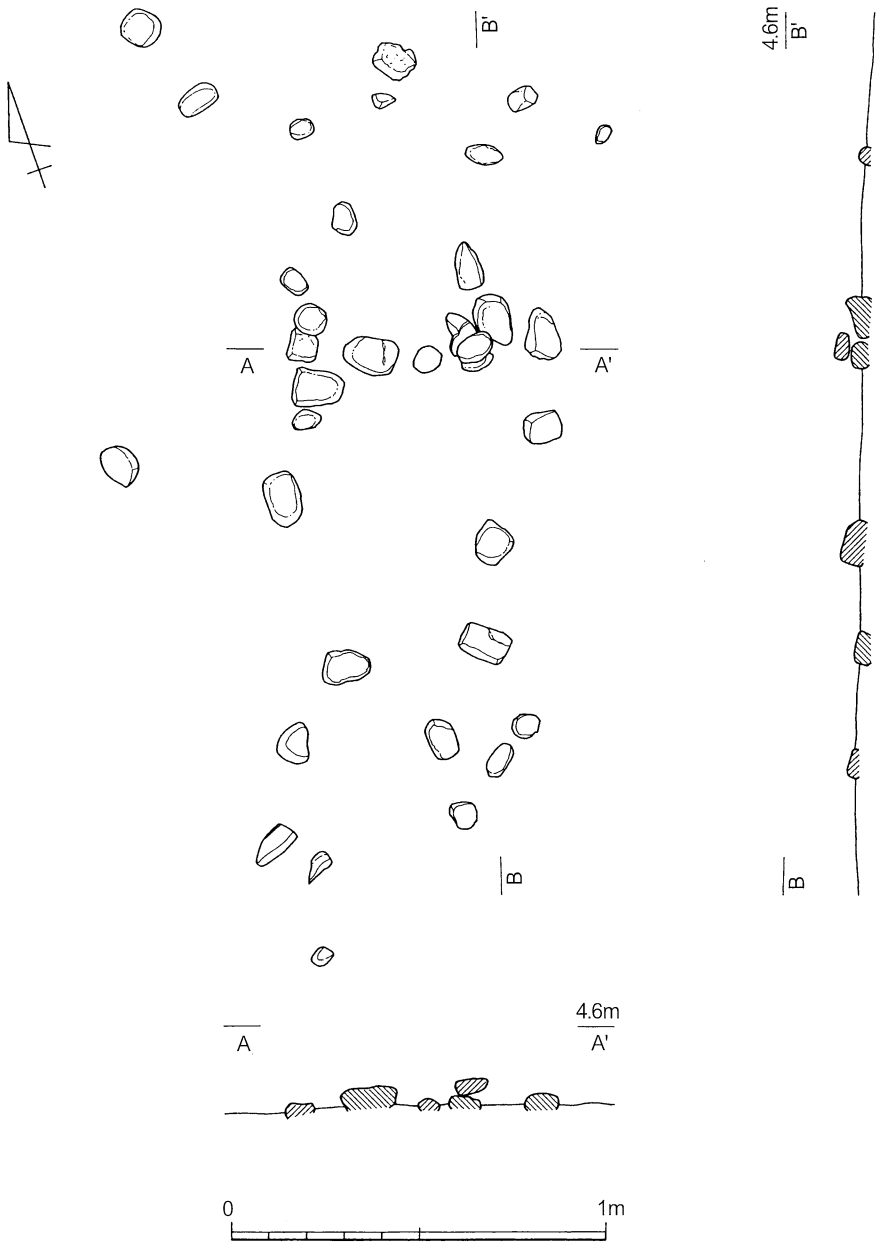


図33　ＳＬ２０　実測図

㉒　ＳＬ２２

Ｃ－５区に位置する石囲炉である。今回調査したなかでは、最も標高の高い位置に築かれている。この地点の上方にも被熱した礫は存在するが、その集中度は減少する。また、南西側に約6.5m離れてＳＬ１７が，北東に約6.0m離れてＳＬ１４が築かれている。ともに石囲炉で、貴船神社遺跡のなかでは標高の高い地点に築かれるという共通点を持っている。

平面プランは方形で、規模は小さな炉跡である。東辺と南辺のすべては残存していない。現況からは石材が完存していない両側のいずれかに開口していると推測されるが、地形的には南側に開口している可能性が高く、東壁は損壊を受けたものと思われる。ほぼ南北方向に主軸を有し、南北0.30～0.40m、東西0.35～0.40mを測る。他の石囲炉と比べると使用された石材は扁平でなく通常の人頭大の礫が使われている。西壁の石材が最も大きく安定している。開口部と推定される部分に2点の石器が置かれている。以前はアワビ起こしと言われていたもので淡路島の古墳の副葬品としても知られた遺物である。緑泥片岩で，製塩作業に関する遺物であろうと思われる。2点が並んで出土している点は興味深い。出土遺物は製塩炉跡のなかでは最も多い。須恵器（杯身・杯蓋・蓋・短頸壷・壷・平瓶・提瓶）・土師器（甕・マダコ壷）・土錘・石器・製塩土器が出土している。土師器は被熱しているが、須恵器は火を受けていない。２者の使用目的・方法の違いがあるものと思われる。炉内に製塩土器の廃棄された小片は出土していない。時期的には６世紀末頃になろうかと思われる。

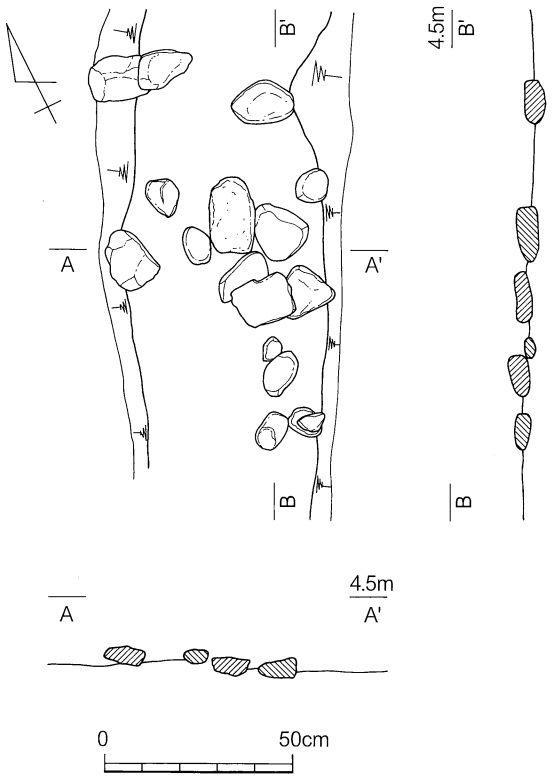


図34　ＳＬ２１　実測図

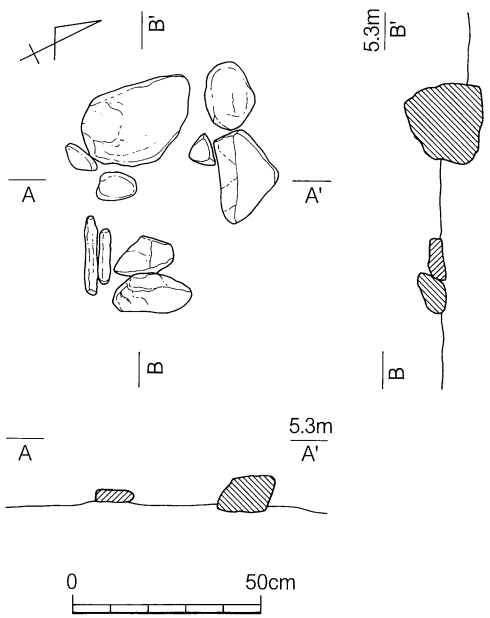


図35　ＳＬ２２　実測図

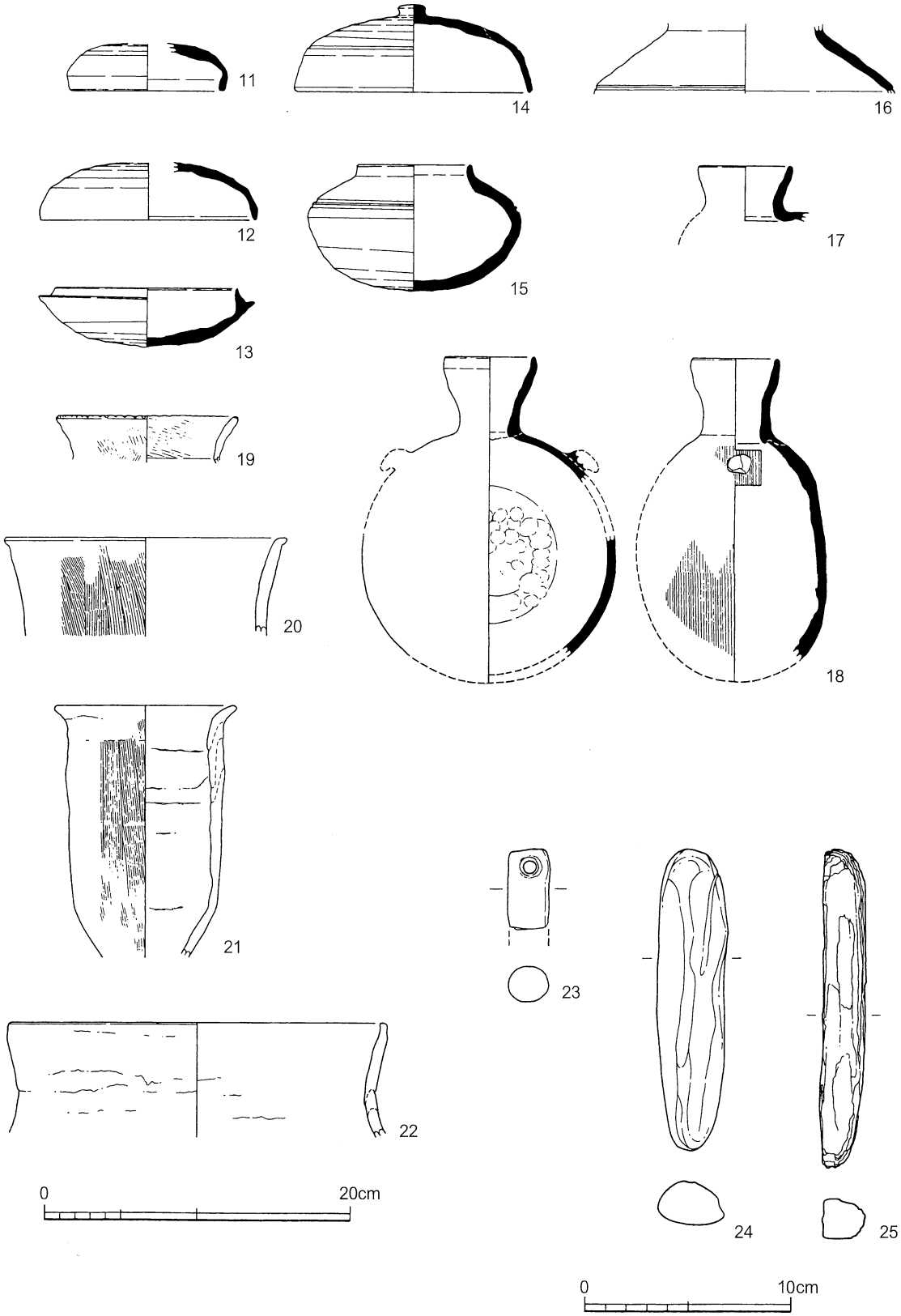


図36　ＳＬ２２　出土遺物実測図

2．竪穴住居跡（ＳＨ）

①　ＳＨ０１

Ｂ－５区で検出された住居跡で、砂地の割には保存状態が良好である。平面的には完存している。北側にカマドを作り付けている。規模は東西3.50m、南北3.80mを測り、それに長さ0.40mの竈が付加されている。床面は砂地で、明確に柱穴を確認することはできなかった。床面からは貼り床に供された粘土が存在する。南半には粘土はブロックとしか検出されておらず、中砂層となっている。本来は粘土が敷設されていたと思われる。ただ，北半の方が粘土は厚かったものと思われ、ほぼ中央部に南側に落ち込む段が認められる。竪穴住居跡の空間利用の差があったと想定される。壁の残存度は比較的良好で、最大0.4m残っている。竈はよく使われており、焼土は住居跡中央まで広がっている。出土遺物のなか

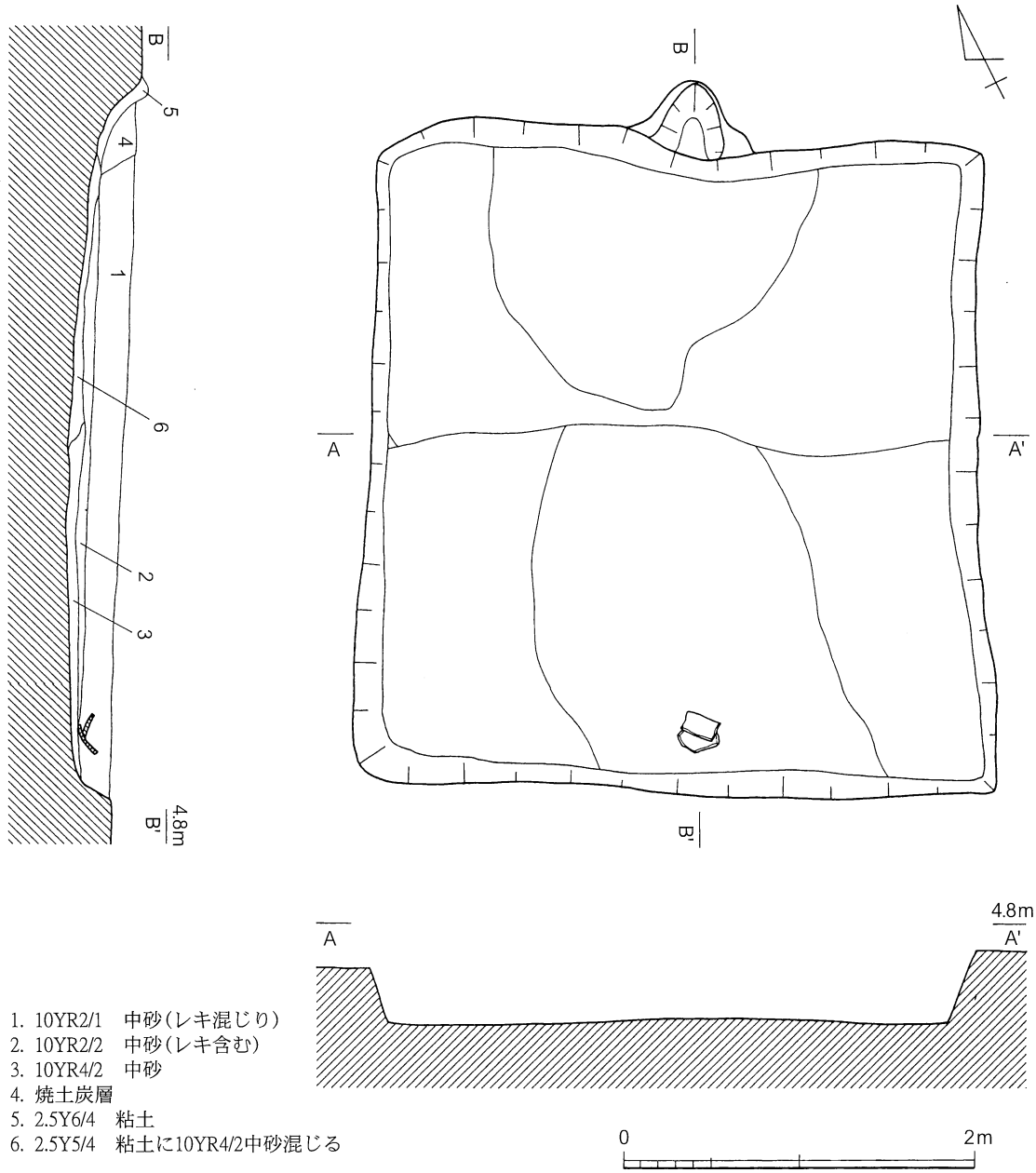
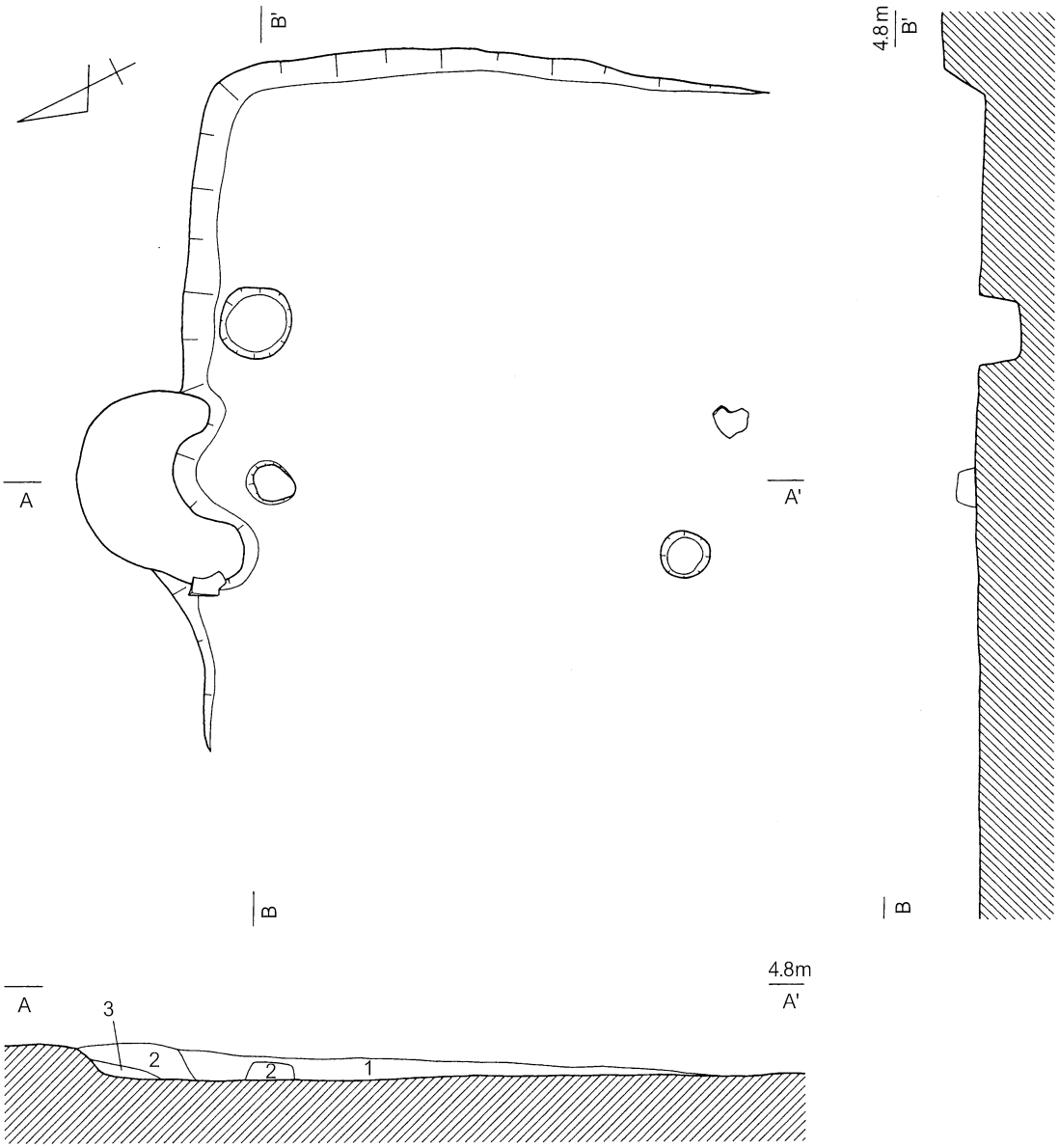


図37　竪穴住居跡（ＳＨ）０１　実測図

に砥石もあり，時期が奈良時代にまで下ることから、普通の竪穴住居跡として良いか疑問である。製塩作業に伴う工房とは考えられないだろうか。

② ＳＨ０２

調査区東側のＣ・Ｄ―４区で調査した竪穴住居跡である。ＳＨ０１と同様に北辺中央に竈を作り付けている。等高線に平行に築かれている。標高の低い西側は流失しており、全体の４分の１程度しか残っていないようである。残存長は北辺が3.7m、東辺が3.1mである。竈が中央であるとすれば、５m以上になり、ＳＨ０１より規模は大きくなる。竈の大きさも幅・長さともに0.5mを測る大きさである。竈の平面形は半円に近く炭・焼土の広がりは狭い。竈の内側に粘土塊が置かれている。単なる粘土とは思

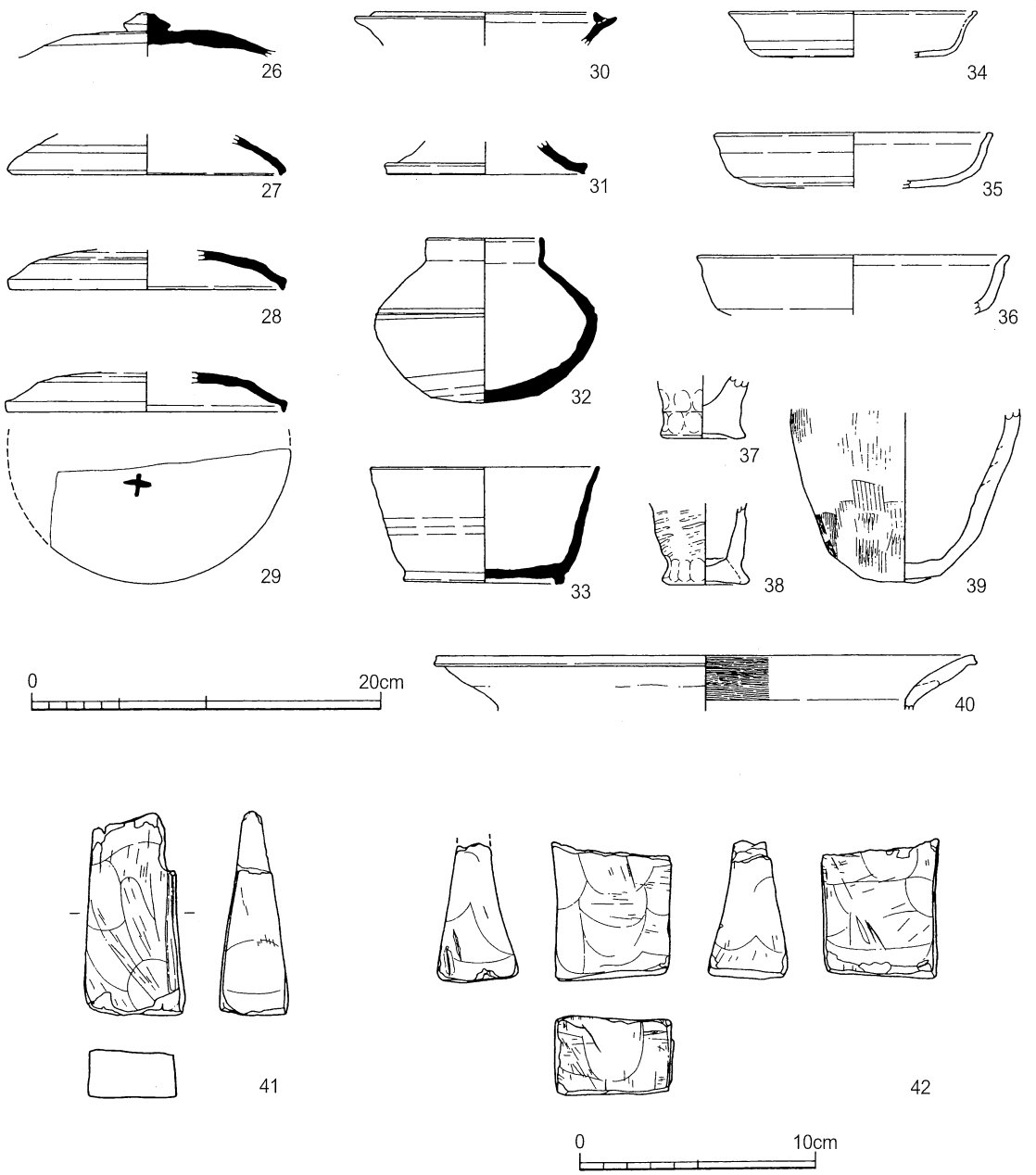


1. 10YR 2/1　礫混じり中砂
2. 10YR 6/6　粘土（被覆している）
3. 2.5YR2/3　中砂（炭・焼土混じり）

0　2m

図38　竪穴住居跡（ＳＨ）０２　実測図

SH01



SH02

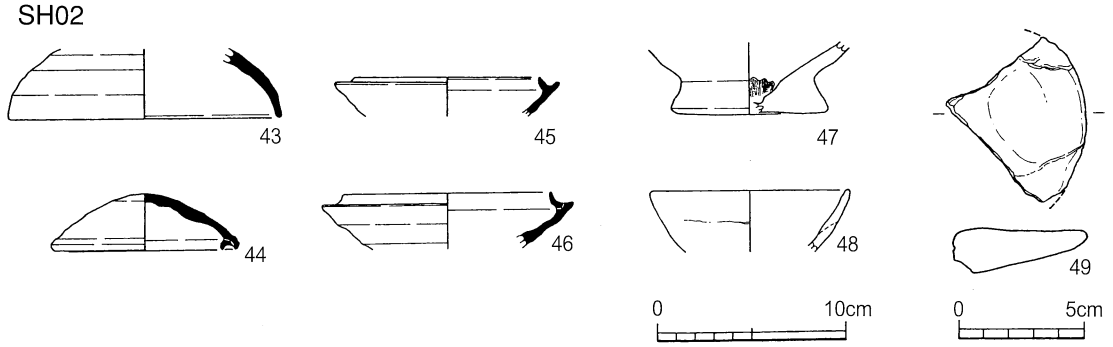


図39　ＳＨ０１・０２　実測図

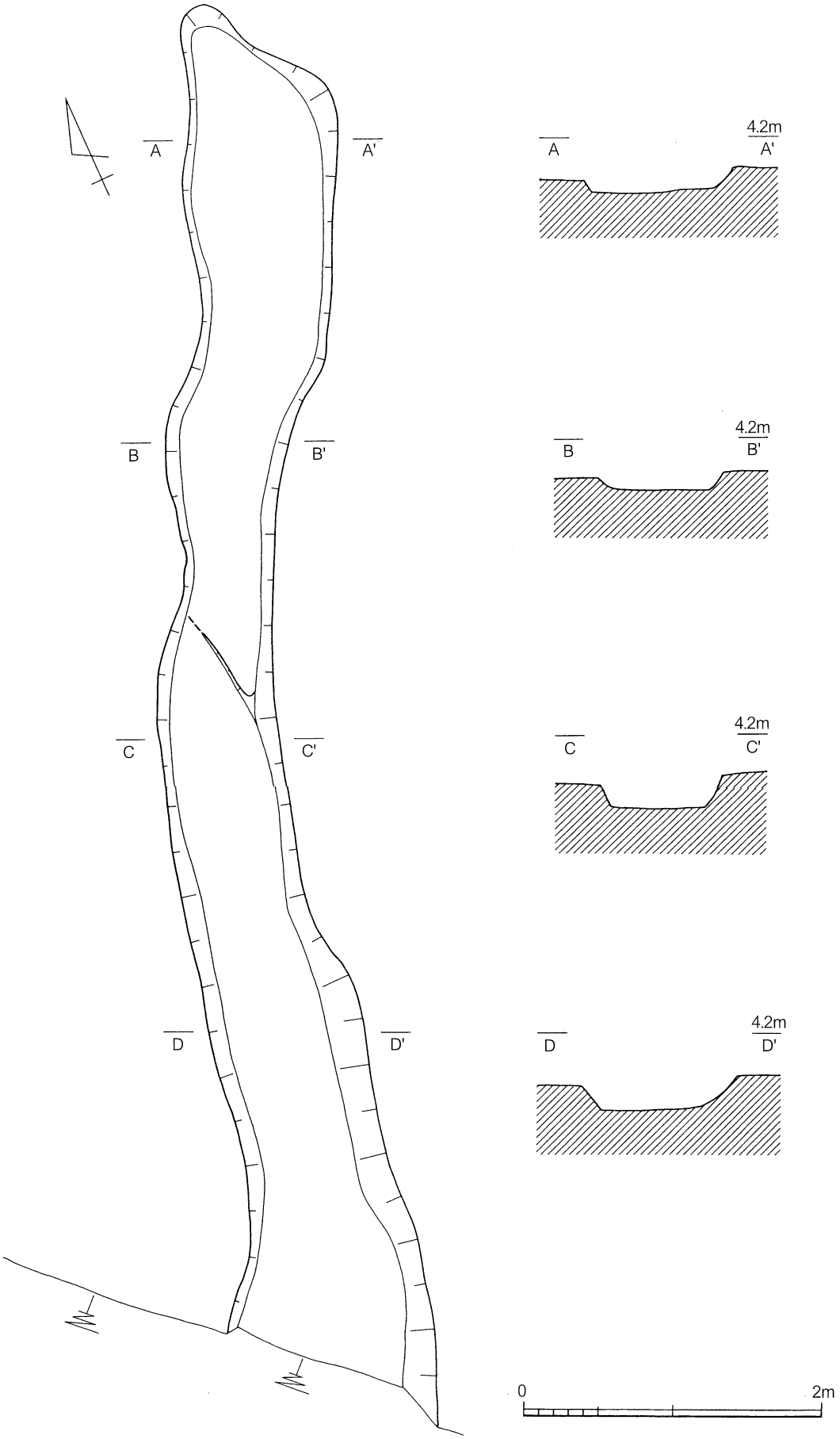
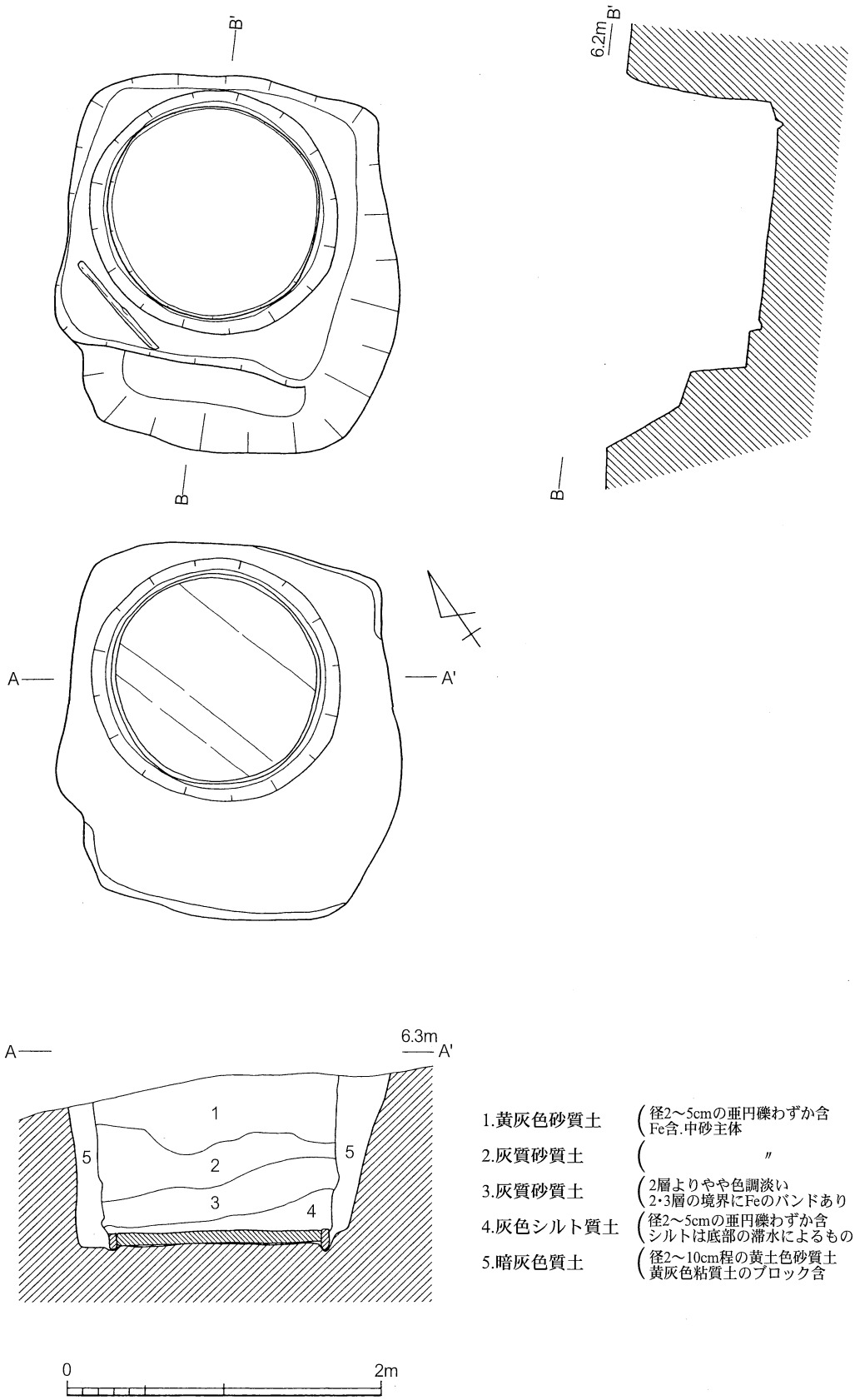


図40　溝（ＳＤ）０１　実測図



1.黄灰色砂質土　（径2～5cmの亜円礫わずか含 Fe含.中砂主体）
2.灰質砂質土　（〃）
3.灰質砂質土　（2層よりやや色調淡い 2･3層の境界にFeのバンドあり）
4.灰色シルト質土　（径2～5cmの亜円礫わずか含 シルトは底部の滞水によるものか？）
5.暗灰色質土　（径2～10cm程の黄土色砂質土 黄灰色粘質土のブロック含）

図41　土抗（ＳＫ）０１　実測図

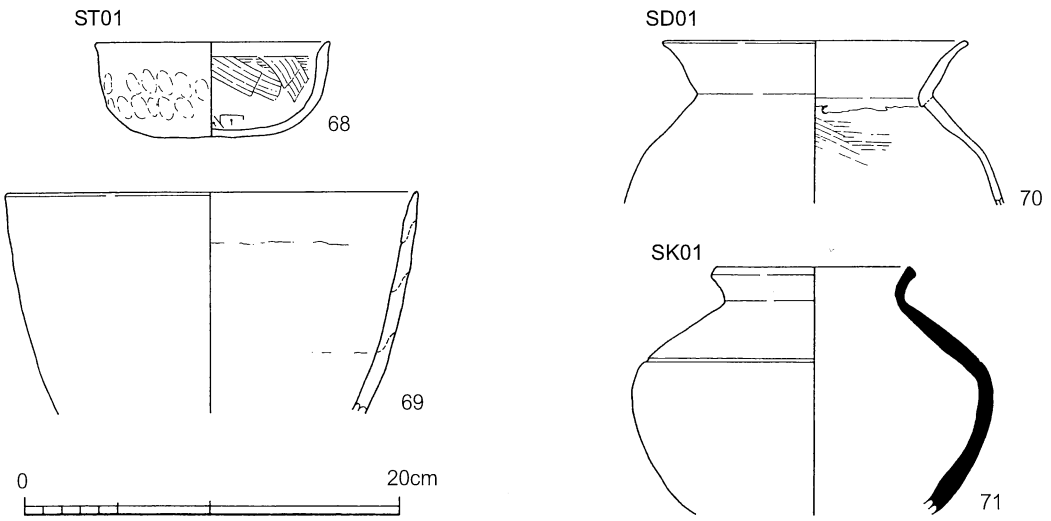


図42　遺構　出土遺物実測図

われず，竈の関連施設と思われる。竈の粘土の側面に土器のカマドの破片が出土している。床面に粘土は見られないが、埋土にブロックとして粘土が散在していることと砂地であることから、本来は貼り床が施されていたと思われる。柱穴は２基確認している。床面中央部分と想定される地点に径0.25mのピットが1基位置している。砂地であることから深さは明確にすることができなかった。崩壊しているものの0.2m以上はあるものと判断している。他の1基は北壁沿いの中央東側にある。径0.4mとやや大きめである。深さも0.25mとしっかりしている。

出土遺物は7世紀はじめ頃の遺物である。ＳＨ０１よりは古い時期の竪穴住居跡である。遺構の性格も異なっているだろうと思われる。

３．溝（ＳＤ０１）

調査区西南隅付近で検出した溝状遺構である。水田造成のため削平を受けており、本来の規模や丸底Ⅱ式包含層との層位的関係は不明であるが、検出面での幅80～140cm、深さ15cm以下で断面形は逆台形である。等高線に沿う方向に直線状に流れ、検出長は約９ｍ、北側は中途で途切れ、南側は調査区外に延びる。北側のＳＸ０３と平面図上では接続するように見えるが埋土が異なる。埋土は黒褐色の細～中砂で、脚台式の製塩土器片のほか、南端付近で丸底Ｉ式の製塩土器片が比較的まとまって出土した。このことからＳＤ０１は丸底Ｉ式の時期のものと考えられる。

４．土坑

①　ＳＫ０１

Ｃ－５杭の東４ｍ、南１ｍ付近で検出された土坑である。長辺2.4m、短辺２ｍの不整長方形で、深さ１ｍほどの矩形の断面形を呈し、内部に径1.3mの桶を据えている。桶は底板と側板の下端部のみ遺存していた。年代を決める遺物は出土しなかったが、異なる土質が未分解でブロック状をなす埋土の状況や掘り形の側面にセメントが貼られていることから、現代に近い時期のものであろう。調査前の畦畔境に位置すること、昭和60年作製の都市計画図ではＳＫ０１東側の地筆が畑であり、周囲の水田が常に水田ではなく畑としても利用されたと考えられることも合わせて、ＳＫ０１は肥溜めと考えられる。

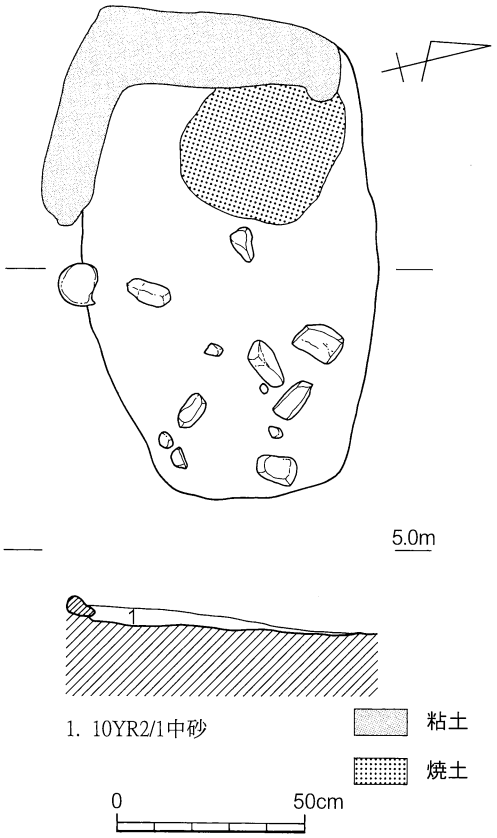


図43　土抗（ＳＫ）０２　実測図

② ＳＫ０２

調査区ほぼ中央に近いＢ－6区に所在する土坑である。南側にＳＨ０１が存在している。確実な製塩炉はやや離れているが、周囲には多くの被熱した礫群が広がっている。そのなかに位置する土坑である。粘土を伴った焼土が広がる土坑で，製塩作業に密接に関わった遺構と思われる。地形に直交する状態で築かれている。標高の低い（この部分は緩斜面である）西側に粘土を巻くように土坑肩部に貼っている。

土坑は不定の長方形で、長辺1.3m、短辺0.75mを測る。西辺に幅約0.2mで厚さ0.05～0.2mの粘土を貼っている。粘土は精製のもので、他遺構の粘土より上質である。粘土を施している西辺近くに最大長0.4mに焼土が広がっている。東半部分には礫が置かれている。土坑そのものの深さは浅く、最も深いところで、0.15mである。焼土は西辺に集中しているが、全体的に散らばっている。

5．石棺墓（ＳＴ０１）

調査区北端近くのＡ－１・２で検出されている。北側に古い時期の炉跡（ＳＬ２０）が存在しているだけで、遺構の広がりとしては北端に近いと思われる。石棺墓であるが、築造後に何らかの要因で僅かに移動し歪んでいる。ただ、平行に動いていることから全体像を復原することは可能である。砂層は流失しており、掘り方は明確に検出できなかった。石棺の規模は、現存長で最大1.95mを測る。幅は、北側が広く0.55mを測り、南側は0.25mと狭くなっている。内法では，長さ1.70m、最大幅0.35m、最小幅0.20mを測る。石材は板石を使用している。長軸方向に大きく歪んでおり、床面のレベル差は0.30mを測る。幅の値が異なることから，頭位は北側と考えられる。副葬品として２点の土器が使用されている。1点（68）は土師器杯で完形品である。口径12.3cmで通有の土器に似せているが，本質的には製塩土器(丸底Ⅱ式)の焼成前に精製土器に変更した土器と思われる。他の１点（69）は製塩土器で棺内中央の北寄りから出土している。丸底Ⅱ式の大型の鉢で、口縁部のみヨコナデで仕上げている。

6．落ち込み（ＳＸ）

丸底Ⅱ式の製塩土器包含層（図８①Ａ層）の層厚は一様ではなく下方に凹凸がある。この包含層を掘り下げ、丸底Ⅰ式や脚台式の製塩土器が含まれる黒褐色砂質土層（図８②層）の上面に達すると、①Ａ層が土坑状や不定形の落ち込みとして把握できる。このうち①Ａ層のみが堆積している場合は、遺構とは考えずに自然形成の地表面の凹凸に①Ａ層が堆積したものと判断したが、①Ａ層の下に別の堆積物が存在するものがあり、製塩に関わる何らかの遺構と考えて調査を行った。当初は、これらの遺構が石敷炉の周辺に所在すると考えていたため（実際は石敷炉が集中する調査区南部は現状保存のため、①Ａ層

を掘り下げていないので石敷炉との関係はよくわからない)、採鹹に関係する遺構の可能性を考えた。このため、渡辺誠名古屋大学教授の現地での御指導もあって、堆積土の水洗選別を行ったが、遺構の性格を特定する情報は得られなかった。(調査区内の様々な堆積土についても水洗選別を行ったが、海藻に付着している微小貝や炭化物などは検出できなかった。)

① ＳＸ０１

B-3杭の南４ｍ付近で検出した長辺約３ｍ、短辺約2.2ｍのやや不整な隅丸長方形の落ち込みである。深さは最深部で22cmを測り、断面形は緩やかに落ち込む皿状を呈する。埋土はシルト、細砂、中砂を主体とする黒色砂で製塩土器片をわずかに含んでいる。底面では赤変した礫を中心に若干の礫が見られたが、側面や底面に被熱による変色などは認められなかった。

ＳＸ０１の性格については不明であるが、他の製塩遺跡での類例を求めると岡山県玉野市に所在する「沖須賀遺跡」で検出された古墳時代の「１号土壙」「２号土壙」が遺物の包含量が不明であるものの最も近いと思われる。

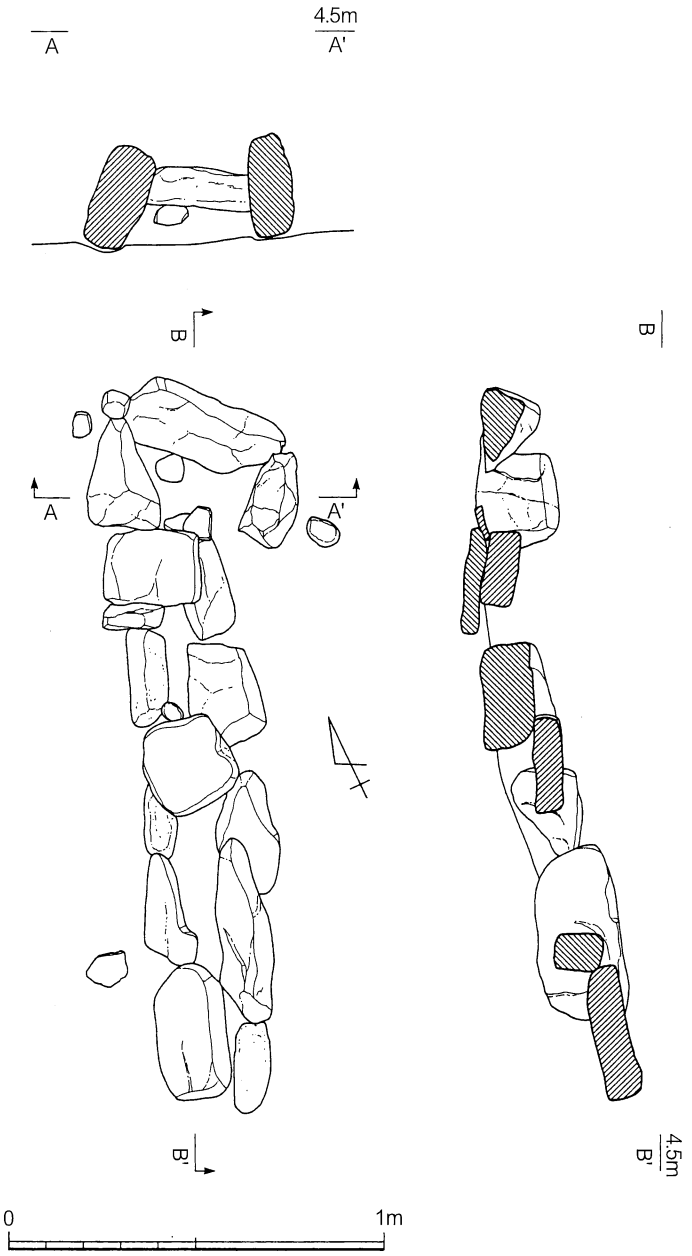


図44　石棺墓（ＳＴ０１）　実測図

(『玉野市埋蔵文化財発掘調査報告(2)　沖須賀遺跡　玉野市立山田中学校校舎改築工事に伴う発掘調査』1981　岡山県玉野市教育委員会)

② ＳＸ０２

ＳＬ０７、０９とＳＬ１２、１３の間に所在する落ち込みである。南北幅約６ｍ、東西幅６ｍ以上の規模で、深さ0.5～0.6ｍを測る。西側は水田造成のため上部を壊されているが、埋土の類似性や位置関係からＳＸ０３に接続する可能性が高い。平面形は不定形であるが、巨視的には東西方向に長い溝状の落ち込みである。断面形は極めて緩やかな皿状を呈する。このことからＳＸ０２は遺構ではなく自然形成の落ち込みと考えるべきであろう。

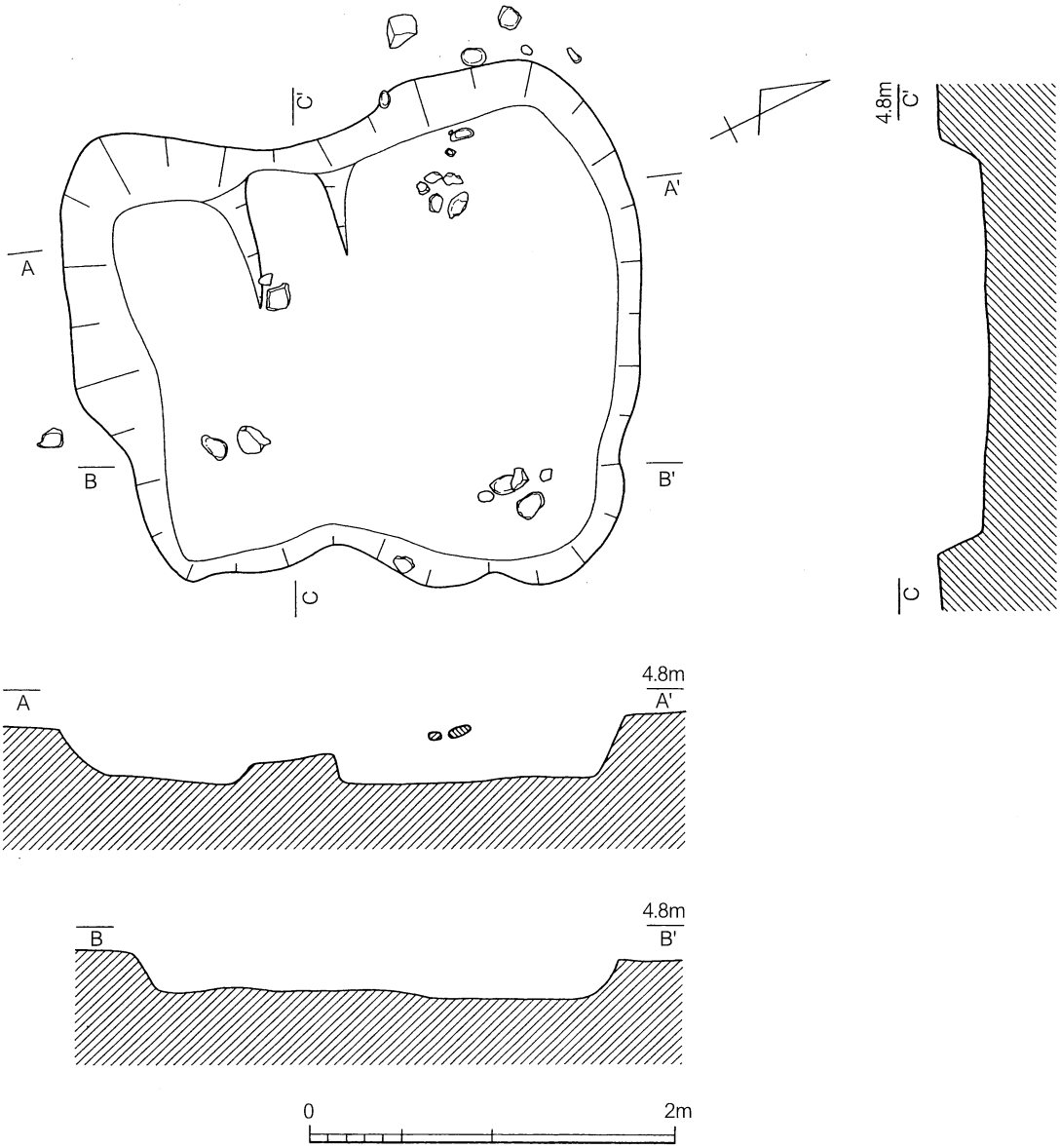


図45　落ち込み（ＳＸ０１）　実測図

埋土は２層に分けられる。上層は図９で①Ａ層と呼称する層で、丸底Ⅱ式の製塩土器片と径１～２㎝の礫を多く含む黒褐色礫混じり砂質土である。上層は落ち込みの検出よりさらに40㎝の厚さで堆積している。下層は土器片をわずかに含む黒色砂質土でＳＸ０２の底面を中心に堆積している。ＳＸ０１と同様に埋土の水洗選別を行ったが、成果は無かった。

③　ＳＸ０３

A-4グリッドで検出した落ち込みである。図９①Ａ層が削平を受けている調査区西辺にあるが、埋土上層に①Ａ層が堆積している。埋土、位置関係から東側ＳＸ０２に接続する可能性が高い。平面形は全くの不定形で、断面形も深さ10㎝内外の立ち上がりの不明確な皿状を呈する。底面には緩やかな凹凸がある。また、径30～40㎝深さ10㎝程のピット状の落ち込みが４ヶ所あり、埋土の状況などから遺構と認定し難いが、一つから完形の飯蛸壺が出土している。また、西端部では中～大礫大の礫が集積された状

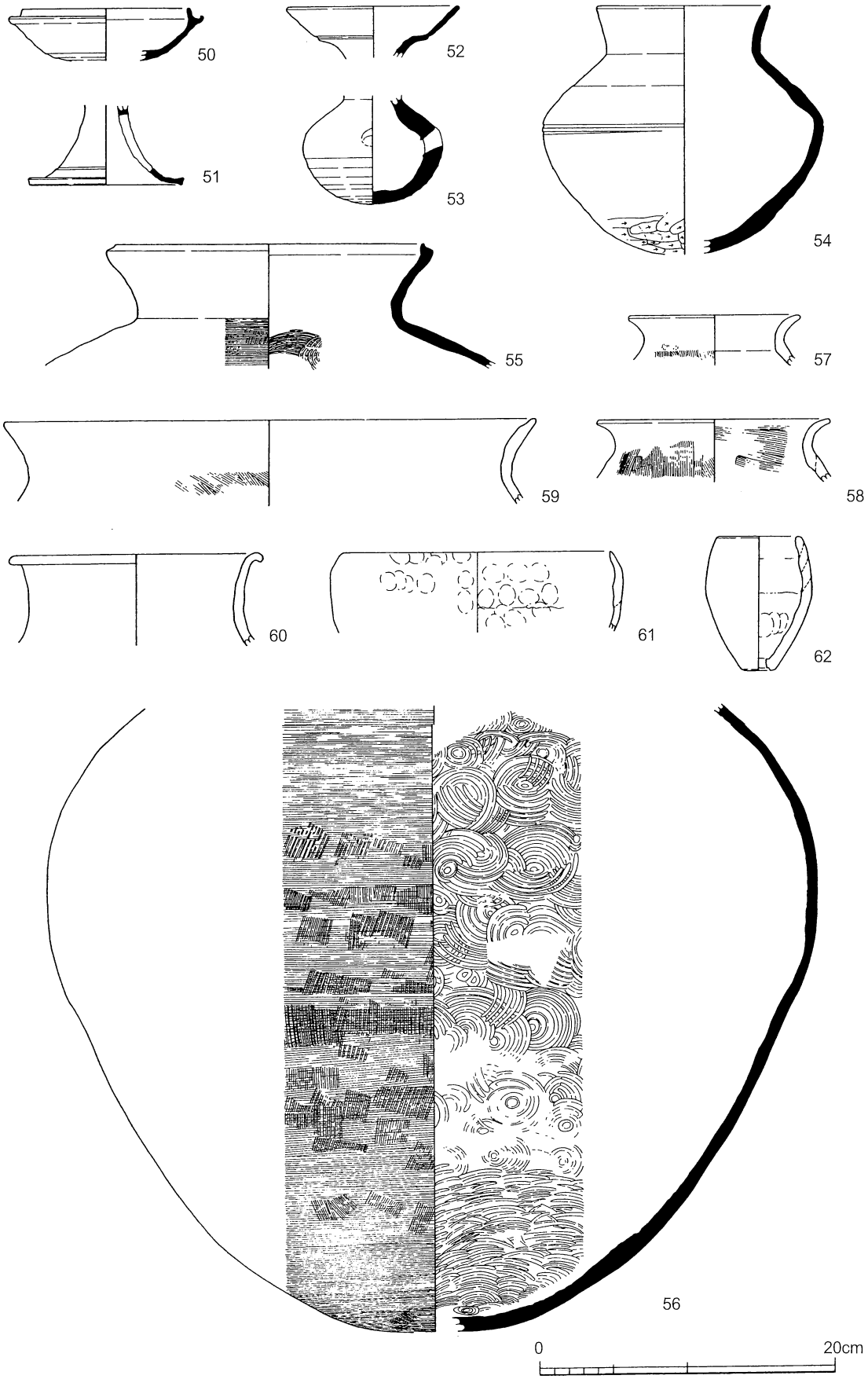


図46　ＳＸ０２　出土遺物実測図

図47　落ち込み（ＳＸ）０３　実測図

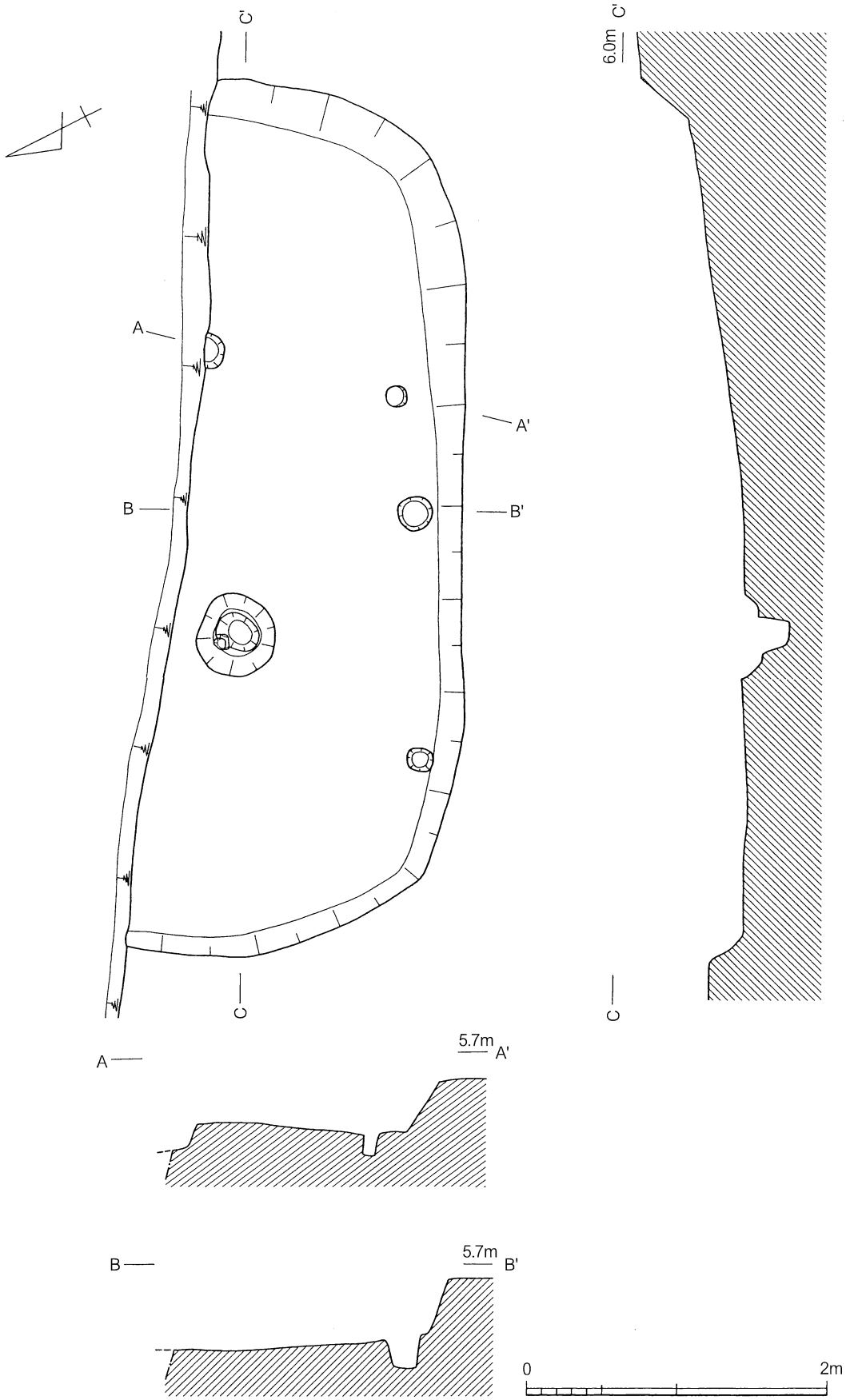


図48　落ち込み（ＳＸ）０５　実測図

況で出土している。これらの礫に赤変したものは含まれない。

ＳＸ０２、０３は丸底Ⅱ式期には落ち込みとして存在していた。この部分では石敷炉が検出されなかったことを合わせると、ＳＸ０２、０３を挟んで２つの炉群に分類できる可能性があること、炉は砂堆上の僅かな高まりを利用して構築している可能性があることの２点が指摘できる。

④　ＳＸ０４

Ｂ－5区で調査した落ち込みで、南側に南西部の炉跡群があり、南東に竪穴住居跡（ＳＨ０１）が、北東に礫群や土坑（ＳＫ０２）が位置している。遺構集中部分に存在する周囲の炉跡の廃棄物が厚く堆積している部分で、約５×４ｍの楕円形の落ち込みと、幅1.5ｍの溝から成っている。溝は深さ0.2ｍと浅い遺構である。溝状の方が新しい遺構である。西側では一体化し、明瞭でない。遺構の深度も西の方が浅くなっている。廃棄後の礫群は炉跡の可能性がある。

⑤　ＳＸ０５

Ｃ・Ｄ－３区の下層で検出した遺構である。調査区外へ延びており全掘していない。南半を調査したものと思われる。隅円の方形で竪穴住居跡状の遺構である。床面のレベルが南北方向は水平であるが、東西方向は斜めになっている。東側が高くなり水平でないことから、落ち込みとして報告する。しかし、

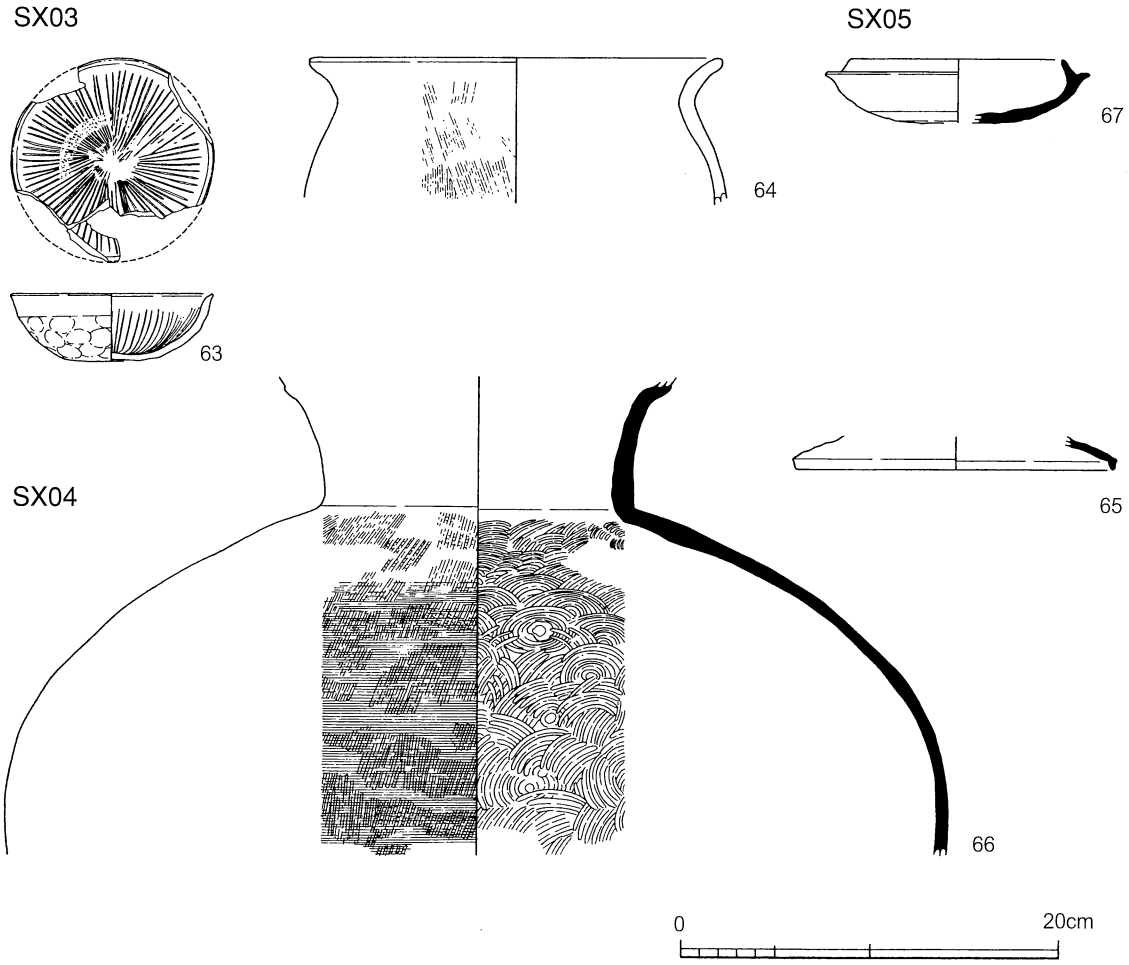


図49　ＳＸ０３・０４・０５　出土遺物実測図

壁の状況やピットの存在などは竪穴住居跡の状況と齟齬がない。竪穴住居跡の可能性の残される遺構である。規模は，東西方向の長さ5.8mで、南北方向の調査した長さは1.9mである。中央西寄りに径0.3mのしっかりしたピットが存在する。このピットだけ柱穴の可能性がある。小型のピットが南壁沿いに3基見られる。深さは0.2m前後ある。落ち込みの深さは0.3mを測る。出土遺物は須恵器・土師器で、製塩土器は含まない。竪穴住居跡の2基よりは時期の遡る遺構で、6世紀後半の落ち込みである。

⑥　ＳＸ０６

Ｂ－２・３区に位置する大型の落ち込みである。全長10mを越す落ち込みで、埋土は黒色砂で色調から2層に分けられる。下層には礫はほとんど混入していない。礫は主に遺構上面に散布している。礫に混じって須恵器・土師器の破片も認められる。擂鉢状の形状をしており，最大深度0.3mと浅い遺構である。

７．その他の遺構

その他の遺構としては、ほぼ全面に広がっている礫群がある。そのうちの大半は本来炉として使用された後に廃棄された礫であろうと思われる。単位として認められるものもあり、炉跡として可能なものもあるが、図を提示するにとどめる。石組部分は大型の炉跡とする意見もあったが、保留しておく。小型の炉跡を認定したとすれば、無数にあることになる。

それ以外には粘土のブロックが存在するものと、採鹹土坑になる可能性のある調査区南西部の炉跡集中部分の土坑がある。この土坑は炉跡の主軸延長上にあり、鹹水溜めの機能を考えている。周囲にも粘土を貼った面や土坑があり、製塩工程の一体となる遺構である。

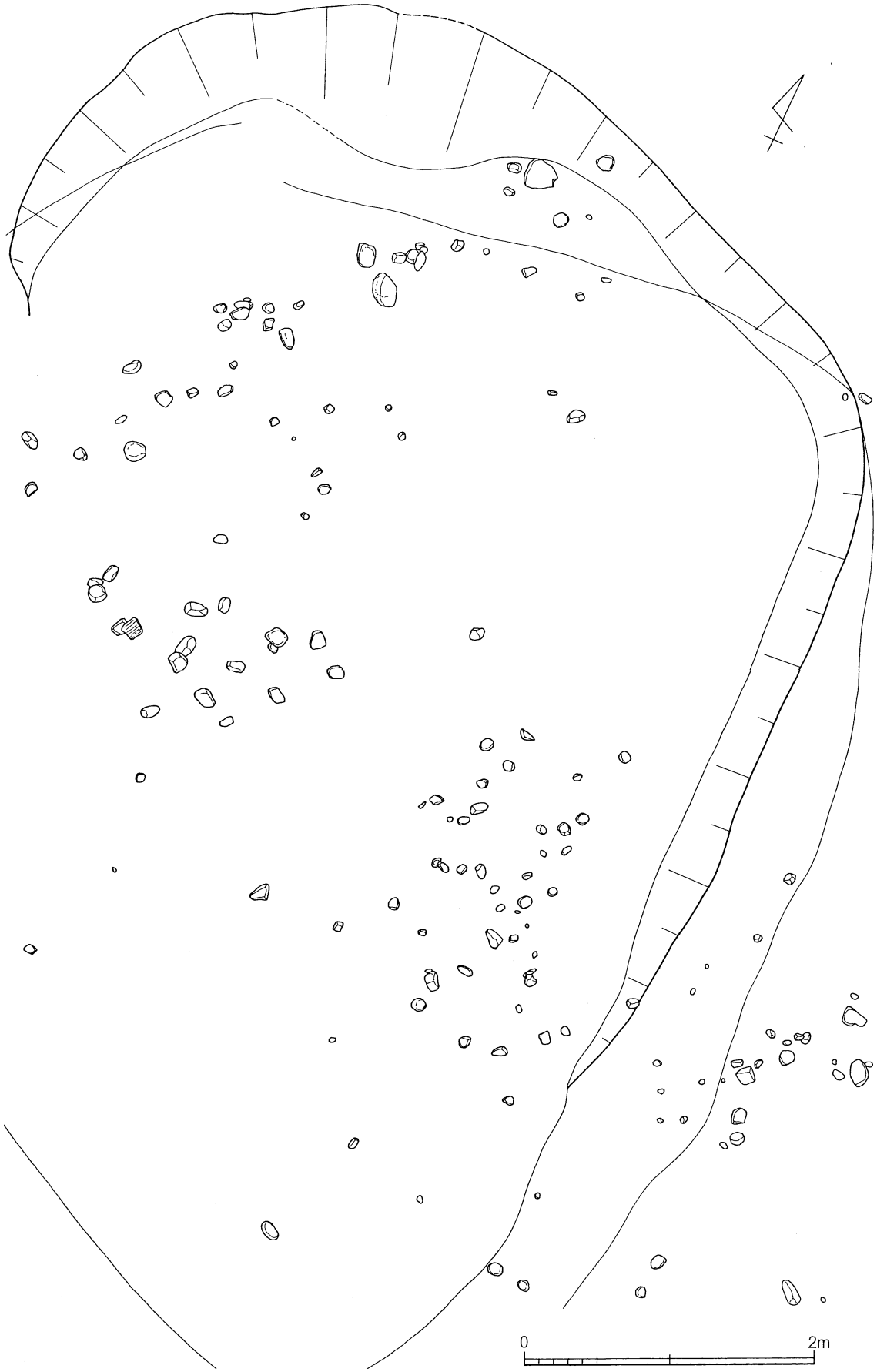


図50　ＳＸ０６　実測図

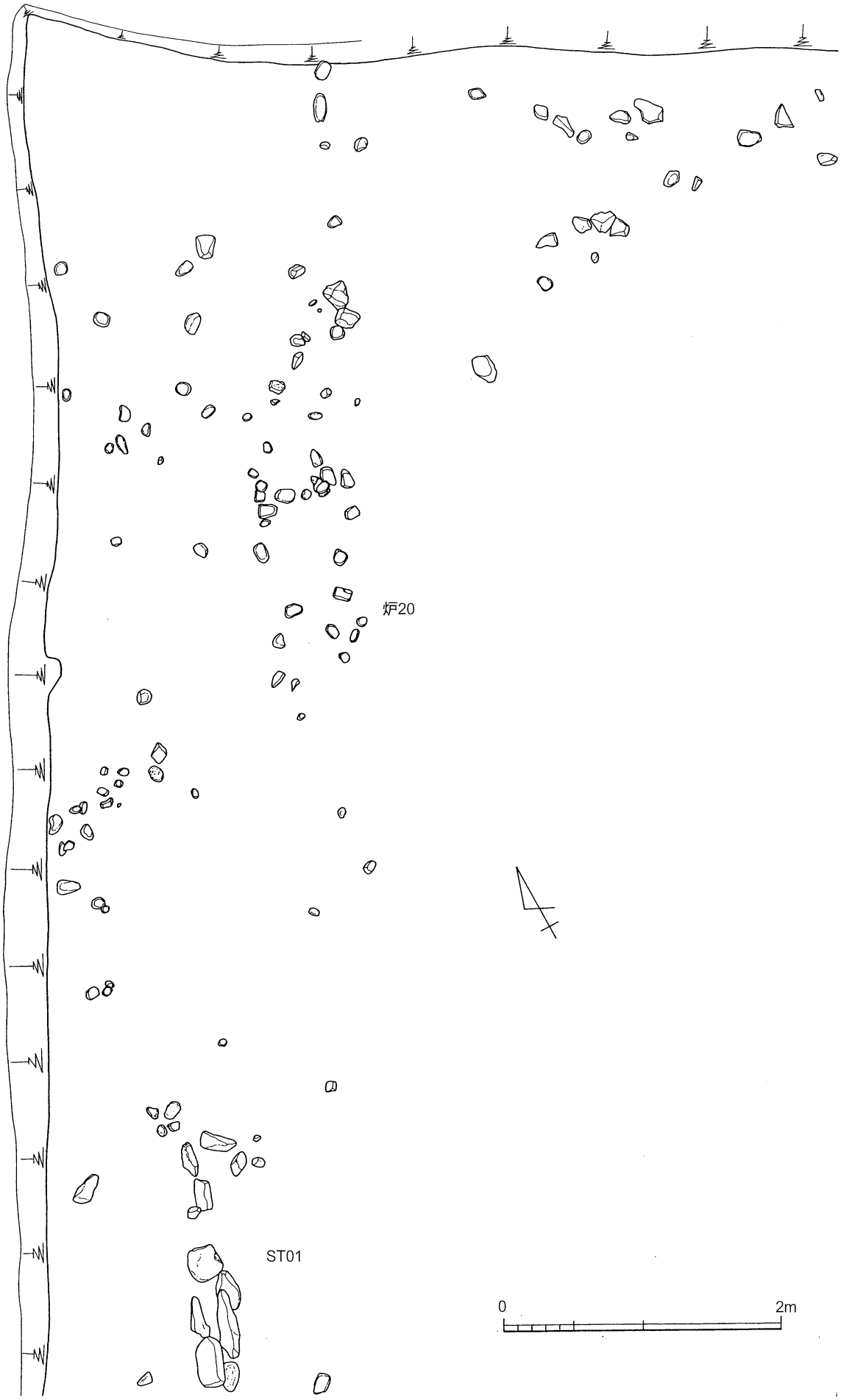


図51　A－1　実測図

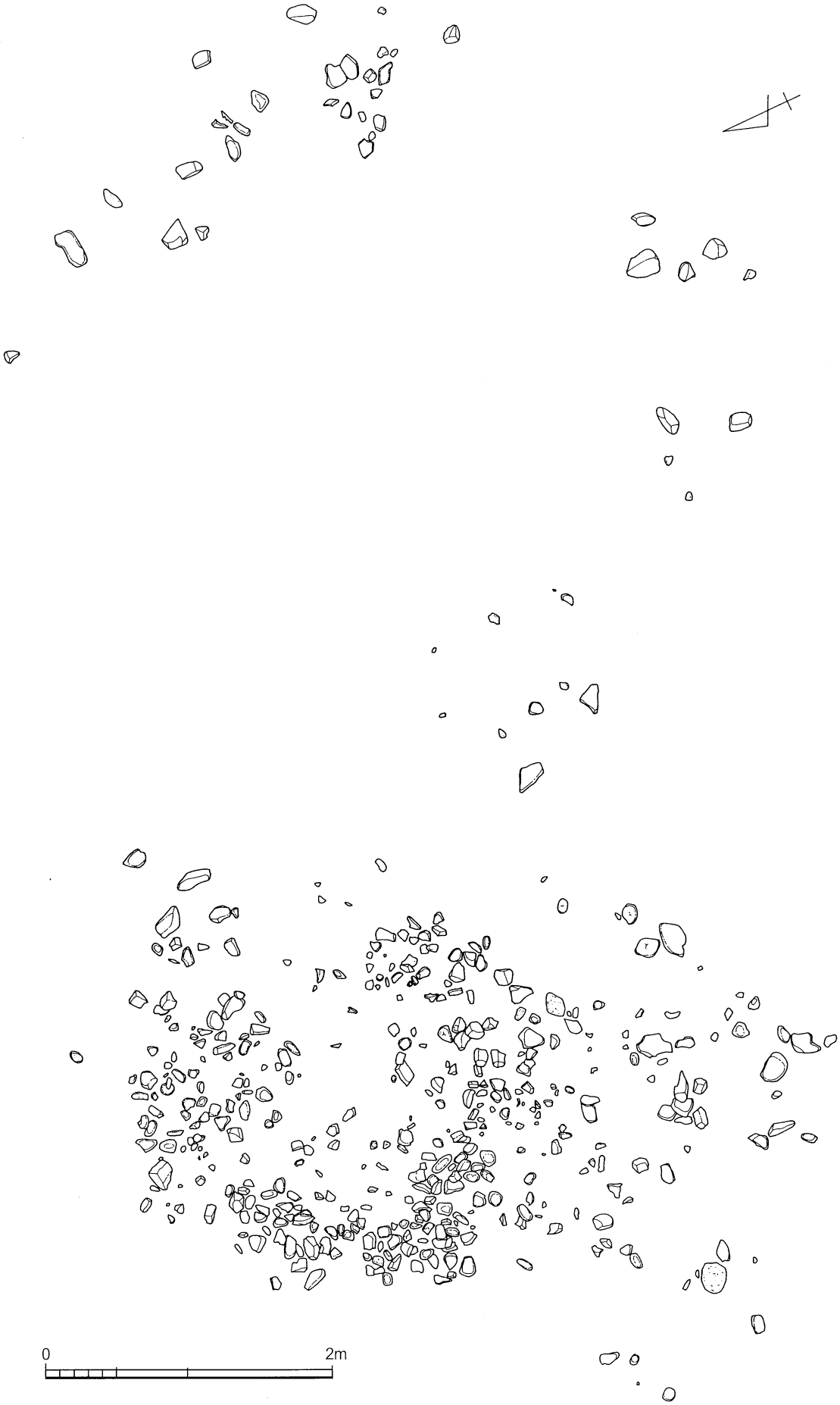


図52　B－1・2　実測図

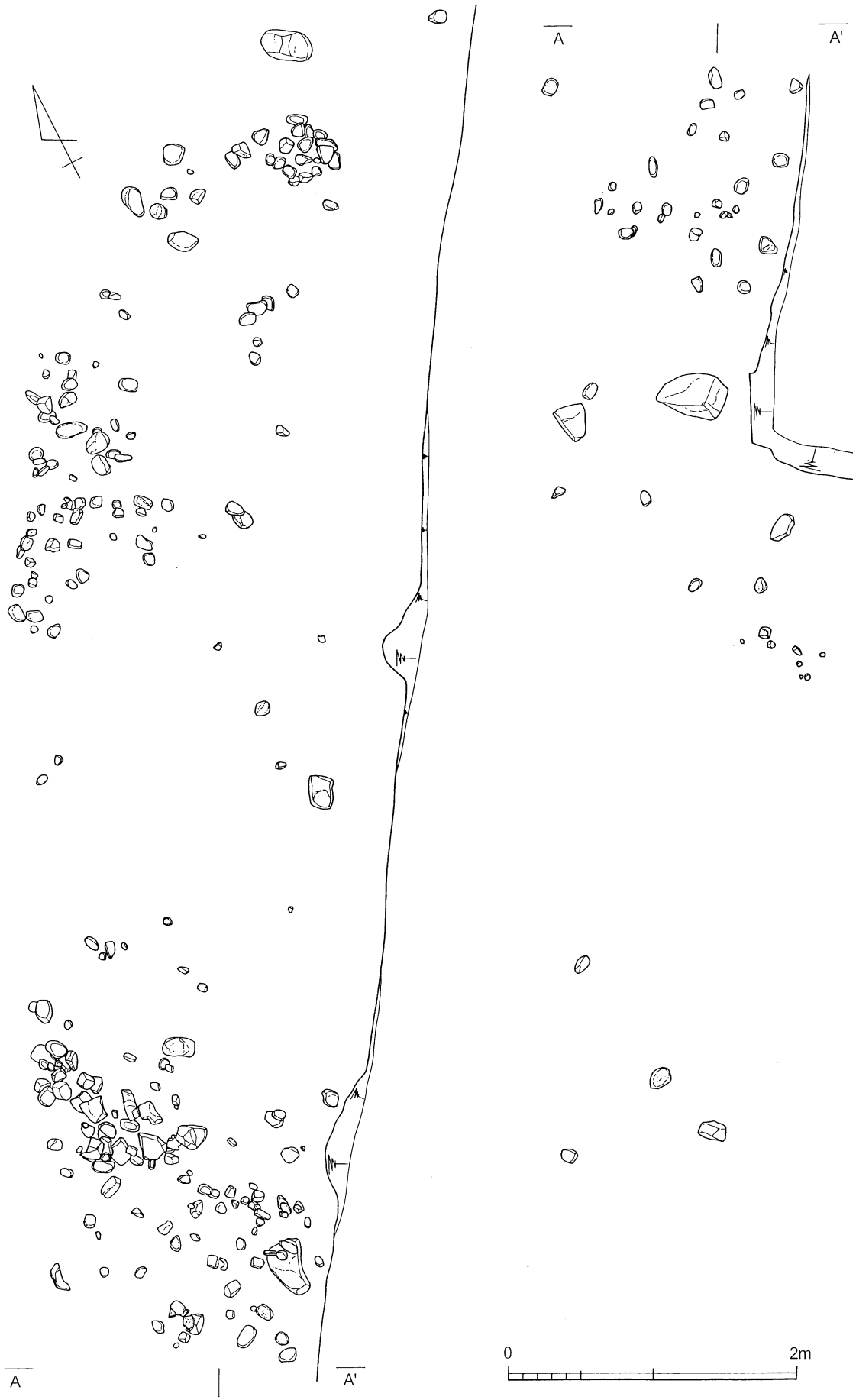


図53　C－2・3　実測図

図54　B－3　実測図

図55　B－4・5　実測図

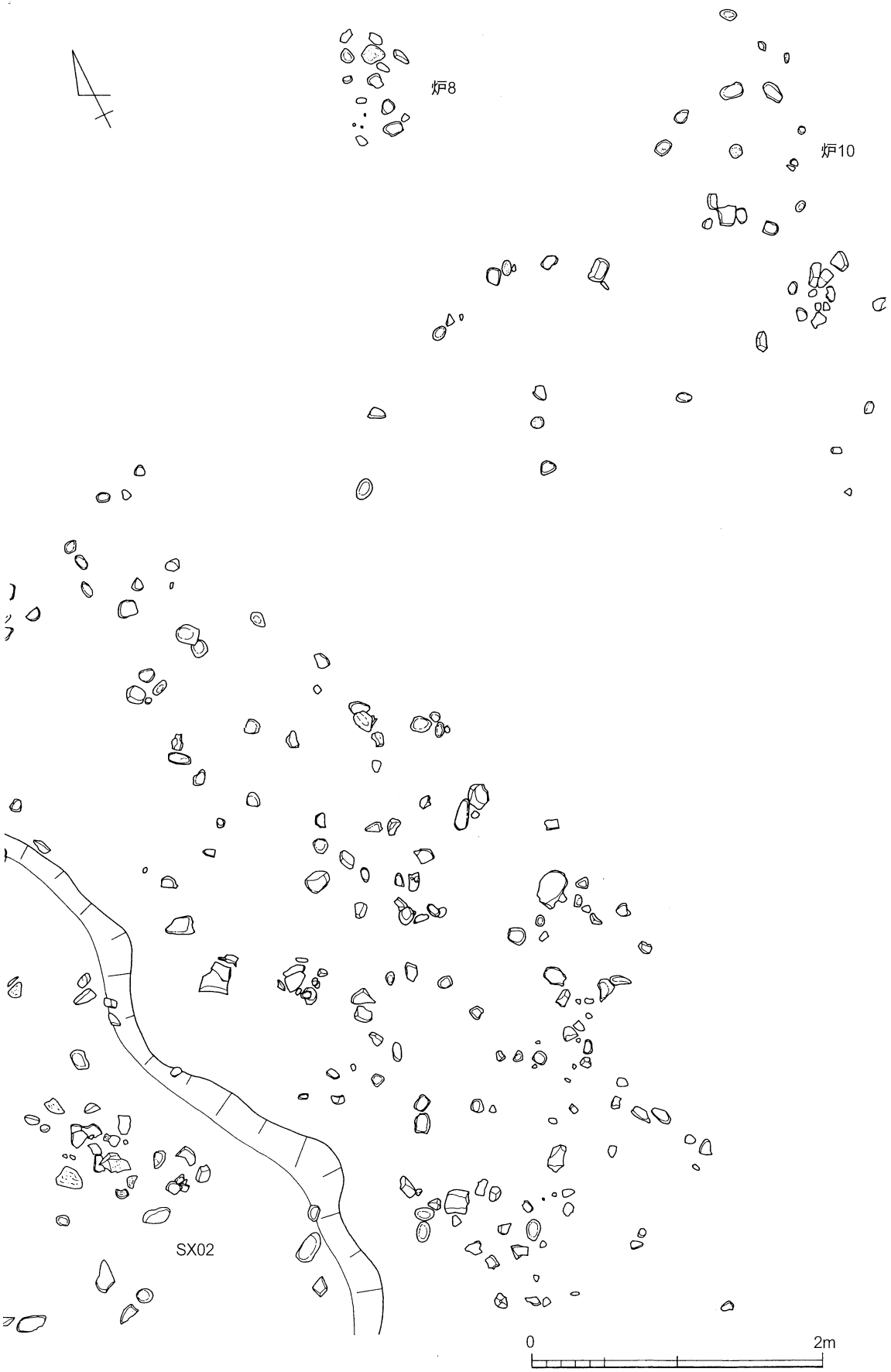


図56　B－4　実測図

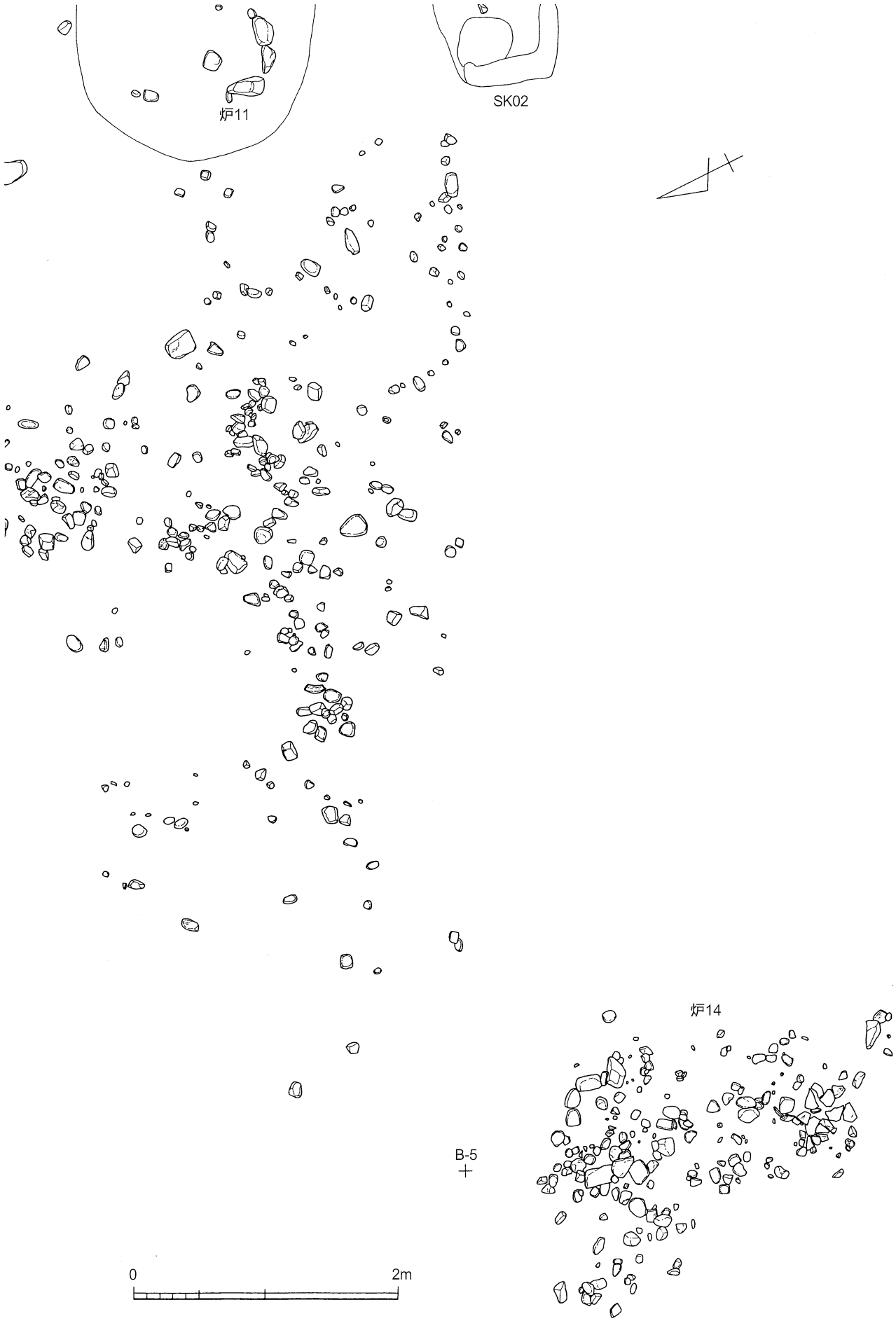


図57　B－5　実測図

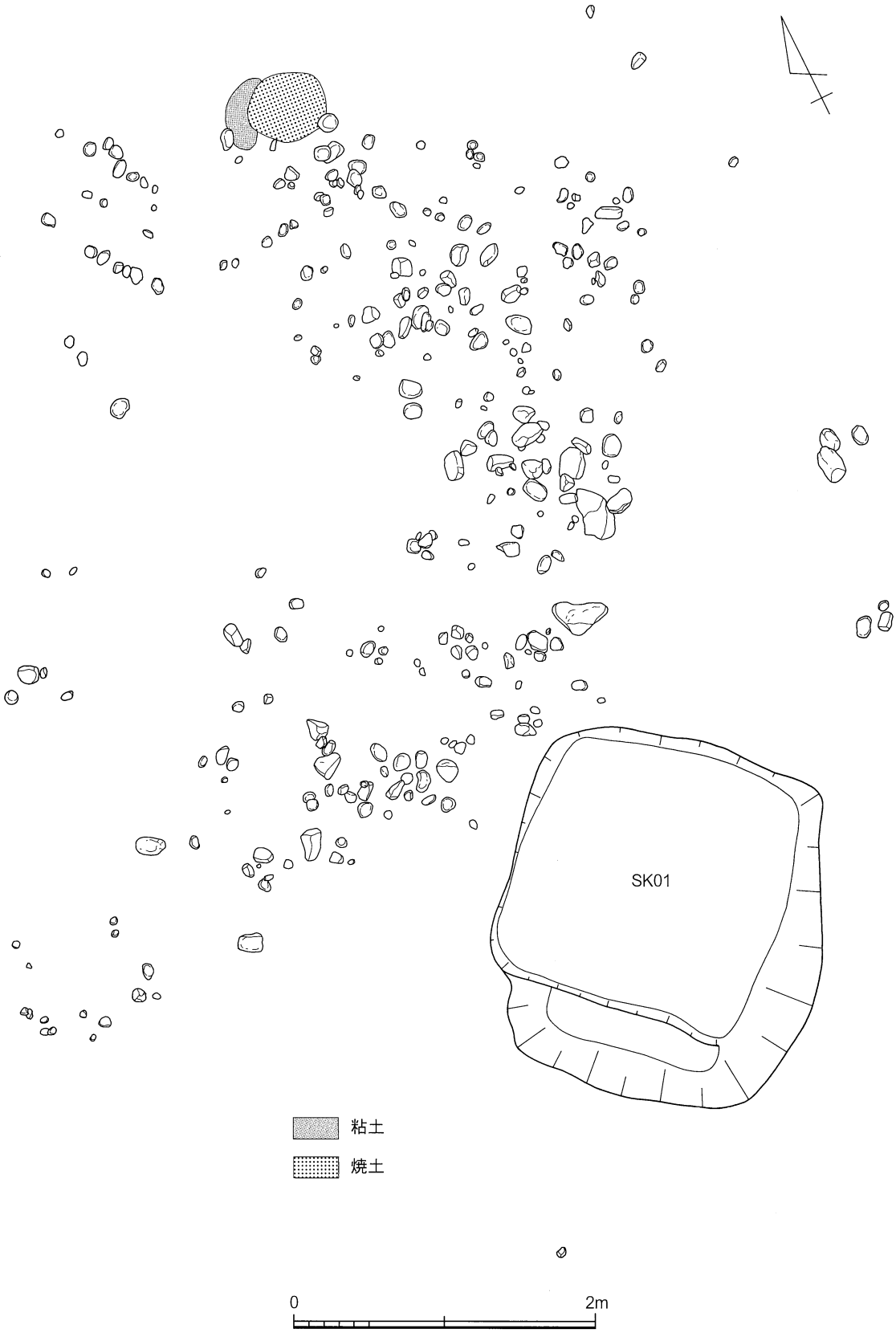


図58　C－4・5　実測図

Ⅴ．出土遺物

遺物は多量に出土している。遺跡の性格から当然大半の遺物は製塩土器である。製塩土器は型式的には脚台Ⅱ式から丸底Ⅱ式（大阪湾編年で、淡路編年のⅢ式）までの長期間に渡っている。その中心は丸底Ⅱ式（淡路のⅡ～Ⅲ式）である。製塩土器以外にも比較的多くの遺物が出土している。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・韓式土器・新羅陶器・土錘・鞴羽口・金属器（釣針・鉄族・鎌・刀子・釘・帯金具）、石器（石鏃・砥石・磨石など）と少量の中近世の遺物である。

量的には製塩土器が７割以上、通常の土師器が２割近くで、その他が1割となる比率である。破片の大きさからは須恵器やイイダコ壷が目立ち、多いような印象を受ける。

１．製塩土器

製塩土器は消耗品であることから、量的には多いものの小片になっているものが多数を占める。調査段階でもそのことが予測されていたので、統計処理することを主体とした。整理段階で，本来通常の土器と考えられていた土器の中にも2次焼成の状況などから製塩土器としたものもある。図化した点数と実際の量とは変化がある。図化点数は包含層だけでは、脚台Ⅱ式が41点、脚台Ⅲ式が11点、丸底Ⅰ式が14点、丸底Ⅱ式が65点（通常認識されている個体のみは32点）である。丸底の破片を包含層分のみ測った数値は、Ⅰ式が56,355ｇ、Ⅱ式が1,725,196ｇで、法量の差は大きいが、Ⅱ式が重量的には30倍になっている。製塩土器の編年は広瀬和雄氏の大阪湾編年が一般的である。ここでは混同を避けるため，特に明記しない限り広瀬編年を使用する。

脚台Ⅱ式のものを最古とする。量的には比較的多数を占めるが，脚台という破片として大型片であることも量的多数の印象を強くする要因であろう。脚台のタイプは幾つかある。大きくは３つに分けられる。（Ⅰ）ベタ高台のもの、（Ⅱ）上げ底のもの、（Ⅲ）輪高台状になるものの３種で、細かい形態差は多数ある。率的にはⅡの上げ底のものが多い。体部は外面タタキで、内面ナデか板ナデのものが多い。脚台部はユビ成形や調整のものが多く、粘土の継ぎ目が明瞭である。外面のタタキの方向は平行のものが多く、右上がりのものが僅かにある。脚台部は接合しているものが大半で、一部作りだしているものがある。接合は、ユビで大きくナデ上げているのが多いが、丁寧なナデやタタキのままのものもある。熱を受けていないと観察される破片も１割以上ある。

脚台Ⅲ式の製塩土器は量的に少ない。脚台がやや小さく、体部が大きく開く。整形はⅡ式より丁寧である。外面はタタキやナデで共通している。内面ハケ整形の土器もある。脚台はベタ高台と上げ底のものがある。タタキはⅡ式に比べるとやや細かいようである。また、1点の小さな支脚がある。調査段階は、他地域からの搬入品と想定していたが、最近調査された東浦町引野遺跡の調査資料で、脚台Ⅱ～Ⅲ式の良好な資料が呈示され、そのなかに類例を求めることができる。丸底Ⅰ式直前の脚台が退化したタイプに当てることが可能である。

丸底Ⅰ式にはほとんど個体差は少ない。破片が小片になっていることにも起因しているが、意図的にタイプを分類するまでには至っていない。破片をみる限り明らかに変化があるとは決めがたいからである。端部の形状や径の大小・器高の差がある程度である。口縁部も内湾するものや直立するものがあるが、小片からは傾きを正確にだすことは困難である。口縁部のナデの強弱が僅かな変化であろうか。図化すると形態差があるように見えるが、破片からこれを抽出することは困難である。備讃瀬戸に見られ

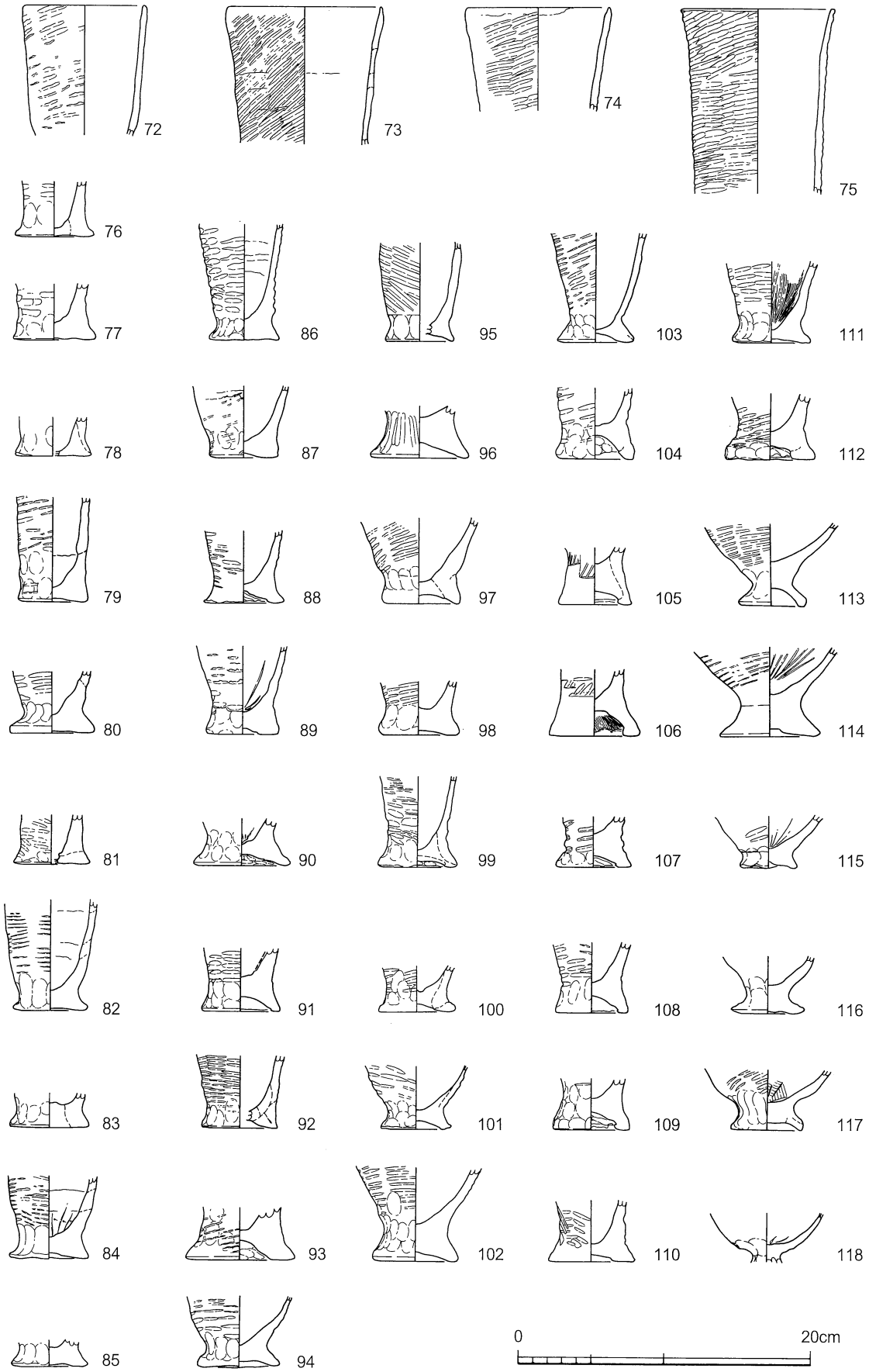


図59　製塩土器　実測図（1）

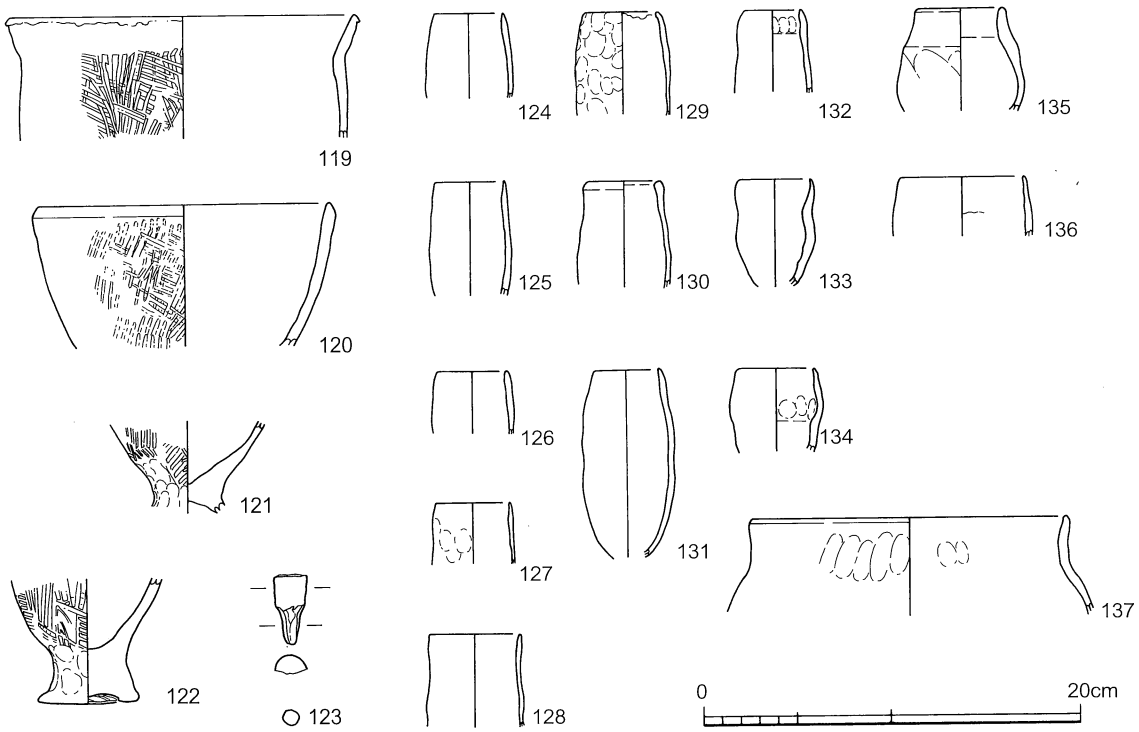


図60　製塩土器　実測図（2）

るタタキは認められない。ナデと板ナデで調整している。他にはこの時期としては大型の甕（137）がある。緩やかなくの字で、頸部はナデで形成している。個数は少ないものと思われ、数個体であろう。この時期に断定することはできないが、脚台Ⅲ式のプロポーションをした土器がある（119～122）。僅かに上げ底となる脚台から体部は大きく開き、格子状のタタキを外面に施している。明確に格子になるもので、脚台もしっかりしている。脚台部はユビで作りナデ整形している。口縁部は内湾して尖るものとくの字に開く2種がある。焼成は良好で色調は茶色がかった灰色を呈している。体部の器肉は厚い。搬入品と考えられる。

丸底Ⅱ式は量的に最も多い土器で、貴船神社遺跡での製塩の最盛期である。貴船神社遺跡出土の製塩土器の大半がこの時期である。遺物量も多いが、土器のタイプの変化もあり、工程を考えるのに良好な一群である。図からは通有の甕やマダコ壷とする土器もあるが、被熱状況などから少なくとも貴船神社遺跡においては製塩土器と考えているものも含んでいる。この時期に該当する土器はバラエテイに富んでいる。大型品と小型品に分かれる。小型品には皿状のものから鉢・椀・マダコ壷があり、大型品には甕・鉢・甑がある。全体的に成形技法は粗雑である。ユビ成形からナデ仕上げを基本とし、大型品で口縁部をヨコナデしている程度である。粘土の継ぎ目を明瞭に残したものも多く、指圧痕が明確に残されたものが多い。内面は板ナデ仕上げの土器もある。小型鉢にはタタキが施されているものがあり、（162）は縦方向のタタキもある。器肉には差があり、相対的に丁寧な調整を加えているものの方が薄いものが多い。形も変化が大きく一概には標記できない。内湾するものや外反するもの、内傾するものなどタイプがある。鉢はくの字状に頸部を持つものとないものがある。小型丸底壷に近い形状の鉢もある。ハケ整形を伴っている個体が多い。（168）の内湾する深鉢は完形品に復原できた数少ない製塩土器である。淡路島でも浜田遺跡などに類例があり、時期の下る可能性を考えていた土器である。貴船神社遺跡では工程の差で時期差ではないと考えている。大型品には通有の形態と製塩土器として作られた2種がある。

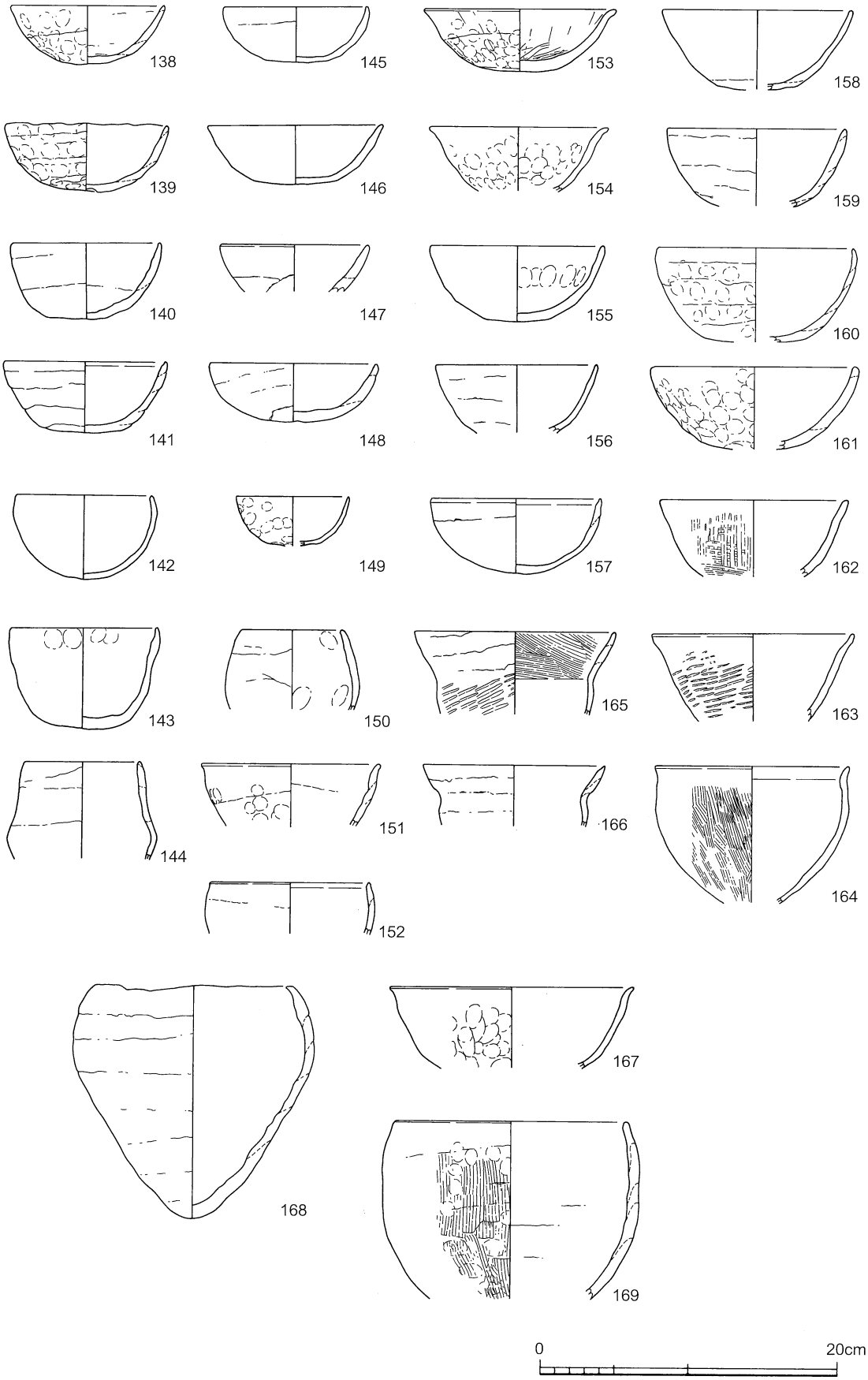


図61　製塩土器　実測図（3）

図62　製塩土器　実測図（4）

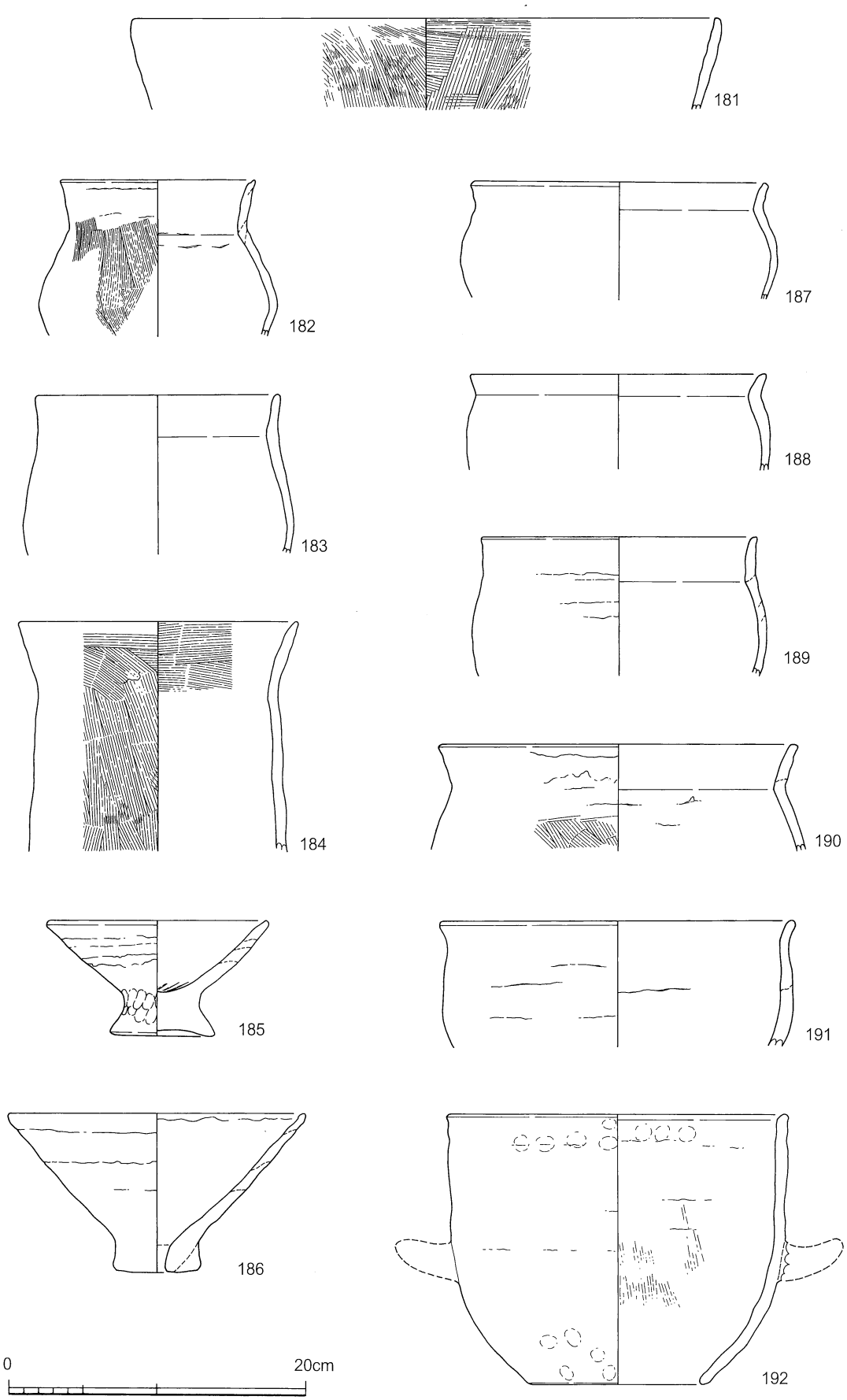


図63　製塩土器　実測図（5）

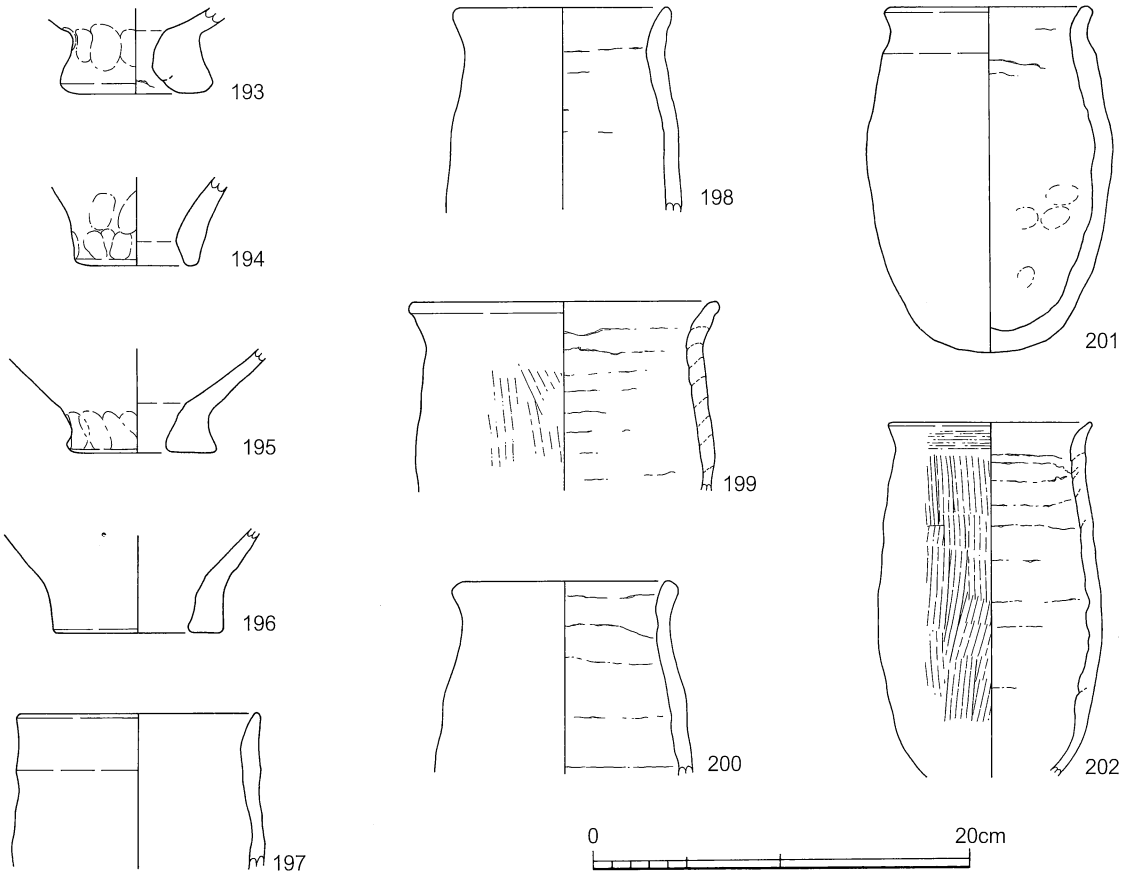


図64　製塩土器　実測図（6）

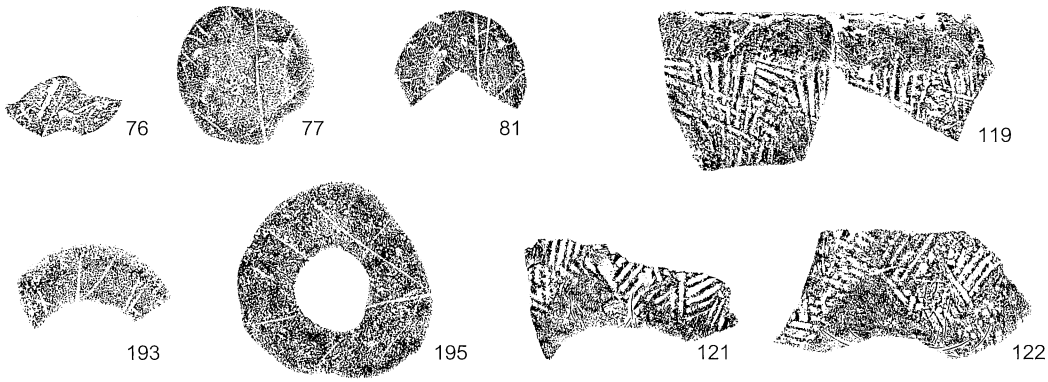


図65　製塩土器　拓本

主にﾕﾋﾞ成形だけの粗雑な土器は製塩専用に焼成された土器である。貴船神社遺跡で専用として指摘できるのは、①マダコ壷（201）　②端部を貼り付けた深鉢（173）　③鉢形の甑（186）があり、他に甑（192）（196）や大型鉢（170）もこれに含まれるかもしれない。大型鉢は口径30cmを越えるもので製塩土器としては大型の範疇に入る。（187）などの無頸壷形の土器は精製土器であるが強い熱を受けており、用途が異なっていると思われる。

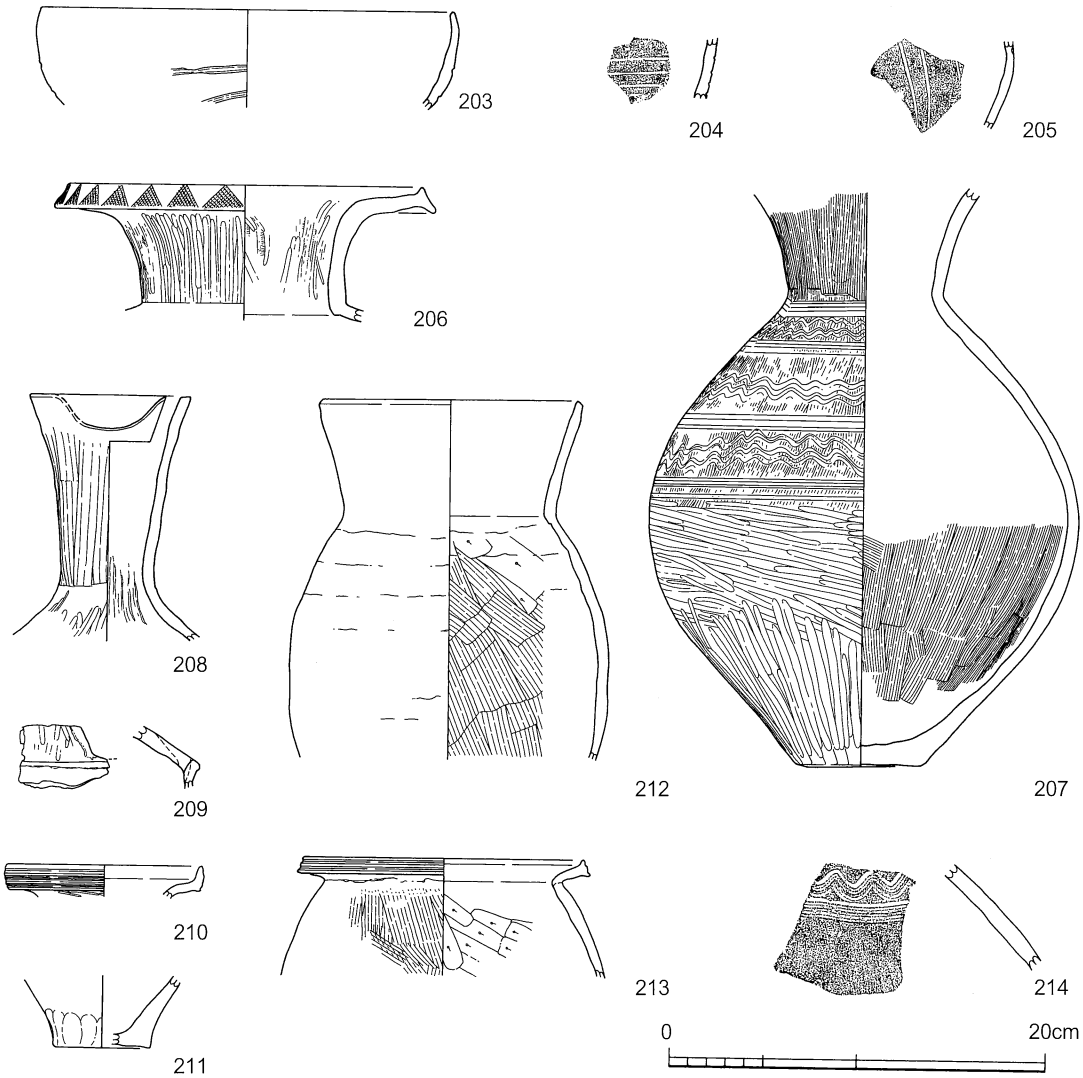


図66　縄文土器・弥生土器　実測図

2．縄文土器・弥生土器

包含層から数点の土器が混じっている。縄文土器は磨滅しているものが多く、後期の磨消縄文の破片と思われる。図化した土器は3点であるが、文様は残っていないものの色調・胎土から縄文土器と思われる破片は他に数点認められる。

弥生土器は９点図化しているが、出土点数は縄文土器と比べるとはるかに多い。また、余り磨滅しておらず、土師器などと残存状況は似ている。特に（207）の壷は口縁端部を欠いているものの、ほぼ完形の土器で出土状況からも遺構が近接して存在したものと思われる。調査区北壁で確認したもので、周囲から中期の土器が出土している。土器の内容は中期の方が比率が高いかもしれない。(206)（209）のように西側（東部瀬戸内）の影響を受けた土器もある。

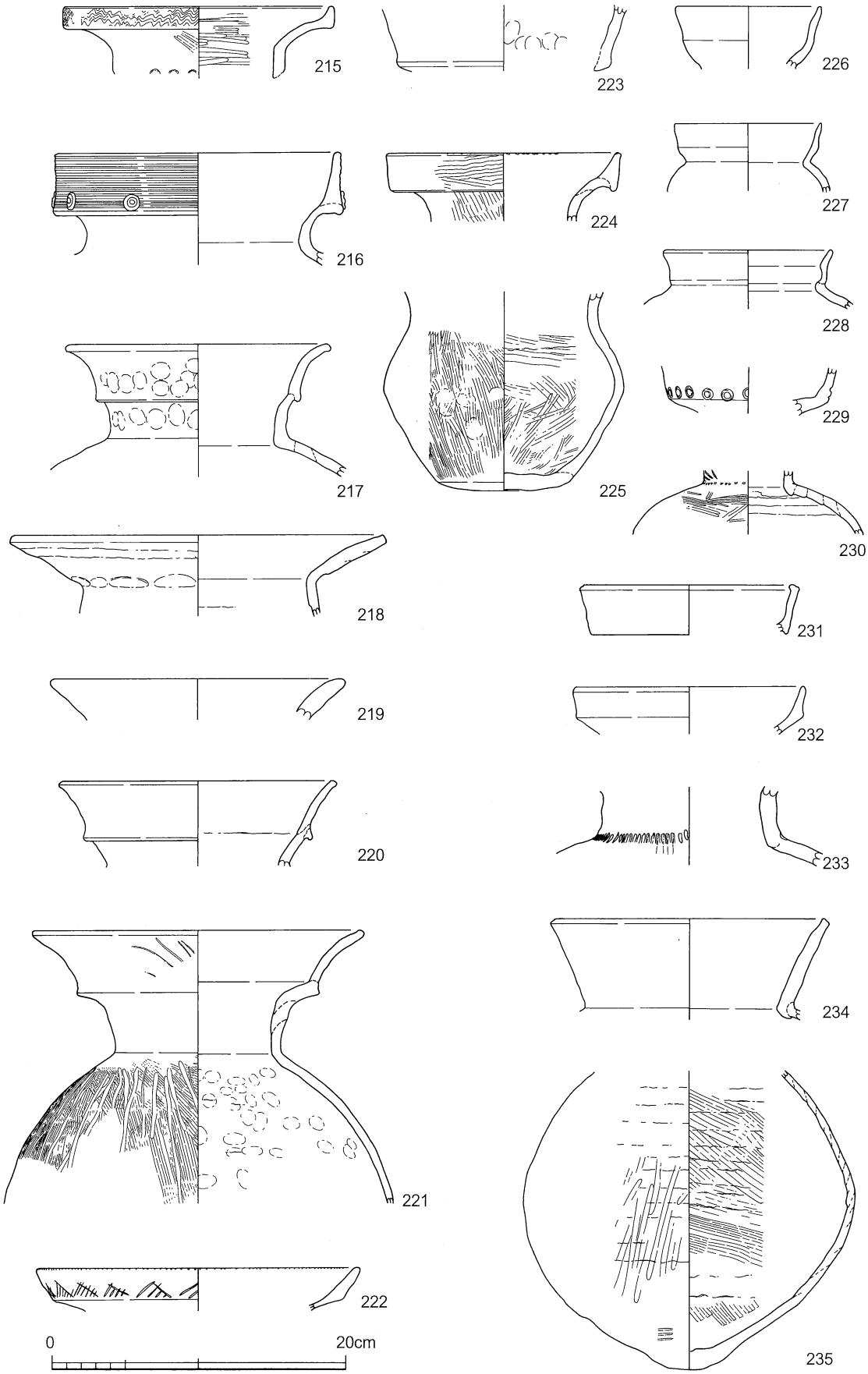

215
223
226
216
224
227
228
217
225
229
230
218
231
219
232
220
233
221
234
222
235
0
20cm

図67　土師器　実測図（1）

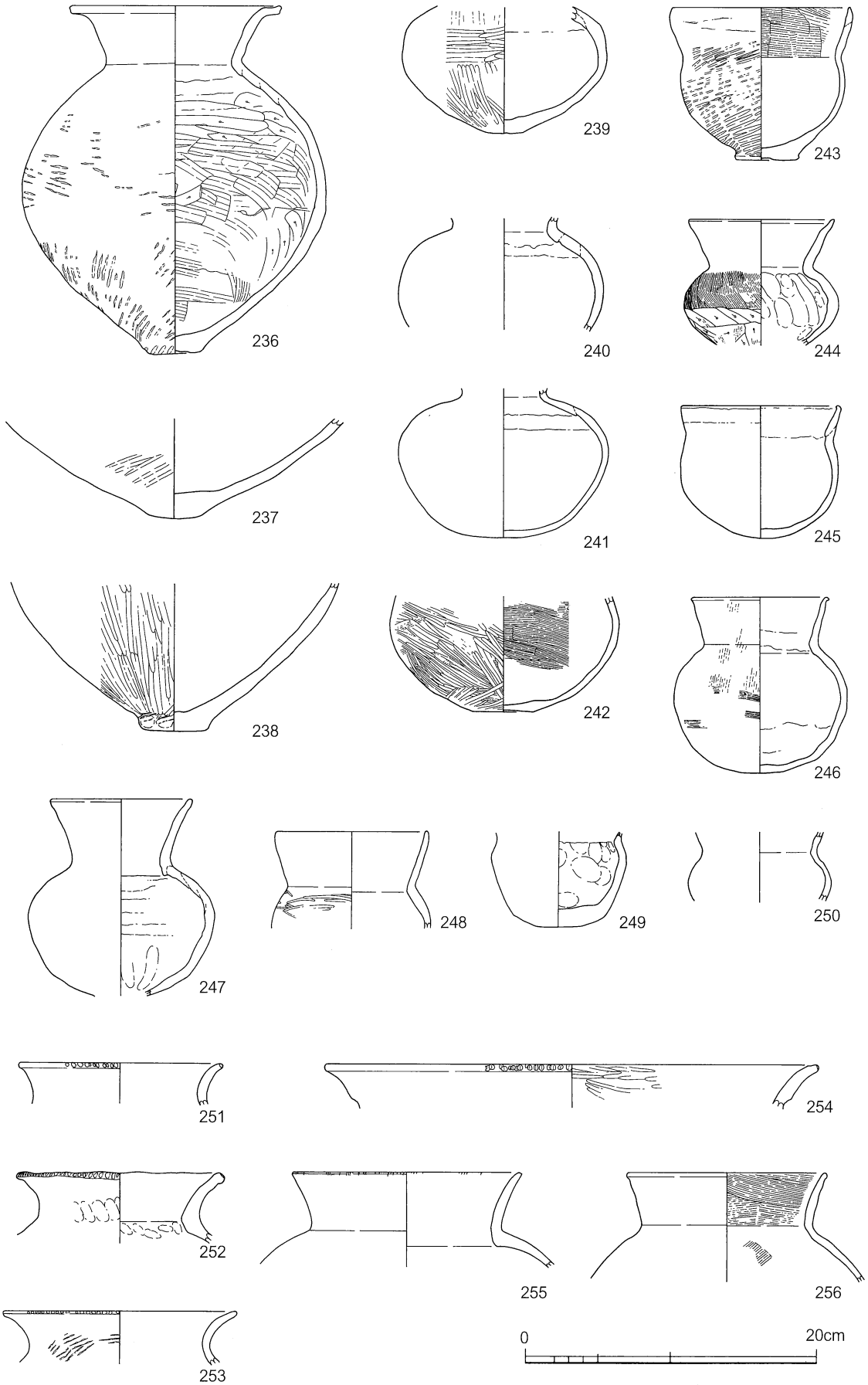

236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
0
20cm

図68　土師器　実測図（2）

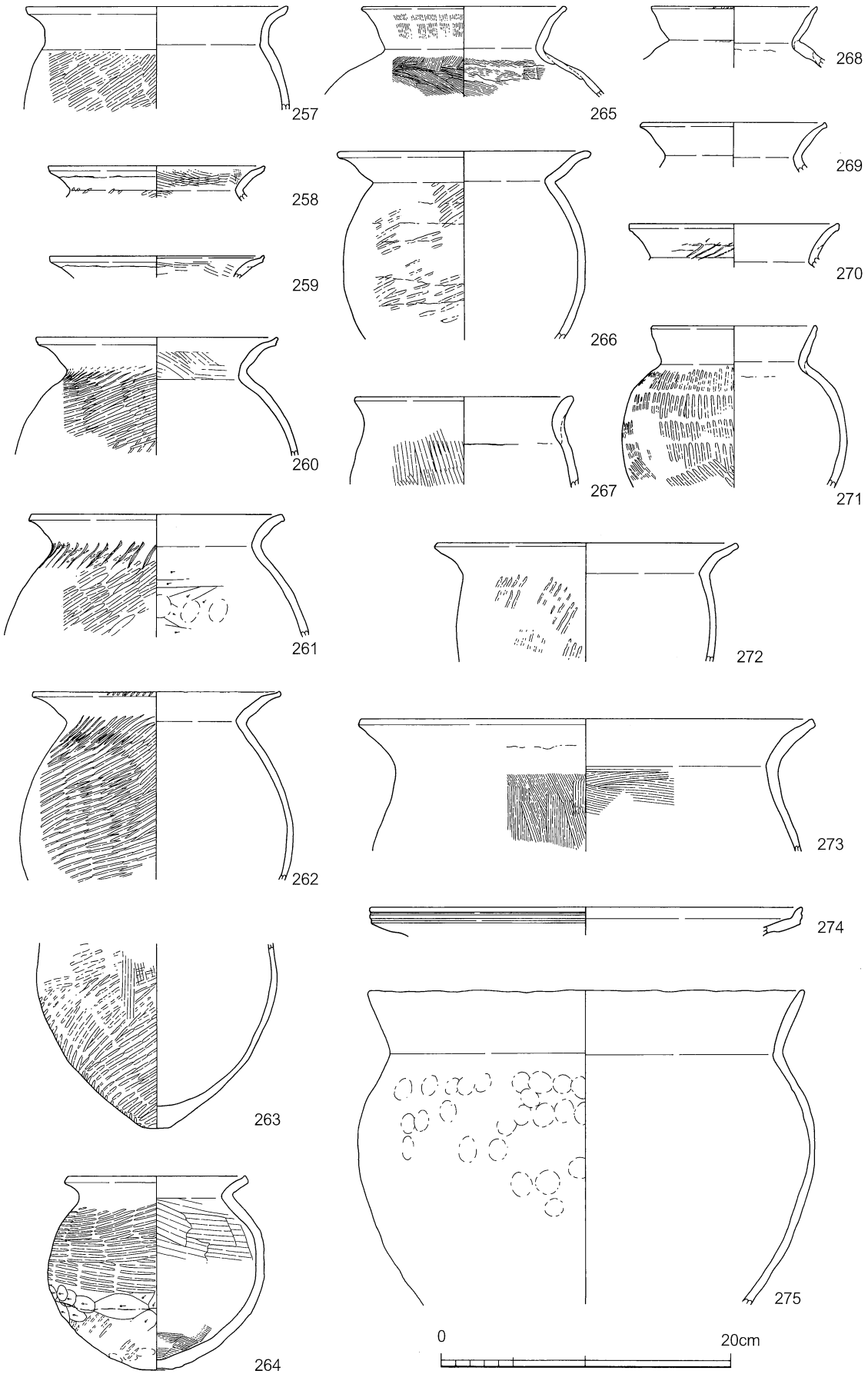

257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
0
20cm

図69　土師器　実測図（3）

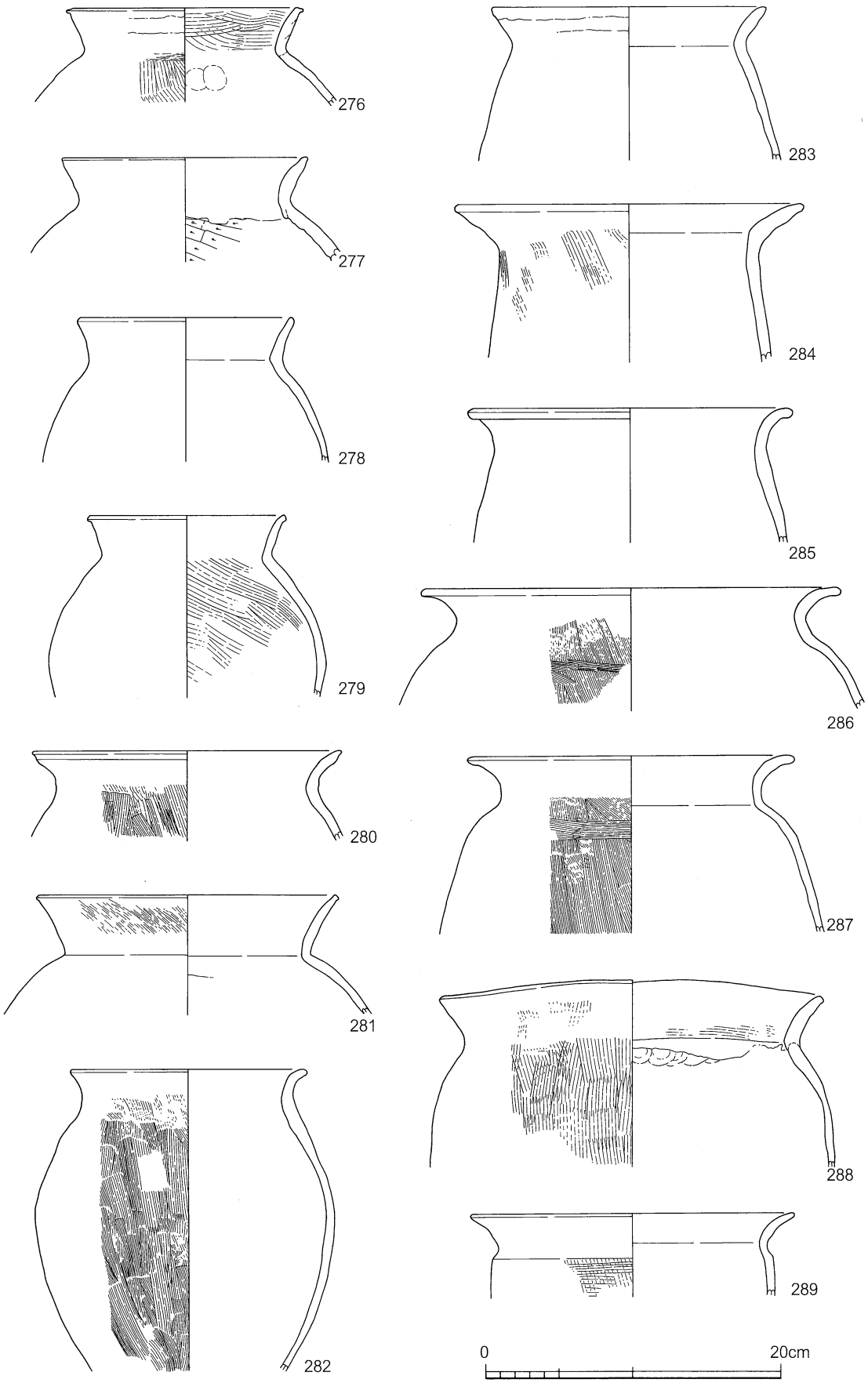


図70　土師器　実測図（4）

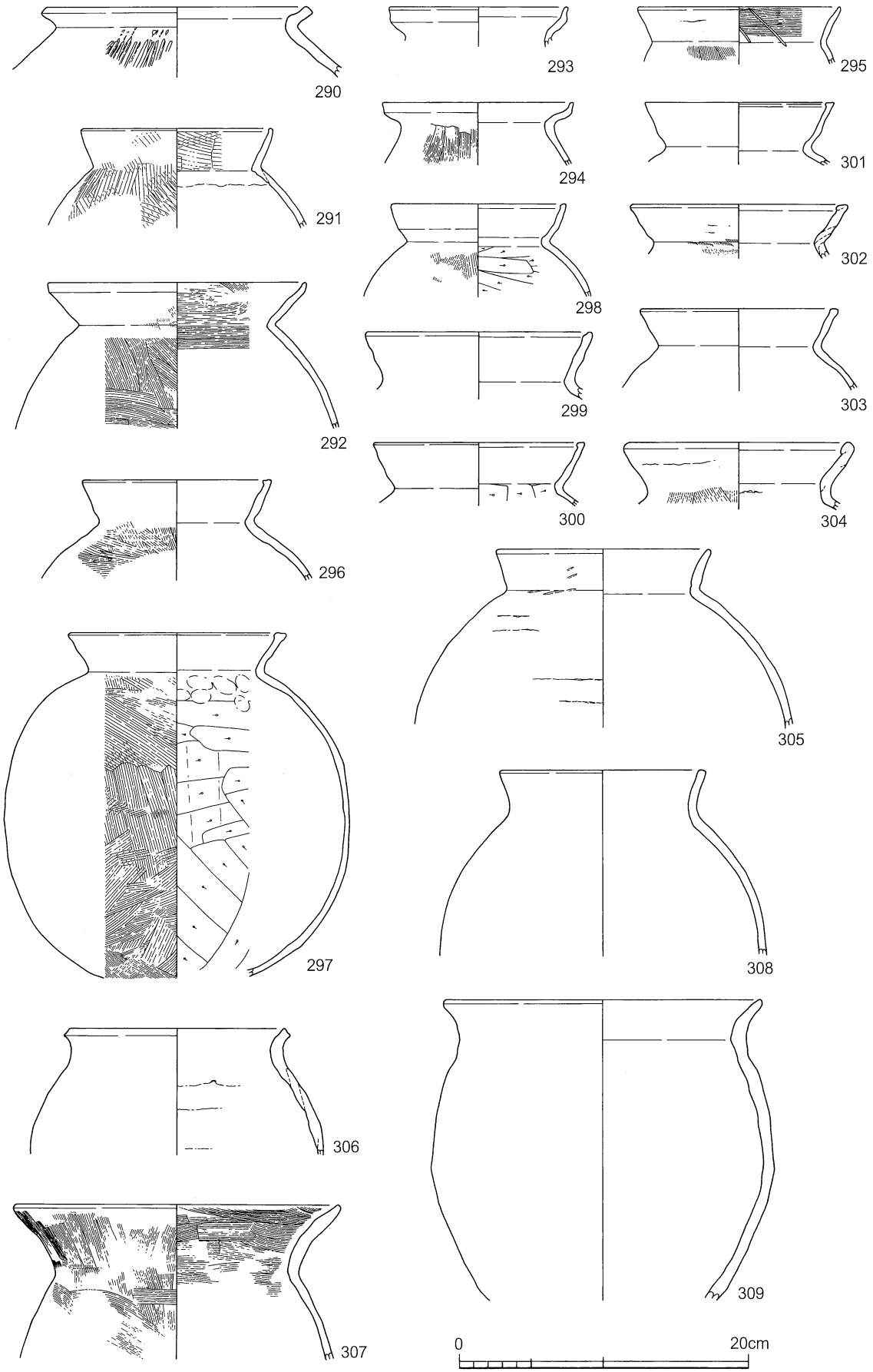

290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
0
20cm

図71　土師器　実測図（5）

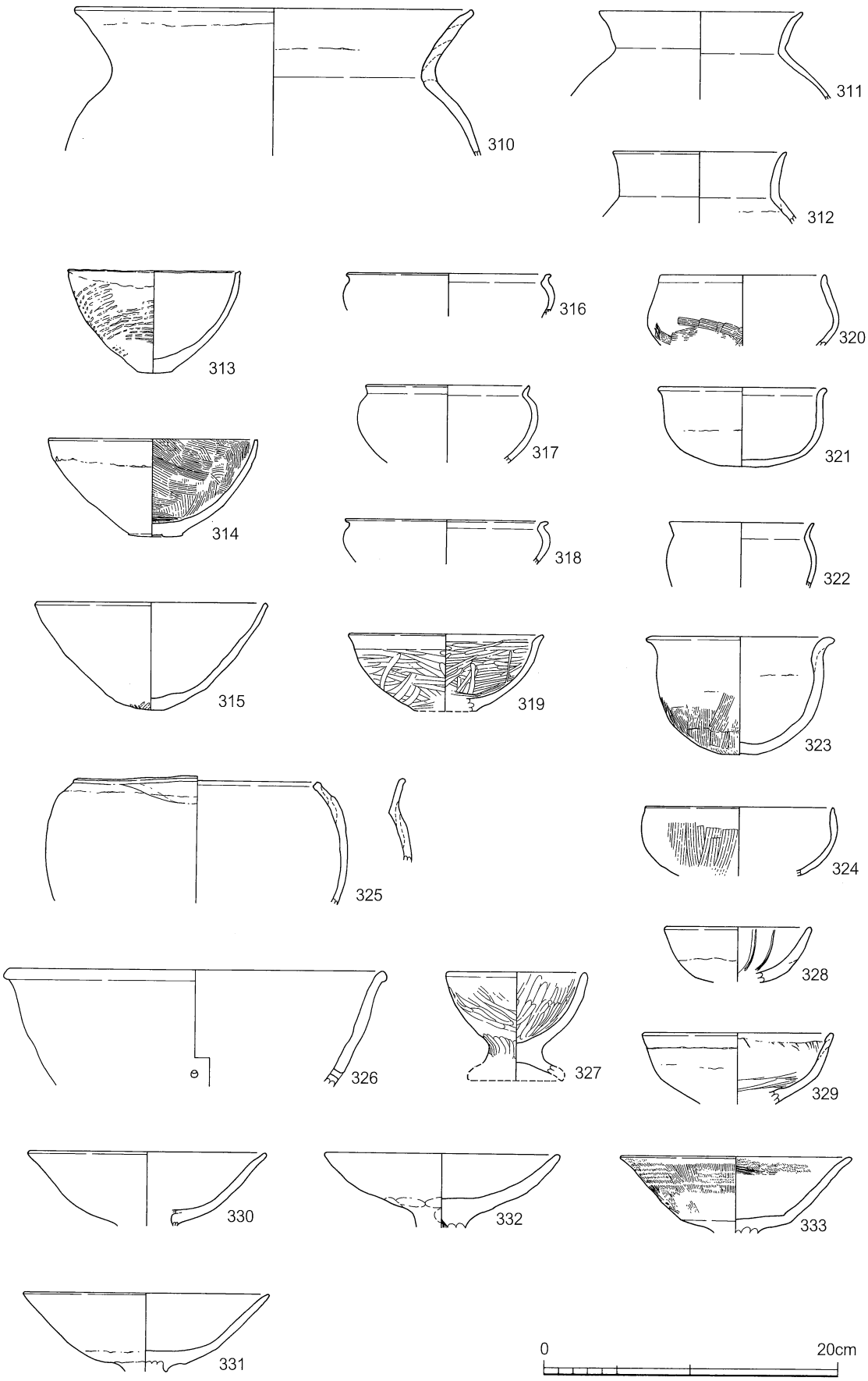

310
311
312
313
316
320
317
321
314
318
322
315
319
323
325
324
328
326
327
329
330
332
333
331
0
20cm

図72　土師器　実測図（6）

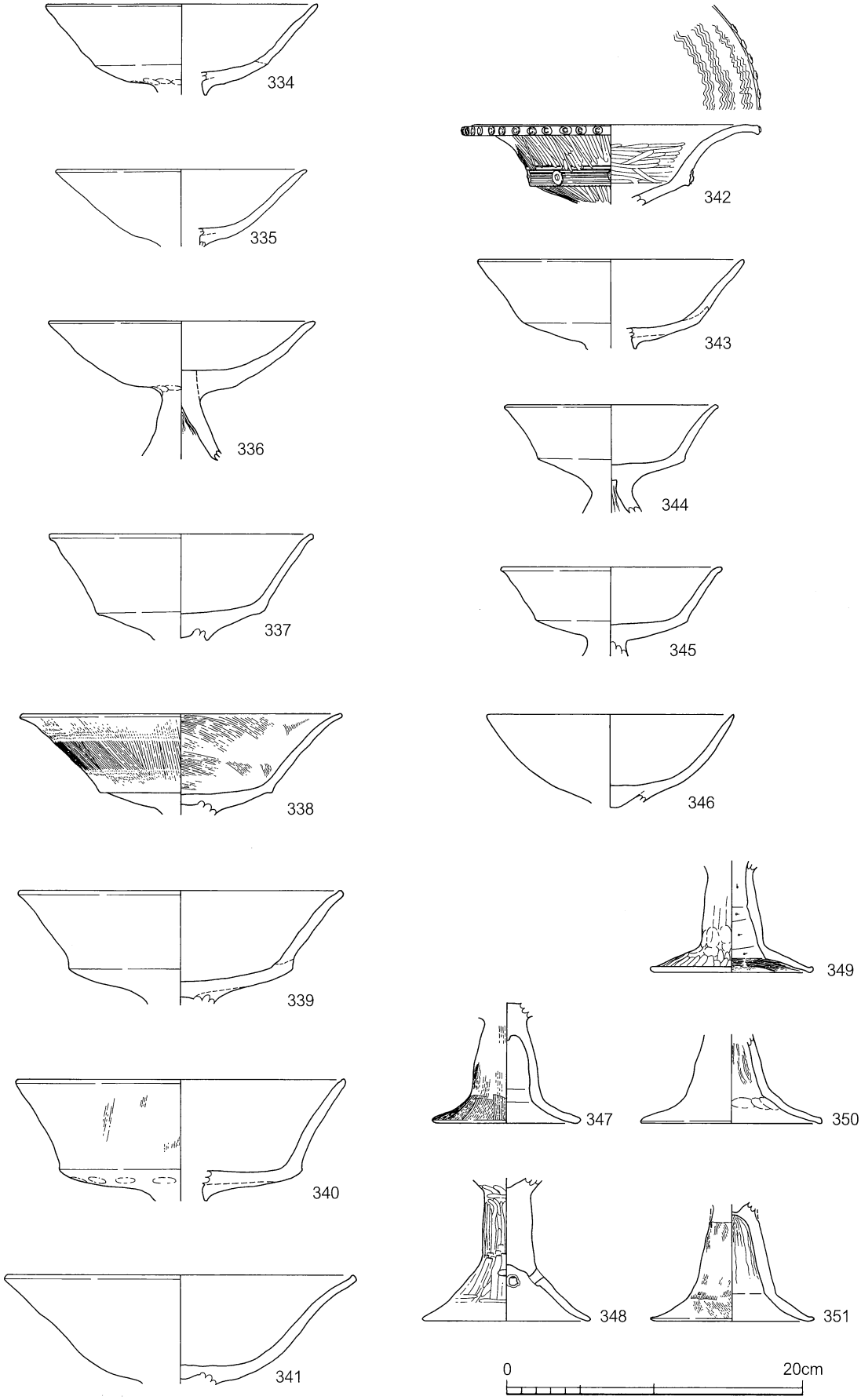

334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
0
20cm

図73　土師器　実測図（７）

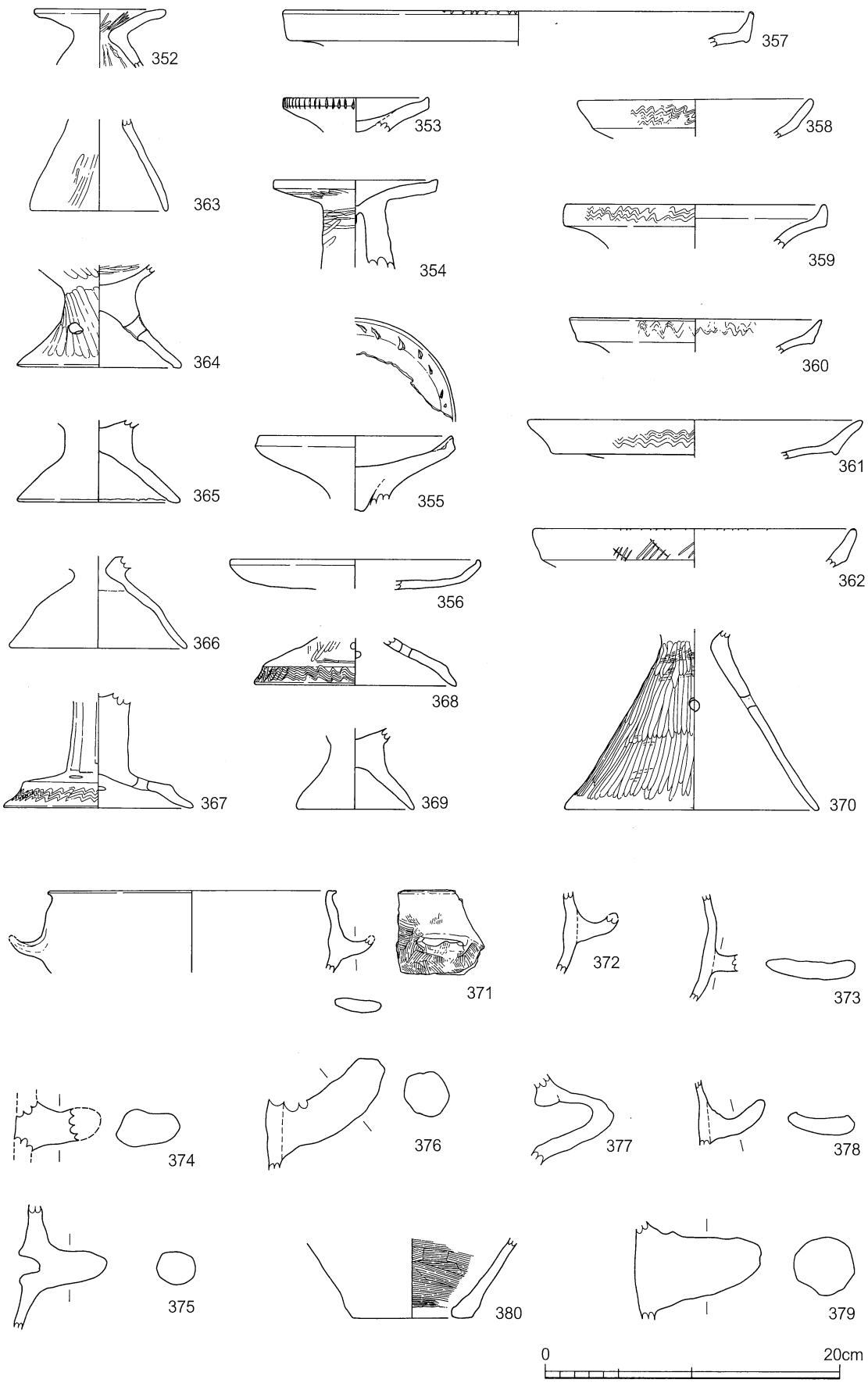

352
357
353
358
363
354
359
364
360
355
361
365
356
362
366
368
367
369
370
371
372
373
374
376
377
378
375
380
379
0
20cm

図74　土師器　実測図（8）

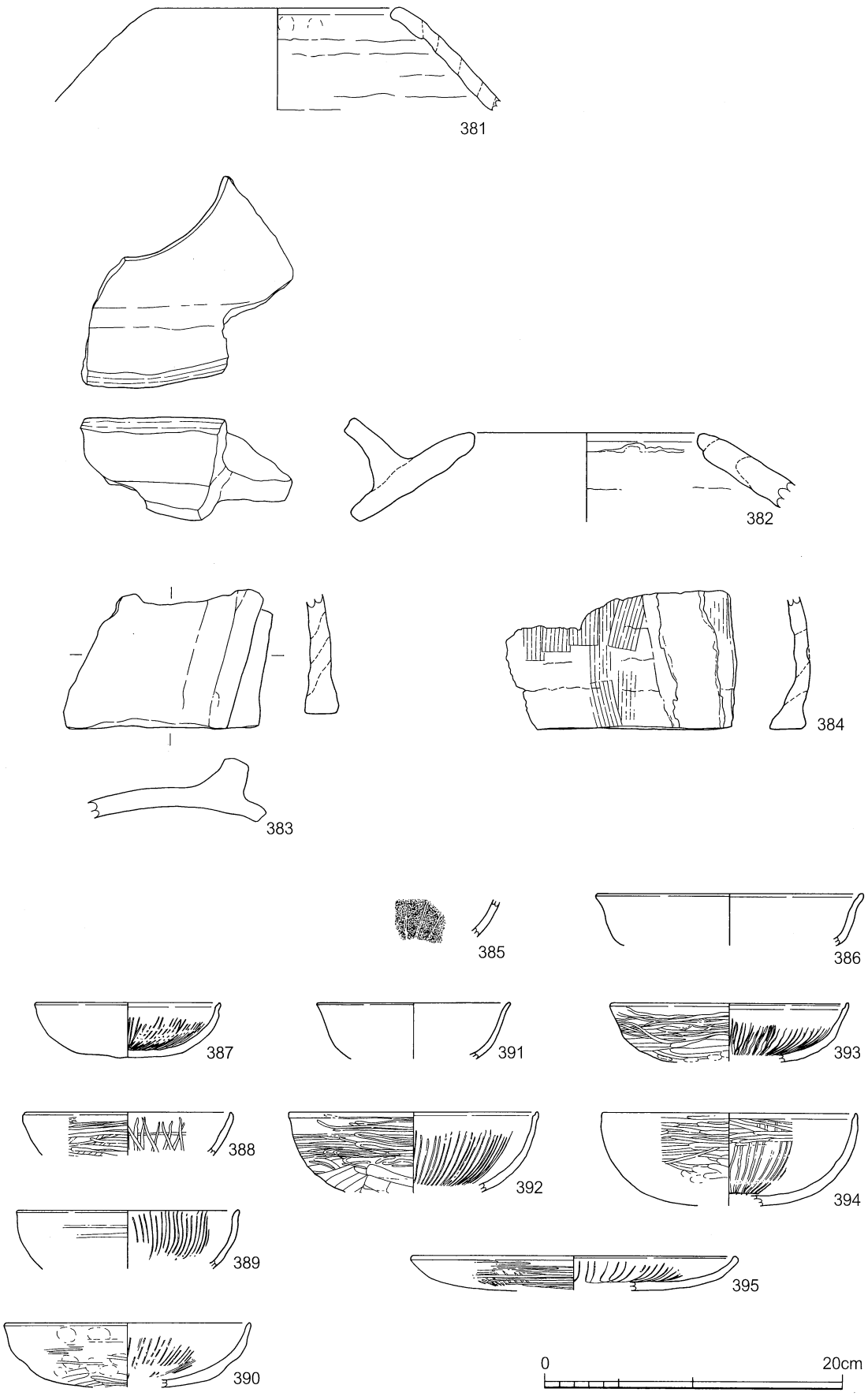

381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
0
20cm

図75　土師器　実測図（9）

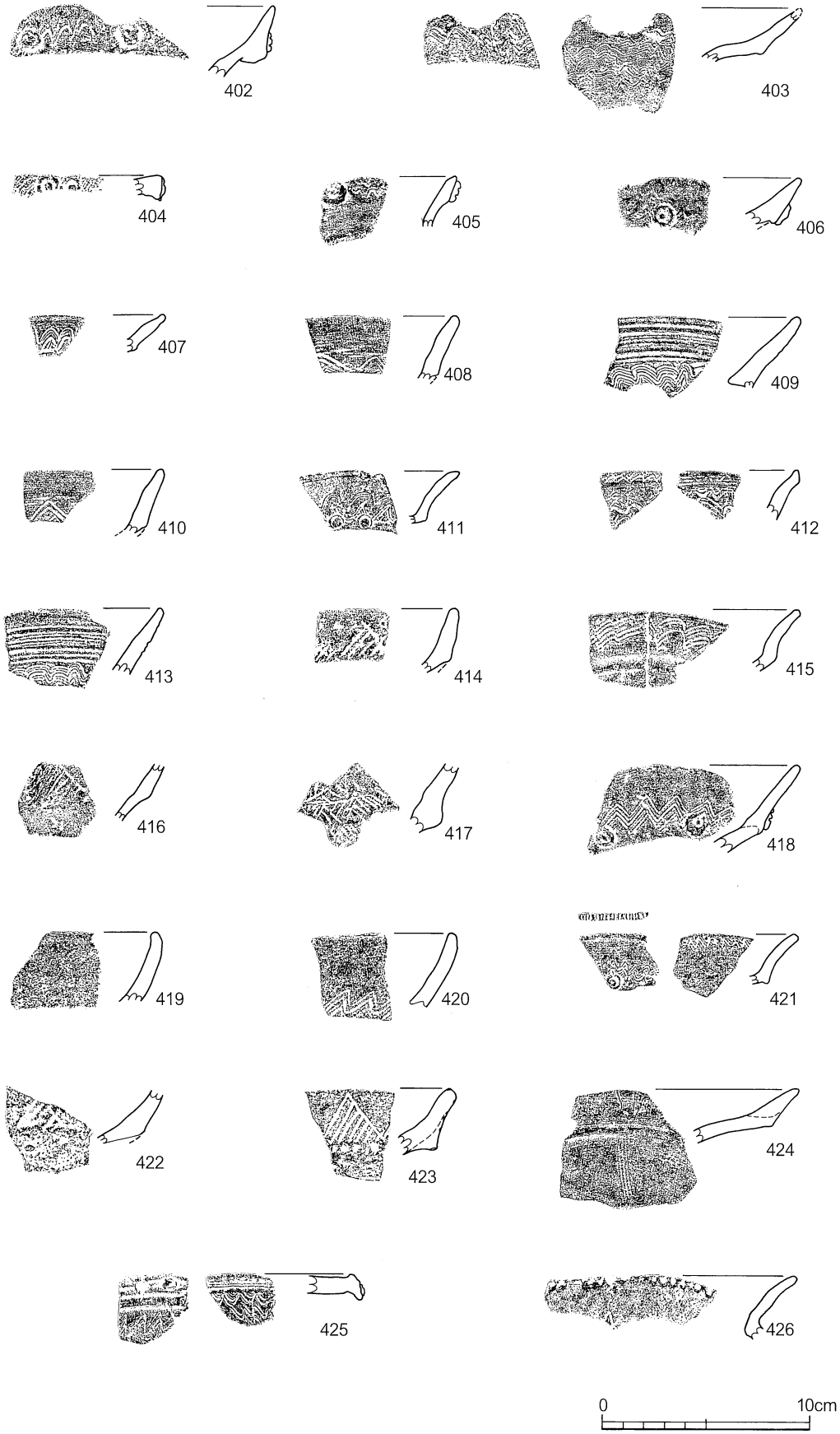


図76　土師器文様　拓本（1）

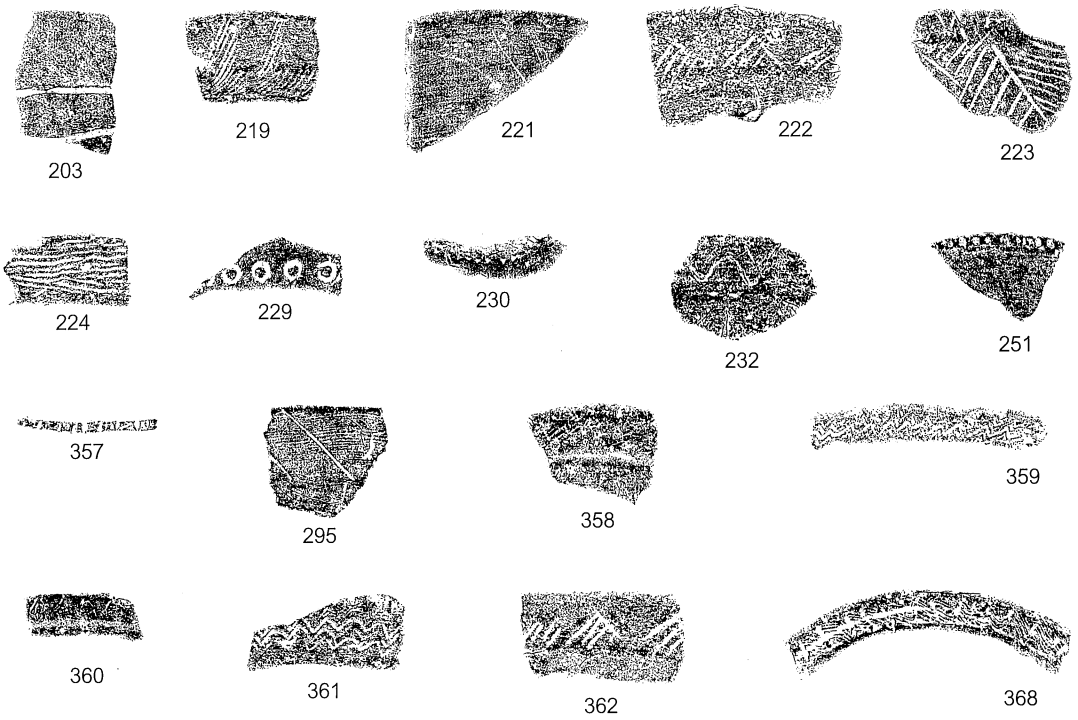


図77　土師器文様　拓本（2）

3．土師器

出土総量は製塩土器の方が圧倒的に多いが、図化した点数は212点とかえって多い点数を数える。内訳は壷36点、甕62点、鉢14点、高杯25点、器台19点、甑10点、カマド4点、椀（杯）10点、皿1点と壷をはじめとする文様拓本が25点である。大きな特徴は、地元産の土器に比べて搬入土器が比較的多いことである。

壷には装飾を施したものが多い。波状文・鋸歯文・円形浮文を主体に竹管文･刺突文・刻み目文がみられる。時期幅も多少あるようで、弥生時代後期後半の土器も含まれている。量的には、布留式併行期の遺物が多く、小型の精製土器が多数を占める。小型品でミニチュアかとも思われる手捏ねに近いものがあるのも特徴である。搬入品は山陰地域のものが多く、東部瀬戸内・北四国の土器がある。しかし、地元産の土器も相当量含まれ、淡路独自の土器も存在する。

甕は壷に比べて特徴が少ない。調整が丁寧なものと粗雑なものがある。粗雑な火を受けた土器もあり、製塩作業に使われたものも入っているかもしれない。特徴的な土器は、外面の縦方向のタタキと口縁端部の刻み目状の整形痕跡である。この2点は淡路の特徴にも挙げられている点であり、今後淡路からの搬出もしくは淡路への影響を検討する資料になろう。成形にはタタキとハケの両者の甕がある。個体数を数えることのできる底部で数えると、60個の平底のうち、外面タタキ成形は47個になる。その他ナデしたものもあり、基本的にはタタキ成形が主体であろう。

鉢には精製の鉢専用と、分割成形による甕の下半部のような鉢がある。精製の鉢には暗文の見られるものもある。小型品が多く、中型品は2点図化している。2点とも精製品である。(325) は片口が付く内湾するタイプで胎土も精良であるが、強く火を受けており注目される。製塩土器の可能性も全く否定できない。(326) は体部に円孔が開いている。体部は外傾し口縁部が如意形になる。

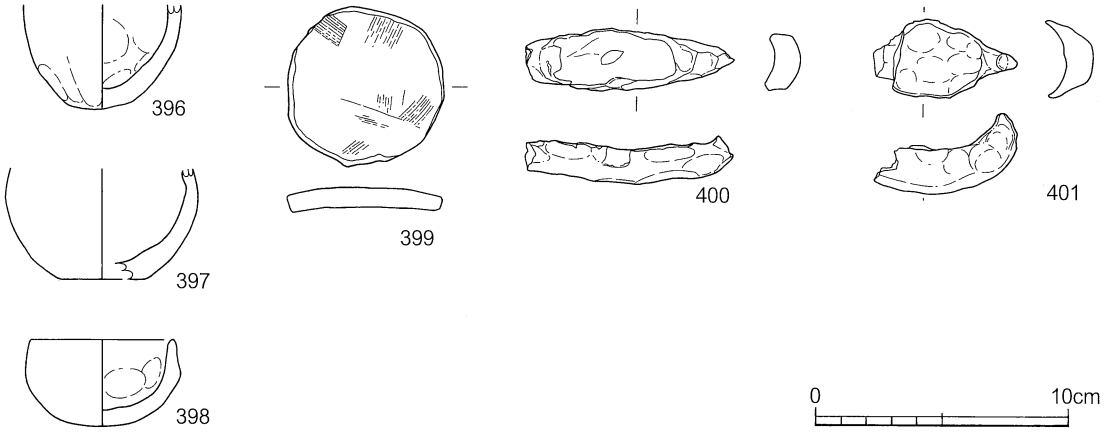


図78　土製品　実測図

高杯にも時期幅がある。脚部が中実のものと中空のものがあり、大きく分類できる。柱状部をカウントできるもので158点あり、大半が中空で148点である。そのなかで柱状部が途中で膨らむものが1割以下（７点？）存在する。中実のものは時期的に古い段階に限られているようで、新しいものは低脚になっている。

器台には淡路型器台と通常の器台がある。口縁端面・内面上部や下台部端面に波状文・鋸歯文の装飾を施したものが多い。高杯と異なり中実のタイプも同時期と思われる。中実のものは下台部に装飾があり、透孔があるものが多く色調は赤みを帯び、丁寧な整形を施している。口縁端部に刻み目状の整形痕を持つ器台もある。

甑は通常のものであるが、丁寧な作りの甑も存在する。底部で甑と判断した（380）以外は把手から甑と考えたもので、カマドの把手もあるかもしれない。把手には中実のものが多いが外形線と並行となる形状になるものや、内面が窪んだものもある。把手部はユビ成形であるが、体部との接合部はハケ整形やナデが見られる。

カマドの破片は大きく、ある程度の量もあるが接合できなかった。各部分があるようである。外面には粗いハケがみられる。

奈良時代の杯はミガキの施された丁寧な仕上げのものである。内面は縦方向、外面は横方向が主体である。皿も1点図化している。丁寧な暗文状のミガキがある。

土製品は６点図化している。３点はミニチュア土器で、（398）は鉢で他の2点は壷のミニチュアである。すべて手捏ねである。（399）は円板状の土製品で焼成後の再利用である。紡錘車に転用する前かもしれない。（400）（401）は舟形土製品でともに前後の表現がある。（400）は完形で手捏ねである。細身で舳先の表現も認められる。（401）は約３分の２程度の破片である。幅がやや広く舳先は大きく上がっており立体的である。

４．須恵器

須恵器も各器種が出土している。時期も古段階の須恵器から奈良時代までの土器がみられる。量的には５世紀末から６世紀後半の須恵器が多いように思われる。器種は杯が多く、壷・甕が次ぐ。古い時期の須恵器はＴＫ４３までは陶邑産の須恵器である。それ以降も陶邑産の須恵器の流入も続くが、地元で焼成されるものに変わっていく。洲本市大野窯跡が知られている。杯蓋・杯身ともにヘラ記号が多いの

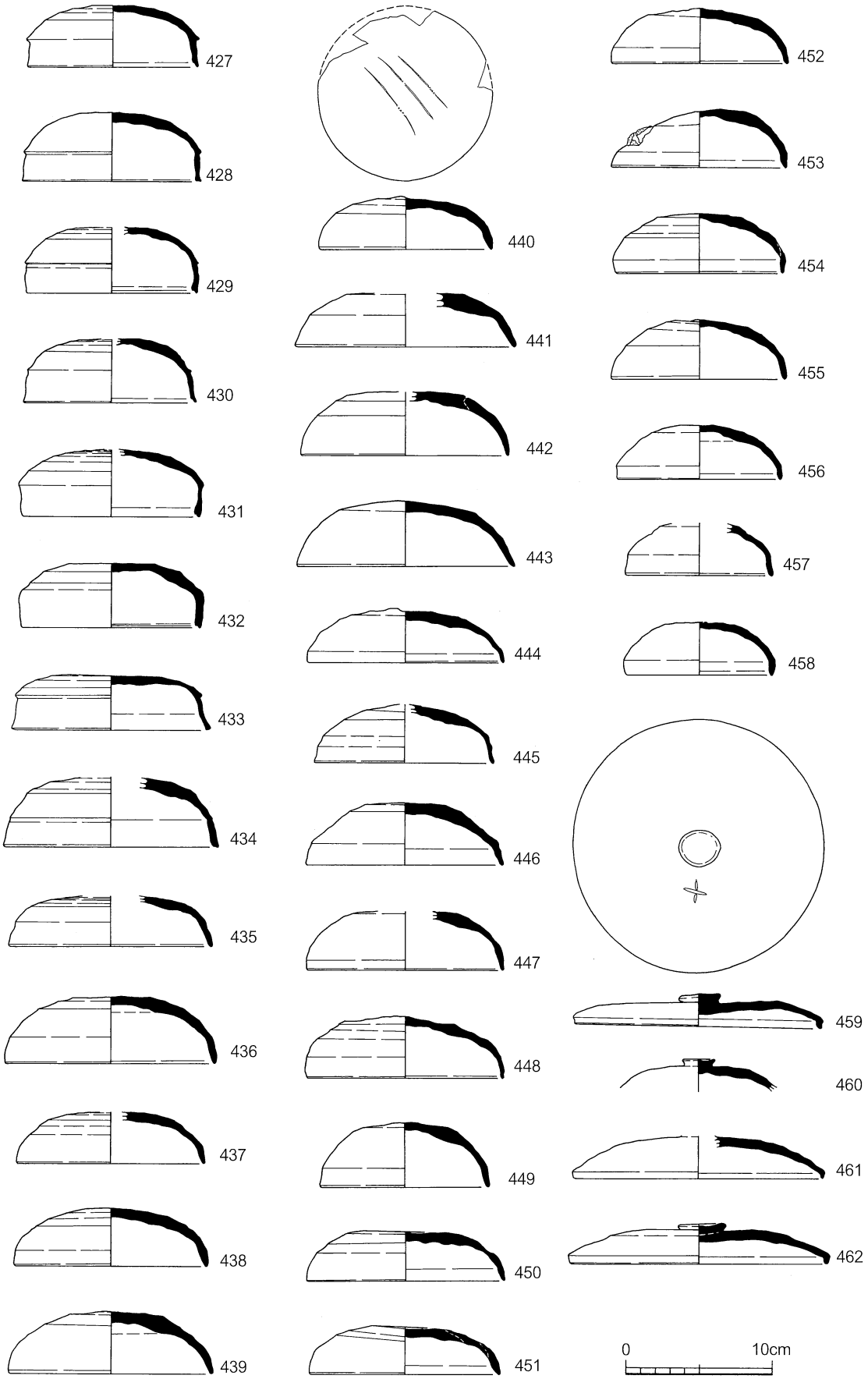

427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
0
10cm

図79　須恵器　実測図（1）

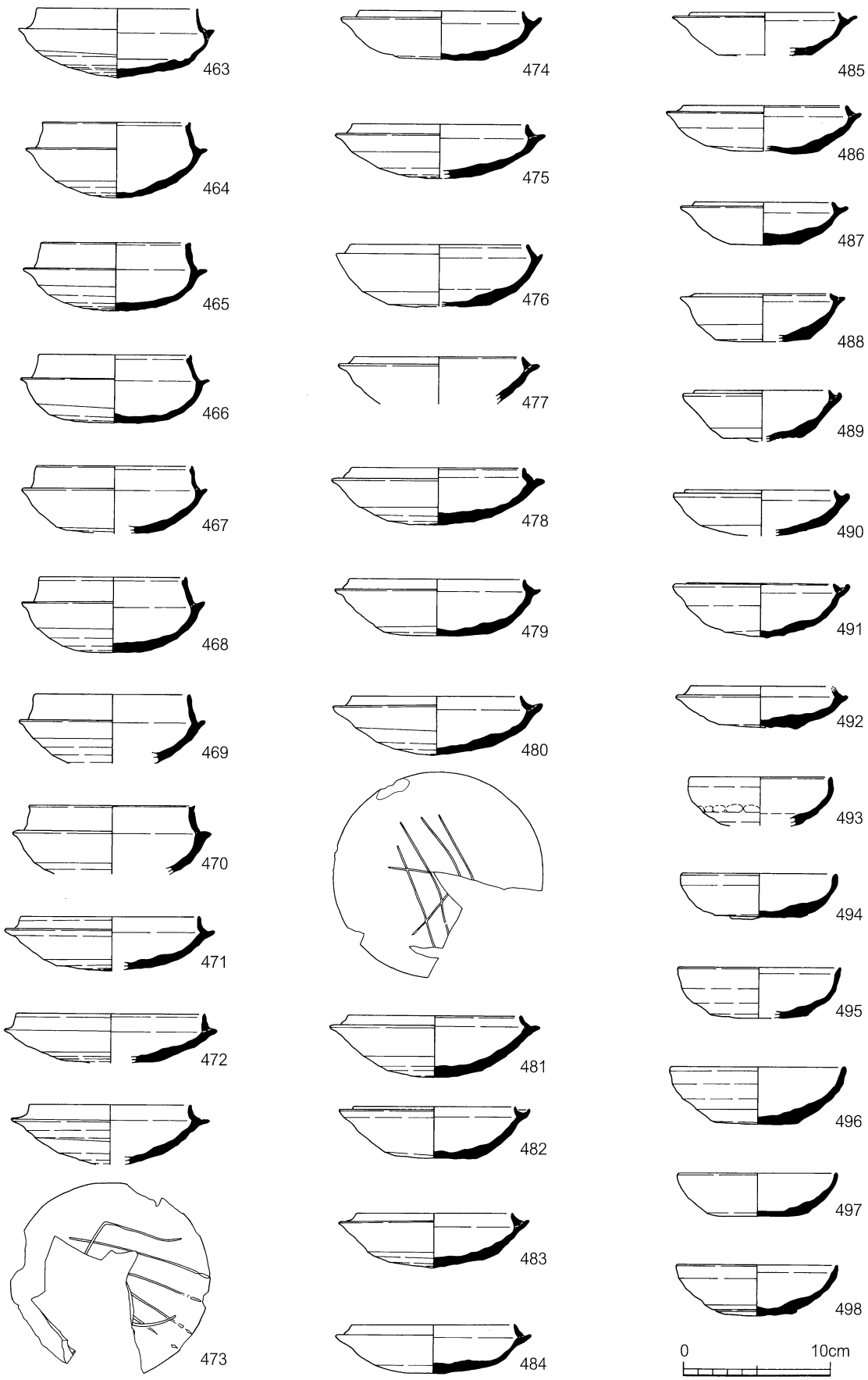

463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
0
10cm

図80　須恵器　実測図（2）

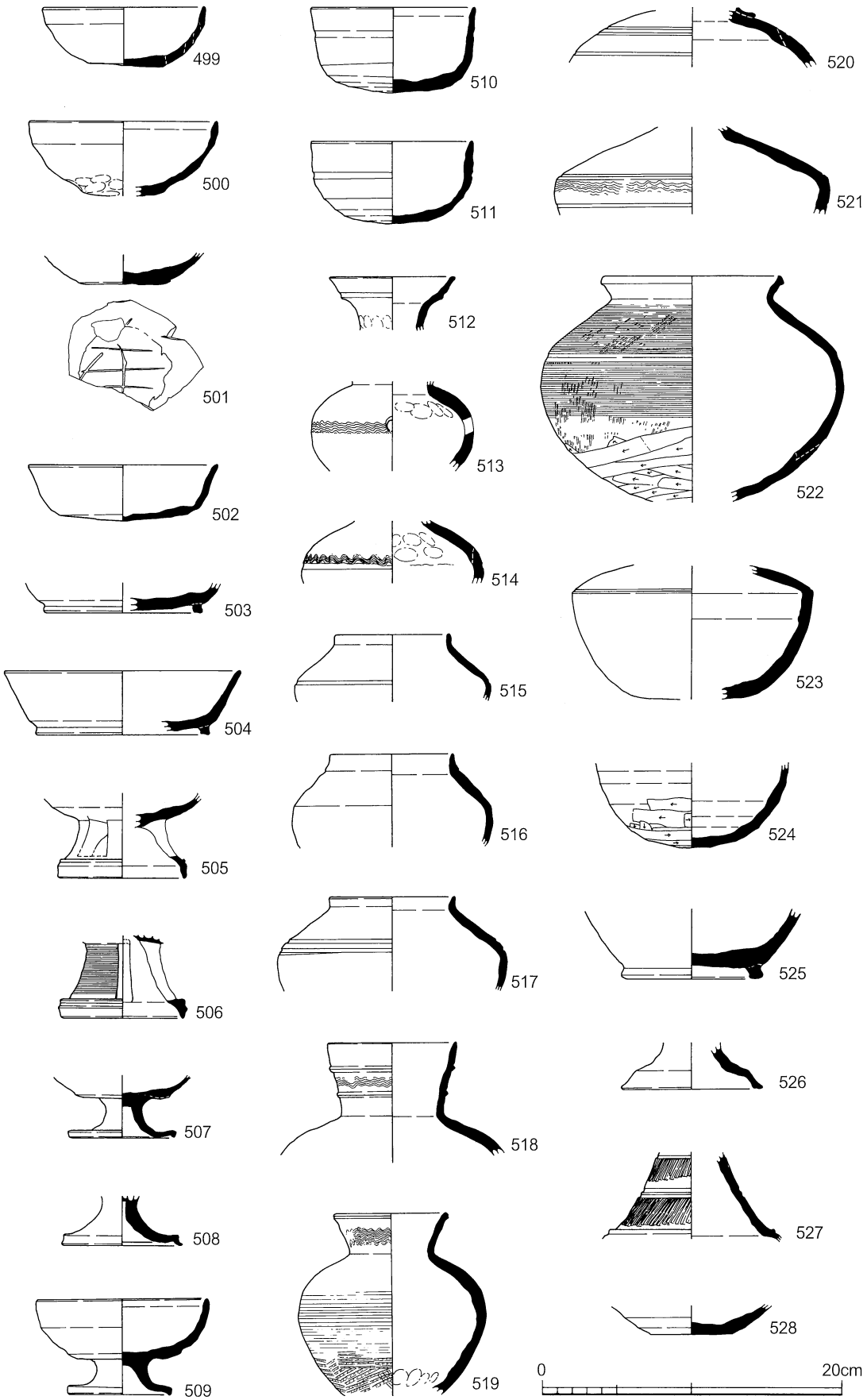

499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
0
20cm

図81　須恵器　実測図（3）

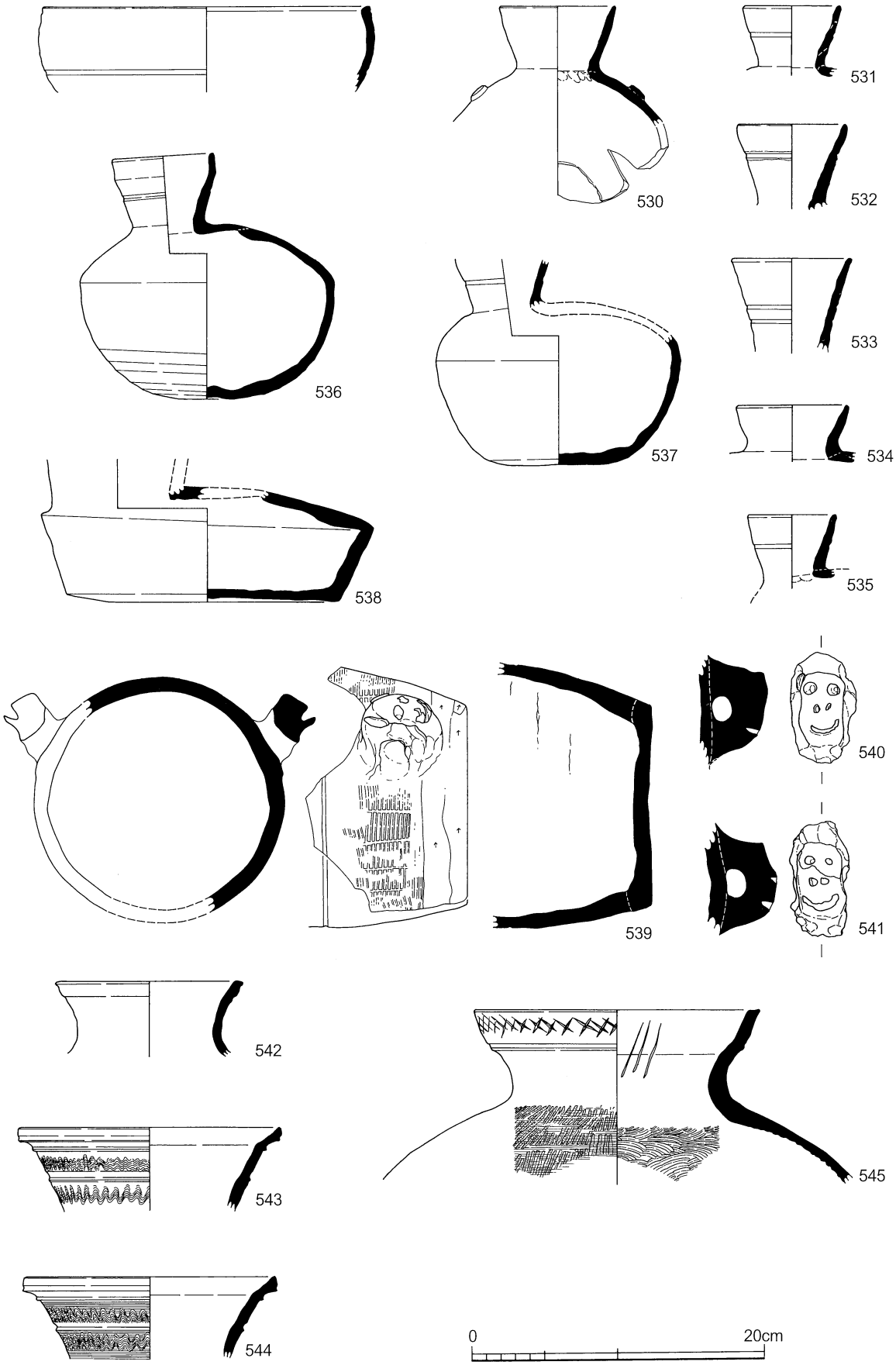

530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
0
20cm

図82　須恵器　実測図（4）

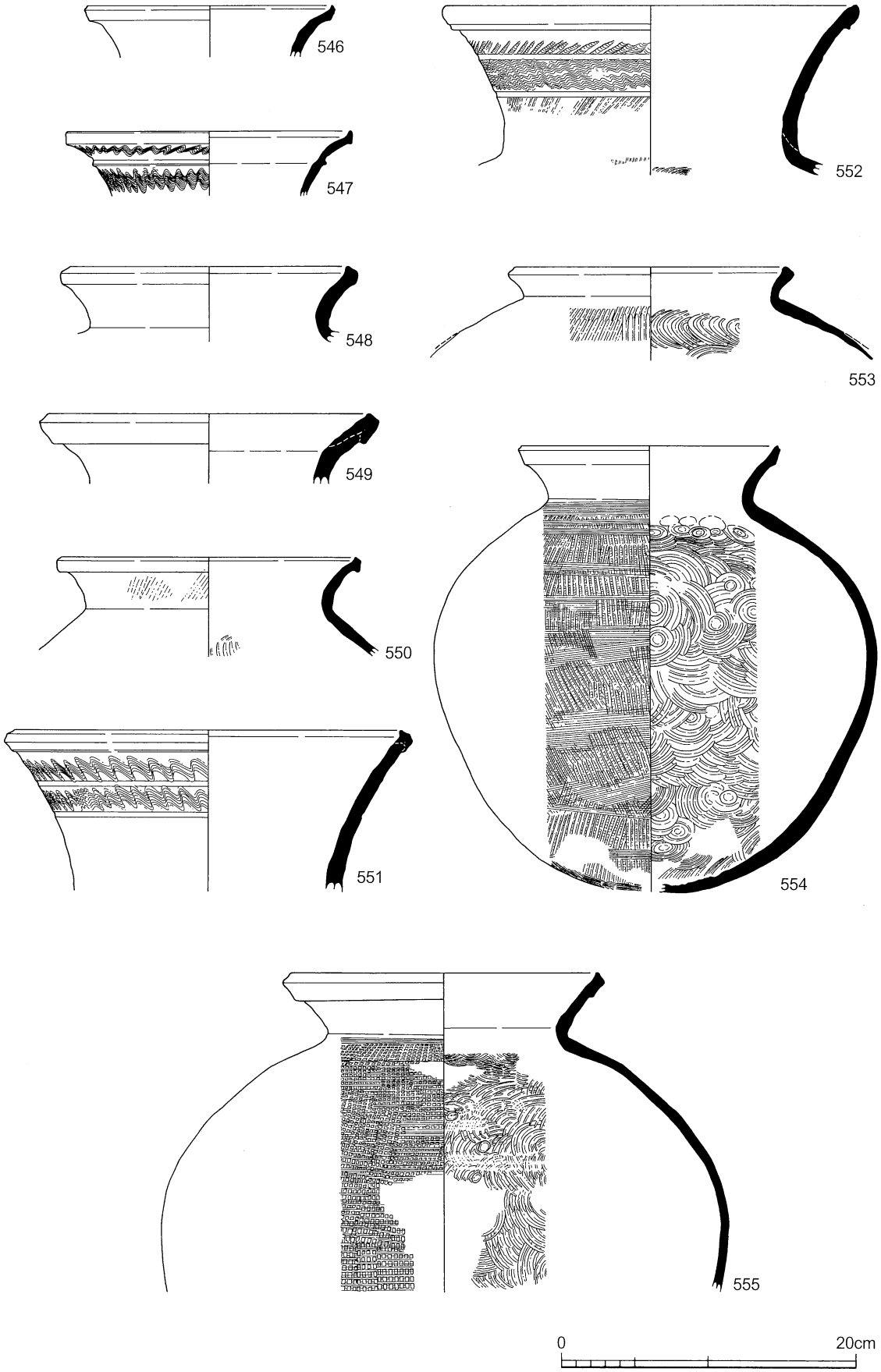


図83　須恵器　実測図（5）

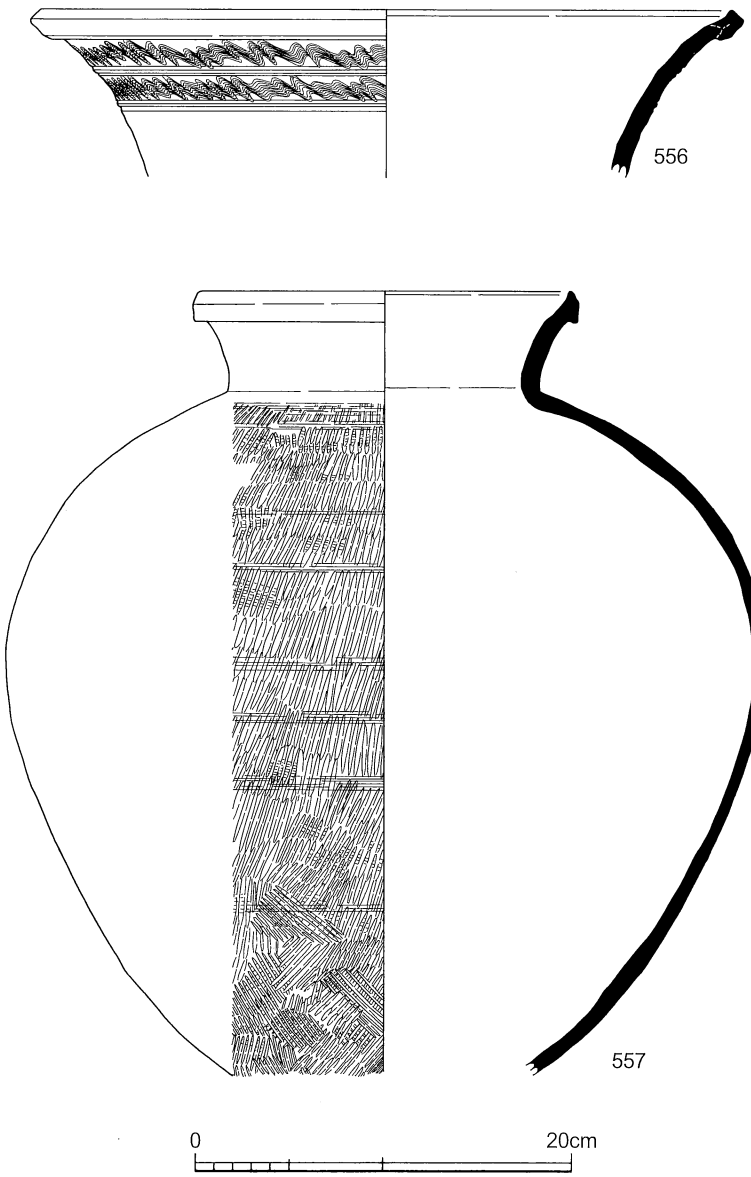


図84　須恵器　実測図（6）

が目立つ。3本の平行線の記号が多く、それに×状に交差する記号が多い。幾何学的な記号もある。同種の記号は壷内面（545）にも見られる。盌は強いケズリを施し、静止ケズリもみられる。壷には波状文を施す頻度が高い。壷・甕には内面のタタキを消しているものが多い。

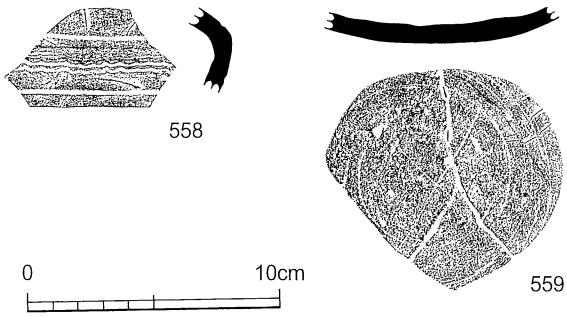


図85　須恵器　文様拓本（1）

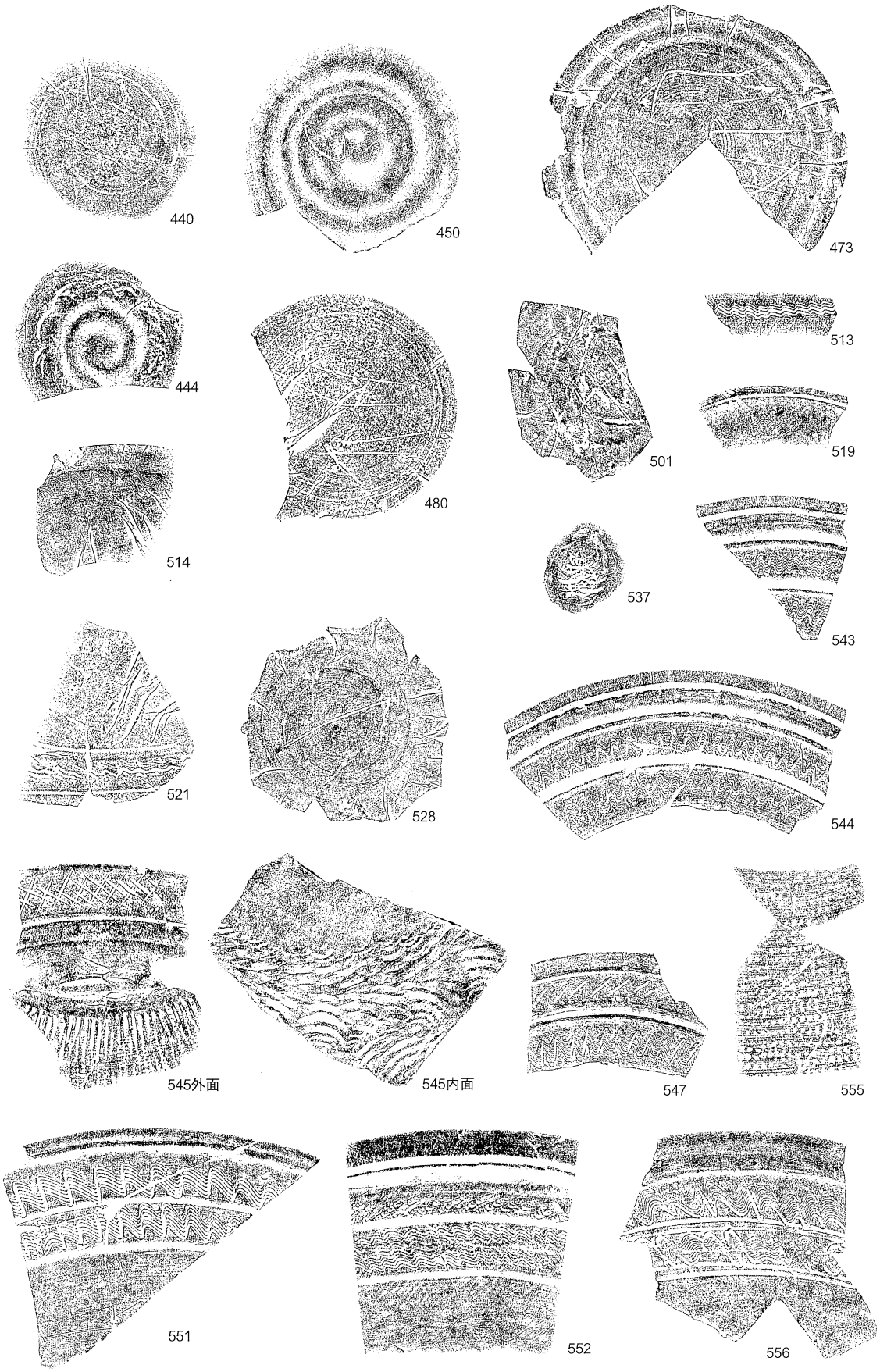


図86　須恵器　文様拓本（2）

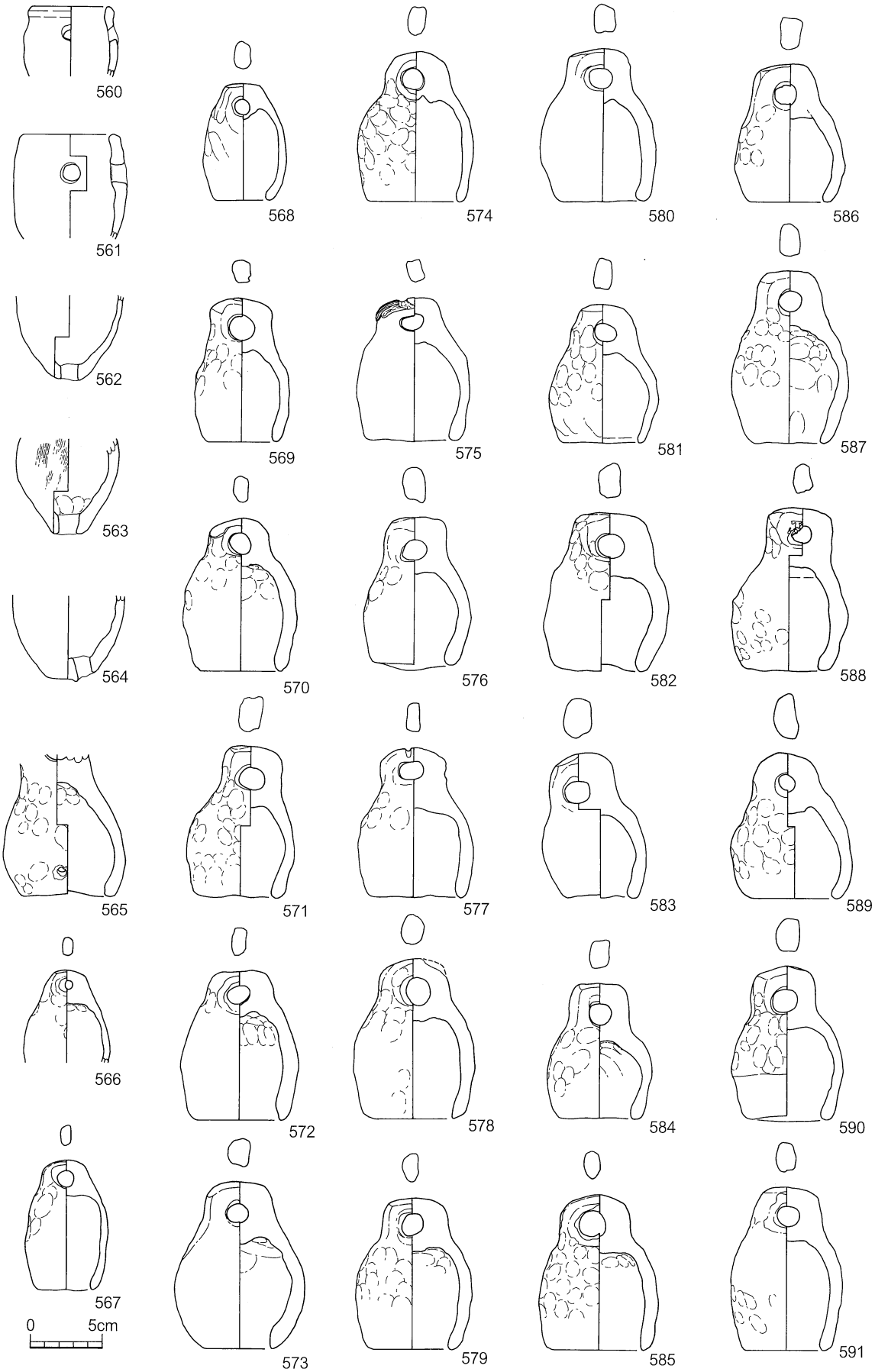


図87　イイダコ壺　実測図（1）

5．新羅陶器

図化しているのは同一個体と思われる樽型１点である。俵壷に似た器形をした土器で両端が面となっている。体部は単位のあるタタキで成形され、内面は丁寧にナデで仕上げているが、粘土紐の継ぎ目が観察される。両側面の肩部はケズリがなされている。その内側に２個１対の把手が両側に付加される。把手上面にヘラによって顔を表現している。一見サルのように見えるが人を表した可能性もある。口部分はアルカウィクスマイルのように見える。口縁部は残っていない。器肉が赤褐色であることが特徴で、図化したものは３点１個体であるが、破片は他にも出土している。

6．イイダコ壷

破片が大きいことや把手部が目立つことから、実際の出土量以上に目に付く遺物である。コップ型のものから、釣鐘状のものまである。１点だけ須恵質のものがあるが、それ以外は土師質である。コップ型のイイダコ壷は少なく２点図化している。ともに口縁部下に円孔が１ヶ所見られる。次の時期に相当するタイプがコップ型で尖り底の底中央でなく、ややずれた横部に穿孔のあるものである。１孔のものもあるが、２孔のものが多い。多くの製品は釣鐘状のイイダコ壷である。器高や径の大小があり、体部

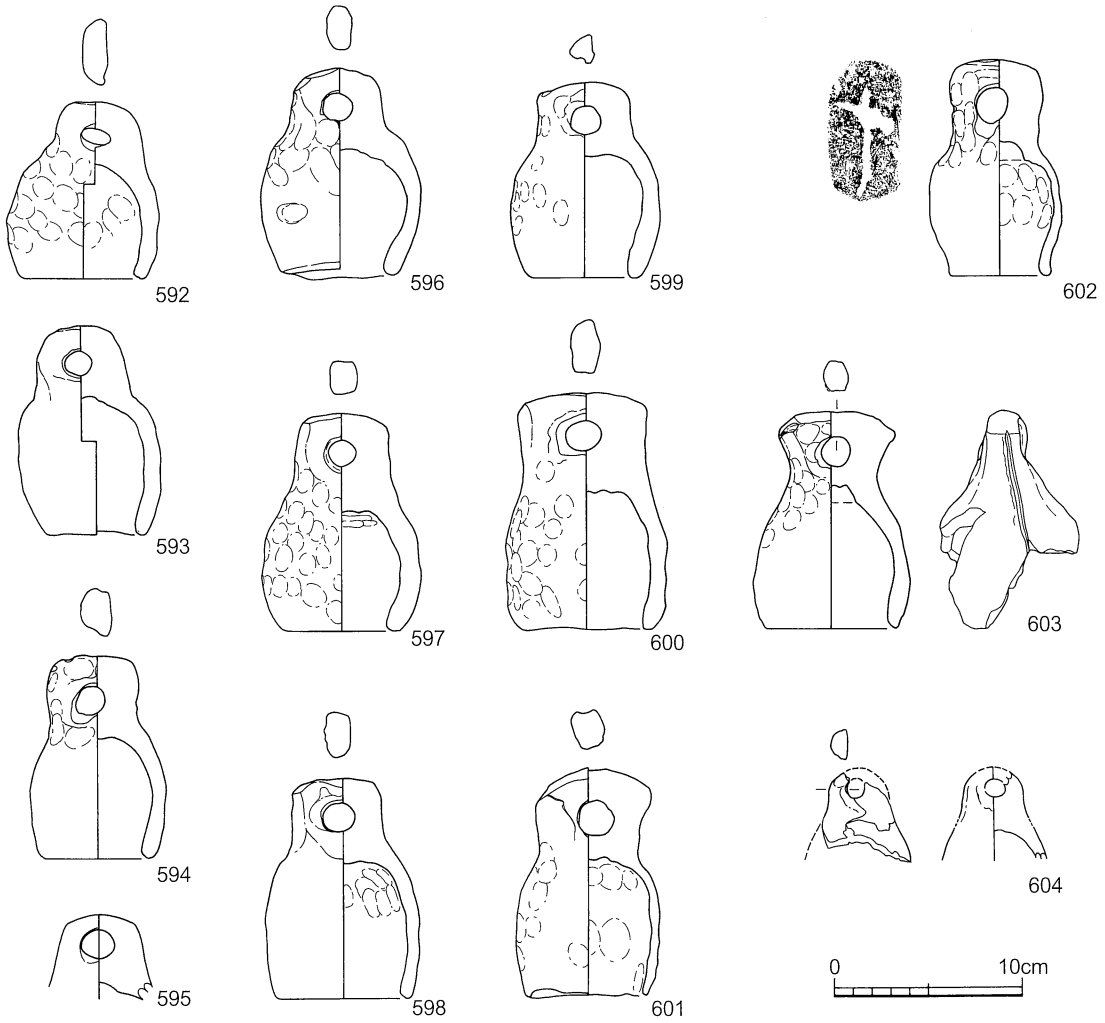


図88　イイダコ壺　実測図（２）

図89　イイダコ壺　記号拓本

の肩が張るなどの器形の変化もある。(565) だけは釣鐘状であるが、裾端部近くに円孔がある。小型のものは比較的丁寧に仕上げられているが、ユビ成形で作られていることに変わりはない。(568) は径3.7cmと非常に小型で、把手部も小さい。湾曲しており、容積も狭い。釣鐘状のタイプは把手部の大小と体部肩の度合いが分類の基準となる。技法はほとんど、ユビ成形でナデ仕上げである。体部上半から把手にかけては指の痕跡が明瞭である。把手部は角張っているものもあり、ヘラ状の工具で調整した痕跡がよく残っている。ヘラ記号も数点あり、特徴的である。十字の記号が数点見られる。(604) は唯一須恵質のタコ壷で丁寧な作りである。

7．マダコ壷

器種はマダコ壷であるが、貴船神社遺跡では相当数製塩作業に用いられたと考えている。そのため、製塩土器として掲載している。口縁部は大半が短いがそのなかでも、短い口縁部と無頸のものと、くの字のものがある。くの字で端部が肥厚し、器肉の厚いものは製塩に使われていないかもしれない。内面も平滑でなく粘土紐の継ぎ目が明瞭である。器肉がやや薄く、頸部の短い被熱したタイプは製塩専用に作られたと考えている。確実な個体数で80個を超える。

8．土錘

上下に穿孔のある有孔土錘が大半で、棒状土錘が数点ある。有孔土錘は８～10cmで大きな差はないようである。端部が角張って肥厚するものがあり、イイダコ壷の釣鐘状の把手が角張るのと共通しているようである。棒状土錘は大型のものである。ユビ成形で作られている。

9．羽口

鞴の羽口の破片で、鉄器生産も行っていたことが理解できる資料である。外径7.8cmと通常の大きさの羽口である。長さは半分程度残っている。内径2.4cmで鉄滓が付着している。炉14からも１点出土している。

10．金属器

33点図化している。遺構出土のものは少なく、包含層出土のものが多い。遺構からは製塩作業面の落ち込み（ＳＸ０２）から４点と竪穴住居跡（ＳＨ０１）（ＳＨ０２）から各々１点出土している。遺構出土の鉄器は器種がわかりやすいものが多い。

鉄鏃が４点と多く、茎も数点あり鏃の一部も含まれる。鉄鏃は住居跡から各１点あり、意味があるかもしれない。刀子が３点出土している。２点は切先だけであるが、１点は関部で金具も残存しており、

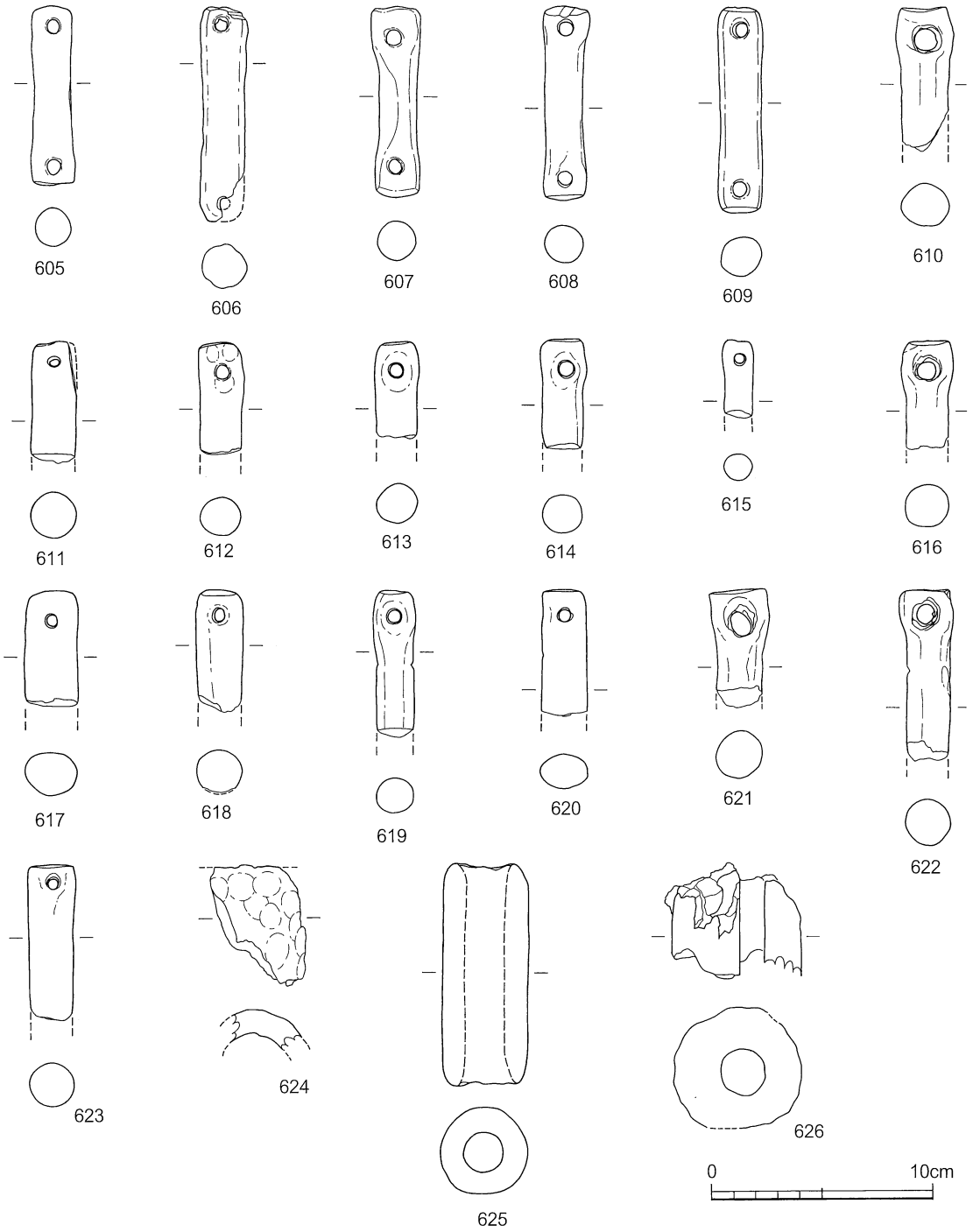


図90　土錘他　実測図

木質も残っている。鎌はＳＸ０２から出土しており、鉄部分はほぼ完存している。柄部との接合部も残り、切先の先端を欠いている。(639) は釣針で先を欠いている。鉄斧は長さ6.1cmと小型で完形である。鉸具も２点出土しているが、２点の種別は異なると思われる。大きさと形態からで、(641) は帯金具で、(642) は馬具に伴うものと思われる。淡路では？帯の出土がなく、帯金具の出土の意義は高いものと思われる。幅が狭くベルトの大きさは小さい。釘も量は多いが、茎部は器種を決めがたい。(644) は鎹かもしれない。

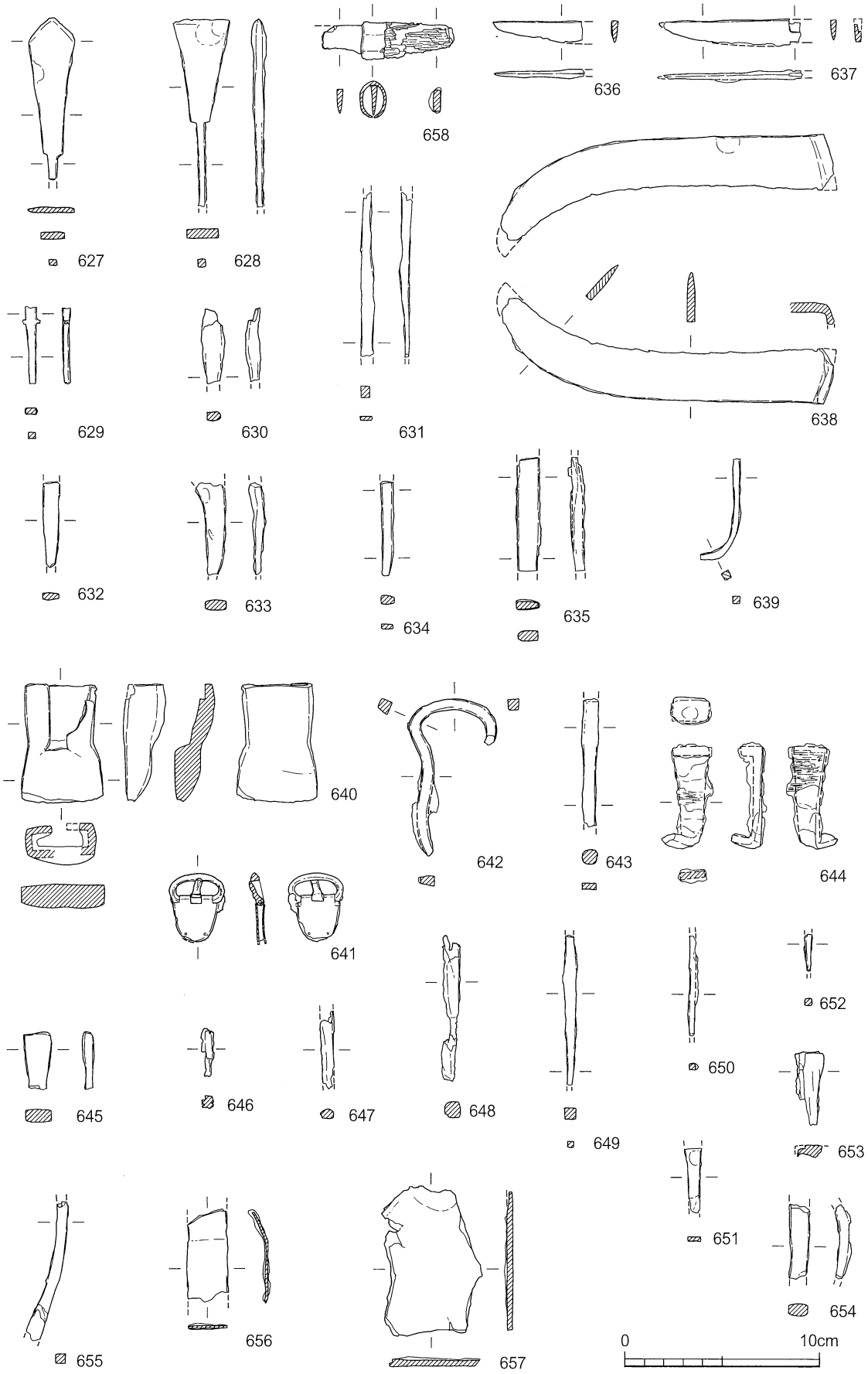

627
628
658
636
637
629
630
631
638
632
633
634
635
639
640
642
643
644
641
645
646
647
648
649
650
652
653
651
654
655
656
657
0
10cm

図91　鉄器　実測図

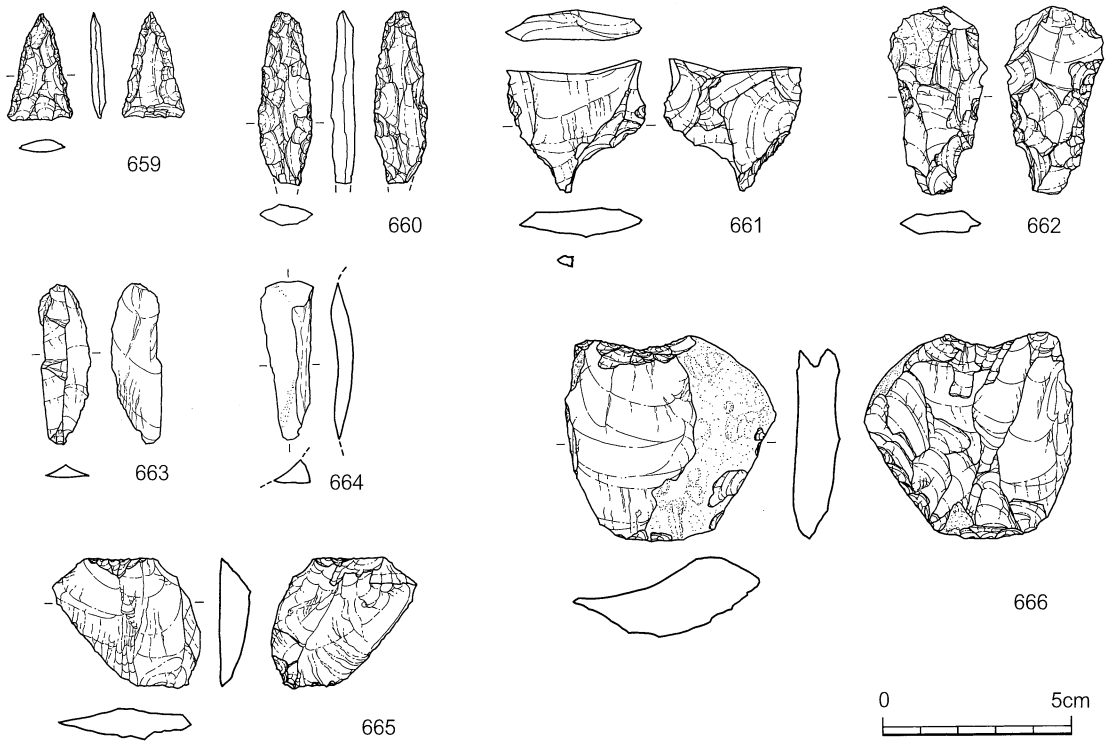


図92　石器　実測図（１）

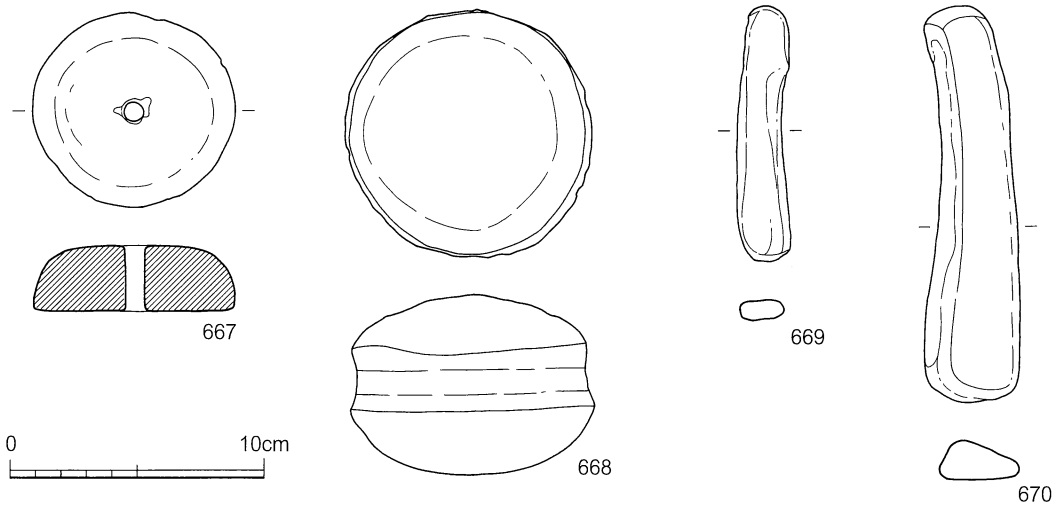


図93　石器　実測図（２）

11. 石器

石器は21点図化した。砥石とあわび起こしは竪穴住居跡から出土しているが、大半は埋土・包含層から出土している。砥石はＳＨ０１から２点出土している。あわび起こしとされている棒状石器は炉22から２点並んで出土している。

(659) (660) は石鏃で、(659) は平基式で長さ28㎜、幅17㎜、厚さ３㎜片面は２次加工を全面に施すが、他面は中央に自然面を残す。刃部は通常に作り出している。基部の加工が最も新しい。材質は２点

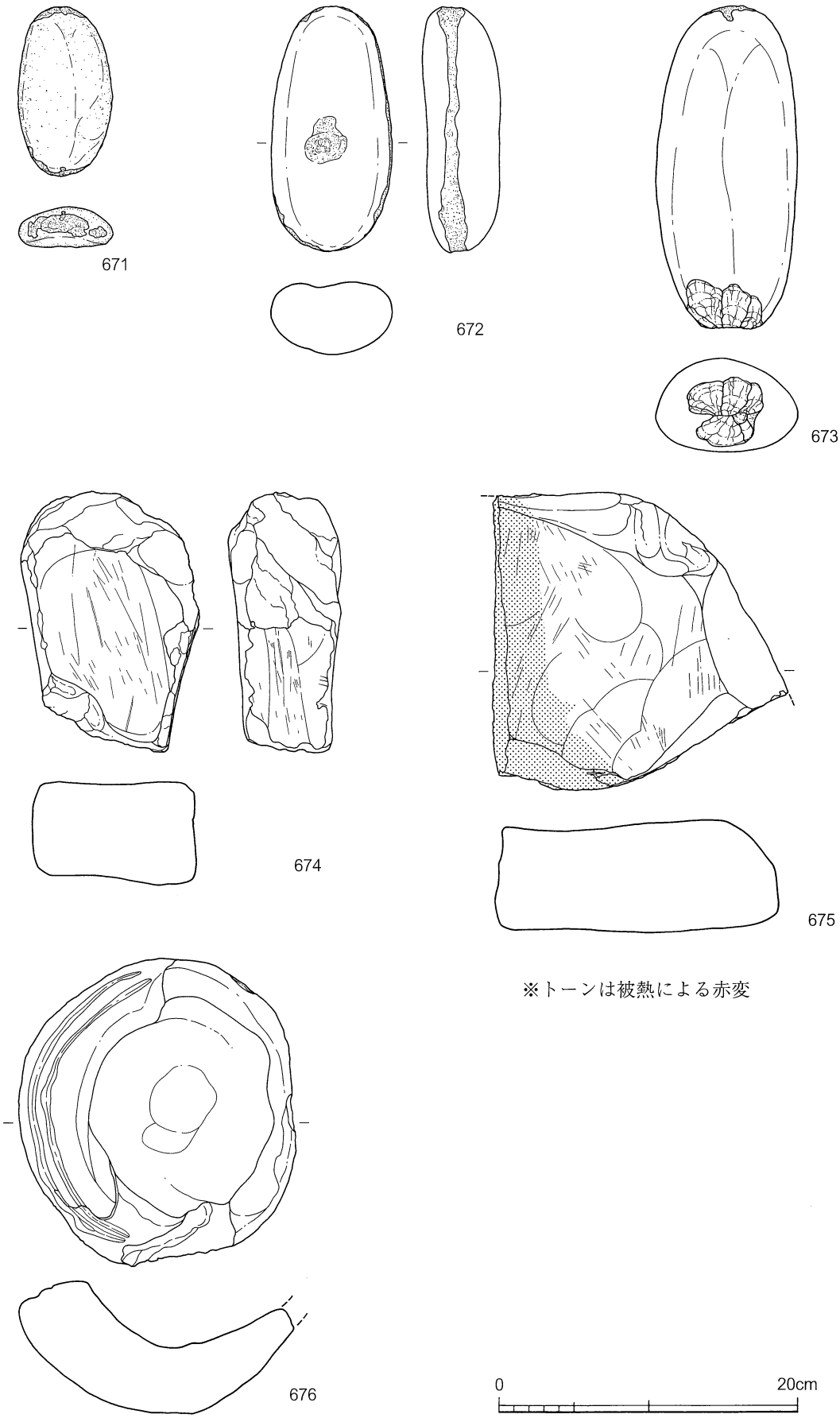


図94　石器　実測図（3）

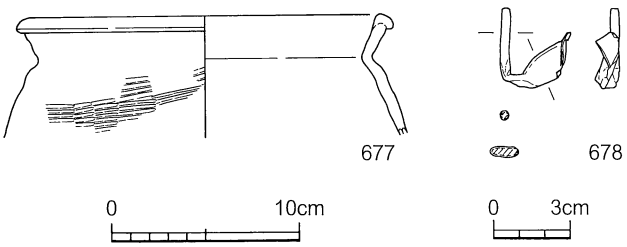


図95　中近世遺物　実測図

ともサヌカイト（金山系）である。(660) は基部を欠失しているが、尖基式で、残存長46㎜、幅14㎜、厚さ６㎜を測る。基部側の方が厚く、先端が薄く仕上げている。２次加工は粗く階段状剥離が目立つ。

(661) は刃部を欠いているが石錐と思われる。やはりサヌカイトで２次加工を全面に行っていない。大きな剥離面である。楔形石器やその可能性のある石器、その削片も出土している。(662) は可能性のある剥片で、縦長剥片の両側を加工している。中央部は細くエッジを作っている。(663) は楔形石器の削片で大きく割り、裏面には階段状剥離がある。(665) は大きな１面の剥離面から成っている。両極打撃による剥離痕を示している。中央に稜を持ち、比較的鋭い刃部を持つ。(666) も大きな剥離面を持ち、大型の部類に入る石器である。自然面も残っているが、周縁は細かい調整を加えている。(667) は風化しているものの滑石の精製品である。僅かに歪な円形で径7.75～7.98cmを測る。高さ2.6cmで、中央に円孔が上から下に向けて穿孔されている。上径が0.75cm、下径が7.0cmである。上部と側部の一部は損傷を受けている。断面形は饅頭形をしている。機能は不明であるが、良質の石材である。(668) は大型石錐で、火を受けており部分的に赤変している。径9.75～9.82cmを測る円形礫の側面に溝を巡らせている。0.4～0.6cmの溝を緩やかな曲線で握り窪めている。(669) (670) は棒状の石器で、あわび起こしとされていたものである。(669) は長さ10.18cmと小型である。(671) (673) は敲石で、端部に打撃痕がある。(674) (675) は台石としたもので、明確な用途は不明である。

表1 遺物観察表

番号	出土地・土層	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技法他	形態の特徴	備考
1	炉２・３周辺	須恵器	甕	19.1	2.7		全体にロクロナデ	外反し、端部は外方へやや肥厚する	
2	炉２・３周辺	須恵器	高杯		2.3	6.2	全体にロクロナデ	裾部は水平気味に開き、端部は丸く肥厚する	
3	炉２・３周辺	土師器	鉢	21.6	10.2		ユビ整形の後、口縁部はヨコナデ	口縁部は直立ぎみで端部はやや外反する	
4	炉２・３周辺	製塩土器	鉢	12.1	5.4		ユビ整形の後、口縁部はヨコナデ	口縁部は内湾する	
5	炉２・３周辺	製塩土器	鉢	10.6	6.2		ユビ整形の後、口縁部はヨコナデ	やや内湾するが、直立に近く直線的	
6	炉１４	須恵器	提瓶		22.8		ロクロナデののちユビ仕上げ、把手部はナデ	球形のやや歪んだ体部に口縁部と１対の輪状の把手がつく	
7	炉１４	土師質	羽口	5.8	8.0		ユビ押さえとナデ整形	鉄滓が付着	
8	炉１７	土師器	甕	25.4	17.2		内面はケズリの後ナデ、外面はハケ	半球状の体部から外反する口縁部に続く	外面にヘラ描き
9	炉１７	製塩土器	鉢	12.0	11.5		内外面ともユビ整形で、一部板ナデ使用	球形の体部から内湾し尖りぎみの端部となる	
10	炉１７	土師質	竈		11.0		ユビ整形で外面はハケ整形	下向きの把手がつく、鍔剥離	
11	炉２２	須恵器	杯蓋	9.8	3.1		全体にロクロナデで天井部はケズリ	口縁部は直線的に内傾する	自然釉付着
12	炉２２	須恵器	杯蓋	13.9	3.8		全体にロクロナデで天井部はケズリ	端部は尖りぎみ	
13	炉２２	須恵器	杯身	11.8	3.9		ロクロナデで内面は１方向の仕上げナデ	直線的な底部で、内傾する端部	自然釉付着
14	炉２２	須恵器	蓋	15.1	5.8		ロクロナデで天井部は１方向の仕上げナデ	緩やかな体部で、小さなボタン状のつまみがつく	
15	炉２２	須恵器	短頸壷	7.3	8.4		外面はケズリ、内面・口縁部はロクロナデ	やや扁平の体部に直立する端部	
16	炉２２	須恵器	壷		4.7		内外面ともロクロナデ	頸部から直線的な胴部に続く	
17	炉２２	須恵器	平瓶	5.9	3.6		内外面ともロクロナデ	頸部は明確な稜線をもたない。端部丸い	自然釉付着
18	炉２２	須恵器	提瓶	5.5	20.2		全体的にロクロナデ、外面はカキメ、内面円板部はナデ	体部は余り扁平でない、口縁部は端部近くで直立する	自然釉付着
19	炉２２	土師器	甕	11.5	3.2		ハケ整形の後、ヨコナデ	口縁端面に刻み目、外反する口縁部	
20	炉２２	土師器	鉢	18.2	5.7		外面ハケ整形、端部はヨコナデ	外反し、端部は外方へ肥厚する	被熱、製塩土器？
21	炉２２	土師器	マダコ壷	11.0	16.7		外面ハケ整形、口縁部はヨコナデ	体部は直線的で、口縁部は外湾する	強く焼ける
22	炉２２	製塩土器	甕	24.2	7.5		ナデ整形・仕上げ	僅かに外へ開き、端部は丸く納める	端部にＣａ付着
23	炉２２	土師質	土錘		1.8		ユビ成形	穿孔部分は肥厚しない	
24	炉２２	石器	棒状		21.0		端面を加工	直線に延びる、節理面を利用	結晶片岩、あわび起こし
25	炉２２	石器	棒状		14.8		端面を加工		結晶片岩、あわび起こし
26	ＳＨ０１	須恵器	杯蓋		2.5		天井部外面はケズリ、他はロクロナデ	平坦な天井部につまみを付加する	
27	ＳＨ０１	須恵器	杯蓋	15.3	2.3		ロクロケズリののち、ロクロナデ	端部は角張る	自然釉付着
28	ＳＨ０１	須恵器	杯蓋	15.5	2.3		天井部外面はケズリ、他はロクロナデ	端部は下方へ僅かに肥厚する	
29	ＳＨ０１　床面	須恵器	杯蓋	15.8	2.3		天井部外面はケズリ、他はロクロナデ	天井部は平坦で稜線明瞭、端部は内外に肥厚	墨書「十」
30	ＳＨ０１	須恵器	杯身	12.6	1.9		ロクロナデ	立ち上がりは低く、内傾する	
31	ＳＨ０１	須恵器	高杯		1.9		ロクロナデ	直線的で、端部はやや肥厚	自然釉付着

番号	出土地・土層	種　別	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技　　法　　他	形　態　の　特　徴	備　　考
32	ＳＨ０１	須恵器	短頸壷	6.4	9.5		胴部下半はロクロケズリ、他はロクロナデ	やや扁平で算盤玉状、口縁部は内湾する	
33	ＳＨ０１	須恵器	杯身	12.9	6.8	9.2	ロクロナデで、内面は不定方向のナデ	高台は台形で、口縁部はやや外反する	
34	ＳＨ０１	土師器	皿	14.0	2.7		外面はケズリ、他はロクロナデで内面はナデ仕上げ	口縁部は薄く緩やかに仕上げ、端部は肥厚	
35	ＳＨ０１	土師器	皿	15.0	3.2		ロクロナデで内面は特に強くなでる	稜線は明瞭でなく器肉厚い	丹塗
36	ＳＨ０１	土師器	皿	17.5	3.4		ロクロナデ	器肉厚く、Ｓ字状に湾曲し端部は外へ開く	
37	ＳＨ０１	製塩土器			3.6	4.8	ユビ成形の後ユビ整形	底部は上げ底で外方へ開く	
38	ＳＨ０１	製塩土器			4.7	5.0	ユビ成形と外面タタキ成形、底面未調整	底部は僅かに上げ底で体部は直線的に続く	
39	ＳＨ０１	製塩土器	マダコ壷		10.0		外面ハケ整形、内面はナデ整形	器肉厚く、底は平底ぎみ	
40	ＳＨ０１	土師器	甕	30.4	3.2		内面はハケ整形で、全体にヨコナデ	直線的に伸び、端部は外方へ肥厚、器肉厚い	
41	ＳＨ０１　埋土	石器	砥石		8.7		１面を使用	長辺の断面三角形で、短辺は長方形	125.9ｇ
42	ＳＨ０１　埋土	石器	砥石		6.0		４面使用（主に面の広い２面）	長辺の断面三角形で、短辺は長方形	130.2ｇ
43	ＳＨ０２	須恵器	杯蓋	14.2	3.7		天井部はケズリ、全体にロクロナデ	緩やかな弧を描き、端部は丸く納める	
44	ＳＨ０２	須恵器	杯蓋	8.2	3.1		天井部はヘラ切り、全体にロクロナデ	反りは大きく湾曲する、浅い	
45	ＳＨ０２	須恵器	杯身	9.7	2.1		ロクロナデ	直線的	
46	ＳＨ０２	須恵器	杯身	10.9	3.0		天井部はケズリ、全体にロクロナデ	立ち上がりは大きく内傾し端部は尖る	
47	ＳＨ０２	製塩土器	鉢		3.8	8.3	ナデ整形し、板ナデ仕上げ	底部大きくベタ底、直線的に延びる	
48	ＳＨ０２	製塩土器	椀	10.3	3.3		ユビ成形の後ユビ整形	浅めで端部は尖る	
49	ＳＨ０２　埋土	石器	磨石		6.5		上面のみ磨り面	断面三角形	45.6ｇ
50	ＳＸ０２	須恵器	杯身	10.2	3.5		ロクロナデで、底部はロクロケズリ	受け部も立ち上がりと同様に内傾、底大きめ	
51	ＳＸ０２	須恵器	高杯		5.4	10.4	内外面ともロクロナデ、透孔下に１条沈線	緩やかに外湾し、端部は肥厚する	自然釉付着
52	ＳＸ０２	須恵器	はそう	11.3	3.5		ロクロナデ	二重口縁部となり、沈線１条	
53	ＳＸ０２	須恵器	はそう		7.4		外面下半はロクロケズリ、他はロクロナデ	球形の体部で、上方からの透孔	
54	ＳＸ０２	須恵器	壷	11.4	16.8	18.9	外面下半はロクロケズリ、他はロクロナデ	算盤玉状の体部に外反する口縁部が付く	
55	ＳＸ０２	須恵器	甕	20.6	8.5		口頸部はロクロナデ、体部はタタキ成形	明瞭な稜線を持たない頸部、端部は肥厚する	
56	ＳＸ０２	須恵器	甕		42.6		外面は縦方向のタタキからハケ、内面は同心円タタキ	体部上部に最大腹径を有する	
57	ＳＸ０２	土師器	甕	11.3	3.5		ナデ整形ののち、口縁部はヨコナデ	口縁部は外反する	被熱
58	ＳＸ０２	土師器	甕	15.3	4.3		ハケ整形の後、ヨコナデ	口縁部は外反する、頸部の稜線不明瞭	
59	ＳＸ０２	土師器	甕	30.6	5.8		ハケ整形ののち、口縁部はヨコナデ	緩やかに外反する口縁部で端部は尖る	
60	ＳＸ０２	土師器	壷	16.4	6.3		ハケ整形の後、ヨコナデならびにナデ調整	直立ぎみの頸部から強く曲げ端部は丸い	被熱
61	ＳＸ０２	製塩土器	鉢	18.1	5.4		ユビ成形ののち端部はヨコナデ	内湾する口縁部で端部は尖りぎみ	
62	ＳＸ０２	土師器	イイダコ壷	5.1	9.3	2.6	ユビ成形ののち端部はヨコナデ	底部中央にずれて透孔、口縁部は内湾	被熱、酸化粒
63	ＳＸ０３	土師器	杯	10.6	3.6		ユビ成形ののちユビ調整、端部はヨコナデ	内湾し、端部は尖りぎみに外へ開く	底部外面に黒斑
64	ＳＸ０３	土師器	甕	21.4	7.8		外面ハケ整形、内面板ナデ、口縁ヨコナデ	口縁部は外反し、端部は丸く納める	被熱

番号	出土地・土層	種　別	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技　　法　　他	形　態　の　特　徴	備　　考
65	ＳＸ０４	須恵器	杯蓋	16.7	1.8		ロクロナデ	端部は直立する	
66	ＳＸ０４	須恵器	甕		25.4		外面はタタキ→カキメ、内面同心円タタキ、頸部ヨコナデ	肩は緩やかで頸部は直立し、口縁部へ開いていく	自然釉付着
67	ＳＸ０５	須恵器	杯身	11.3	3.4		外面下半はロクロケズリで他はロクロナデ	口縁端部は内傾する	
68	ＳＴ０１	土師器	椀	12.3	5.2		ユビ成形ののち、口縁部はヨコナデ	底部大きめで体部直立し端部は外反する	
69	ＳＴ０１	製塩土器	鉢	21.8	11.8		ユビ成形ののち板ナデ、口縁部はヨコナデ	直線的に外へ広がる	強く被熱
70	ＳＤ０１	土師器	甕	15.9	8.8		ハケののち板ナデ、口縁部はヨコナデ	やや肩が張り、屈曲して外反する。端部は丸く納める。	
71	ＳＫ０１	須恵器	壷	10.1	13.2		ロクロナデ	球形の体部から短い口縁部に続く。端部肥厚。	
72	Ａ－１	製塩土器	脚台Ⅱ	8.1	9.0		外面はタタキ、内面は横の後斜め方向のナデ	脚台から開き、直線的に上へ伸びる	
73	Ａ－５	製塩土器	脚台Ⅱ	10.4	9.5		外面はタタキ、内面はナデ、口縁部のみヨコナデ	直線的に上へ伸びる	
74	Ａ－５	製塩土器	脚台Ⅱ	9.6	7.2		外面はタタキ、内面はナデ、口縁部のみヨコナデ	直線的に外へ広がる	
75	Ａ－５	製塩土器	脚台Ⅱ	10.2	12.7		外面はタタキ、内面はナデ、口縁部のみヨコナデ	直線的に伸び、口縁部近くで外へ広がる	
76	Ａ－１・２	製塩土器	脚台Ⅱ		3.9	5.4	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底は平坦、体部は直線的、	底面に木葉痕
77	Ａ－１	製塩土器	脚台Ⅱ		3.9	5.6	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底は平坦、体部は直線的、	底面に木葉痕
78	Ａ－１・２	製塩土器	脚台Ⅱ		3.2	5.2	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底は平坦で、中央部は薄い	底面に木葉痕
79	Ｂ－５（１０）	製塩土器	脚台Ⅱ		7.2	4.8	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底はやや上げ底、体部は直線的。	
80	Ｂ－５（１３）２０－３０	製塩土器	脚台Ⅱ		4.2	5.7	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底面は平坦で端部は肥厚する。体部は外へ開く。	
81	Ｂ－５	製塩土器	脚台Ⅱ		3.4	5.2	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底は平坦、体部は直線的、	底面に木葉痕
82	Ｂ－４（１２）０－２０	製塩土器	脚台Ⅱ		7.4	5.1	外面はタタキ、脚台部はユビ成形、	底面は平坦で端部は肥厚する。体部はやや内湾ぎみ。	
83	Ｂ－１（１７）	製塩土器	脚台Ⅱ		2.4	5.4	脚台部はユビ成形、内面はナデ	底は平坦	底面に木葉痕？
84	Ａ－５	製塩土器	脚台Ⅱ		5.7	5.4	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底はやや上げ底、体部はやや内湾ぎみ。	
85	Ｂ－５	製塩土器	脚台Ⅱ		1.9	5.2	脚台部はユビ成形、内面･底面はナデ	底は歪な突出平底	
86	Ａ－１	製塩土器	脚台Ⅱ		8.0	4.8	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底は平坦で端部やや肥厚、体部はやや内湾	
87	Ａ－５	製塩土器	甕		4.9	4.7	外面はタタキののち、底部再成形、内面ナデ	底部中央やや上げ底、体部は内湾ぎみ。	本来は通常土器
88	Ａ－１・２	製塩土器	脚台Ⅱ		5.0	5.4	外面はタタキ、内面は板ナデ、底面は放射状ナデ	底部は上げ底で端部は肥厚、体部は内湾	
89	Ａ－１・２	製塩土器	脚台Ⅱ		6.1	5.0	外面はタタキ、内面はヘラ状工具ののちナデ	底部は上げ底で厚い、体部はやや内湾	底面に木葉痕
90	Ｂ－１（１７）２０－３０	製塩土器	脚台Ⅱ		3.3	6.6	底部はユビ成形、内面に絞り目残る	底部は上げ底で端部は肥厚、	底面に木葉痕？
91	Ｂ－２（２５）０－１０	製塩土器	脚台Ⅱ		4.3	5.3	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で厚い、体部は直線的に延びる	
92	Ａ－５	製塩土器	脚台Ⅱ		5.0	5.2	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で、体部は直線的に延びる	
93	Ａ－５	製塩土器	脚台Ⅱ		3.6	7.4	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で端部は肥厚、体部は直線的	
94	Ｂ－１（１３）２０－３０	製塩土器	脚台Ⅱ		5.0	5.6	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で端部は肥厚、体部は内湾	
95	Ｃ－５	製塩土器	脚台Ⅱ		6.7	4.5	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で、体部はやや内湾	
96	Ａ－１	製塩土器	脚台Ⅱ		3.6	6.7	脚台部はユビ成形、内面･底面はナデ	底部は上げ底で端部は肥厚し厚い、	
97	Ｂ－２　１０－２０	製塩土器	脚台Ⅱ		5.9	5.4	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で、体部は直線的に延びる	

番号	出土地・土層	種　別	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技　　法　　他	形　態　の　特　徴	備　　考
98	A－5	製塩土器	脚台Ⅱ		3.6	5.5	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で、体部は直線的に延びる	
99	A－1・2	製塩土器	脚台Ⅱ		6.3	5.4	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で、体部はやや内湾	
100	A－1・2	製塩土器	脚台Ⅱ		3.2	5.3	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で端部は肥厚、体部は内湾	
101	A－5	製塩土器	脚台Ⅱ		4.3	4.8	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で端部は肥厚、体部は内湾	脚台部端部に砂粒
102	B－2	製塩土器	脚台Ⅱ		6.5	5.9	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で端部は肥厚し厚い、体部は内湾	
103	A－2	製塩土器	脚台Ⅱ		7.5	5.2	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で端部は肥厚、体部は内湾,底部は薄い	
104	B－3（23）10－20	製塩土器	脚台Ⅱ		4.9	5.4	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で高台状に、体部は内湾ぎみ。	
105	A－2（19）20－30	製塩土器	脚台Ⅱ		4.0	4.9	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で端部は内側に肥厚、底部は厚い。	
106	A－1	製塩土器	脚台Ⅱ		4.6	6.2	外面はタタキ内面はナデ、脚台内面はハケ、	底部は上げ底で高台状に、端部は内側に肥厚、底部は厚い。	
107	A－1・2	製塩土器	脚台Ⅱ		3.5	5.2	外面はタタキ、脚台内面はユビ成形後ラセン状ナデ	底部は上げ底で高台状に、端部は内側に肥厚、底部は厚い。	
108	A－1・2	製塩土器	脚台Ⅱ		4.9	5.0	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で高台状に、端部は内側に肥厚、底部は厚い。	
109	A－2（19）20－30	製塩土器	脚台Ⅱ		3.5	5.2	外面はタタキ、脚台内面はユビ成形後ラセン状ナデ	底部は上げ底で高台状に、端部は内側に肥厚、底部は厚い。	
110	A－2（19）20－30	製塩土器	脚台Ⅱ		4.2	5.9	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で高台状に、端部は内側に肥厚、底部は厚い。	底面は未調整
111	A－5	製塩土器	脚台Ⅱ		5.6	5.4	外面はタタキ、内面はハケ、脚台部はユビ成形・ナデ	底部は上げ底で端部は肥厚し厚い、体部は内湾	
112	A－2（19）20－30	製塩土器	脚台Ⅱ		4.6	6.1	外面はタタキ、内面はナデ、脚台部はユビ成形	底部は上げ底で端部は内側に肥厚、底部は厚く体部は内湾。	底面は未調整
113	A－5	製塩土器	脚台Ⅱ		4.6	4.7	外面はタタキ、内面はハケ、脚台部はユビ成形・ナデ	底部は上げ底で厚い、体部は内湾し外方へ広がる	内面くもの巣状ハケ
114	A－1	製塩土器	脚台Ⅱ		5.8	6.8	外面はタタキ、内面はハケ、脚台部はユビ成形・ナデ	底部はドーナツ状平底で厚く、体部は内湾。	
115	C－5	製塩土器	脚台Ⅱ		3.7	3.9	外面はタタキの後ナデ、内面は板ﾅﾃ、脚台はユビ成形	底部は僅かに上げ底、体部は外方へ湾曲する	
116	A－2	製塩土器	脚台Ⅱ		4.0	5.0	全体にユビ成形後、体部はナデ仕上げ。	底部は上げ底で端部は肥厚し厚い、体部は内湾	
117	2グリッド	製塩土器	脚台Ⅱ		4.2	5.0	外面はタタキ、内面はハケ、脚台部はユビ成形・ナデ	底部は上げ底で厚い、体部は内湾し外方へ広がる	内面くもの巣状ハケ
118	A－3	製塩土器	脚台Ⅲ		3.4		外面はナデ、内面は板ナデ、脚台部はユビ成形。	体部は内湾。	
119	A－1（15）	製塩土器	脚台式	18.2	6.6		外面は複合のタタキ、内面は板ナデ、口縁部ヨコナデ	体部は直線的に屈曲し口縁部に続く。端部は角張り端部肥厚	搬入品
120	B－1	製塩土器	脚台式	15.4	7.5		外面は複合のタタキ、内面は板ナデ、口縁部ヨコナデ	緩やかに内湾し、尖りぎみの口縁部。	搬入品
121	B－1（17）20－30	製塩土器	脚台式		4.9		外面は複合のタタキ、内面は板ナデ、脚台はユビ成形	体部は内湾する	搬入品
122	B－1	製塩土器	脚台式		6.7	5.4	外面は複合のタタキ、内面は板ナデ、脚台はユビ成形	底部は上げ底で端部は肥厚し厚い、体部は内湾	搬入品
123	A－3・4	製塩土器	脚台Ⅲ		3.7		ユビ成形ののちナデ仕上げ	短い支脚部（8×9㎜）	
124	B－3（16）	製塩土器	丸底Ⅰ	3.6	4.5		内外面ともナデ仕上げ	内湾する体部で、端部は尖る。	
125	C－3	製塩土器	丸底Ⅰ	3.6	6.1		内外面ともナデ仕上げ	内湾する体部で、端部は尖る。	
126	B－4（3）0－20	製塩土器	丸底Ⅰ	3.6	3.4		内外面ともナデ仕上げ	内湾する体部で、端部は尖りぎみに丸い。	
127	B－2（16）20－30	製塩土器	丸底Ⅰ	3.9	3.3		ユビ成形ののちナデ仕上げ。	直線的に延び、端部は尖る。	
128	A－4	製塩土器	丸底Ⅰ	4.8	5.0		内外面ともナデ仕上げ	直線的に延びやや外反し、端部は尖る。	
129	B－2（16）20－30	製塩土器	丸底Ⅰ	3.8	5.5		ユビ成形ののちナデ仕上げ。	直線的に延び内湾しつつ端部に続く。	
130	A－5	製塩土器	丸底Ⅰ	3.8	5.4		内外面ともナデ仕上げ	内湾する体部で端部は肥厚し丸い。	

番号	出土地・土層	種　別	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技　　法　　他	形　態　の　特　徴	備　　考
131	A－2	製塩土器	丸底Ⅰ	3.4	10.0		内外面ともナデ仕上げ	内湾する体部で端部は丸く納める。体部は歪。	
132	C－4	製塩土器	丸底Ⅰ	3.0	4.4		内外面ともナデ仕上げ	体部は直線的で、端部は尖る。	
133	A－1	製塩土器	丸底Ⅰ	3.7	5.6		内外面ともナデ仕上げ	体部はS字状に屈曲し、口縁部は内湾し端部は尖る。	小型
134	B－4（7）10－20	製塩土器	丸底Ⅰ	4.0	4.5		ユビ成形ののちナデ仕上げ。	体部はS字状に屈曲し、口縁部は内湾し端部は尖る。	
135	B－5（1）0－10	製塩土器	丸底Ⅰ	4.4	5.5		ユビ成形ののち口縁部はナデ仕上げ。	体部は球形に近く、口縁部は直立し端部は丸い。	
136	C－3	製塩土器	丸底Ⅰ	6.5	3.2		ユビ成形ののち口縁部はナデ仕上げ。	体部は直線的で端部は尖る。	
137	A－5	製塩土器	丸底Ⅰ	16.6	4.9		ユビ成形ののち口縁部はナデ仕上げ。	緩やかな頸部から直立して口縁端部に続く。やや肥厚。	
138	C－4	製塩土器	丸底Ⅱ	10.1	4.0		ユビ成形ののち口縁部はナデ仕上げ。	緩やかな体部で、端部は丸い。	
139	C－5	製塩土器	丸底Ⅱ	10.7	4.7		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	緩やかな体部で、端部は丸い。口縁部は波状になる。	
140	B－3（1）10－20	製塩土器	丸底Ⅱ	9.8	5.1		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	内湾ぎみの体部で端部は丸く尖る。	
141	C－5	製塩土器	丸底Ⅱ	10.7	4.8		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	内湾ぎみの体部で端部は丸く尖る。	やや厚い
142	A－3（5）0－10	製塩土器	丸底Ⅱ	9.0	5.7		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	体部は球形で、口縁部は急に内湾する。	歪
143	B－4（3）10－20	製塩土器	丸底Ⅱ	9.7	6.8		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	底部僅かに認められ、体部は直線的に外方に広がる。	
144	A－5	製塩土器	丸底Ⅱ	7.6	6.6		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	体部大きく屈曲し、端部は内傾し丸くなる。	
145	B－5	製塩土器	丸底Ⅱ	9.5	3.8		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	内湾ぎみの体部で端部は丸く尖る。	
146	B－5	製塩土器	丸底Ⅱ	11.6	4.0		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	やや外開きの体部で、口縁部は外反ぎみ。	
147	B－3（2）	製塩土器	丸底Ⅱ	9.8	2.8		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	直線的で端部近くでやや内傾する。	
148	B－5（3）	製塩土器	丸底Ⅱ	11.1	4.0		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	内湾ぎみの体部で端部は丸く尖る。	
149	C－4	製塩土器	丸底Ⅱ	7.5	3.4		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	内湾ぎみの体部で端部は丸く尖る。	
150	A－5	製塩土器	丸底Ⅱ	6.6	5.4		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	最大腹径は低く、体部は内湾する。端部は丸い。	
151	B－2（23）凹地	製塩土器	丸底Ⅱ	11.8	4.3		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	体部は外反しつつ屈曲し、端部は外へ肥厚する。	
152	B－3（12）20－30	製塩土器	丸底Ⅱ	10.6	3.5		ユビ成形ののち、内面板ナデ、外面ナデ。	内湾し、端部は外へ尖りぎみに肥厚する。	
153	B－3（23）10－20	製塩土器	丸底Ⅱ	12.6	4.2		ユビ成形ののち、内面板ナデ、外面ナデ。	底部厚く、体部は皿状になり、端部は外反し丸くなる。	
154	A－4（20）	製塩土器	丸底Ⅱ	11.7	4.4		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	口縁部は外反し、端部は丸く納める。	
155	B－2（17）凹地	製塩土器	丸底Ⅱ	11.5	5.1		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	体部は半球状で、端部は尖りぎみに丸い。	
156	C－4	製塩土器	丸底Ⅱ	10.8	4.6		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	体部は内湾し、口縁端部は丸い。	
157	B－3（18）10－20	製塩土器	丸底Ⅱ	11.3	5.1		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	体部は半球状で、端部は尖りぎみに丸い。	
158	B－1（16）0－20	製塩土器	丸底Ⅱ	12.6	5.4		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	体部は直線的に近く内湾し、端部は丸い。	
159	B－4（21）	製塩土器	丸底Ⅱ	11.8	5.3		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	体部は半球状で、端部は尖りぎみに丸く、器肉は厚い。	
160	C－4	製塩土器	丸底Ⅱ	13.1	6.4		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	体部は内湾し、口縁端部は尖りぎみで丸い。	
161	C－4	製塩土器	丸底Ⅱ	13.4	5.6		ユビ成形ののち、内面板ナデ、外面ナデ。	体部は内湾し、口縁端部は丸い。	
162	A－1	製塩土器	鉢	12.4	5.2		外面はタタキ成形、内面はナデ。	体部は内湾しつつ外方へ開き、口縁端部は丸い。	
163	A－5	製塩土器	鉢	13.4	5.9		外面はタタキ成形、内面はナテ、口縁部はヨコナデ。	体部は直線的で、口縁部はやや外方し丸い	

番号	出土地・土層	種　別	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技　　法　　他	形　態　の　特　徴	備　　考
164	B－5（13）20－30	製塩土器	鉢	12.8	9.3		外面はハケ、内面はナデ、口縁部はヨコナデ。	体部は内湾しつつ外方へ開き、口縁端部は丸い。	
165	A－5	製塩土器	鉢	13.3	5.6		外面はタタキ成形、内面は板ナテ、口縁部はヨコナデ。	体部は内湾し、口縁部は直線的で外方へ開く	
166	A・B－1　0－20	製塩土器	鉢	12.1	4.1		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	体部は内湾し、口縁部は直線的で外方へ開き、端部は尖る。	
167	B－3	製塩土器	鉢	16.1	5.5		ユビ成形ののち内外面ともナデで、口縁部はヨコナデ	体部は内湾し、口縁端部は丸い。	
168	B－6（2）0－10	製塩土器	鉢	12.9	5.6		ユビ成形ののち内外面ともナデで、口縁部はヨコナデ	尖り底で倒卵形の体部から内傾する口縁部へ。端部は尖る。	Ｃａ付着
169	B－4（21）	製塩土器	鉢	15.4	12.0		ユビ成形ののち、外面はハケ、内面はユビ整形。	内湾し、口縁端部は丸い。	
170	C－3	製塩土器	鉢	26.0	8.1		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	体部は直線的で、口縁部は外反し端部は角張りぎみ。	
171	D－3	製塩土器	鉢	31.8	12.7		ユビ成形ののち、外面はハケ、内面はユビ整形。	体部は直線的で、口縁部は僅かに外反し端部は角張りぎみ。	
172	C－3	製塩土器	鉢	32.8	19.5		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	体部は内湾ぎみの直線で、端部は角張りやや肥厚する。	
173	A－3（15）20－30	製塩土器	鉢	17.2	6.7		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	直線的で器肉厚く端部は丸い。	粗い作り
174	A－2（14）20－30	製塩土器	甕	13.0	8.6		外面はタタキ成形、内面はナデ、口縁部はヨコナデ。	体部は内湾し、口縁部は直立する。	
175	B－4（19）	製塩土器	鉢	15.4	4.3		外面はタタキからナデ、内面はハケ整形。	体部から稜線を持たずに直線で角張る端部へ続く。	
176	C－4	製塩土器	鉢	19.0	6.5		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	内湾する体部から尖った端部へ。器肉は厚い。	
177	B－4（7）0－10	製塩土器	甕	24.9	25.0		内外面ともハケ整形で、端部はヨコナデ。	緩やかな稜線の頸部で、端部は丸い。	
178	C－5	製塩土器	甕	26.9	6.4		内外面ともハケ整形で、端部はヨコナデ。	緩やかな稜線の頸部で、端部は丸い。	
179	B－4（18）10－20	製塩土器	鉢	25.3	15.2		内外面ともハケ整形で、端部はヨコナデ。	体部は直線的で、端部は角張る。	
180	A－3	製塩土器	甕	20.4	22.8		外面ハケ、内面板ナデ、口縁部はヨコナデ。	内湾する長胴の体部から大きく外湾する口縁部へ、端部ヨコナデ	
181	A－1	製塩土器	鉢	39.2	6.2		内外面ともハケ整形で、端部はヨコナデ。	直線的に外方に広がる、端部は尖る	
182	B－2（18）20－30	製塩土器	壷	12.9	10.5		外面はハケ整形、口縁部はヨコナデ。	倒卵形の体部で口縁部は直線的、端部は尖る。	
183	C－3	製塩土器	甕	16.0	10.8		ユビ成形ののち内外面ともナデ。	僅かに内湾する体部から直線的に丸い端部へ	
184	A－3（9）0－20	製塩土器	甕	18.5	15.5		内外面ともハケ整形で、端部はヨコナデ。	直線的な体部で、口縁部は外方へ広がる。	
185	C－4	製塩土器	鉢	14.6	7.9	7.1	ユビ成形ののち内外面ともナデ、端部はヨコナデ。	やや上げ底の脚台から直線的に延び、端部は丸い。	
186	A－1（15）20－30	製塩土器	甑	19.7	10.7	5.9	ユビ成形ののち内外面ともナデ、端部はヨコナデ。	平底から直線的に延びる体部で、端部は丸い。	
187	A－2（5）10－20	製塩土器	鉢	19.6	7.9		ユビ成形ののち内外面ともナデ、端部はヨコナデ。	球形の体部から外方に広がり、端部は角張る。	
188	C－2（21）0－10	製塩土器	鉢	19.9	6.5		外面ハケ整形からナデ仕上げ、内面ナデ、端部ヨコナデ	球形の体部から短い直線的な口縁部に続く。端部は尖る。	
189	C－3	製塩土器	鉢	18.4	9.4		ナデ整形ののち板ナデ仕上げ、口縁部はヨコナデ。	内湾する体部から直立する口縁部になる。端部は尖りぎみ。	
190	B－4（18）10－20	製塩土器	鉢	23.6	7.2		外面ハケ、内面板ナデ、口縁部はヨコナデ。	内傾する体部から直線的に外へ開く。端部は角張る。	
191	B－3（23）0－20	製塩土器	鉢	23.6	8.5		ユビ成形ののち内外面ともナデ、端部はヨコナデ。	僅かに内湾する体部から如意形の端部へ。	口縁部にＣａ付着
192	B－3（6）	製塩土器	甑	22.4	18.2	12.2	ユビ成形から、外面ハケ、内面ナデ整形。端部ヨコナデ	口縁部から垂下し、体部下半は急激に内湾する。把手１対。	
193	C－3	製塩土器	甑		4.5	8.1	ユビ成形ののち内外面ともナデ。	大型の底部。体部は広がる。	底面に木葉痕
194	C－4	製塩土器	甑		4.7	6.6	ユビ成形ののち内外面ともナデ。	外側に広がる。	
195	C－4	製塩土器	甑		5.5	2.9	ユビ成形ののち内外面ともナデ。	底面は平坦で、体部は直線的に広がる。	底面に木葉痕
196	C－3	製塩土器	甑		5.6	9.0	ユビ成形ののち内外面ともナデ。	底部から直立し、外側に広がる。	底面未調整

番号	出土地・土層	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技法他	形態の特徴	備考
197	A－5	土師器	マダコ壷	12.4	8.1		ユビ成形ののち内外面ともナデ、端部はヨコナデ。	直立する体部からやや外反する短い口縁部になる。	
198	B－4（7）凹地	土師器	マダコ壷	11.0	10.8		ユビ成形ののち内外面ともナデ、端部はヨコナデ。	僅かに内湾する体部から如意形の口縁部へなる。	
199	B－3（20）20－30	土師器	マダコ壷	16.0	10.1		ユビ成形ののち内外面ともナデ、端部はヨコナデ。	内傾する体部から如意形の口縁部へ続く。	
200	B－4（6）10－20	土師器	マダコ壷	10.8	10.4		ユビ成形ののち内外面ともナデ、端部はヨコナデ。	内傾する体部から短い肥厚する口縁部に続く。	
201	A－5	土師器	マダコ壷	10.3	15.7		ユビ成形ののち内外面ともナデ、端部はヨコナデ。	内湾する体部から短い口縁部へ、端部は丸い。	
202	A－4(10) 0－20	土師器	マダコ壷	10.4	18.9		ユビ成形から、外面ハケ、内面ナデ整形。端部ヨコナデ	内湾する体部から短く外反する口縁部へ、端部は尖る。	
203	A－5（5）20－30	縄文土器	鉢	21.3	5.2		ユビ成形ののち内外面ともナデ、端部はヨコナデ。	内湾する体部で端部は尖りぎみ。	
204	A－5	縄文土器	鉢		3.2		内外面ともナデ。	直線的な体部	
205	A－1	縄文土器	鉢		4.2		内外面ともナデ。	内湾する体部	
206	B－2（22）20－30	弥生土器	壷	18.6	7.2		ハケ整形ののちヘラミガキ、端部はヨコナデ	直立する頸部から水平に端部に延びる。端部は内外に肥厚。	
207	C－1	弥生土器	壷		30.3	6.8	外面ハケ整形から下半ヘラミガキ上半施文、内面ハケ	算盤玉状の体部から外反する頸部に続く	
208	C－3	弥生土器	水差	8.4	13.0		外面はハケ整形→ヘラミガキ、内面ナデ、端部ヨコナデ	長い頸部は外反する。端部は角張る。	
209	B－1	弥生土器	壷		3.4		内面ナデ、外面ヘラミガキ･ヨコナデ	内側に屈曲する。	精製土器
210	B－1（12）20－30	弥生土器	壷	10.2	1.8		口縁部ヨコナデ、外面ヘラミガキ	端部直立、頸部は水平ぎみに内側へ。	
211	C－5	弥生土器	甕		3.9		ナデ整形ののち、ナデ仕上げ。	外反ぎみに広がる。	
212	A－2	弥生土器	壷	13.5	19.1		ユビ成形ののち内面ハケ整形、外面板ナテ	湾曲する長めの体部から直線的な口縁部に続く	
213	B－1	弥生土器	甕	14.7	6.3		外面ハケ整形、内面ケズリ→板ナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部からくの字の短い口縁部になる	
214	B－1（22）20－30	弥生土器	壷		5.6		外面ヘラミガキ、内面ナデ	内湾する体部	搬入品
215	C－5	弥生土器	壷	18.0	4.9		内外面ともにヘラミガキ、端部はヨコナデ	直立する頸部から外湾して端部に延びる。端部は外に肥厚	
216	B－2	土師器	壷	19.0	7.7		内外面ともヨコナデ	大きく湾曲する頸部から直立する端面の大きい口縁部	
217	A－2（25）0－20	土師器	壷	17.4	8.6		ユビ成形ののちヨコナデ	内傾して頸部に繋がり、二重口縁となる。端部は丸い。	被熱
218	B－4（5）10－20	土師器	壷	25.0	5.5		ユビ成形ののちヨコナデ	直立する頸部から大きく広がる口縁部へ。端部は角張る。	
219	C－3	土師器	壷	9.6	2.8		ユビ成形ののちハケ整形。端部はヨコナデ。	外傾する。端部は丸い。	
220	機械掘削	土師器	壷	18.3	5.9		内外面ともヨコナデ	外傾する二重口縁で、上半はやや外反。	
221	B－1　20－30	土師器	壷	21.9	18.5		内面ナデ外面ハケから部分的なミガキ口縁部ヨコナデ	球形の体部から直立する頸部から二重口縁となる、端部丸い	
222	C－4	土師器	壷	21.5	3.0		内外面ともヨコナデ	頸部から直線的に延び、くの字状の口縁部	
223	C－6	土師器	壷		4.5		ユビ成形ののちヨコナデ	外傾する口縁部、擬口縁部で剥離。	
224	A－1（5）0－20	土師器	壷	15.5	4.6		ナデ整形ののち、口縁部ヨコナデ、外面ハケ？で施文	外湾する頸部から直立する口縁部へ続く。端部下方へ肥厚。	搬入品
225	B－3（24）10－20	土師器	壷		13.5	8.9	ユビ成形ののちハケ整形。端部はヨコナデ。	算盤玉状の体部から外反する頸部に続く、底部は大きめ。	搬入品
226	A－5	土師器	壷	9.7	4.3		内外面ともヨコナデ	緩やかなＳ字状の頸部で、端部は丸い。	
227	A－3（9）0－20	土師器	壷	9.9	4.6		体部はナデ、口縁部はヨコナデ	内湾する体部から緩やかなＳ字状の口縁部へ。	搬入品
228	B－4	土師器	壷	11.1	4.0		体部はナデ、口縁部はヨコナデ	やや外湾する体部から緩やかなＳ字状の口縁部へ。	搬入品
229	C－3	土師器	壷		3.1		内外面ともヨコナデ	明瞭な稜線を持たずに口縁部に続く	

番号	出土地・土層	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技法他	形態の特徴	備考
230	B－1（22）20－30	土師器	壷		4.4		内面ユビ成形からナデ仕上げ、外面へラミガキ	球形の体部から直立する頸部へ。	
231	A－1	土師器	壷	14.0	3.4		内外面ともヨコナデ	外傾する口縁部、端部は内面に肥厚。	
232	C－5	土師器	壷	15.4	3.3		内外面ともヨコナデ	下半は内湾し、上半は直立し面となる。端部は丸い。	
233	B－5（14）	土師器	壷		5.5		内外面ともヨコナデ	内湾する体部から直立する口縁部になる。	
234	A－1（アゼ）10－20	土師器	壷	18.2	6.9		内外面ともヨコナデ	頸部から直線的に外傾する。端部は角張る。	被熱
235	A－5	土師器	壷		20.3		内面はハケ整形、外面はユビ整形ののちへラミガキ	算盤玉状の体部	
236	A－5	土師器	壷	14.3	23.9		タタキ成形の後ナデ仕上げ、内面はハケ整形からナデ	球形の体部から外反する口縁部に、端部は外へ広がる	底面タタキ底、被熱
237	C－4	土師器	壷		7.0		外面タタキ成形、内面ナデ・板ナデ	内湾する球形の底部、底部は厚い、	被熱、表面磨滅
238	B－1（12）20－30	土師器	壷		10.1		外面タタキ成形からへラミガキ、内面ナデ	内湾する球形の底部、底部は厚い、	底部再成形
239	A－5	土師器	壷		8.9		ハケ整形ののちへラミガキ、内面板ナデ	やや扁平な球形の体部	
240	B－1（2）20－30	土師器	壷		7.7		ユビ成形ののちナデ仕上げ	球形の体部から外反する頸部に	表面磨滅
241	A－1（20）20－30	土師器	壷		10.2		外面ユビ仕上げ、内面ナデ	球形の体部から外反する頸部に	
242	A－2	土師器	壷		8.0	4.1	外面ハケののちミガキ、内面ハケ整形	平底の底部から球形の体部になる	
243	A－5	土師器	壷	12.2	10.6	11.3	外面タタキからナデ、内面板ナデ、口縁部は内面ハケ	上げ底の底部から下膨れの体部に、口縁部は外傾する	底部内面くもの巣状ハケ
244	B－1（1）0－20	土師器	壷	9.8	8.6		内面ユビ成形、外面ハケ整形	やや扁平の球形の体部から外傾する口縁部に、端部尖る	
245	B－1	土師器	壷	10.7	9.1		ユビ成形ののちナデ仕上げ	球形の体部から外傾する口縁部、端部は内側に肥厚する、	
246	A－1	土師器	壷	9.1	12.1		外面ハケ整形から丁寧なナデ仕上げ、口縁部ヨコナデ	球形の体部から外傾する口縁部、端部は外方に開く	
247	B－4（22）	土師器	壷	9.5	13.6		外面ハケ整形、内外面ともナデで仕上げる	球形の体部から外傾する口縁部、端部は丸い、	
248	A－3（14）	土師器	壷	10.3	6.7		外面ナデののちへラミガキ、口縁部ヨコナデ	やや内湾ぎみに直線に延びる口縁部	
249	B－2（3）10－20	土師器	壷		6.7		ユビ成形ののちナデ仕上げ	歪な体部	
250	機械掘削	土師器	壷		4.9		ナデ仕上げ	扁平な体部から外傾する口縁部に続く	
251	A－1	土師器	壷		2.8		ヨコナデ、端部に工具（タタキ原体）で刻み目	外湾する口縁部、端部は丸い	
252	A－5	土師器	甕	13.5	4.9		ユビ成形ののちナデ、口縁部ヨコナデ、端面刻み	外湾する口縁部、端部は丸く肥厚する	タタキ原体による刻み目
253	A－1	土師器	甕	15.7	3.7		外面タタキ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	外湾する口縁部、端部は丸い	タタキ原体による刻み目
254	A－1	土師器	甕	33.7	3.0		ヨコナデののち内面はミガキ	外湾する口縁部、端部は丸い	タタキ原体による刻み目
255	B－1	土師器	甕	15.6	6.5		ナデ仕上げ、口縁部はヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部に、端部は丸い	タタキ原体による刻み目
256	A－2（20）0－10	土師器	甕	13.4	7.5		内面はハケ整形、口縁部はヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部に、端部は丸くやや肥厚	
257	A－1	土師器	甕	17.7	7.2		外面タタキ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から途中から外湾する口縁部に、端部は尖る	被熱
258	A－1（15）	土師器	甕	14.8	2.2		外面タタキ、内面ハケ、口縁部ヨコナデ	外反する口縁部で端部は上につまみあげる	
259	A－1（15）	土師器	甕	14.8	1.5		内面ハケ、口縁部ヨコナデ	外反する口縁部で端部は上につまみあげる	
260	B－2（1）20－30	土師器	甕	16.5	8.2		外面タタキ、内面ハケ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部に、端部つまみあげ	
261	A－1（20）	土師器	甕	17.2	8.5		外面タタキ、内面へラケズリ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部に、端部は角張る	
262	A－5	土師器	甕	16.8	13.0		外面タタキ、内面板ナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外湾する口縁部に、端部は丸い	

番号	出土地・土層	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技法他	形態の特徴	備考
263	B－1（13）20－30	土師器	甕		12.8	1.8	外面タタキののちナデ、内面板ナデ	小さな平底で内湾しながら倒卵形に延びる	
264	A－5	土師器	甕	12.1	13.3	2.2	外面タタキののちナデ、内面ハケ（上粗く、下細かい）	球形の体部で小さな平底、口縁部外傾し短い、端部肥厚	
265	B－1（7）20－30	土師器	甕	13.8	6.3		内外面ともハケ、口縁部ヨコナデ	肩の張る胴部から外反する口縁部に、端部肥厚	被熱
266	C－5	土師器	甕	17.0	12.9		外面タタキののちナデ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	倒卵形の体部から大きく外へつまみあげた口縁部に	
267	B－2（2）20－30	土師器	甕	14.6	6.3		外面ハケ、内面板ナデ、口縁部ヨコナデ	僅かに外へくの字に開く、端部丸い	内面に有機質付着
268	B－1（12）20－30	土師器	甕	11.3	4.3		ナデ仕上げ、端面刻み目（タタキ原体による）	くの字で口縁部は薄く端部は尖る	
269	B－1（12）20－30	土師器	甕	11.5	3.4		内面ナデ、口縁部ヨコナデ	緩やかなくの字で、端部は肥厚する	
270	A－1	土師器	甕	14.3	3.0		タタキ成形の後口縁部作り出す、ヨコナデ仕上げ	外反する口縁部で端部は上下に肥厚する	
271	B－2（19）20－30	土師器	甕	11.2	11.1		外面縦方向のタタキ、頸部は強いナデ、口縁部ヨコナデ	球形の体部から直線的に口縁部に続く	被熱
272	A－1（炉21下）	土師器	甕	20.5	8.2		外面縦方向のタタキ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から、内面に強い稜線を持って外反する	
273	B－2（18）20－30	土師器	甕	31.0	9.2		体部はハケ整形、口縁部はヨコナデ	緩やかなくの字で、端部は僅かに肥厚する	被熱
274	A－1（20）	土師器	甕	29.6	2.0		ヨコナデ	端部は上方へつまみ上げる、端面に2条の凹線	被熱
275	B－2	土師器	甕	29.9	21.5		ユビ成形ののち内面板ナデ外面ナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外方に直線的に延びる口縁部	被熱
276	A－1	土師器	甕	15.2	6.4		内面はユビ仕上げ、外面ハケ整形、口縁部ヨコナデ	直立ぎみのくの字の口縁部、端部は外へつまみ出す	
277	A－3（14）0－20	土師器	甕	16.4	6.4		内面ケズリ、外面ユビ調整、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部に、器肉厚い	
278	A－1（アゼ）20－30	土師器	甕	14.2	9.8		体部はナデ仕上げ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部からくの字の口縁部に	
279	A－1（20）	土師器	甕	13.1	12.4		内面粗いハケ整形、外面板ナデ、口縁部ヨコナデ	倒卵形の体部から端部は大きく外へつまみあげる	被熱、原体貝？
280	A－4（10）0－20	土師器	甕	25.5	6.3		外面ハケ整形、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	くの字で端部はつまみ出す	被熱
281	B－5（11）20－30	土師器	甕	19.9	8.2		体部は板ナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から直線的に延びる口縁部に	
282	B－3	土師器	甕	15.5	20.3		外面ハケ整形、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	長胴の倒卵形の体部から強く短い外反する口縁部になる	被熱
283	C－5	土師器	甕	18.3	10.4		外面ハケ整形、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	くの字形の口縁部で器肉厚く、端部丸い	
284	C－4	土師器	甕	23.1	10.8		外面ハケ整形、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	直線的な体部から大きく開く口縁部、端部丸い	被熱
285	B－4	土師器	甕	21.1	9.1		体部ナデ仕上げ、口縁部ヨコナデ	如意状の口縁部で端部肥厚する	
286	B－4（22）10－20	土師器	甕	27.8	8.4		外面ハケ整形、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から大きく屈曲して外反する口縁部に、端部丸い	
287	C－5	土師器	甕	21.2	12.0		外面ハケ整形、内面板ナデ、口縁部ヨコナデ	肩の張る体部から屈曲して外反する口縁部になる	被熱、外面黒斑
288	B－4（12）10－20	土師器	甕	25.3	12.6		全体にハケ整形、口縁部ヨコナデ	球形の体部から外傾する口縁部に、端部は丸い	歪
289	B－4（18）	土師器	甕	21.6	5.6		外面粗いハケ、口縁部ヨコナデ	直立する体部から屈曲し外反する	搬入土器か
290	B－4（21）10－20	土師器	甕	17.9	4.9		外面は単位のある工具（ヘラ？）、口縁部ヨコナデ	大きく内傾する体部から短くくの字に曲がる	搬入土器
291	B－2（11）20－30	土師器	甕	12.9	6.9		ハケ整形で内面は板ナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から稜線を持ちくの字になる、端部丸く肥厚	
292	A－2	土師器	甕	17.7	10.1		ハケ整形で内面は板ナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から稜線を持ちくの字になる、端部上へつまむ	
293	C－4	土師器	甕	12.1	2.8		ヨコナデ	口縁端部上方へ立ち上げる	搬入土器
294	B－2（炉22周辺）	土師器	甕	13.0	4.4		外面ハケ整形、内面板ナデ、口縁部ヨコナデ	口縁部は有段で上方につまみ上げる	搬入土器
295	A－2（25）0－10	土師器	甕	13.8	4.0		外面ハケ整形、内面板ナデ、口縁部ヨコナデ	くの字で薄く仕上げる	

番号	出土地・土層	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技法他	形態の特徴	備考
296	A－1（アゼ）20－30	土師器	甕	12.7	7.1		外面ハケ整形、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から直線的に延びる口縁部に、端部肥厚	
297	A－2（10）10－20	土師器	甕	14.8	23.9		外面ハケ、内面ケズリののちナデ、口縁部ヨコナデ	球形の体部からくの字に屈曲し内湾する、端部肥厚	布留甕
298	B－2（22）0－10	土師器	甕	11.8	6.5		外面ハケ、内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	球形の体部からくの字に屈曲し内湾する、端部肥厚	布留甕
299	B－5（1）20－30	土師器	甕	15.3	4.6		ヨコナデ	くの字で端部段を持って肥厚する	
300	A－3	土師器	甕	14.4	3.4		内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	くの字に大きく屈曲して内湾する、端部内側に肥厚する	布留甕
301	A－1	土師器	甕	12.8	4.1		ヨコナデ	くの字に大きく屈曲して内湾する、端部内側に肥厚する	布留甕
302	B－2（22）	土師器	甕	14.7	3.7		外面ハケ、口縁部ヨコナデ	くの字に緩やかに屈曲して内湾する、端部内側に肥厚する	布留甕
303	A－1（5）0－20	土師器	甕	13.2	5.7		外面板ナデ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	くの字に緩やかに屈曲して外傾する、端部肥厚する	被熱
304	A－2（25）10－20	土師器	甕	15.3	4.6		外面ハケ、口縁部ヨコナデ	緩やかなくの字で、端部玉縁状に折り曲げる	
305	C－3	土師器	甕	14.5	12.4		外面ユビ成形ののちナデ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	球形の体部からくの字に屈曲し外傾する、端部丸い	被熱
306	機械掘削	土師器	甕	14.8	8.8		内外面とも体部板ナデ、口縁部ヨコナデ	倒卵形の体部から短い口縁部になる、端部角張る	
307	B－5（2）20－30	土師器	甕	22.1	10.8		内外面ともハケ整形、端部周辺はヨコナデ	内湾する体部から大きく外反する口縁部になる	
308	C－3	土師器	甕	13.8	12.9		内外面とも体部板ナデ、口縁部ヨコナデ	球形の体部から直交に近く外傾する、端部丸い	被熱
309	A－1	土師器	甕	21.6	20.9		内外面とも体部板ナデ、口縁部ヨコナデ	倒卵形の体部からやや短い口縁部になる、端部丸い	
310	A－1	土師器	甕	26.8	10.0		外面ユビ成形ののちナデ、内面板ナデ、口縁部ヨコナデ	やや肩の張る体部から大きく外反する口縁部に、端部薄くなる	
311	C－2（6）	土師器	甕	13.6	6.0		体部板ナデ・ユビ仕上げ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部からくの字に外傾し途中から外反する、端部丸い	被熱
312	C－2（6）	土師器	甕	11.7	4.9		ヨコナデ	直線的な体部から外反する口縁部に	
313	A－5	土師器	鉢	11.6	7.0	2.3	外面タタキ、内面板ナデ、口縁部ヨコナデ	小さな平底で内湾しながら口縁部に、端部僅かに肥厚	
314	B－3（1）	土師器	鉢	14.1	6.8	3.7	外面ユビ整形･調整、内面ハケ、底面ナデ	平底で内湾する体部、端部中央凹む	
315	A－1	土師器	鉢	15.1	7.3		外面下半タタキ、内外面とも板ナデ、口縁部ヨコナデ	丸底に近く体部内湾する、端部やや外開きで肥厚する	
316	B－4	土師器	鉢	13.6	3.0		内外面ともナデ仕上げ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から短い口縁部が外反する、端部尖る	
317	B－4	土師器	鉢	11.0	5.3		内外面ともナデ仕上げ、口縁部ヨコナデ	扁平な球形から短い口縁部に、端部尖る	
318	C－5	土師器	鉢	13.6	3.0		ヨコナデ	内湾する体部から短い口縁部が大きく外反する、端部尖る	
319	B－1（7）20－30	土師器	椀	13.0	5.3	4.3	内外面ともヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	平底から内湾する体部になり口縁部短く外反する	
320	機械掘削	土師器	椀	11.1	4.8		内外面ともハケ整形、内面はナデ、口縁部はヨコナデ	器高中位で最大径になり、端部は尖る	
321	A－1	土師器	椀	11.2	5.4		外面ナデ、内面ナデ・板ナデ、口縁部ヨコナデ	丸い平底ぎみの底部から上方に延び、口縁部は外に開く	
322	B－2（7）20－30	土師器	鉢	9.6	4.4		内外面ともナデ仕上げ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部からくの字に外傾する、端部尖る	
323	A－3（14）0－20	土師器	鉢	12.1	8.1		外面ハケ整形、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	球形の体部から短く外反する口縁部になる	
324	A－2（20）0－10	土師器	鉢	12.7	4.7		外面ハケ整形、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から直立して尖った端部に続く	
325	B－3（12）0－30	土師器	鉢	16.3	8.7		外面ユビ整形からナデ、内面板ナデ、口縁部ヨコナデ	球形に内湾し、端部角張る、片口が付く	被熱
326	C－6	土師器	鉢	25.3	8.0		内外面ともナデ仕上げ、口縁部ヨコナデ	直線的に延び、僅かに外反して肥厚する端部になる	体部に円孔
327	C－4	土師器	鉢	9.2	7.0		内外面ともヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、脚台部ナデ	内湾する体部で、端部丸い、脚台は低く内湾ぎみ	
328	C－3	土師器	鉢？	9.8	3.7		ヨコナデ、内面にヘラで単位のある施文	内湾する体部で、端部丸い	

番号	出土地・土層	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技法他	形態の特徴	備考
329	B－5（12）0－10	土師器	高杯	12.8	4.9		内外面ともナデ仕上げ、口縁部ヨコナデ	内湾し口縁部に向かって外傾する、端部丸い	内面に工具痕
330	B－2（6）20－30	土師器	高杯	16.0	5.0		ヨコナデ	浅い杯部で端部近くで外反する、端部丸い	被熱
331	C－3	土師器	高杯	16.5	5.3		杯部下半はナデ、上半はヨコナデ	直線的に延び、端部尖る	被熱
332	A－1（5）0－30	土師器	高杯	15.7	5.0		内面板ナデ、口縁部ヨコナデ、脚台付近ユビ調整	浅い杯部で内湾し器肉厚い、端部丸い	
333	A－1	土師器	高杯	15.5	5.2		ハケ整形ののちヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	下半平たく、屈曲して直線的に延び、端部開いて丸い	
334	A－6（炉2周辺）	土師器	高杯	18.2	6.2		下半ナデ、上半ヨコナデ	稜線を持たずに内湾する、端部丸い	
335	A－1（5）0－20	土師器	高杯	16.7	5.2		ナデ仕上げ、口縁部ヨコナデ	直線的にのびる、端部尖る	
336	A－1（5）0－20	土師器	高杯	17.6	9.4		杯部ヨコナデ、柱状部外面ナデ、内面絞り目	細い柱状部で、明瞭な稜線を持たずに内湾する	
337	A－1（20）	土師器	高杯	17.6	7.2		内面ハケ整形からナデ、口縁部ヨコナデ、円板充填	水平に延び稜線を持って外傾し端部近くで反り、丸くなる	
338	A－2（25）20－30	土師器	高杯	21.5	6.7		ハケ整形ののちナデ、口縁部ヨコナデ	水平に延び稜線を持って外反する、端部丸い	被熱
339	B－1（22）20－30	土師器	高杯	21.8	7.7		ヨコナデ	水平ぎみに内湾し、稜線から外反する、端部丸い	
340	B－4（19）	土師器	高杯	22.0	8.2		下半ナデ、上半ヨコナデ	水平に延び稜線を持って外反する、端部丸い	
341	A－1	土師器	高杯	23.2	7.4		下半ナデ、上半ヨコナデ	稜線を持たずに内湾する、端部角張る	被熱
342	A－5	土師器	高杯	19.7	5.4		内外面ともヘラミガキで丁寧に仕上げる	外傾し稜線を持ち大きく外反する、端部は反って角張る	波状文・竹管付浮文
343	B－6（炉2・3周辺）	土師器	高杯	17.8	6.1		下半ナデ、上半ヨコナデ、円板充填	内湾し口縁部に向かって外傾する、端部丸い	
344	A－5	土師器	高杯	14.1	7.2		杯部ヨコナデ、脚部内面絞り目	水平に延び稜線を持って外反する、端部は角張る	
345	C－6	土師器	高杯	14.6	6.0		杯部ヨコナデ、脚部板ナデ	水平に延び稜線を持って外反する、端部は丸い	被熱
346	A－2	土師器	高杯	15.5	6.3		下半板ナデ、上半ヨコナデ	半球状に内湾し、端部尖る、円板充填	
347	C－4	土師器	高杯		8.1	10.0	外面ハケ整形、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	湾曲して下方に延び、裾は外湾し、端部丸い	
348	A－2	土師器	高杯		9.7	11.4	ヘラミガキ、裾端部ヨコナデ	直線的な柱状部から外傾して裾に続く、端部尖る	四方透孔
349	A－5（アゼ）20－30	土師器	高杯		8.2	11.0	内面ケズリ、口縁部ヨコナデ、裾部内面ハケ、外面ミガキ	直線的な柱状部から外傾して裾に続く、端部肥厚	
350	A－5（10）20－30	土師器	高杯		6.0	12.2	端部ヨコナデ、内面絞り目・ユビ成形	緩やかに裾に向かって開いていく	被熱
351	A－1（アゼ）0－20	土師器	高杯		8.0	11.0	外面ハケからナデ、内面絞り目、裾ヨコナデ	外傾し屈曲して大きく外反する、端部は反って尖る	
352	B－1（22）20－30	土師器	器台	8.5	4.0		外面ヨコナデ、上台内面ヘラミガキ、下台内面絞り目	下台はやや内湾、上台は厚く外反する、端部丸い	
353	B－4（19）	土師器	器台	9.7	8.4		内面ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、円板充填	直線ぎみに延び、端部内側に肥厚	刻み目
354	C－4	土師器	器台	11.0	6.1		ヨコナデののちヘラミガキ	直線的な柱状部で、上台は僅かに外反し端部肥厚	
355	A－1	土師器	器台	12.9	5.2		内外面ともナデ仕上げ、口縁部ヨコナデ	緩やかに内湾し、端部角張り上方に肥厚	刺突文
356	A－3	土師器	器台	16.7	2.1		ヨコナデ	直線的に開き、端部近くで内湾し上方に延びる、端部丸い	
357	A－1	土師器	器台	31.6	2.4		ヨコナデ	外反ぎみに開き上方へ面を持って延びる、端部丸い	刻み目
358	A－1	土師器	器台	15.8	2.5		ヨコナデ	明瞭な稜線を持たずに屈曲し、端部丸い	波状文
359	A－1	土師器	器台	17.4	3.0		ヨコナデののちヘラミガキ	外湾しながら端面に続き、上方に肥厚する	波状文
360	C－3	土師器	器台	16.9	2.3		ヨコナデののちヘラミガキ	外反しながら端面になり、端面は上方へ延びる、端部尖る	波状文
361	C－5　20－30	土師器	器台	22.3	2.6		ヨコナデ	直線的に延び内外に大きく肥厚する端面になる、端部丸い	波状文

番号	出土地・土層	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技法他	形態の特徴	備考
362	C－4	土師器	器台	21.6	2.6		ヨコナデ	直線的な端面	鋸歯文・刻み目
363	C－4	土師器	器台		6.3	9.1	ヨコナデののちヘラミガキ	内湾ぎみに直線に延び、端部丸い	
364	B－4（5）0－20	土師器	脚台		7.0	11.1	ヨコナデののちヘラミガキ	柱実で、裾は直線的、端部丸く内側に僅かに肥厚	三方透孔
365	C－5	土師器	脚台		5.6	11.0	端部ヨコナデ、他は板ナデ	柱実で、内湾ぎみに延びる、端部下面平坦	
366	A－1	土師器	器台		5.8	12.0	内面ナデ、外面板ナデ、端部ヨコナデ	緩やかに屈曲して延びる、端部やや外反し丸い	
367	C－5	土師器	器台		7.9	12.9	内面ナデ、外面板ナデ、端部ヨコナデ	柱状部直に延び、裾は開いてから稜線を持って延びる	
368	C－5	土師器	器台		3.2	13.8	ヨコナデののちヘラミガキ	直線的に延び、稜線を持って端部に続く、端部尖る	四方透孔
369	B－5（10）20－30	土師器	脚台		5.6	8.0	ヨコナデ	直線的に延びる、端部丸い	
370	A－5	土師器	器台		11.9	17.0	外面タタキからナデ･ヘラミガキ、内面板ナデ	直線的に延び、端部は丸い	四方透孔
371	B－3	土師器	甑	18.9	5.7		外面ハケ整形、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部で端部は外へ開く、把手は上向きで1対	
372	C－3	土師器	甑		5.6		外面ハケ、内面ナデ	内湾する体部、把手は上向き	
373	C－2（21）10－20	土師器	甑		7.3		外面ハケ、内面ナデ	内湾する体部で、把手は幅の広いタイプで上向き	
374	B－5（SH01周辺）	土師器	甑		3.4		ナデ	断面楕円形に近い形状、先端欠く	
375	A－1	土師器	甑		8.4		ハケ整形ののち把手部ナデ	断面円形の水平に延びる、内側少し凹む	
376	B－3（25）10－20	土師器	甑		4.5		ナデ	断面円形で上方に延びる	
377	C－6	土師器	甑		6.1		ハケ整形ののち把手部ナデ	断面円形の水平に延びる、内面は空洞	
378	B－3（19）10－20	土師器	甑		4.5		ハケ整形ののち把手部ナデ	断面平たくやや幅広く、上方に屈曲する	
379	B－2（20）20－30	土師器	甑		6.7		内面ケズリ、把手部ナデ	断面円形の水平に延びる、内面外湾する	
380	B－2（8）20－30	土師器	甑		5.5	8.0	内面ハケ、外面板ナデ	底は円孔で、そこから外傾する	
381	C－5	土師器	竈	16.4	6.9		ナデ	内湾する口縁部、端部丸い	
382	B－1（2）0－20	土師器	竈	14.7	6.9		ナデ、口縁部はヨコナデ	内傾する体部に鍔はやや外反する	
383	B－1（2）0－20	土師器	竈		8.0		ナデ	直立する体部、鍔は幅狭く厚い	
384	A－3（14）0－20	土師器	竈		9.3		外面ハケ整形、ナデ	内湾する体部で底面広い、鍔はずれる	
385	B－2（20）10－20	土師器	鉢		2.6		ナデ	内湾する体部で、2条の単位のある文様	竹管文
386	C－4	土師器	杯	17.8	3.5		ヨコナデ	内湾する体部で口縁部は外へ開く、端部丸い	
387	B－5（2）10－20	土師器	杯	12.4	3.8		ナデ、口縁部ヨコナデ	丸みのある底から内湾する体部に、端部はつまみあげ尖る	
388	B－5（7）10－20	土師器	杯	13.8	2.9		ヨコナデ	やや内湾する外傾する体部	
389	B－2（22）	土師器	杯	14.8	3.9		ナデののち、ミガキ	内湾する体部で口縁部は外反し、端部尖りぎみ、内面暗文	
390	C－4	土師器	杯	16.4	4.4		ナデののちヨコナデ、ミガキ	内湾する体部で端部は尖る、暗文	
391	A－2	土師器	杯	12.9	3.8		ヨコナデ	外反する体部で、口縁部尖る	
392	B－3（17）20－30	土師器	杯	16.6	5.4		ヨコナデ、ヘラミガキ	内湾する体部で、端部屈曲してつまみ上げる、端部丸い	
393	B－4（6）10－20	土師器	杯	15.8	4.0		ナデののちヨコナデ、ヘラミガキ	内湾する体部で端部尖りぎみ	
394	C－4	土師器	椀	16.9	6.2		ナデののちヨコナデ、ヘラミガキ	内湾する体部で端部尖りぎみ、暗文	

番号	出土地・土層	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技法他	形態の特徴	備考
395	A－3（14）	土師器	皿	21.4	2.3		タタキののちナデ、ヘラミガキ	緩やかに内湾し、端部肥厚する	
396	A－5	土師器	壷		4.2		ユビ成形、ナデ	球形の胴部	ミニチュア
397	B－5（13）	土師器	壷		4.4	3.6	ナデ	平底で球形の胴部	ミニチュア
398	C－3	土師器	鉢	5.6	3.4		ユビ成形、ナデ	丸底で内湾し、端部丸い	ミニチュア
399	C－4	土師器	円板状		6.4		ハケ整形、ナデ	やや歪な円形	
400	A－3（5）0－10	土師器	船形	8.2	2.5	1.1	手捏ね	幅狭く、舳先上がる、前後の判断明瞭	
401	B－4（17）	土師器	船形	3.1	1.9	5.7	手捏ね	幅やや広く、舳先大きく上がる	
402	C－3	土師器	壷		3.5		ヨコナデ	端面大きく円形浮文と波状文を施す	表面磨滅
403	C－5	土師器	壷		2.3		ヨコナデ	平行に広がり、外反する端部に続く。	波状文
404	A－1	土師器	壷		1.2		ヨコナデ		波状文・円形浮文
405	C－3	土師器	壷		2.4		ヨコナデ	外湾ぎみの口縁部	波状文・円形浮文
406	B－4（17）	土師器	壷		2.3		ヨコナデ	垂下する口縁端面	波状文・円形浮文
407	A－1	土師器	壷		2.8		ヨコナデ	外反する口縁部で、端部は丸い	波状文
408	A－1	土師器	壷		3.0		ヨコナデ	やや外湾する	波状文
409	C－5	土師器	壷		3.4		ヨコナデ	直線的に延び、端部は丸くやや肥厚	波状文
410	A－1	土師器	壷		3.1		ヨコナデ	直線的に延び、端部は丸い	鋸歯文
411	A－1（15）	土師器	壷		2.6		ヨコナデ後、内面はヘラミガキ	外反し端部は尖る	波状文・円形浮文
412	A－1	土師器	壷		2.4		ヨコナデ	外反し端部は上方へつまみ上げる	波状文（内外面･端面）
413	C－5	土師器	壷		3.2		ヨコナデ	外傾し、端部は丸い	波状文・直線文
414	C－3	土師器	壷		3.1		ヨコナデ	端面直立し、端部丸く刻み目を施す	鋸歯文
415	A－1	土師器	壷		3.0		ヨコナデ	屈曲して外反する	波状文
416	C－4	土師器	壷		2.7		ヨコナデ	屈曲して外反する	鋸歯文
417	機械掘削	土師器	壷		3.3		ヨコナデ	突帯状に稜線厚くなる、	斜格子文（鋸歯文）
418	C－4	土師器	壷		4.3		ヨコナデ	外傾し、稜線を持って外反する、端部は丸い	山形文
419	A－1	土師器	壷		3.0		ヨコナデ	内湾し端部は丸い	波状文
420	A－1	土師器	壷		3.6		ヨコナデ	内湾し端部は丸い	波状文
421	B－6	土師器	壷		2.4		ヨコナデ	外反する口縁部で、端部は角張りぎみで刻み目を施す	波状文・円形浮文
422	C－3	土師器	壷		2.6		ヨコナデ	外傾する部分	鋸歯文
423	A－1	土師器	壷		3.2		ヨコナデ	外反する口縁部で、端部は角張りぎみで刻み目を施す	鋸歯文
424	C－5	土師器	壷		2.6		ヨコナデ後、内面はヘラミガキ	頸部から外反し端面を持って端部に	器台かも
425	B－1（1）0－20	土師器	壷		1.2		ヨコナデ	水平に広がる口縁部	波状文・円形浮文
426	B－1（アゼ）0－20	土師器	甕		3.1		タタキののち折り曲げて口縁部作り出す	外反し、端部に刻み目状の施文	
427	A－2（24）0－10	須恵器	杯蓋	11.4	4.2		ロクロケズリののちロクロナデ	天井部は丸みを持ち、口縁部は直線的、端部は尖る	自然釉

番号	出土地・土層	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技法他	形態の特徴	備考
428	C－3	須恵器	杯蓋	12.1	4.7		ロクロケズリののちロクロナデ、内面は仕上げナデ	天井部は丸みを持ち、口縁部は直線的で外へ肥厚	
429	B－3（1）	須恵器	杯蓋	11.5	4.5		ロクロケズリののちロクロナデ	丸みのある体部で端部近くも内湾する	
430	A－1（25）20－30	須恵器	杯蓋	11.7	4.4		ロクロケズリののちロクロナデ、内面に当て具痕	天井部は丸みを持ち稜線を持って端部に続く	
431	B－1（7）	須恵器	杯蓋	11.9	4.6		ロクロケズリののちロクロナデ	稜線は甘く内傾して口縁部となる、端部丸みを持ち厚い	
432	B－3	須恵器	杯蓋	12.0	4.4		ロクロケズリののちロクロナデ	天井部は平坦で、甘い稜線から直立ぎみで丸い端部になる	
433	B－2（21）20－30	須恵器	杯蓋	13.0	4.0		ロクロケズリののちロクロナデ	平坦な天井部から鋭い稜線から外反して角張りぎみの端部に	自然釉
434	確認調査（坪4）	須恵器	杯蓋	14.4	4.8		ロクロケズリののちロクロナデ	厚みのある天井部から湾曲しながら端部に続く	
435	C－4	須恵器	杯蓋	13.6	3.5		ロクロケズリののちロクロナデ	器高低く広がりぎみに内湾する	
436	B－4（8）	須恵器	杯蓋	14.1	4.6		ロクロケズリののちロクロナデ、内面1方向の仕上げナデ	丸みのある体部で稜線不明瞭	
437	B－2（13）20－30	須恵器	杯蓋	12.6	3.6		ロクロケズリののちロクロナデ、内面は仕上げナデ	丸みのある体部で稜線不明瞭、端部は細く丸い	
438	B－2（23）	須恵器	杯蓋	12.9	4.0		ロクロケズリののちロクロナデ	稜線を持たない丸みのある体部、端部は丸い	
439	A－3	須恵器	杯蓋	13.6	4.3		ロクロケズリののちロクロナデ	天井部平坦で厚く、体部は丸く尖っている	
440	C－5	須恵器	杯蓋	11.6	3.6		ロクロケズリののちロクロナデ、内面1方向の仕上げナデ	器高低く内湾ぎみに端部丸くなる	
441	B－2（23）	須恵器	杯蓋	14.8	3.6		ロクロケズリののちロクロナデ	天井部平坦で厚く、体部は丸く尖っている	自然釉
442	B－3	須恵器	杯蓋	14.0	4.4		ロクロケズリののちロクロナデ	稜線を持たない丸みのある体部、端部は丸い	
443	A－4（10）	須恵器	杯蓋	14.5	4.6		ロクロケズリののちロクロナデ	やや平坦な天井部から開きぎみに内湾する	
444	B－2（25）	須恵器	杯蓋	13.3	3.7		ロクロケズリののちロクロナデ、内面に当て具痕	厚みのある天井部から尖った端部に向かって薄くなる	
445	C－5	須恵器	杯蓋	12.1	4.0		ロクロケズリののちロクロナデ	丸みのある天井部から直立し端部は外反する	
446	B－3（16）10－20	須恵器	杯蓋	13.2	4.3		ロクロケズリののちロクロナデ、天井部はヘラ切り	平坦な天井部から斜めに延び稜線を持って尖った端部に続く	
447	B－4（8）10－20	須恵器	杯蓋	13.2	4.1		ロクロナデで天井部はヘラ切り	丸みのある体部で稜線不明瞭、端部は細く丸い	
448	B－4（17）	須恵器	杯蓋	13.2	4.3		ロクロナデで天井部はヘラ切り	丸みのある体部で稜線不明瞭、端部は細く丸い	
449	B－4（25）	須恵器	杯蓋	11.4	4.4		ロクロナデで天井部はヘラ切り、内面に仕上げナデ	器高高く丸みを持つ、端部は丸く尖っている	
450	B－5（11）10－30	須恵器	杯蓋	13.3	3.4		ロクロケズリののちロクロナデ、内面1方向の仕上げナデ	天井部水平で湾曲して尖った端部に続く	
451	A－4（5）0－20	須恵器	杯蓋	12.8	3.5		ロクロケズリののちロクロナデ、内外面に不定方向ナデ	器高低く内湾ぎみで端部丸くなる	
452	B－3（18）	須恵器	杯蓋	11.8	3.8		ロクロナデで天井部はヘラ切り、内面にユビナデ	丸みのある体部で端部尖る	
453	B－4（18）10－20	須恵器	杯蓋	10.7	4.0		ロクロナデののヘラ切り、仕上げナデ	歪みあり、体部丸く端部尖る	自然釉、窯壁付着
454	B－3（1）0－20	須恵器	杯蓋	11.3	4.0		ロクロケズリののちロクロナデ、天井部ヘラ切り	丸い体部で口縁部内湾する、端部尖る	自然釉
455	C－4	須恵器	杯蓋	11.7	4.0		ロクロケズリののちロクロナデ、内面1方向の仕上げナデ	丸い体部で口縁部内湾する、端部丸い	
456	B－3（18）	須恵器	杯蓋	11.0	3.7		ロクロナデののヘラ切り、仕上げナデ	丸みのある体部で端部尖る	
457	C－5	須恵器	杯蓋	9.8	3.6		ロクロナデののちヘラ切り	器高高く丸みを持つ、端部は丸い	
458	B－5（11）20－30	須恵器	杯蓋	9.8	3.7		ロクロナデののちヘラ切り	丸みのある体部で端部内傾し丸い	
459	A－3（14）0－20	須恵器	杯蓋	16.6	2.3		ロクロケズリののちロクロナデ、内外面とも仕上げナデ	平たいつまみ部で体部水平に延び端部は下につまみ出す	自然釉、ヘラ記号
460	C－3	須恵器	杯蓋		2.3		ロクロケズリののちヘラ切り、仕上げナデ	丸みのある体部に平たいつまみ付く	

番号	出土地・土層	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技法他	形態の特徴	備考
461	A－4（SX02西）	須恵器	杯蓋	16.8	2.9		ロクロナデから仕上げナデ	丸みのある体部で端部は下につまみ出す	自然釉
462	A－1	須恵器	杯蓋	17.3	2.8		ロクロナデののちヘラ切り、内面は1方向ナデ	ボタン状のつまみから水平に延び、端部折り曲げる	
463	C－6	須恵器	杯身	10.8	4.8		ロクロケズリののちロクロナデ、内面に当て具痕	丸みのある体部で受部は水平で立ち上がり部は薄く直になる	重ね焼きの痕跡
464	B－1（6）20－30	須恵器	杯身	9.9	5.2		ロクロケズリののちロクロナデ	丸みのある体部で立ち上がりは内傾する	自然釉
465	C－3	須恵器	杯身	10.0	4.6		ロクロケズリののちロクロナデ	立ち上がりは内傾し、端部は角張る	
466	A－1（20）20－30	須恵器	杯身	10.2	4.7		ロクロケズリののちロクロナデ	平たい底部で立ち上がりは内傾し端部は肥厚する	重ね焼きの痕跡
467	A－1（25）20－30	須恵器	杯身	10.5	4.6		ロクロケズリののちロクロナデ	立ち上がりは緩やかに屈曲しながら内傾し、端部は肥厚する	
468	A－1（20）20－30	須恵器	杯身	9.8	5.2		ロクロケズリののちロクロナデ	丸みのある体部で立ち上がりは厚く内傾する	
469	C－3	須恵器	杯身	10.4	4.7		ロクロケズリののちロクロナデ	立ち上がり屈曲しながら直になり端部は尖る、受部短く丸い	
470	B－3（17）20－30	須恵器	杯身	11.1	4.7		ロクロケズリののちロクロナデ	体部厚く丸い、立ち上がり外反し端部肥厚する	
471	B－2（23）	須恵器	杯身	12.0	3.7		ロクロケズリののちロクロナデ	器高低く底部平たく、立ち上がりは外反する	
472	B－4（1）	須恵器	杯身	12.7	3.3		ロクロケズリののちロクロナデ	器高低く体部直線的に延び、立ち上がりは直になる	
473	B－5	須恵器	杯身	10.9	4.2		ロクロケズリののちロクロナデ	立ち上がりは外反し端部は尖る	底部にヘラ記号
474	B－5（18）10－30	須恵器	杯身	11.1	3.3		ロクロケズリののちロクロナデ	器高低く立ち上がりはシャープで端部尖る	
475	B－4（16）	須恵器	杯身	11.8	3.7		ロクロケズリののちロクロナデ、内面は1方向のナデ	器肉厚く、立ち上がり短く外反する	
476	B－4（21）0－20	須恵器	杯身	12.0	4.2		ロクロケズリののちロクロナデ、底部ヘラ切り、内面ナデ	底部平たく、立ち上がり内傾し端部丸い	自然釉付着
477	B－5（11）10－20	須恵器	杯身	11.4	3.2		ロクロケズリののちロクロナデ	体部直線的で立ち上がり内傾する	
478	B－3（9）20－30	須恵器	杯身	11.6	3.9		ロクロケズリののちロクロナデ	器肉厚く、立ち上がり短く屈曲して外反する	
479	B－5（11）20－30	須恵器	杯身	11.8	3.9		ロクロケズリののちロクロナデ、内面はナデ仕上げ	底部平たく体部丸みを持ち、立ち上がり短い	自然釉付着
480	C－5	須恵器	杯身	11.4	4.0		ロクロケズリののちロクロナデ、内面は仕上げナデ	器肉厚く、立ち上がり短く外反する	底部ヘラ記号
481	A－1（25）20－30	須恵器	杯身	11.7	4.2		ロクロケズリののちロクロナデ、内面は仕上げナデ	体部は器肉厚く、立ち上がり短く内傾する	
482	B－3（18）	須恵器	杯身	11.0	3.5		ロクロナデで底部はヘラ切り	底部平坦で体部は丸みを持ち、立ち上がり短い	
483	B－4（21）	須恵器	杯身	10.6	3.7		ロクロケズリののちロクロナデ	器肉厚く、立ち上がり短く外反する、受部短い	
484	A－1	須恵器	杯身	10.9	3.3		ロクロケズリののちロクロナデ、底部粘土板使う	体部上半と立ち上がりは薄く、端部尖る	
485	B－5（12）0－20	須恵器	杯身	10.0	2.9		ロクロケズリののちロクロナデ、内面仕上げナデ	底部平坦で体部直線的、立ち上がり受部より短く尖る	
486	B－3（17）0－20	須恵器	杯身	11.1	3.3		ロクロナデで底部はヘラ切り、内面強い仕上げナデ	直線的な体部で立ち上がりは内傾する	
487	B－3（24）10－20	須恵器	杯身	9.3	3.0	4.7	ロクロナデで底部はヘラ切り、内外面とも仕上げナデ	底部平坦で体部丸い、口縁部も端部は丸い	
488	B－2（24）10－20	須恵器	杯身	9.3	3.2	6.5	ロクロケズリののちロクロナデ、底部ヘラ切り、内面ナデ	底部平坦で体部丸い、口縁部も端部は丸い	
489	A－4（5）0－20	須恵器	杯身	9.1	3.5	5.5	ロクロケズリののちロクロナデ、底部ヘラ切り	底部平坦で体部丸い、口縁部も端部は丸い	
490	C－5	須恵器	杯身	10.1	3.1		ロクロナデで底部はヘラ切り	体部丸く口縁部厚い、受部僅かに残り厚い	
491	B－3（18）	須恵器	杯身	9.9	3.8		ロクロケズリののちロクロナデ	体部歪で丸い、立ち上がり短い	
492	B－2	須恵器	杯身	9.7	2.8	5.8	ロクロナデで底部はヘラ切り	器高低く、体部歪で器肉厚い、立ち上がり・受部短い	
493	B－3（19）凹地	須恵器	杯身	9.5	3.4		ロクロナデで底部はヘラ切り	体部内湾し、端部丸い	

番号	出土地・土層	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技法他	形態の特徴	備考
494	A－2（25）0－10	須恵器	杯身	10.4	3.0		ロクロナデで底部はヘラ切り、内面1方向仕上げナデ	底部歪で体部内湾する、端部丸い	
495	B－3（14）0－10	須恵器	杯身	10.9	3.5	6.8	ロクロナデで底部はヘラ切り	底部平坦で体部内湾する、端部尖りぎみに丸い	
496	C－5	須恵器	杯身	11.6	3.9	5.9	ロクロケズリののちロクロナデ底部はヘラ切り、内面ナデ	底部平坦で体部内湾する、端部は丸い	
497	C－5	須恵器	杯身	10.6	2.9	6.8	ロクロナデで底部はヘラ切り、内面強い仕上げナデ	底部平坦で体部内湾する、端部は丸い、器高低い	
498	B－2（20）10－20	須恵器	杯身	10.8	3.5		ロクロケズリののちロクロナデ、底部ヘラ切り	底部平坦で体部内湾する、端部は尖る	
499	B－4（7）10－20	須恵器	杯身	10.7	4.0	5.2	ロクロナデで底部はヘラ切り	底部平坦で体部内湾する、端部は尖る	
500	C－5	須恵器	杯身	12.4	5.1	5.4	ロクロナデで底部ユビ整形	底部不安定で体部内湾する	
501	C－5	須恵器	杯身		2.0	6.1	ロクロナデ	底部不安定で体部内湾する	ヘラ記号
502	A－4（10）0－20	須恵器	杯身	12.4	3.8	8.6	ロクロナデで底部はヘラ切り、内面1方向のナデ	底部不安定で体部直線的に延び端部丸く反る	
503	B－3	須恵器	杯身		1.9	8.3	ロクロナデで底部はヘラ切り	底部平坦で内湾して体部に成る、高台はややふんばる	
504	A－4（10）0－20	須恵器	杯身	15.6	4.3	11.0	ロクロナデで底部はヘラ切り、ナデ	底部から体部にかけて湾曲し直線的に端部に続く、高台肥厚	
505	B－2（17）20－30	須恵器	高杯		5.7	8.6	ロクロナデ	杯部内湾し、脚部は外反し端部直立する、端部丸い	三方透孔
506	排土	須恵器	高杯		5.6	8.0	ロクロナデ、カキメ	外反ぎみに広がり、端部直立し内外に肥厚する	四方透孔
507	C－3	須恵器	高杯		4.2	6.9	ロクロナデ	短脚で大きく屈曲し、杯部も水平に延び屈曲する	
508	機械掘削	須恵器	高杯		3.3	8.0	ロクロナデ	外反ぎみに広がり、端部直立し下方に肥厚する	
509	B－3（21）0－10	須恵器	高杯	11.3	6.5	6.7	ロクロナデ、内面仕上げナデ	杯部内湾し端部丸い、脚部は外反し端部角張る	
510	B－5（7）10－20	須恵器	椀	10.8	5.7		ロクロナデ、外面下半ロクロケズリ	底部不安定で丸みを持ち、体部は直線的に延びる、端部丸い	
511	B－3（18）10－20	須恵器	椀	10.6	5.4		ロクロナデ、外面下半ロクロケズリ	底部丸みを持ち、体部直立する、沈線1条	自然釉
512	C－5	須恵器	はそう	8.1	3.5		ロクロナデ、頸部外面ユビ調整	頸部から外反し稜線・沈線を持って外傾する、端部丸い	
513	B－3（5）	須恵器	はそう		6.0		ロクロナデ、内面ユビ成形	球形の体部	波状文
514	B－1（11）0－20	須恵器	はそう		4.2		ロクロナデ、内面ユビ成形	扁平な体部	波状文
515	C－4	須恵器	短頸壷	7.4	4.5		ロクロナデ	肩の張る扁平な体部に短い直立する口縁部がつく、端部丸い	
516	C－4	須恵器	短頸壷	8.1	6.2		ロクロナデ	やや扁平な体部に短い直立する口縁部がつく、端部尖る	
517	A－1	須恵器	短頸壷	8.2	6.3		ロクロナデ	肩の張る扁平な体部に外傾する短い口縁部がつく、端部丸い	
518	C－4	須恵器	壷	8.5	7.6		ロクロナデ	肩の張る体部に外傾する口縁部がつく、端部尖る	波状文
519	B－3（11）	須恵器	壷	7.2	12.2		ロクロナデ、外面タタキ・カキメ	倒卵形の体部から外反する口縁部に続く、端部やや肥厚	波状文、自然釉
520	B－2（24）10－20	須恵器	壷		4.0		ロクロナデ	内湾する体部	
521	B－4（4）10－20	須恵器	壷		5.9		ロクロナデ	胴部上半は直線的に肩が張り頸部に続く	波状文、自然釉
522	C－5	須恵器	壷	11.6	15.1		ロクロナデ、外面タタキ・ケズリののちカキメ・ナデ	球形の体部から外傾する口縁部になり端部肥厚する	
523	B－1（8）0－10	須恵器	壷		8.4		ロクロナデ	内湾する体部から肩が張って胴部上半に続く	
524	B－3（25）10－20	須恵器	壷		5.8		静止のケズリののちロクロナデ	球形の底部から体部	
525	C－5	須恵器	壷		4.7	9.5	ロクロナデ、後仕上げナデ	平たい底部から内湾する体部に、高台は内外に肥厚する	
526	B－4（7）10－20	須恵器	脚部		3.1	9.0	ロクロナデ	外湾し端部近くで稜線を持って外傾する、端部肥厚し角張る	

番号	出土地・土層	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技法他	形態の特徴	備考
527	B－3（アゼ）	須恵器	脚部		5.8		ロクロナデ	裾部を欠くが、稜線・突帯から内傾する	
528	B－4（3）20－30	須恵器	底部		2.0	5.4	ケズリののちロクロナデ	平底で直線的に広がる	
529	C－4	須恵器	鉢	22.1	5.9		ロクロナデ	内湾する体部で端部角張りぎみ	
530	B－4（19）10－20	須恵器	提瓶	7.8	13.0		ロクロナデ	片側扁平な球形の体部からやや内湾する口縁部がつく	
531	B－4（6）10－20	須恵器	提瓶	6.4	4.8		ロクロナデ	直線的に延び、端部は丸い	
532	C－3	須恵器	提瓶	7.3	5.8		ロクロナデ	外傾し、端部は丸い	
533	B－4（11）0－20	須恵器	提瓶	8.0	6.4		ロクロナデ	やや外反する口縁部がつく、端部丸い	自然釉、土器片付着
534	B－5（11）10－20	須恵器	平瓶	7.3	3.9		ロクロナデ	水平に延びる体部から外傾する口縁部、端部丸い	自然釉
535	C－3	須恵器	平瓶	5.8	5.2		ロクロナデ	外傾する口縁部で、端部丸い	
536	D－5	須恵器	平瓶	6.7	16.9		ロクロナデ、外面下半ロクロケズリ、円板充填	扁平な球形の体部で、外傾し稜線を持って立ちあがる	
537	C－4	須恵器	平瓶		14.1		ロクロナデ	平底で扁平な球形の体部から外傾する頸部に続く	
538	B－2（23）10－20	須恵器	平瓶		9.8	18.6	ロクロナデ	平底で直線的な体部、肩部で大きく屈曲する、頸部直立	
539	C－3	新羅陶器	樽型	11.3	5.3		ロクロナデ	湾曲する体部で、側面は平坦、把手が付く	
540	C－3	新羅陶器	把手		7.5		ロクロナデ	サル？をヘラの刺突文で描く	
541	C－3	新羅陶器	把手		8.0		ロクロナデ	サル？をヘラの刺突文で描く	
542	C－4	須恵器	壷	11.9	5.3		ロクロナデ	外反する口縁部で、端部近くで端面となり、端部角張る	
543	確認調査（坪4）	須恵器	壷	17.6	5.7		ロクロナデ	外傾する口縁部で、端部肥厚する	波状文
544	C－6	須恵器	壷	17.0	5.6		ロクロナデ	外反する口縁部で、端部角張る	波状文
545	B－4（9）20－30	須恵器	壷	19.3	12.0		ロクロナデ、内外面タタキ、口縁部ヘラ描き	内湾する体部から屈曲し外反する、端部角張る	格子文
546	C－4	須恵器	甕	16.6	3.6		ロクロナデ	外反する口縁部で、端部角張る	
547	A－1	須恵器	甕	19.2	4.4		ロクロナデ	外反する口縁部で、端部肥厚する	波状文
548	A－2（アゼ）0－10	須恵器	甕	18.8	5.1		ロクロナデ	外反する口縁部で、端部肥厚する	
549	B－4（19）0－10	須恵器	甕	21.7	4.8		ロクロナデ	やや外反する口縁部で、端部近くで端面となり、端部角張る	自然釉
550	C－4	須恵器	甕	19.9	6.8		ロクロナデ、内面同心円文タタキ、外面ハケ	内傾する体部上半から頸部は外反し、端部は肥厚する	
551	B－2（19）10－20	須恵器	甕	26.1	11.0		ロクロナデ	外反する口縁部で、端部肥厚する	波状文
552	B－4（7）10－20	須恵器	甕	27.7	10.9		ロクロナデ、内外面タタキ	外反する口縁部で、端部近くで肥厚して面となり、端部丸い	波状文･刺突文
553	B－3（6）0－20	須恵器	壷	18.2	6.3		ロクロナデ、内外面タタキ	湾曲する体部から短く外反する口縁部に続く、端部肥厚する	
554	B－3（23）10－30	須恵器	壷	17.5	30.3		ロクロナデ、内外面タタキ	球形の体部で口縁部は外反し端部肥厚してから尖る	
555	B－3（18）凹地	須恵器	壷	20.9	21.5		ロクロナデ、内外面タタキ	球形の体部で口縁部は外傾し端部肥厚する	
556	B－4（9）10－20	須恵器	甕	36.7	8.9		ロクロナデ	外反する口縁部で、端部角張る	波状文、自然釉
557	A－1（25）10－30	須恵器	壷	19.5	41.8		ロクロナデ、外面タタキで上部はカキメ、内面タタキを消す	球形の体部で口縁部は外反し端部肥厚する	
558	B－4（5）	須恵器	壷		3.4		ロクロナデ	内湾する体部	波状文
559	A－5（5）20－30	須恵器	杯		1.5		ロクロナデ	内湾する	ヘラ記号

番号	出土地・土層	種　別	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技　　法　　他	形　態　の　特　徴	備　　考
560	A－1	土師器	イイダコ壷	5.2	4.9		ナデ調整、口縁部ヨコナデ	内湾する体部で、口縁部は如意状で端部肥厚する	円孔1ヶ所
561	B－1（13）20－30	土師器	イイダコ壷	6.1	7.3		ナデ調整、口縁部ヨコナデ	内湾する体部で、器肉厚く端部丸い	円孔1ヶ所
562	A－1（15）20－30	土師器	イイダコ壷		6.0	1.5	ナデ	底部に穿孔があり、体部内湾する	円孔底部に1ヶ所
563	B－4（22）	土師器	イイダコ壷		6.7	2.1	内面ユビ整形・ナデ、外面ハケ・ナデ	底部に穿孔があり、体部内湾する	円孔底部に1ヶ所
564	B－2（16）	土師器	イイダコ壷		6.0		ユビ整形ののちナデ仕上げ	底部横に穿孔があり、内湾する体部になる	円孔底部に1ヶ所
565	C－5	土師器	イイダコ壷		9.9	8.5	ユビ成形・ナデ仕上げ	釣鐘状のタイプで体部内湾し端部角張る	口縁部横に円孔1ヶ所
566	C－4	土師器	イイダコ壷		6.5		ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部小さく、内湾する体部、把手穿孔部中央凹む	
567	C－4	土師器	イイダコ壷		8.9	3.7	ユビ成形・ナデ仕上げ	小型でやや歪、体部裾に向かって細くなる	
568	C－4	土師器	イイダコ壷		8.2	3.7	ユビ成形・ナデ仕上げ	小型で、把手部ない、体部内湾する、丁寧なつくり	
569	B－3（19）10－30	土師器	イイダコ壷		10.0	4.8	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部大きく歪、体部内湾し端部丸い	被熱
570	B－3（18）	土師器	イイダコ壷		10.6	5.5	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部やや小さく、体部肩が張る、体部内湾し端部丸い	損傷著しい
571	C－3	土師器	イイダコ壷		10.0	5.2	ユビ成形・ナデ仕上げ	肩張らずに緩やか、体部中央で屈曲、端部丸くやや肥厚	
572	A－1	土師器	イイダコ壷		10.5	5.9	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部小さく肩張らない、体部内湾し端部尖りぎみ	被熱、上面にヘラ痕跡
573	B－5（6）20－30	土師器	イイダコ壷		11.6	4.5	ユビ成形・ナデ仕上げ	体部球形状に内湾する、端部尖る	
574	B－4（18）	土師器	イイダコ壷		10.4	6.2	ユビ成形・ナデ仕上げ	肩張り、体部内湾する、端部丸い	被熱、外面損傷
575	B－2（15）0－10	土師器	イイダコ壷		10.0	5.9	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部小さく、体部内傾する、端部丸い	
576	B－2（13）20－30	土師器	イイダコ壷		10.7	4.8	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部やや大きく肩張らずに、体部内湾し端部丸い	
577	B－3（25）10－20	土師器	イイダコ壷		10.4	6.1	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部大きく、角張る、体部内傾し端部丸い	上面にヘラ痕跡
578	B－3（22）10－30	土師器	イイダコ壷		11.1	5.5	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部小さく肩張らない、体部内湾し端部尖りぎみ	
579	A－1	土師器	イイダコ壷		10.5	5.4	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部小さく肩張らない、体部内湾し端部尖りぎみ	
580	B－3（16）10－20	土師器	イイダコ壷		10.7	5.5	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部小さく、体部内傾する、端部角張る	
581	A－1	土師器	イイダコ壷		9.6	5.3	ユビ成形・ナデ仕上げ	肩張らずに体部球形に内湾し、端部尖る	
582	C－5	土師器	イイダコ壷		11.1	5.6	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部やや大きく肩張らずに、体部内湾し端部丸い	
583	B－5（11）10－20	土師器	イイダコ壷		10.1	4.5	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部大きく、体部肩張り内湾する、端部丸い	被熱
584	B－4（5）	土師器	イイダコ壷		9.3	5.5	ユビ成形・ナデ仕上げ	小型で把手部角張る、体部肩張り内湾する、端部丸い	被熱
585	B－3（18）凹地	土師器	イイダコ壷		10.8	6.3	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部角張る、体部肩張り直線的に内傾し、端部尖る	
586	A－1	土師器	イイダコ壷		9.6	5.3	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部角張る、体部肩張らずに内湾する、端部丸い	上面にヘラ痕跡
587	B－5（11）20－30	土師器	イイダコ壷		12.0	4.8	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部小さく肩張らない、体部内湾し端部尖りぎみ	被熱
588	B－3（23）10－20	土師器	イイダコ壷		11.4	5.4	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部角張る、体部肩張らずに内湾する、端部丸い	被熱
589	A－1	土師器	イイダコ壷		10.2	5.6	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部小さく肩張らない、体部内湾し端部丸い	
590	B－13（18）凹地	土師器	イイダコ壷		10.8	5.2	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部角張る、体部肩張らずに内湾する、端部丸い	
591	A－1	土師器	イイダコ壷		11.3	6.3	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部小さく角張る、体部肩張らずに内傾し、端部尖る	
592	A－1	土師器	イイダコ壷		9.4	6.2	ユビ成形・ナデ仕上げ	小型で歪、体部内湾し端部丸い	

番号	出土地・土層	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	技法他	形態の特徴	備考
593	B－3（9）20－30	土師器	イイダコ壷		11.1	4.8	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部角張る、体部肩張り内傾し、端部丸い	被熱
594	B－3（19）10－20	土師器	イイダコ壷		10.8	5.3	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部角張る、体部肩張らずに内湾する、端部丸い	被熱
595	B－5（1）0－10	土師器	イイダコ壷		4.5		ユビ成形・ナデ仕上げ	把手のみ	
596	B－3（22）10－30	土師器	イイダコ壷		11.3	5.6	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部角張る、体部肩張り内湾し、端部丸い	
597	A－1	土師器	イイダコ壷		11.6	5.7	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部角張る、体部肩張らずに内湾する、端部丸い	被熱
598	B－4（5）	土師器	イイダコ壷		11.8	6.7	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部角張る、体部肩張らずに内湾する、端部丸い	
599	A－1	土師器	イイダコ壷		10.4	5.6	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部角張る、体部肩張らずに内湾する、端部丸い	
600	A－4	土師器	イイダコ壷		12.6	6.6	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部大きく、角張る、体部僅かに内湾し端部尖る	
601	B－4	土師器	イイダコ壷		12.0	6.2	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部逆台形、体部薄く僅かに内湾する、端部角張る	把手横面にヘラ記号
602	B－5（1）0－10	土師器	イイダコ壷		11.5	4.9	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部角張る、体部肩張り内湾し端部近くで外反、端部丸い	把手横面にヘラ記号
603	A－3・4	土師器	イイダコ壷		11.7	6.8	ユビ成形・ナデ仕上げ	把手部逆台形、体部肩張らずに内湾する、端部尖る	把手横面にヘラ記号
604	排土	須恵器	イイダコ壷		4.7		ユビ成形・ナデ仕上げ	把手丸く、体部肩張らずに内湾する	唯一須恵質
676	床土下面	土師器	鍋	18.6	6.5		外面タタキ、口縁部ヨコナデ	口縁部くの字で、端部外方に肥厚する、体部外傾する	中世

表2　土　錘　計　測　表

No	出　土　地　点	長さ (cm)	幅（径）(cm) 最大	幅（径）(cm) 最小	厚さ (cm)	重さ (g)	備　　考
605	C－5	8.1	2.0	1.6	1.7		
606	機械掘削	9.7	2.2	1.9	1.9		
607	C－5	8.6	2.3	1.7	1.7		
608	C－6	8.8	2.2	1.7	1.6		
609	C－5	9.4	2.1	1.8	1.8		
610	B－5遺構面	6.5	2.7	2.1	1.9		下半欠
611	B－6（8）0－10	5.5	2.1	2.1	2.0		下半欠、被熱
612	C－5	5.1	2.1	1.8	1.7		下半欠
613	D－5	4.3	2.0	1.8	1.8		下半欠
614	C－5	5.0	2.1	1.8	1.7		下半欠
615	C－5	3.6	1.4	1.2	1.2		下半欠
616	B－3（12）20－30	4.9	2.4	1.9	1.9		下半欠
617	C－5	5.3	2.4	2.3	1.9		下半欠
618	C－5	5.6	2.2	2.0	2.0		下半欠
619	C－5	6.7	2.0	1.8	1.6		下半欠
620	B－3（11）20－30	5.8	2.1	1.9	1.5		下半欠
621	B－3（17）20－30	5.4	2.6	2.0	2.1		下半欠
622	B－3（19）20－30	7.8	2.4	2.0	2.1		下半欠
623	C－6	7.1	2.2	2.0	2.0		下半欠
624	A－1・2	5.4	3.9		1.2		下半欠
625	A－1・2	10.1	4.0	3.9	3.9		
626	A－4	7.0	7.8		7.4		下半欠、羽口

表3　石　器　計　測　表

No	出土地・土層	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(グラム)	備　　考
24	C－5　炉22	棒状	14.75	3.45	2.13	185.1	あわび起こし
25	C－5　炉22	棒状	21.05	3.00	2.6	296.8	あわび起こし
41	B－5　SH01埋土	砥石	8.70	4.30	2.90	125.9	
42	B－5　SH01埋土	砥石	5.95	5.10	3.40	130.2	
49	C－4　SH02埋土	磨石	6.50	5.60	1.78	45.6	
659	C－4　黒色砂	石鏃	2.80	1.70	0.30	1.7	
660	B－4（5）黒色砂	石鏃	4.60	1.40	0.60	2.90	
661	C－5　黒色砂	石錐	3.30	3.60	0.7	9.9	
662	B－2（20）10－20	剥片	5.00	2.60	0.8	9.7	楔形？
663	B－3（4）0－10	楔形	4.20	1.40	0.3		
664	B－4（3）凹地	砥石	4.20	1.40	0.8		被熱
665	B－4（9）20－30	楔形	3.50	3.80	0.90	10.80	
666	B－3（14）凹地	楔形	5.40	5.65	2.00	60.0	
667	B－3（18）凹地	紡錘車？	7.75	7.98	2.6		
668	A－1トレンチ	石錘	9.82	9.75	7.1		
669	SX02	棒状	10.18	2.12	0.9	28.1	あわび起こし
670	C－4　黒色砂	棒状	15.75	3.80	1.55	147.8	
671	A－4（15）10－20	敲石	10.30	6.25	2.75	299.4	
672	A－1	敲石	16.40	8.05	5.25	1027.7	
673	A－1	敲石	21.55	9.35	6.15	1630	
674	A－4（20）10－20	台石	17.40	11.90	7.5	1985	
675	A－1	台石	19.90	21.25	7.7	4620	被熱
676	C－4　黒色砂	不明	21.50	18.40	8.75	2960	

表4　鉄器計測表

No	出土地・土層	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
627	B－5（7）10－20	鉄鏃	8.35	2.35	0.33	
628	B－5　SH01埋土	鉄鏃	9.70	2.85	0.39	
629	C－6　黒色砂	鉄鏃	3.90	0.95	0.42	
630	C－4　SH02埋土	鉄鏃	3.85	1.25	0.45	
631	凹地	茎	8.40	0.58	0.59	
632	B－4（6）SX02	茎	4.55	0.90	0.39	
633	B－3（8）0－10	茎	4.72	1.55	0.52	
634	B－4（12）SX02	茎	4.95	0.65	0.55	
635	A－1	茎	5.85	1.15	0.54	刀子か
636	B－4（12）SX02	刀子	4.60	1.15	0.30	
637	B－4（25）黒色砂	刀子	7.00	1.45	0.35	
638	B－4（12）SX02	鎌	17.00	2.65	0.41	
639	B－2（19）10－20	釣針	5.20	0.38	0.43	
640	B－2（18）20－30	鉄斧	6.10	4.15	1.28	
641	B－4（7）	銅鉸具	3.55	2.81	0.45	
642	A－1（25）20－30	銅鉸具	8.10	4.00	0.52	
643	B－2　SX06	釘	6.60	0.69	0.35	
644	C－4　黒色砂	釘	5.40	2.05	0.35	
645	A－4　黒色砂	釘	2.90	1.40	0.65	
646	B－2（21）10－20	釘	1.90	0.68	0.65	
647	C－3　褐色砂	釘	4.05	0.75	0.45	
648	B－2（21）10－20	釘	7.52	0.90	0.84	
649	B－5（7）0－10	釘	8.80	0.75	0.59	
650	B－3（9）20－30	釘	5.15	0.65	0.36	
651	C－5　黒色砂	茎	3.30	0.95	0.22	鉄鏃？
652	B－2（24）10－20	茎	1.90	0.35	0.31	
653	A－2（5）20－30	不明	3.85	1.52	0.75	
654	C－3　褐色砂	茎	3.80	1.12	0.65	
655	B－4（23）10－20	茎	7.00	0.95	0.64	釘？
656	C－4　黒色砂	不明	4.75	2.10	0.18	小札？
657	表採	不明	7.55	4.65	0.28	
677	機械掘削	煙管吸口	3.35	2.74	0.45	
678	B－2（12）20－30	刀子	6.80	1.95	0.55	関部、木質残る

表５　製塩土器（脚台式）計測表

出土地区	地点・遺構	Ⅰａ	Ⅰｂ	Ⅰｃ	Ⅱ	Ⅲ	脚台Ⅲ	丸底Ⅰ
Ａ－１	5		8	4	5	6		
Ａ－１	15		32	64	26	7		
Ａ－１	17				1	2		
Ａ－１	20		19	8	13	9		
Ａ－１	25		3	1	7	2		
Ａ－１	ＳＬ２１		3		2			
Ａ－１	ＳＴ０１			1				
Ａ－１		15	145	132	120	65	搬入	
Ａ－２	5		3					
Ａ－２	10		2	2	3			
Ａ－２	13			3	12	6	あり	
Ａ－２	14			6	8	10	あり	
Ａ－２	15				1	1		
Ａ－２	19				3	9		
Ａ－２	20		5	4	11	10		
Ａ－２	25		1		1	2		
Ａ－２			18	26	36	41	あり	
Ａ－３			9	10	12	13		
Ａ－４	20		1		2			
Ａ－４	ＳＸ０２		1		1	1		
Ａ－４			2		2			
Ａ－５	ＳＤ０１		2	2	6			
Ａ－５			23	3	54	2		
Ａ－６	10					2		
Ｂ－１	1			2	6	2		
Ｂ－１	2	1	7	4	3	5		
Ｂ－１	3		1	3		6		
Ｂ－１	6	2	26	20	23			
Ｂ－１	7		8	7	17	4		
Ｂ－１	8		1		2	1		
Ｂ－１	11	2	7	24	21	17		
Ｂ－１	12	4	19	16	10	9		
Ｂ－１	13		4	7	6	1		
Ｂ－１	16		8	9	6	4		
Ｂ－１	17	3	11	16	8	3	あり	
Ｂ－１	18		4	2	3	3		
Ｂ－１	21	2	7	20	18	7		
Ｂ－１	22		14	18	18	6		
Ｂ－１	23	1	4	3	1	4		
Ｂ－１	24			1				
Ｂ－１	25		2					
Ｂ－１		2	11	8	2	8		
Ｂ－２	1		8	8	5	5		
Ｂ－２	2		2	2	1	1		
Ｂ－２	3		1	3		1		
Ｂ－２	4		2					
Ｂ－２	6		2	3	2	1	あり	
Ｂ－２	7		2	1	1			

出土地区	地点・遺構	Ⅰａ	Ⅰｂ	Ⅰｃ	Ⅱ	Ⅲ	脚台Ⅲ	丸底Ⅰ
Ｂ－２	8				1			
Ｂ－２	9		2		2	3		
Ｂ－２	10		1					
Ｂ－２	11		5	10	11	5		
Ｂ－２	12				1	1		
Ｂ－２	13		2	1				
Ｂ－２	16		4	3	16	6		
Ｂ－２	17		1	1	17	1		
Ｂ－２	19			1	1			
Ｂ－２	21		10	9	10	3		
Ｂ－２	22		3	2	1	2		
Ｂ－２	23	1	1	1	2			
Ｂ－２	25	1		1			あり	
Ｂ－２			10	9	20	3		
Ｂ－３	1		4	4	5	7	あり	
Ｂ－３	2	1		1				
Ｂ－３	3			2	2	1		
Ｂ－３	4			1				
Ｂ－３	5		2	1				
Ｂ－３	7					1		
Ｂ－３	8				1	2		
Ｂ－３	9				1	4		
Ｂ－３	10					1		
Ｂ－３	11			1				
Ｂ－３	12			1	2	2		
Ｂ－３	13	1		1	1	4		
Ｂ－３	14					2		
Ｂ－３	16					1		
Ｂ－３	17				2	1		
Ｂ－３	18			2		2		
Ｂ－３	19				2		あり	
Ｂ－３	20				1			
Ｂ－３	22			1				
Ｂ－３	23			1	1	1		
Ｂ－３	24					2		
Ｂ－３			7	3	2	7		
Ｂ－３	ＳＬ２２			4	3	2		
Ｂ－４	2					1		
Ｂ－４	3			1		1		
Ｂ－４	4					1		
Ｂ－４	5			1				
Ｂ－４	6					1		
Ｂ－４	7			1	1			
Ｂ－４	8			1	1			
Ｂ－４	9	1	1			1		
Ｂ－４	10	1	2					
Ｂ－４	11				1			
Ｂ－４	13		1		1			
Ｂ－４	14		1					

出土地区	地点・遺構	Ⅰa	Ⅰb	Ⅰc	Ⅱ	Ⅲ	脚台Ⅲ	丸底Ⅰ
B－4	15				1			
B－4	17		1	2	1	1	あり	
B－4	18	1	3	3	3			
B－4	19		2		3	4		
B－4	21		3			3		あり
B－4	22		3	1	2	1		
B－4	23	1				2		
B－4	24		4	1	3	3		
B－4	ＳＬ１４		1					
B－4	ＳＸ０２				1			
B－4			8		1	2		
B－5	1						あり	
B－5	2		1		2	1		
B－5	4				1			
B－5	5		1		1			
B－5	6			1				
B－5	8	2	1		2	1		
B－5	9	2	1	2				
B－5	12	4		1	3			
B－5	15		2					
B－5	17		2					
B－5	19				1			
B－5	21		1					
B－5	22		2					
B－5	ＳＨ０１		1					
B－5			2		2			
B－6			3		1			
C－2	6		2					
C－2	11				1			
C－2	21		1	1				
C－2	25				4			
C－3	1					1		
C－3	ＳＨ０２		2					
C－3			10	2	4			
C－4			22	2	16	3		
C－5	ＳＬ２２		4		2	1		
C－5			25	4	15	2		
C－6			24		11			
D－3			1					
機械掘削			9	5	10	1		
坪1			2	3	2	1		
坪2					1			
計		48	629	536	682	372		

表6　製塩土器計測表

地区	層位	共伴遺物	口縁 グラム			体部 グラム	丸底Ⅰ グラム	備考		
			A	B	C			脚	土	須
SH01			301	655	110	0	6	1	1	0
SH02		高杯　口縁	75	50	0	378	0	1	1	0
SD01			0	60	0	480	1,090	1	1	0
ST01			0	0	0	20	22	1	0	0
SX01			0	230	125	75	159	0	0	0
SX02			3,784	12,505	2,298	6,476	466	1	1	0
SX03			312	740	0	399	15	1	1	0
SX04			0	6	0	20	0	0	0	0
SX06		カマド　マダコ　口縁	2,325	13,879	300	24,115	0	1	1	0
A1⑤	黒色土2	口縁	10	30	25	1,950	540	1	1	0
A1⑩	黒色土1		0	0	0	0	30	1	0	0
A1⑮	黒色砂3	カマド　マダコ　口縁	10	15	0	1,725	195	1	1	0
A1㉕	黒色土1	口縁	0	40	0	195	1	1	1	1
A1㉕	黒色土2	口縁	0	45	0	300	41	1	1	0
A1㉕	黒色土3	口縁	10	95	0	1,000	230	1	1	0
A2⑤	黒色土2	マダコ　高杯　口縁	15	17	10	795	509	1	1	0
A2⑤	黒色土3	高杯　口縁	0	0	5	5	35	1	1	0
A2⑩	黒色土2	高杯　口縁	0	0	0	105	1,356	1	1	0
A2⑬	黒砂3	口縁	50	0	0	680	34	1	1	0
A2⑭	黒色土1		0	20	0	0	68	1	0	0
A2⑭	黒砂2		0	0	0	11	430	1	0	0
A2⑭	黒砂3	高杯　口縁	0	15	0	585	396	1	1	0
A2⑮	黒砂1	マダコ　高杯	20	80	15	845	418	1	1	0
A2⑮	黒砂2	高杯　口縁	60	38	0	10	4,690	1	1	0
A2⑲	黒砂1	口縁	5	0	0	50	0	1	1	0
A2⑲	黒砂2	高杯	0	25	0	195	131	0	1	0
A2⑲	黒砂3	口縁	0	0	0	0	30	1	1	0
A2⑳	黒砂1	高杯　口縁	0	125	0	340	484	1	1	0
A2⑳	黒砂2	高杯　口縁	0	10	10	550	957	1	1	0
A2⑳	黒砂3	口縁	0	0	0	5	325	1	1	0
A2㉔	黒色土1		0	0	5	65	386	0	0	0
A2㉔	黒色土2		0	10	0	10	244	0	1	0
A2㉔	黒色土3	口縁	0	0	0	0	120	0	1	0
A2㉕	黒色土1	高杯　口縁	20	580	25	895	100	0	1	0
A2㉕	黒砂2	マダコ　高杯　口縁	0	260	25	570	1,166	0	1	0
A2㉕	黒砂3		0	0	0	0	60	1	0	0
A3④	黒色土1		0	80	5	270	0	0	0	0
A3④	黒色土2	口縁	0	30	0	85	16	0	1	0
A3④	黒色土3	口縁	0	85	10	0	165	1	1	0
A3⑤	黒色土1		30	55	30	1,190	6	0	1	0
A3⑤	黒色土2		8	298	22	312	1	1	0	0
A3⑤	黒色土3	口縁	0	40	0	10	0	0	1	0

地　区	層　位	共　伴　遺　物	口　縁　グラム			体部	丸底Ⅰ	備　考		
			A	B	C	グラム	グラム	脚	土	須
A３⑨	黒色砂	口縁	10	21	9	170	14	0	1	0
A３⑨	黒色土２	口縁	121	465	44	1,400	0	0	1	0
A３⑩	黒色土２	口縁	17	850	25	4,190	0	0	1	0
A３⑩	黒色土３	口縁	20	430	45	2,425	0	0	1	0
A３⑭	黒色土２	マダコ　口縁　高杯	150	1,778	93	2,739	22	0	1	0
A３⑮	黒色土２	マダコ　高杯　口縁	85	965	30	3,587	12	0	1	0
A３⑮	黒色土３		170	265	11	0	0	0	0	0
A３⑲	黒色土２	口縁	180	580	20	565	1	1	1	0
A３⑳	黒色砂	高杯　口縁	90	115	50	520	36	1	1	0
A３⑳	黒色土２	口縁	0	1,200	110	1,730	54	1	1	0
A３⑳	黒色土３		130	370	55	255	6	0	0	0
A３㉔	黒色砂	高杯　口縁	10	25	15	65	6	0	1	0
A３㉕	黒色土２	口縁	472	1,712	294	6,185	48	1	1	0
A３㉕	黒色土３	高杯	40	80	40	365	4	0	1	0
A４⑤	黒色土２	カマド　口縁	1,090	2,490	290	1,960	11	1	1	0
A４⑩	黒凹地１	口縁　高杯	80	2,008	75	4,110	61	1	1	0
A４⑩	黒凹地２	カマド　口縁	315	2,925	240	6,610	24	0	1	0
A４⑮	黒２	口縁	195	545	21	1,900	32	0	1	0
A４⑮	黒凹地３		25	733	35	2,050	22	0	0	0
A４⑳	黒色砂１	高杯　口縁	40	237	50	2,780	45	1	1	0
A４⑳	黒２	口縁	260	1,632	325	3,900	21	0	1	0
A４⑳	黒３	口縁	85	625	40	1,530	42	0	1	0
A４㉕	黒色土１		0	240	0	1,645	44	0	1	0
A４㉕	黒２		95	795	30	2,755	146	0	1	0
A４㉕	黒３	口縁	195	290	0	1,400	205	0	1	0
A５⑤	黒色土２	カマド　マダコ	2,050	660	30	5,340	52	1	1	0
A５⑤	黒色土３	カマド　高杯　口縁	270	3,400	70	8,920	267	0	1	0
A５⑩	黒色土２		200	1,960	20	3,120	6	0	0	0
A５⑩	黒色土３	高杯　口縁	0	2,535	0	3,470	992	1	1	1
B１①⑥	黒色土２	高杯　口縁	6	16	0	0	80	1	1	0
B１②⑦	黒色土２	カマド　高杯　口縁	28	50	16	0	50	1	1	0
B１⑥	黒３	口縁	0	78	0	720	83	1	1	0
B１⑥	黒色土	口縁	7	28	5	0	70	1	1	0
B１⑦	あぜ	口縁	25	10	5	0	25	1	1	0
B１⑦	黒３	高杯　口縁	0	68	0	310	44	1	1	0
B１⑧	黒色土１		30	156	0	0	0	0	0	0
B１⑪	黒色土２	口縁	13	32	0	0	0	1	1	0
B１⑪	黒３	口縁	26	23	9	1,060	106	1	1	0
B１⑫	あぜ		0	20	0	0	0	1	0	0
B１⑫	黒色土２	マダコ　口縁	0	10	0	0	20	1	1	0
B１⑫	黒３	高杯　口縁	0	38	15	0	30	1	1	0
B１⑬	黒３	高杯　口縁	0	0	0	0	0	1	1	0
B１⑭	褐色砂		0	0	0	0	10	0	0	0

地　区	層　位	共　伴　遺　物	口　縁　グラム			体部	丸底Ⅰ	備　考		
			A	B	C	グラム	グラム	脚	土	須
B 1⑯	黒色土2	高杯　口縁	7	15	11	0	30	1	1	0
B 1⑯	黒3	高杯　口縁	71	73	13	0	95	1	1	0
B 1⑰	あぜ	口縁	0	0	0	0	0	1	1	0
B 1⑰	黒色土2	口縁	5	0	5	0	126	1	1	0
B 1⑰	黒3	高杯　口縁	47	29	14	0	70	1	1	0
B 1⑱	黒3	口縁	0	0	0	0	30	1	1	0
B 1⑲	黒3	口縁	0	0	0	0	5	1	1	0
B 1⑳	黒色土2	口縁	0	7	0	0	10	0	1	0
B 1㉑	黒色土1		0	21	0	0	5	1	0	0
B 1㉑	黒色土2	口縁	35	10	5	0	40	1	1	0
B 1㉑	黒色土3	カマド　高杯　口縁	8	160	0	799	224	1	1	0
B 1㉒	黒灰色砂	口縁	8	55	12	0	35	1	1	0
B 1㉒	黒色土2	口縁	0	16	0	0	15	1	1	0
B 1㉒	黒色土3	高杯　口縁	0	365	40	0	46	1	1	0
B 1㉓	黒色土1		0	0	0	0	0	0	0	0
B 1㉓	黒色土2		0	0	0	0	0	0	0	0
B 1㉓	黒色土3	高杯　口縁	0	0	0	0	20	1	1	0
B 1㉔	黒色土3	高杯　口縁	0	15	0	0	0	0	1	0
B 1㉔	黒色土1	口縁	0	15	19	20	55	1	1	0
B 1㉕	黒灰色砂	口縁	0	0	2	0	10	1	1	0
B 1㉕	黒色土2	口縁	0	0	0	0	5	0	1	0
B 2	黒色土	マダコ　口縁	470	1,683	410	5,345	59	1	1	0
B 2①	黒色土1	口縁	0	10	0	0	20	1	0	0
B 2①	黒色土2	口縁	0	10	0	0	45	0	1	0
B 2①	黒色土3	口縁	10	20	0	25	455	1	1	0
B 2②	黒色土1	カマド　マダコ　口縁	10	0	0	0	5	0	1	0
B 2②	黒色土2	口縁	0	0	0	0	45	1	1	0
B 2②	黒砂3	高杯　口縁	0	0	0	13	250	1	1	0
B 2③	黒砂2	口縁	0	0	0	0	50	1	1	0
B 2③	黒色土3	口縁	0	5	0	10	5	1	1	0
B 2④	黒色土1	口縁	0	5	0	0	7	1	1	0
B 2④	黒色土2	口縁	0	16	0	115	25	1	1	0
B 2⑤	黒灰色砂	口縁	0	0	0	0	0	0	1	0
B 2⑤	黒色土2	口縁	0	15	0	620	22	0	1	1
B 2⑥	黒色土1	口縁	5	40	5	0	30	1	1	0
B 2⑥	黒色土2	マダコ　口縁	0	30	60	0	20	1	1	0
B 2⑥	黒色土3	口縁	10	45	0	10	280	1	1	0
B 2⑦	黒色土1		0	40	0	0	5	1	0	0
B 2⑦	黒色土2		0	0	0	0	25	1	0	0
B 2⑦	黒色土3	口縁	0	15	0	0	135	1	1	0
B 2⑧	黒色土1		0	0	0	0	0	0	0	0
B 2⑧	黒色土3	口縁	5	5	0	10	105	1	1	0
B 2⑨	黒灰色砂	口縁	10	0	0	0	55	1	1	0

地　区	層　位	共　伴　遺　物	口　縁　グラム			体部	丸底Ⅰ	備　考		
			A	B	C	グラム	グラム	脚	土	須
B２⑨	黒色土２	口縁	0	0	0	0	5	0	1	0
B２⑨	黒色土３	口縁	0	0	0	0	15	1	1	0
B２⑪	黒色土１	カマド　マダコ	20	15	10	0	30	1	0	0
B２⑪	黒色土２	口縁	35	30	5	30	505	1	1	0
B２⑪	黒色土３	口縁	55	10	0	0	565	0	1	0
B２⑫	黒色土２		30	115	5	0	45	1	1	0
B２⑫	黒色土３		0	90	0	770	92	0	0	0
B２⑬	黒色土１	口縁	0	0	0	0	10	1	1	0
B２⑬	黒色土２	口縁	0	50	0	0	0	0	1	0
B２⑬	黒色土３	カマド	105	75	30	0	5	1	0	0
B２⑭	黒砂１	口縁	0	8	0	0	5	1	0	0
B２⑮	黒色土	口縁	0	210	0	0	15	1	1	0
B２⑯	黒色土１	口縁	230	637	70	2,635	132	1	1	1
B２⑯	黒色土２	カマド　口縁	235	600	609	7,500	45	1	1	0
B２⑯	黒色土３	口縁	10	65	10	1,200	232	1	1	1
B２⑰	黒色土１	カマド　マダコ　口縁	20	130	0	0	0	1	1	0
B２⑰	黒色土２	マダコ　口縁	80	850	50	4,500	6	0	1	1
B２⑰	黒色土３	口縁	850	2,750	170	7,410	80	1	1	1
B２⑱	黒色土２		30	70	11	0	0	0	0	0
B２⑱	黒色土３	マダコ　口縁	580	2,470	140	6,960	0	0	1	1
B２⑲	黒色土２	口縁	0	45	0	0	15	1	1	0
B２⑲	黒色土３	口縁	50	5	0	0	15	1	1	0
B２⑳	黒色土２	口縁	55	160	5	1,360	11	0	1	1
B２⑳	黒色土３	口縁	0	15	0	0	0	1	1	0
B２㉑	黒色土１	マダコ	910	5,650	210	20,420	0	1	1	0
B２㉑	黒色土２	マダコ　口縁	343	2,240	75	12,920	44	1	1	1
B２㉑	黒色土３	口縁	65	270	37	90	155	0	1	0
B２㉒	黒色土１		485	2,692	64	0	0	0	1	0
B２㉒	黒色土３	マダコ　口縁	635	725	95	265	10	1	1	0
B２㉒	黒色土	マダコ　口縁	180	1,670	50	10,180	12	1	1	1
B２㉓	黒色土１		35	65	0	0	0	1	0	0
B２㉓	黒色土２	マダコ　口縁	320	610	25	0	0	1	1	0
B２㉓	黒色土３	マダコ　口縁	965	3,408	395	11,967	0	1	1	1
B２㉔	黒色土１	口縁	20	28	0	0	0	0	1	0
B２㉔	黒色土２	口縁	0	52	0	0	8	1	1	0
B２㉔	黒色土３		5	0	0	0	0	0	1	0
B２㉕	黒色土１	口縁	325	3,135	126	4,550	91	1	1	0
B２㉕	黒色土２	マダコ　口縁	50	80	0	0	0	0	1	0
B３①	黒灰砂１	口縁	1,180	5,514	421	11,285	0	1	1	0
B３①	黒色土２	マダコ　口縁	80	2,340	20	9,450	0	1	1	0
B３②	黒色土２	カマド　口縁	100	870	25	7,430	1	0	1	0
B３②	黒色土１	口縁　高杯	200	2,555	15	6,820	0	1	1	0
B３③	黒色土１		485	1,739	0	0	0	0	0	0

地区	層位	共伴遺物	口縁 グラム			体部 グラム	丸底Ⅰ グラム	備考		
			A	B	C			脚	土	須
B3③	黒色土2	カマド　口縁	240	450	100	7,700	0	1	1	0
B3③	黒色土3	口縁	103	2,715	90	2,320	8	1	1	0
B3④	黒色土1		0	30	10	0	0	0	0	0
B3④	黒色土2	カマド	175	335	10	3,710	0	1	1	1
B3④	黒色土3	カマド　口縁	10	30	5	0	0	0	1	0
B3⑤	黒色土1	カマド　口縁	0	70	0	0	0	1	1	0
B3⑤	黒色土2	カマド　口縁	31	36	0	0	0	1	1	0
B3⑥	黒色土1	口縁	919	489	205	0	0	0	1	0
B3⑥	黒色土2	口縁	100	3,210	60	6,400	1	0	1	0
B3⑦	砂層直上	口縁	33	16	5	0	0	0	1	0
B3⑦	黒色土2	カマド　口縁　高杯	700	8,630	100	14,255	1	0	1	1
B3⑦	黒色土3	口縁	210	470	85	0	0	0	1	0
B3⑧	黒色土1	口縁	15	15	1	15	0	1	1	0
B3⑧	黒色土2	マダコ　口縁　カマド	620	5,440	270	13,740	0	0	1	0
B3⑧	黒色土3	口縁	25	620	15	2,115	0	1	1	0
B3⑨	黒色土2	カマド　マダコ	35	305	0	1,055	0	1	0	0
B3⑨	黒色土3	カマド　口縁	45	545	50	4,000	0	0	1	0
B3⑩	黒色土1	カマド	10	45	0	0	0	1	0	0
B3⑩	黒色土2	口縁	10	105	0	0	0	1	1	0
B3⑪	砂層直上		0	0	0	0	0	0	0	0
B3⑪	黒色土2	カマド　口縁	230	1,170	65	6,810	3	1	1	0
B3⑪	黒色土3	口縁	125	503	60	12	0	0	1	0
B3⑫	砂層直上		5	25	0	1	0	1	0	0
B3⑫	黒色土2	カマド　口縁	375	5,502	325	15,000	11	1	1	0
B3⑫	黒色土3	カマド　マダコ　口縁	400	2,620	40	0	0	1	1	0
B3⑬	黒凹地1	カマド　口縁	1,140	7,225	165	5,380	8	1	1	0
B3⑬	黒色土2	カマド　口縁	2,460	1,628	755	3,280	0	1	0	0
B3⑬	黒色土3	口縁　マダコ	740	5,900	615	14,880	0	1	1	1
B3⑭	黒色凹地	口縁	298	541	30	0	0	0	0	0
B3⑭	黒色土2	カマド　口縁	105	130	0	0	0	0	1	0
B3⑭	黒色土3	マダコ	65	1,450	60	5,480	0	1	0	0
B3⑮	黒色土1	口縁	5	15	0	0	0	0	1	0
B3⑯	黒色土1	口縁	350	1,155	285	0	0	0	1	0
B3⑯	黒色土2	カマド　口縁	97	1,255	68	3,850	7	1	1	0
B3⑯	砂層3		70	228	20	25	0	0	0	0
B3⑰	黒色土1	口縁	405	145	130	0	0	1	1	0
B3⑰	黒色土2		2,070	3,770	550	3,990	0	0	0	0
B3⑰	黒色土3	カマド　口縁	925	4,180	455	11,355	36	1	1	0
B3⑱	黒凹地1	口縁　マダコ	5,123	37,435	2,425	44,360	0	1	1	1
B3⑱	黒色土2	口縁	1,862	11,290	670	7,640	0	1	1	0
B3⑱	黒色土3		800	355	0	2,520	0	0	0	0
B3⑲	黒凹地1		380	3,400	90	7,340	0	1	0	1
B3⑲	黒色土2	口縁　マダコ	1,830	5,830	780	15,574	1	1	1	1

地　区	層　位	共　伴　遺　物	口　縁　グラム			体部	丸底Ⅰ	備　考		
			A	B	C	グラム	グラム	脚	土	須
B３⑲	黒色土３	口縁	1,210	3,980	570	5,320	0	1	1	0
B３⑳	黒色土２	口縁	55	30	10	0	0	0	1	0
B３⑳	黒色土３	口縁	80	420	0	0	0	0	1	0
B３㉑	黒色土１	口縁	320	1,430	95	6,160	0	0	1	0
B３㉒	黒色土１		215	1,155	85	0	0	0	1	0
B３㉒	黒色土２	口縁	1,520	14,020	560	21,510	0	0	1	0
B３㉒	黒色土３	口縁	363	1,365	20	0	0	1	0	0
B３㉓	黒色土１	口縁	151	742	88	0	0	0	1	0
B３㉓	黒色土２	口縁	3,530	13,640	1,505	26,480	0	1	1	0
B３㉓	砂直上３	口縁	60	320	5	0	0	1	1	0
B３㉔	黒色土１		470	545	156	0	0	0	0	0
B３㉔	黒色土２		565	906	110	0	0	1	0	0
B３㉕	黒色土２	カマド　マダコ　口縁	105	590	55	2,660	0	0	1	0
B４①	黒色土１	口縁	285	3,655	20	7,700	0	0	1	0
B４①	黒色土２	口縁	1,665	1,660	325	8,180	12	1	1	0
B４②	黒色土１	カマド　口縁	1,400	5,115	515	13,630	0	0	0	1
B４②	黒色土２	口縁　船形土製品	559	1,302	72	0	25	0	1	0
B４②	砂直上	口縁	90	300	25	20	0	0	1	0
B４③	黒凹地１	口縁	1,305	4,173	280	7,915	0	0	1	0
B４③	黒凹地２		793	2,079	211	0	0	0	0	0
B４③	砂直上３	カマド　マダコ　口縁	235	2,850	40	8,100	24	1	0	0
B４④	黒色土２	口縁	690	715	45	0	15	1	1	0
B４④	黒色土３	口縁	0	10	0	0	0	0	1	0
B４⑤	黒色土２	口縁　石鏃	125	615	25	0	30	1	1	0
B４⑥	黒色土１	口縁	60	2,580	65	5,700	0	0	1	0
B４⑥	黒色土２	カマド　マダコ　口縁	870	4,190	195	5,525	0	0	0	0
B４⑦	黒色土１	口縁	160	2,753	175	5,565	75	0	1	1
B４⑦	黒色土２	口縁　マダコ	0	265	0	5,285	0	1	1	0
B４⑧	黒色土１		45	305	25	0	20	1	0	0
B４⑧	黒色土２	カマド　マダコ　口縁	1,345	11,742	295	15,320	57	0	1	1
B４⑧	砂上面３	口縁	0	47	0	0	55	1	1	0
B４⑨	黒色土２	カマド　口縁	35	200	6	0	10	1	1	0
B４⑨	黒色土３	口縁	18	376	0	0	55	1	1	0
B４⑩	黒色土１	カマド　口縁	10	82	0	0	30	1	1	0
B４⑩	砂直上３	口縁	0	10	0	0	25	1	1	0
B４⑪	黒色土２	カマド　口縁	73	5,134	184	5,728	29	1	1	0
B４⑫	黒凹地１		250	762	86	1,110	1	0	1	0
B４⑫	黒凹地２	口縁	261	706	4	0	0	0	1	0
B４⑬	黒色土２	マダコ　口縁	51	5,947	59	8,930	102	1	1	1
B４⑭	黒色土２	高杯　口縁	763	1,170	255	7,860	41	1	1	0
B４⑭	黒色土３		0	12	0	0	30	1	0	0
B４⑮	黒色土１	カマド　高杯　口縁	20	60	0	1,165	144	0	1	0
B４⑮	砂直上３	口縁	0	0	0	0	60	1	1	0

地区	層位	共伴遺物	口縁 グラム			体部 グラム	丸底Ⅰ グラム	備考		
			A	B	C			脚	土	須
B 4 ⑯	黒色砂 1	口縁	176	111	0	0	20	0	1	0
B 4 ⑯	黒色土 2	カマド　マダコ	763	1,170	255	7,860	41	1	1	0
B 4 ⑰	黒色土 1	マダコ　口縁	130	315	20	10	155	1	1	0
B 4 ⑰	黒色土 2	口縁	296	1,560	105	6,930	264	1	1	0
B 4 ⑱	黒色土 1	マダコ　口縁	195	1,810	15	7,950	4	0	1	0
B 4 ⑱	黒凹地 2	マダコ　口縁	2,305	18,606	1,670	22,540	770	1	1	0
B 4 ⑲	黒色土 1		70	65	0	0	35	1	0	0
B 4 ⑲	黒色土 2	カマド　マダコ　口縁	1,763	4,749	669	19,520	1,073	1	1	0
B 4 ⑳	黒色土 2	口縁	90	95	30	0	15	1	1	0
B 4 ⑳	黒色土 3	口縁	115	70	0	0	0	0	1	0
B 4 ㉑	黒色土 1	口縁	125	145	35	10	750	1	1	0
B 4 ㉑	黒色土 2	カマド　口縁	35	316	20	4,710	334	0	1	0
B 4 ㉒	黒色土 1	口縁　カマド	600	1,705	80	0	480	1	1	0
B 4 ㉒	黒色土 2	口縁　カマド　高杯	1,170	11,295	540	4,931	215	1	1	0
B 4 ㉓	黒色土 1	カマド　口縁	90	540	56	0	1,597	1	1	0
B 4 ㉓	黒色土 2	カマド　高杯　口縁	710	4,285	370	9,410	228	0	1	0
B 4 ㉔	黒色土 1	カマド　口縁	90	100	0	0	35	1	1	0
B 4 ㉔	黒色土 2	口縁	170	420	230	1,880	88	1	1	0
B 4 ㉔	黒色砂 3	口縁	12	45	0	0	130	1	1	0
B 4 ㉕	黒色土	口縁	0	490	0	1,169	9	1	1	0
B 5 ①	黒色土 1	カマド　口縁	90	410	45	5,440	14	0	1	0
B 5 ①	黒色土 2	口縁　マダコ	435	2,410	204	9,640	414	0	1	0
B 5 ①	黒色土 3	カマド　口縁	0	0	0	0	120	0	1	0
B 5 ②	黒色土 2	高杯　口縁	3,090	22,850	2,020	31,250	115	0	1	0
B 5 ②	黒色土 3	口縁	90	570	50	0	55	0	1	0
B 5 ③	黒凹地 1	カマド	280	4,605	290	7,660	15	1	1	0
B 5 ③	黒色土 2	口縁	1,957	4,035	402	9,120	64	0	1	1
B 5 ③	黒色土 3		30	40	0	0	5	0	0	0
B 5 ④	黒色土 1	マダコ　口縁	0	60	0	1,600	74	1	1	0
B 5 ④	黒色土 2	口縁	20	25	0	0	280	1	1	0
B 5 ⑤	黒色土 1	カマド　口縁	60	0	25	0	190	1	1	0
B 5 ⑥	黒色土 1	カマド　口縁	85	530	20	2,990	6	1	1	1
B 5 ⑥	黒色土 2		115	4,080	120	7,870	23	0	1	1
B 5 ⑥	黒色土 3	口縁	600	4,017	125	0	0	0	1	0
B 5 ⑦	黒色土 1	カマド　マダコ	0	235	0	3,360	30	0	0	1
B 5 ⑦	黒色土 2	カマド　高杯　口縁	400	2,320	270	11,530	58	1	1	1
B 5 ⑦	黒色土 3	口縁	35	52	15	20	665	0	1	0
B 5 ⑧	黒色土 1	口縁　高杯	0	0	0	20	25	1	1	0
B 5 ⑧	黒色土 2	カマド　口縁	10	313	10	0	290	1	1	0
B 5 ⑨	黒色土 1	口縁	0	100	5	0	115	1	1	0
B 5 ⑨	黒色土 2	カマド　口縁	23	72	0	15	180	1	1	0
B 5 ⑩	黒色土	口縁	0	40	0	0	0	1	1	0
B 5 ⑪	黒色土 1	カマド　口縁	210	2,500	160	6,720	26	1	1	0

地　区	層　位	共　伴　遺　物	口　縁　グラム			体部	丸底Ⅰ	備　考		
			A	B	C	グラム	グラム	脚	土	須
B 5⑪	黒色土2	口縁	180	1,129	1,399	12,945	457	1	1	1
B 5⑪	黒色土3	マダコ　口縁	75	670	60	4,040	2,760	0	1	1
B 5⑫	黒色土1	マダコ	0	840	5	4,520	104	0	0	0
B 5⑫	黒色土2	口縁	90	530	50	7,920	204	0	1	0
B 5⑫	黒色砂3	口縁	40	250	5	0	135	1	1	0
B 5⑬	黒色土1	口縁	0	15	0	0	0	0	1	0
B 5⑬	黒色土2	口縁	55	90	10	0	520	1	1	0
B 5⑬	黒色土3	口縁	5	15	0	0	0	1	1	0
B 5⑭	黒色砂		95	50	0	0	50	0	0	0
B 5⑮⑳	黒色土	カマド　口縁	45	40	0	0	25	1	1	0
B 5⑯	黒色土1		70	1,095	77	0	100	0	0	0
B 5⑰	黒色土1	カマド	0	930	0	4,120	204	1	1	1
B 5⑰	黒色土2	マダコ　口縁	65	275	10	2,580	374	0	1	1
B 5⑱	黒色土1		15	55	0	0	10	0	0	0
B 5⑱	黒色土2	口縁	65	175	5	0	650	1	1	0
B 5⑲	黒色土2	カマド　マダコ　口縁	9	160	5	1,880	112	1	1	1
B 5⑳	黒色土2		0	10	0	0	0	0	1	0
B 5㉑	黒色土1	口縁	85	480	55	1,730	24	0	1	0
B 5㉒	黒色土1	口縁　マダコ	60	415	105	4,280	56	1	1	0
B 5㉓	黒色土1	カマド　口縁	90	500	20	6,800	0	0	1	0
B 5㉔	黒色土1	カマド　口縁	12	63	0	10	0	0	1	0
B 6①	黒色土1		35	522	0	0	0	0	0	0
B 6②	黒色土1		0	6,960	10	6,095	114	1	1	0
B 6③	黒色土1		0	20	0	0	0	0	0	0
B 6⑥	黒色土1	口縁	15	30	50	0	0	0	1	0
B 6⑦	黒色土1	口縁	55	135	30	0	0	0	1	0
B 6⑧	黒色土1	マダコ	115	36	40	0	0	0	1	0
B 6⑨	黒色土1		98	245	12	0	0	1	0	0
B 6⑪	黒色土1		110	40	60	0	0	0	0	0
B 6⑫	黒色土1	口縁	0	35	0	0	0	0	0	0
B 6⑬	黒色土1	マダコ	60	90	0	0	0	0	0	0
C 2⑥	黒色土2	製塩.なし　高杯　口縁	0	48	0	0	0	1	1	0
C 2⑪	黒砂1	高杯　口縁	41	210	0	99	0	1	1	0
C 2⑯	黒砂1	高杯　口縁	54	488	35	2,758	36	1	1	1
C 2㉑	黒砂1	高杯　口縁	5	37	25	330	0	0	1	0
C 2㉑	黒砂2	高杯　口縁	10	680	0	2,428	81	1	1	0
C 2㉕	黒色土	高杯　口縁	0	59	0	148	0	1	1	0
C 3①	黒色土1	高杯　口縁	0	55	0	270	0	1	1	0
C 3①	黒色土2	高杯	0	15	0	40	0	0	1	0
C 3⑥	黒灰砂	土師器のみ　口縁	0	10	0	50	0	1	1	0
C 4⑧	黒色砂	高杯　口縁	0	0	0	34	6	1	1	0
C 4㉒	黒色砂	カマド	0	27	0	82	0	1	1	0

＊層位の項の1は0－10cm、2は10-20cm、3は20-30cmを表す
＊備考の項の0は無を、1は有を表す、脚は脚台式、土は土師器、須は須恵器を表す
＊その他層不明や排土出土などの土器がある

Ⅵ．おわりに

貴船神社遺跡の調査は、阪神・淡路大震災の年の平成7年7月から12月までの5ヶ月余りの日数を費やして調査を行った。兵庫県はじめての本格的な製塩遺跡の調査となり、大きな成果を得た。その成果は製塩遺跡研究者をはじめ淡路学や地方史研究の各方面から注目されるものとなった。調査は夏の酷暑の海水浴で賑わう時期から、淡路島西浦特有の強烈な西風に晒されるまでの期間現地調査を行った。遺跡は、住所が示すとおり東側に隣接して野島断層が走っている地域で、その断層崖が顕著に観察でき、野島平林の断層崖が大きくずれた状況を示している地域である。ちょうど遺跡横の駐車場から見学に行くルートに当たり，多くの見学者が訪れていた。断層の実地研修が目的であったが、通りすがりに貴船神社遺跡を垣間見て興味を示して戴いた方々も多数おられた。通常なら遺跡（歴史）に興味の有る方中心の見学であるが、各分野の方々が見学され予想外の質問や意見も多く戴いた。各地から各分野・各世代・各職種・各国の不特定多数の方々に見て戴いた数少ない遺跡ではないかと思われる。地元小学生も多数見学に来られ、足繁く通って来られた生徒も数人いた。自分たちの若い頃の考古学ボーイ姿と重ね合わせて昔の気分に浸ったが、今はどうしているだろうか。十分な説明も出来ず、彼らに貢献出来たか不安である。少なくとも野島海人と塩づくりについては大いなる興味・関心を示してくれたと思う。僅かでも淡路島・兵庫県の歴史・埋蔵文化財に関心を持ち続けていてくれたなら、担当者として幸せである。調査は多量の礫群が出土しいろいろなことを考えながら行っていた。炉と炉でない礫群との判断ができず、炉でなくても廃棄された状態に意味があるとしたら、などと考え毎日実測･写真に追われることとなった。震災復興調査として通常調査以上に速やかな対応の意識が強く、より作業に集中することになり細かい対応が出来なかった。はじめての震災復興調査として緊張もしたが、それなりの成果を上げられたものと安堵している。現地説明会にも遠くから足を運んで戴いた。多くの教示を得、多くの刺激を受けた。感謝致します。以下，調査成果のまとめを記述する。

１．製塩炉について

貴船神社遺跡では22基の製塩炉を検出した。当初2面として調査を行い，20基が上層の遺構で丸底Ⅱ式に併行する時期で、2基が下層で丸底Ⅰ式に併行する時期を考えていた。しかし、整理作業が進むとこれほどの明確な時期差はないように思われた。遺構としては，西側の一段低い部分のＡ－６で検出されたＳＤ０１だけが、純粋な丸底Ⅰ式の時期の遺構である。それ以外は、大きく丸底Ⅱ式の範疇に入ることになる。丸底Ⅱ式の中ではあるが、製塩土器の廃棄土層は浅くても20cmを越えており礫が間層に明らかに入っている。時間幅は別として確実に時間差はあるはずである。調査区南側の保存区域を除いて包含層は調査しており、遺構面としては調査した下層遺構面が最下層の面である。西側を中心に脚台式の包含層はあるものの遺構面は確認できなかった。西側で唯一確認した丸底Ⅰ式した時期が遺構面の時期と考えられる。それ以外の下層遺構面も丸底Ⅰ式の時期以降に使用されたと考えられるが、遺構は広義の丸底Ⅱ式の中に含まれる。すなわち、丸底Ⅱ式の段階に集中して構築された遺構群といえる。

ただ、丸底Ⅱ式としているが時期幅は相当ありそうである。炉跡のタイプは、①石列が複合して並んでいる石敷炉（ＳＬ０９・２０）　②礫が円形に巡る炉（ＳＬ０９）　③礫が集中する石敷炉（ＳＬ０１・０５など）　④石囲炉（ＳＬ１１・１４・１７・２２）　である。15基が③のタイプであるが，細

別が可能である。①が下面にあることから最初に営まれた炉跡で、それ以外が順次構築されていったものである。④の石囲炉は斜面の高い東側に集まっていることからも，作業工程のなかで異なる性格が推測される。

また、調査段階では丸底Ｉ式の炉跡は土器の大きさからも小規模なものを想像しており、下層面での礫群の集中部での炉跡の認定に努めた。丸底Ｉ式の小さな製塩土器の大きさに見合う規模の炉跡を想定していた。が、その後調査された和歌山市西ノ庄遺跡での丸底Ｉ式の炉跡の事例は貴船神社遺跡の石敷炉と規模で変わることはなかった。そのことからも、他の礫群は損壊を受けた炉跡の可能性は残されるが、完全な形はとどめていないと思われる。現状では小型炉跡は存在しなかった可能性は少ないと思っている。①のタイプで操業を開始し、本格的な製塩活動に入ったと思われる。その後、大きく方法を変えることなく継続し、④の石囲炉の出現で工程の変化が生じたものと思われる。

炉跡は保存された調査区南西部の状況を見てみると、炉跡同士が有機的な関係にあることが理解できる。ＳＬ０１とＳＬ０３が同じ隅円長方形のプランでほぼ同じ規模で南北に並んでいる。ＳＬ０１の東側主軸延長上に円形プランのＳＬ０５が位置している。３基の炉跡は一体の作業での遺構群と考えており、さらにＳＬ０１の延長上の粘土を張った土坑（ＳＫ０３）やさらにその東側にある整地（粘土）面と、整地面北側の竪穴住居跡（ＳＨ０１）も一連の遺構群ではと推測している。

この過程から推定すると、貴船神社遺跡の今回調査した地点では煎熬作業から行ったと考えている。前作業である採鹹過程は西側のすでに砂浜がなくなった部分に求めたい。明治時代の絵図でも調査地点の西側に３枚の水田があり、現在の海岸線とは大きく変化していることが明らかである。そのため現況から判断すると，採鹹工程部分も調査地内に求めようと思っていたが、さらに西側と考えられる。渡辺誠・山崎純男両氏の教示・指導を得て、現地で微小貝の確認を行ったが、僅かに一部で確認された以外は確認されなかった。落ち込みや土坑埋土の水洗作業を相当行ったが検出されなかったことは、調査地内での藻塩焼きを否定するものではなかろうか。因みに現在の海岸でﾎﾝﾀﾞﾜﾗは簡単に採集され、そこには当然ながら微小貝が確認されている。この点からも採鹹工程を西側に考えたい。

鹹水を調査地内に運び、煎熬工程に入るものであるが、ＳＫ０３は鹹水溜めと考え、ここから炉上の製塩土器へ鹹水を注ぐのではと思われる。次に煎熬過程も２段階あり第１工程を隅円長方形の２基の炉で、第２工程を円形の炉で行っているのではないかと考えている。調査区南西部の炉跡集中部分でしか確認されていないが、出土製塩土器の内容から考えて、少なくても貴船神社遺跡での製塩作業に関しては妥当でないかと思われる。状態の良好なのは、第１工程がＳＬ０１とＳＬ０３、第２工程がＳＬ０５のセットであるが、明らかにできるセットとして、第１工程がＳＬ１６と第２工程がＳＬ０６も同様の関係である。ＳＬ１５とＳＬ１８も第２工程の炉跡と思われる。

この工程と合わないのが、他のタイプの炉跡である。①は時期的には丸底Ⅱ式の包含層下面で僅かながらも古いことは確実であり、機能・方法も異なるものと思われるが明らかにはできない。当初は脚台式の炉跡を想定していたが、出土土器からは丸底式の時期であることは確実である。多数の炉跡よりは１段階古いことは確実である。②は丸底Ⅱ式の時期で周囲だけに礫を配するタイプで、当然機能も異なると思われるが不明である。④の石囲炉は全くタイプの違うものである。煎熬の第２工程もしくはそれ以降の作業工程に伴う遺構であろう。小型であること、遺物を多く保有していることの２点に特徴がある。特にＳＬ２２は多量の遺物があり、廃棄時に意図的な埋納を行ったかと思われる。③と④の炉跡の関係は微妙である。構築された位置が空間を異にしていることを重視すると、作業工程の違いとする方

が考えやすい。出土遺物からは明確な時期差は求められない。後にも記すが、出土製塩土器の大半が丸底Ⅱ式の段階である。傾向としての変化を想定できても、明確に時期編年することが出来なかったことに起因する。④の石囲炉の出現で焼き塩作業の工程を考慮する必要があるかもしれない。

2．製塩土器について

製塩土器は多量に出土している。脚台Ⅱ式から丸底Ⅱ式の間の時期である。すでに記したように、大半は丸底Ⅱ式の時期になる。脚台Ⅲ式は微量で、貴船神社遺跡の塩づくりの間欠期にあたる。この時期のみ搬入土器が入っているのも大きな特徴である。丸底Ⅰ式期はある程度出土量があるが、丸底Ⅱ式の出土量とは大きな隔たりがある。製塩炉も調査で確実なのは丸底Ⅱ式だけであり、この時期が貴船神社遺跡での製塩の盛期である。

丸底Ⅱ式は、今まで古墳時代後期と考えられていた。貴船神社遺跡の調査では、明らかに奈良時代にまで続くものである。丸底Ⅱ式は淡路島では比較的多くの地点から多量に出土している。それらの中にタイプ差が認められることは、すでに指摘されている。浦上雅史氏によって淡路での編年が行われており、大阪湾（広瀬氏編年）のⅡ式を淡路編年のⅡ式とⅢ式に分けられている。口縁部が開き、口径が大きくなる方が新しい傾向である。歪な土器が多く、破片（小片）から口径を検討するのは困難である。同一個体でも位置によって径が異なるものが多々ある。個体差も多くあり、器肉の厚さからも単純に分類することは出来ない。大多数の製塩土器を確実に分類することは出来なかった。しかし、それは同じ技術・集団によって継続して製塩作業を行っていた証拠になろうかと思われる。第５表の製塩土器計測表でわかるように、形式差による土器分布の特徴を示さない。２ｍ四方ごとに10㎝ずつ分層して製塩土器を取り上げ、その内容から土器の変遷（時期差）を考えるための基礎資料として調査したものであったが、明確な変化や特徴を見出すことはできなかった。すなわち、調査した炉跡群同様に１時期に集中して製塩作業が行われた可能性が高く、明確な時期差を認めることが難しいという結論となった。ただ、傾向としては大型化していくが、その変化の細かい時期は確定しがたい。奈良時代になっての変化の可能性が高い。土器のなかではマダコ壷形のものやベタ高台ふうの鉢や甑は新しい段階になって出現した器形と思われる。

今回の調査結果からは、将来的には丸底Ⅱ式は淡路編年のⅡ式とⅢ式に分けることは可能であろうと予見されるが、貴船神社遺跡の調査では明確な分離は指摘できなかった。器形として大型化する傾向にあるのは事実であるが、貴船神社遺跡の調査成果からは、単に大型化するのではなく煎熬過程の工程の違いによる製塩土器の器形変化があるのではないかと考えている。煎熬の第１工程を甕形などの大型土器を使用し、第２工程を鉢形などの小型土器を使用したのではないかと想定している。当然、逆の変化も考えられるが、土器量の多さと塩（Ｃａ分やその変化物）の付着度を理由としている。炉跡の長方形と円形の関係に準じている。原則的にこの方法が継続され、ある時期に石囲炉の出現による変化と新しい器種の出現によって１つの画期が生じたと思われる。２つの変化は、同時期ではなく新器種の方が遅れていると思われる。この２つの生産方法の変化によって、製塩土器全体にも少なからず変化をあたえたのではないかと、予見している。特にマダコ壺は同型の土器が内陸部にも運ばれていることから、焼塩に伴う土器で、また容器としても利用されていたことを想像させる。今後の検討課題であるが、淡路の塩を考える上に大きな意味を有する資料ではないかと考えられる。また、同様に新たな土器の中に、甑や竈系統の土器が含まれている。これら一群は、貴船神社遺跡周辺ひいては淡路島での土器製塩の終

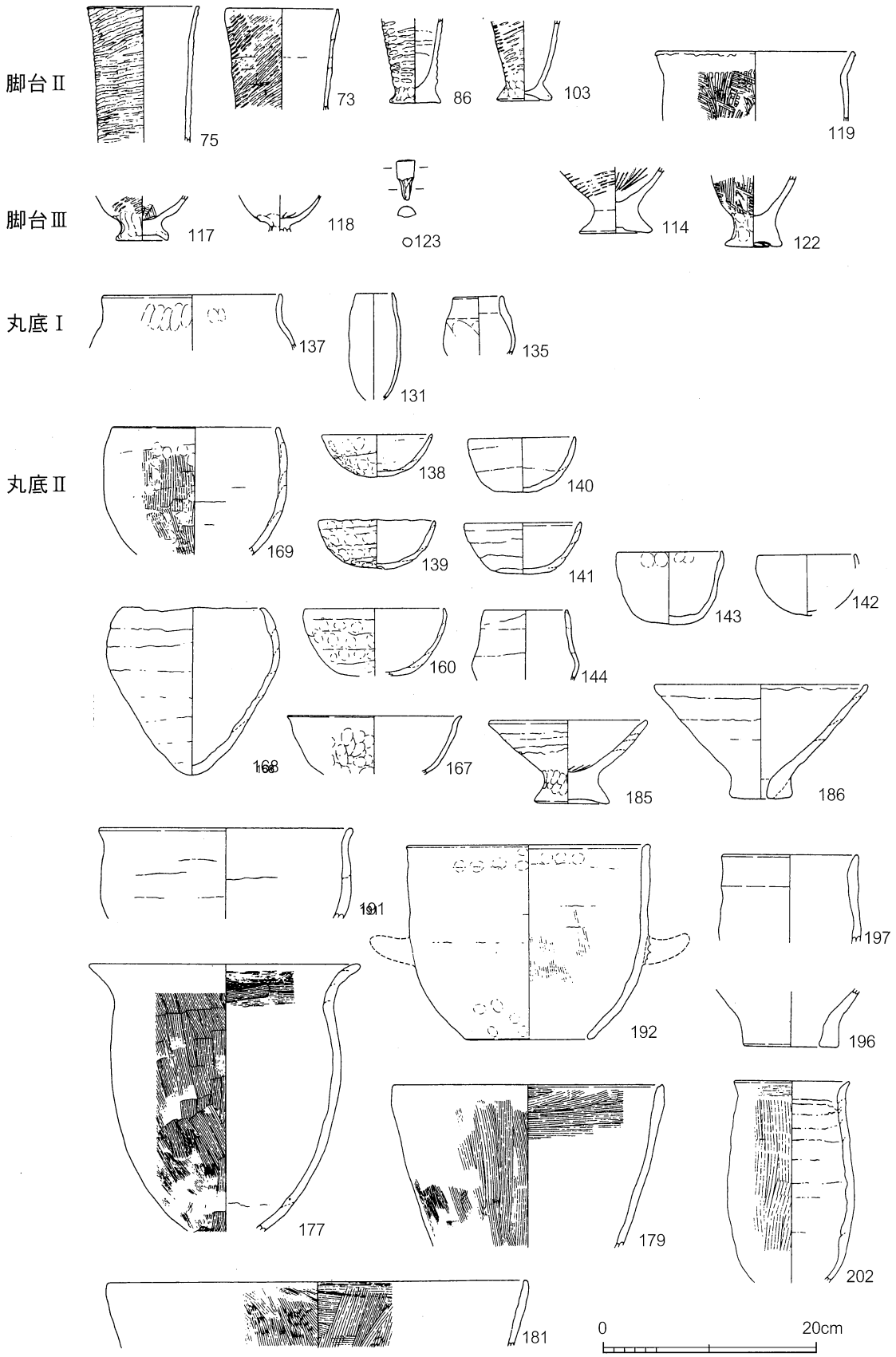

脚台Ⅱ
75
73
86
103
119
脚台Ⅲ
117
118
123
114
122
丸底Ⅰ
137
131
135
丸底Ⅱ
169
138
140
139
141
143
142
160
144
168
167
185
186
191
197
192
196
177
179
202
181
0
20cm

図96　製塩土器編年図

わりを示す資料ではないかと考える。鉄釜などの鉄製容器の使用と竈系遺物を使用する製塩作業へと移行していったのではないかと思われる。ただ、丸底Ⅲ式と通常編年される器肉の厚いタイプの製塩土器とは異なった流れを持っていると考えられる。律令期に入ってからの、塩づくりの変化と体制の変化の両方があるものと思われる。

淡路の中でも津名郡と三原郡の製塩土器は異なっている。今までの資料では、三原郡の方が早く津名郡に移行していったと考えられていた。最近の調査で津名郡でも脚台Ⅱ式の段階から東浦の諸遺跡や貴船神社遺跡で製塩が行われていることが明らかになってきた。土器の胎土も異なっている。丸底式の段階になると変化は大きくなる。備讃瀬戸とは津名郡の土器は異なっている。Ⅰ式の土器にﾀﾀｷﾒは全く認められない。塩の生産が一元的であるとすれば、多少の流れの変化があることになる。現在、三原郡で丸底の良好な資料はなく、津名郡の方が主体を占めていたと想定される。ただ、土器製塩の後は地形的に考えて、津名郡では入り浜がないことから、三原郡などへ塩づくりが移動することは確実である。

関係者の理解の元に、貴船神社遺跡では遺構の一部が保存されることとなった。調査の経緯が緑のみちしるべ事業であったことも幸いしたが、多くの方々の努力によるものである。兵庫県洲本土木事務所の担当の方々や多くの知恵を与えて戴いた研究者やより良い検討を加えて戴いた担当者の方々や工事関係者に感謝致します。盛夏から強い西風が吹き荒れる初冬の時期まで慌ただしく調査を行った。順調に作業を支えて戴いた方やその後の整理作業に携わって戴いた方の協力があって完成したものです。ありがとうございました。

現在、現地は『野島の海人』のモニュメントとともに、説明板や遺跡理解のための模型などが施設内の随所に見られる。遺跡主体の施設ではないが、多数の方に利用され、遺跡を多少なりとも理解戴ければ幸いである。逆に、不特定多数の方が利用できる施設であることを考慮すれば、社会教育的により良い施設であろうかと思われる。出土資料や本報告とともに多くの方々に利用・活用されることを望むものである。

写真８　　現在の貴船神社遺跡（野島大川公園）

炉　跡　群（西から）

炉（ＳＬ）17（西から）

堆　積　状　況（ＳＸ05と炉８）

新　羅　陶　器

製塩土器（脚台・丸底Ⅰ）

製塩土器（丸底Ⅱ）

製塩土器（丸底Ⅱ・Ⅲ）

出　土　遺　物

国土地理院撮影　空中写真

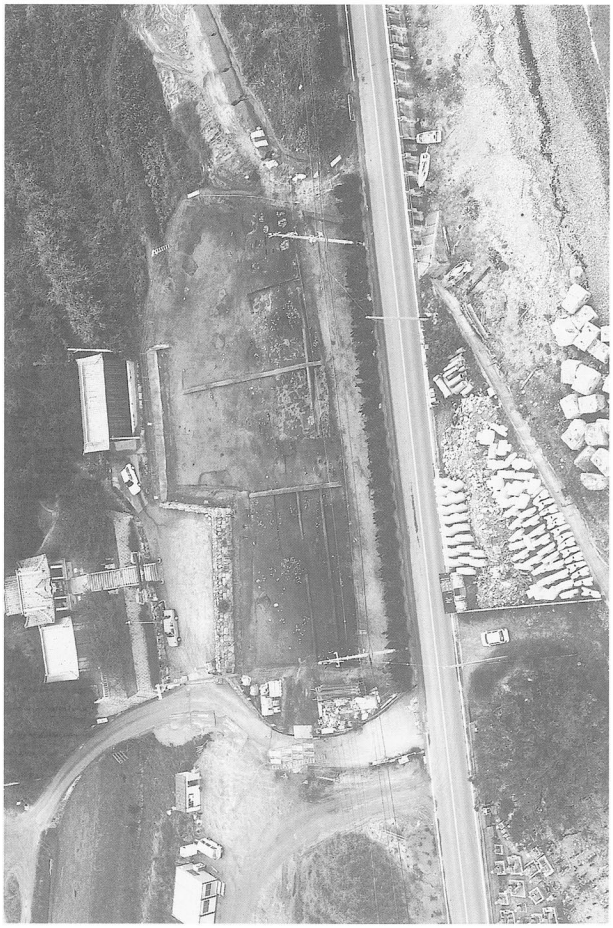
貴船神社遺跡　空中写真（南東上空から）

貴船神社遺跡　空中写真（南西上空から）

貴船神社遺跡　空中写真（北東上空から）

貴船神社遺跡　空中写真（上空から）

図版 4



空中写真（西上空から）

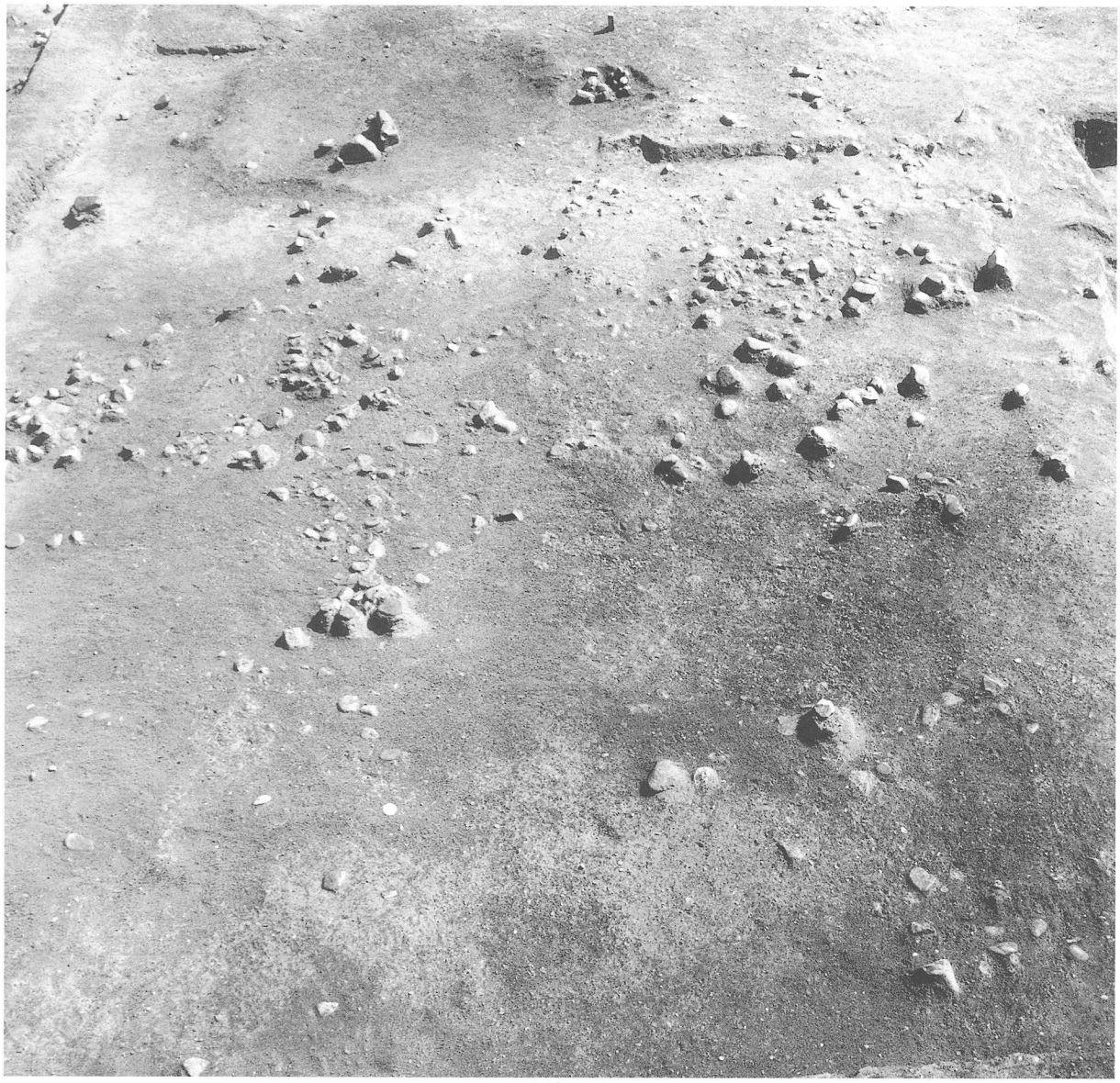
空中写真（北上空から）

空中写真（南東上空から）

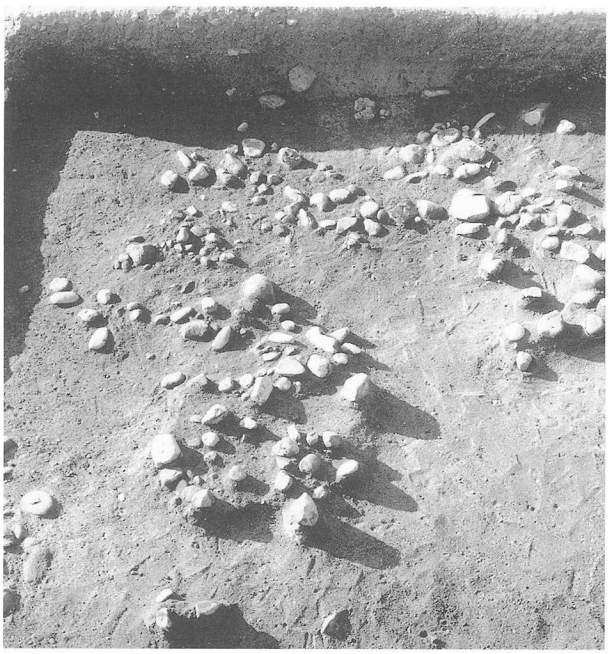
空中写真（南上空から）

調査地全景（北から）

調査地全景（南から）



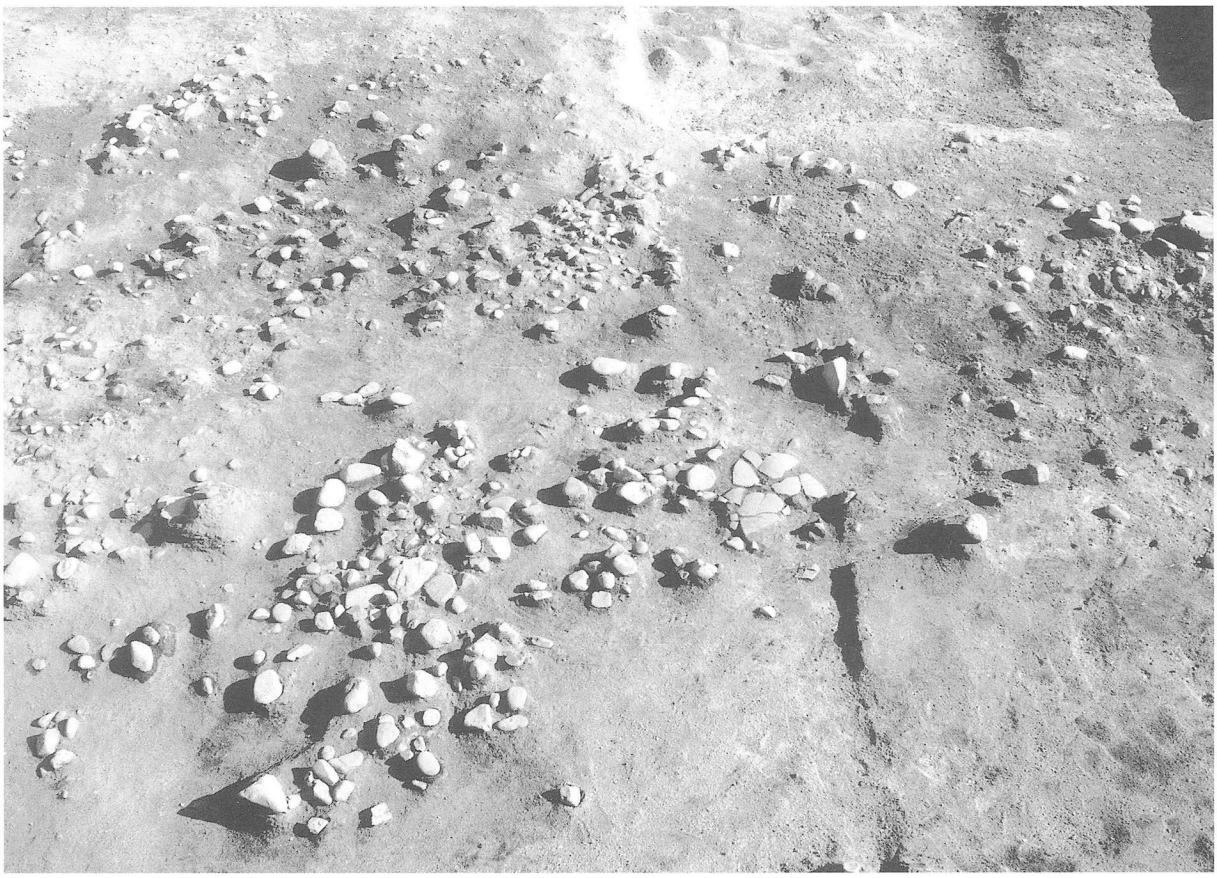
Ｂ－３・４　礫検出状況（西から）



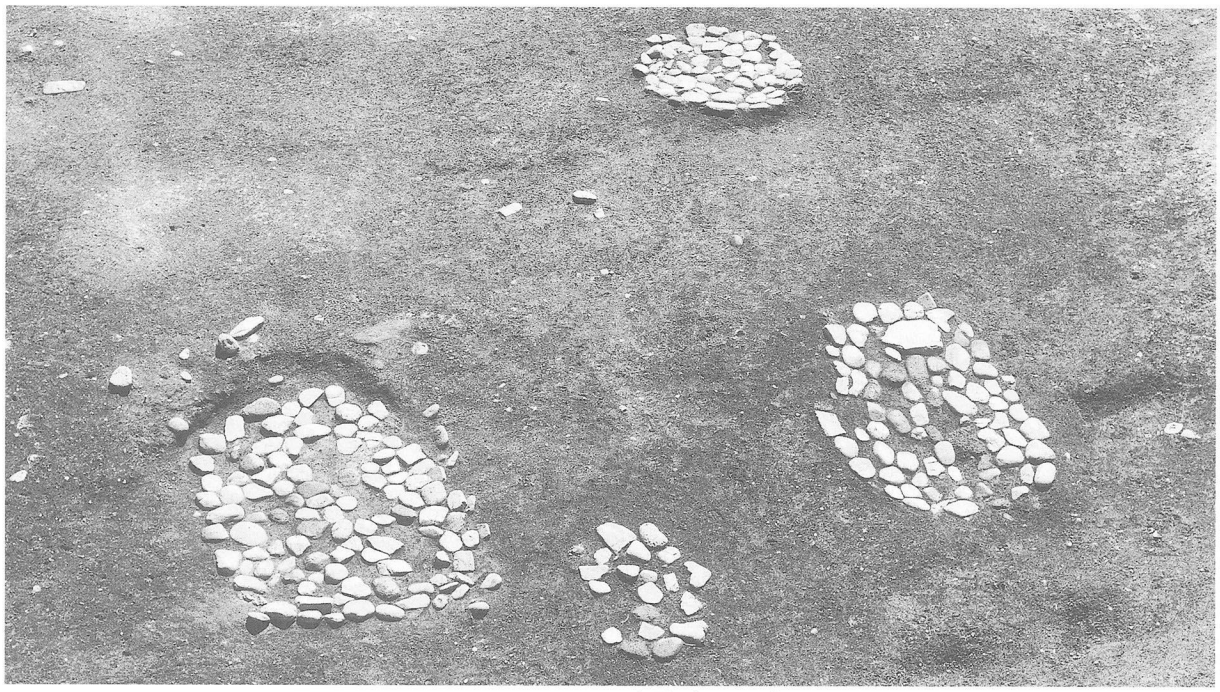
Ｂ－３　礫検出状況（西から）

Ｂ－４　礫検出状況（東から）

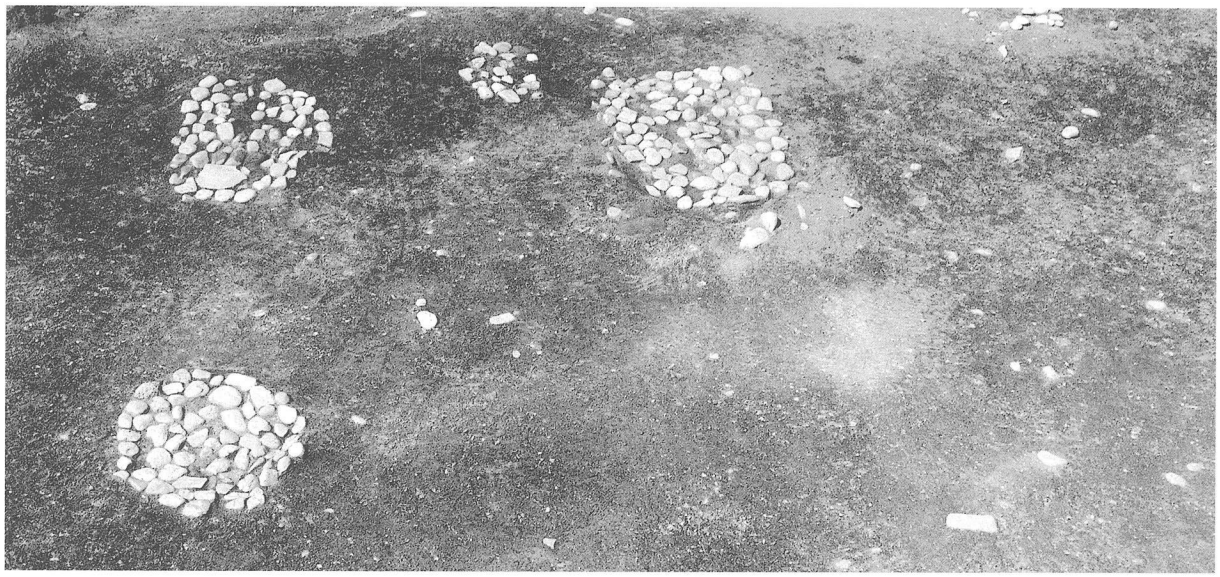
C－4　礫検出状況（西から）



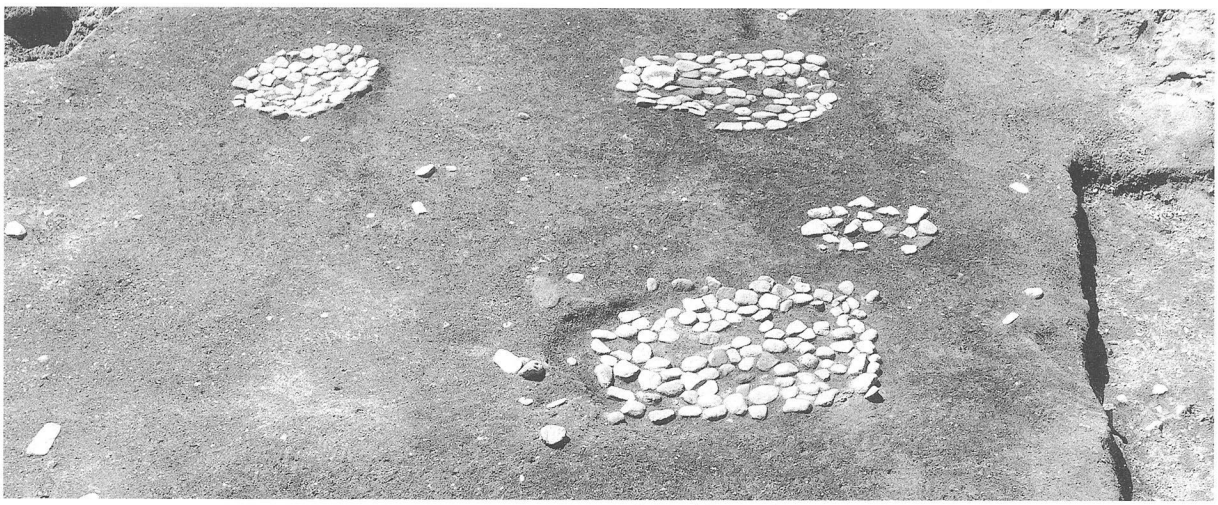
B－5　礫検出状況（西から）



ＳＬ０１～０５　全景（西から）

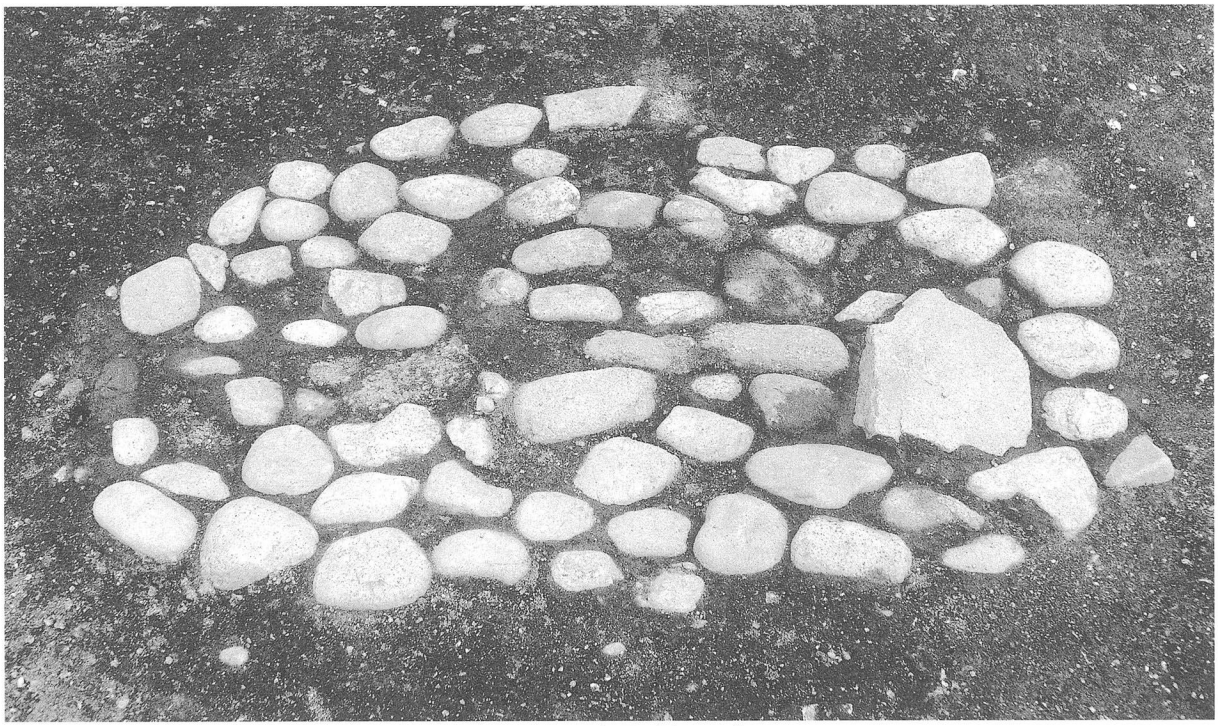


ＳＬ０１～０５　全景（東から）

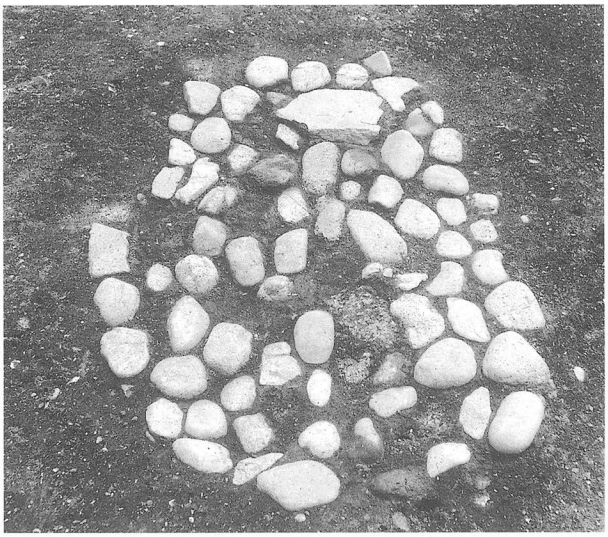


ＳＬ０１～０５　全景（南から）

ＳＬ０１～０３　検出状況（西から）

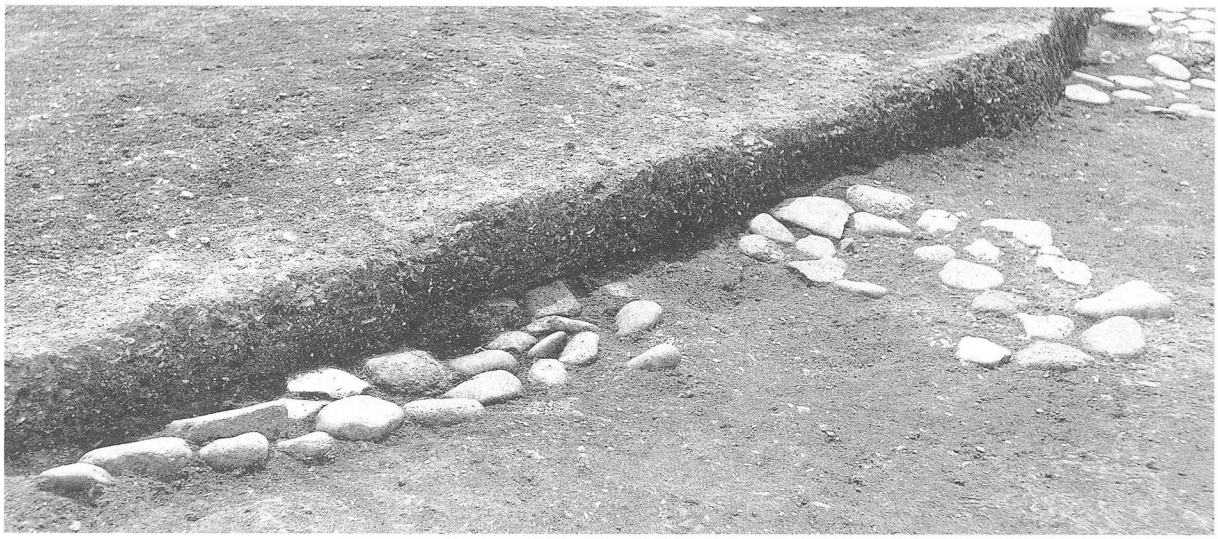


ＳＬ０１　全景（南から）

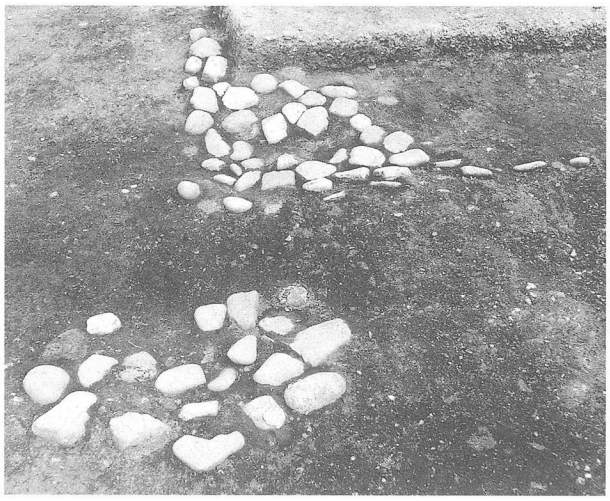


ＳＬ０１　全景（西から）

ＳＬ０１　断ち割り（西から）

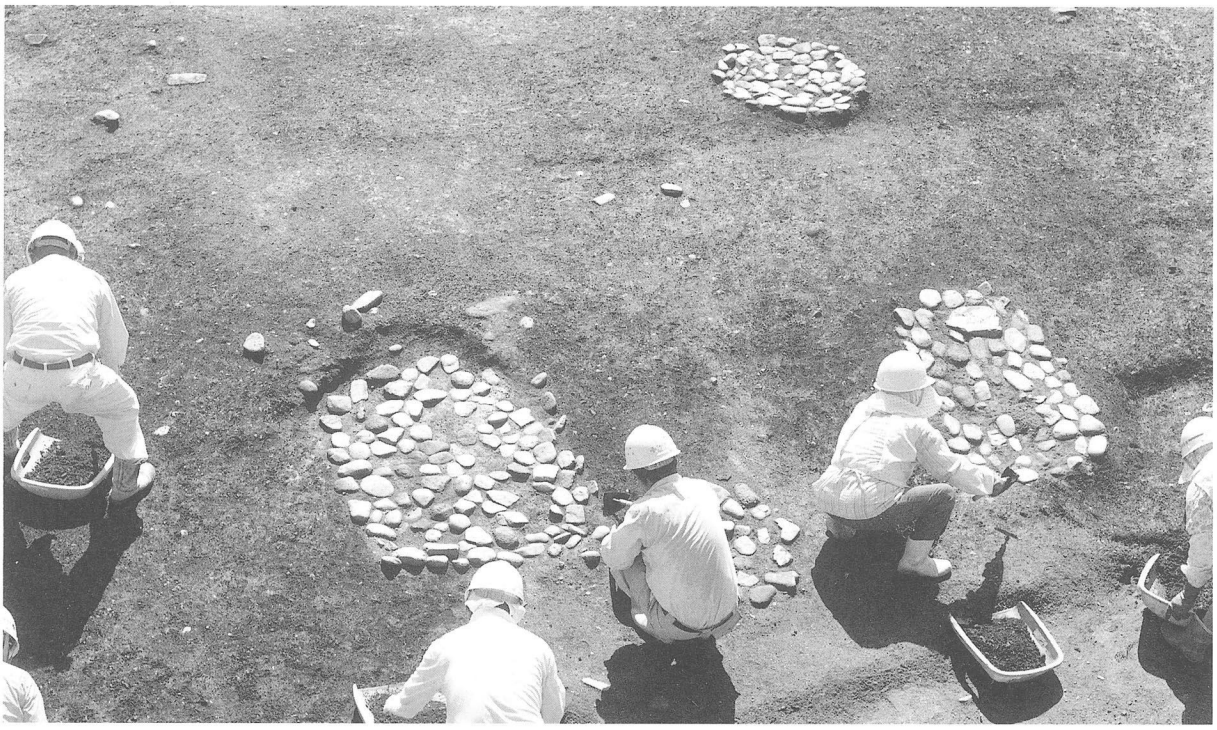


ＳＬ０２・０３　検出状況（北西から）



ＳＬ０２・０３　全景（南から）

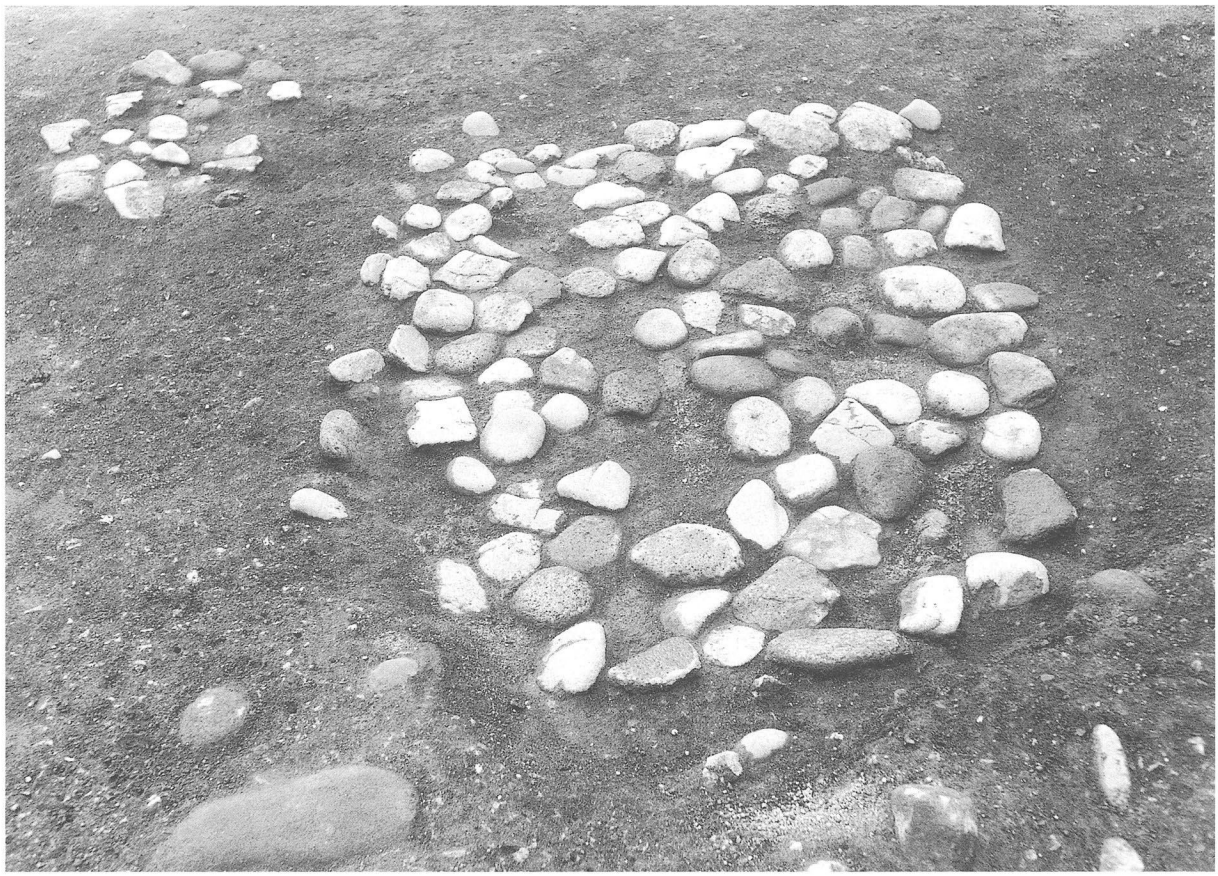
ＳＬ０４（西から）



ＳＬ０１～０５　検出状況（西から）

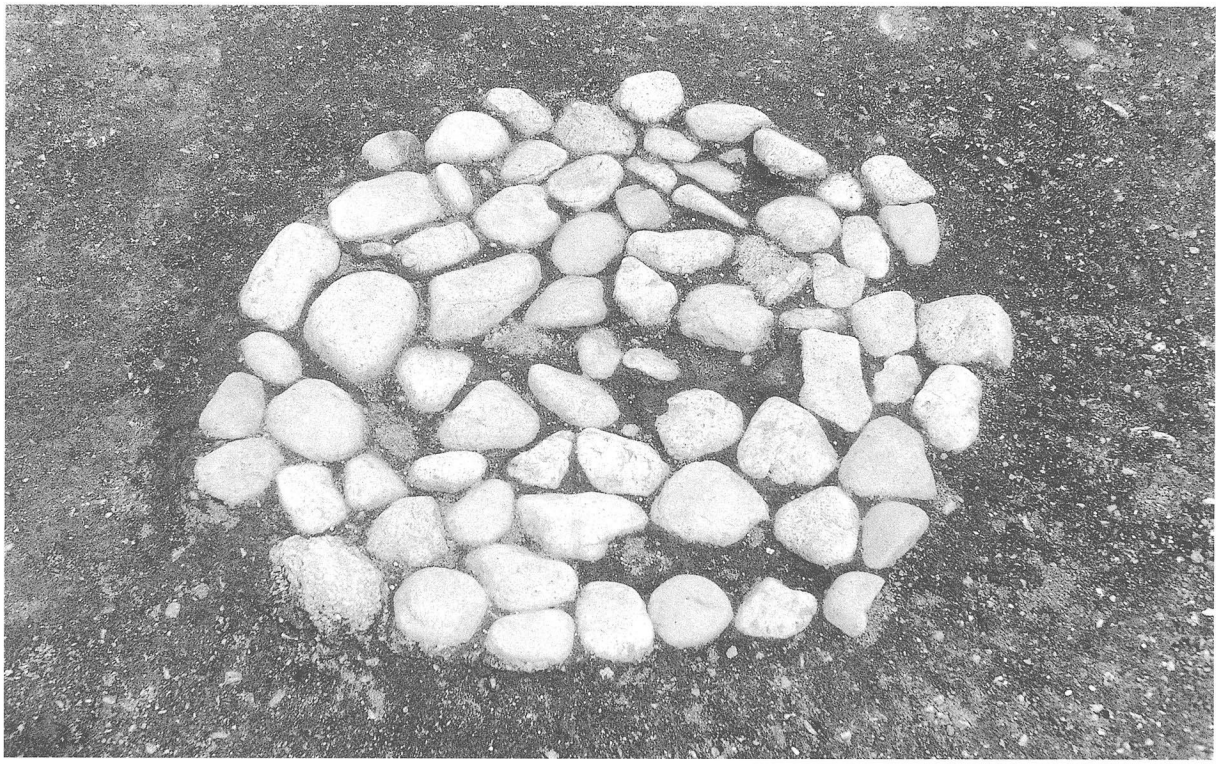
炉跡群（東から）

ＳＬ０３　採鹹土抗（ＳＫ03）全景（西から）

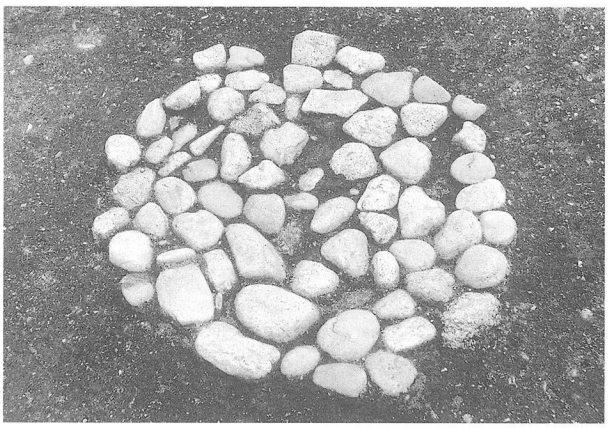


ＳＬ０３全景（西から）

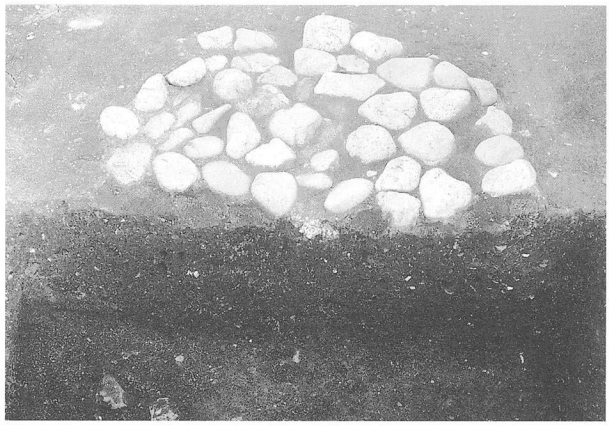
ＳＬ０１～０５　全景（西から）



ＳＬ０５　全景（南から）



ＳＬ０５　全景（西から）



ＳＬ０５　断ち割り（西から）

ＳＬ０６・０７　全景（西から）

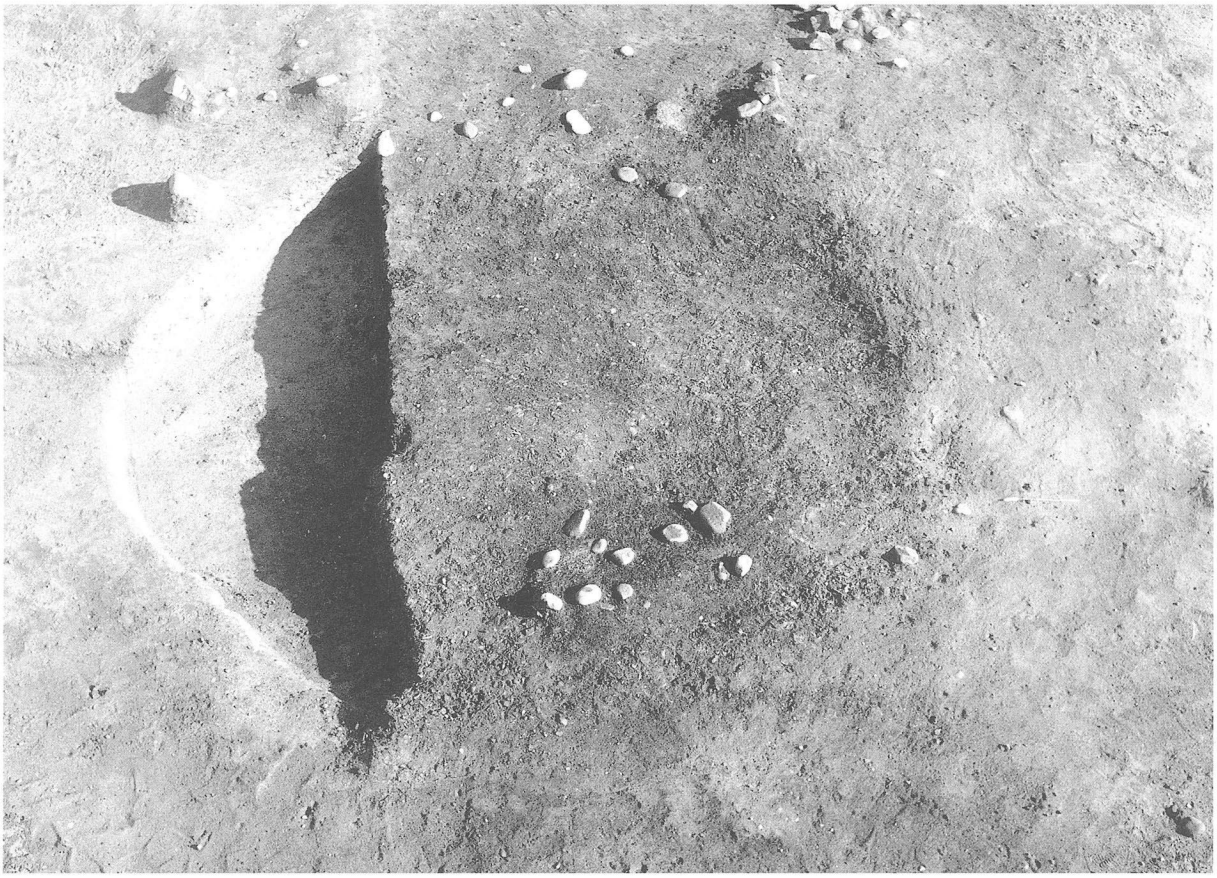
ＳＬ０６　全景（西から）

ＳＬ０７・０９　全景（北から）

ＳＬ０７･０９　全景（西から）

ＳＬ０７　堆積状況（西から）

ＳＬ０７　全景（東から）



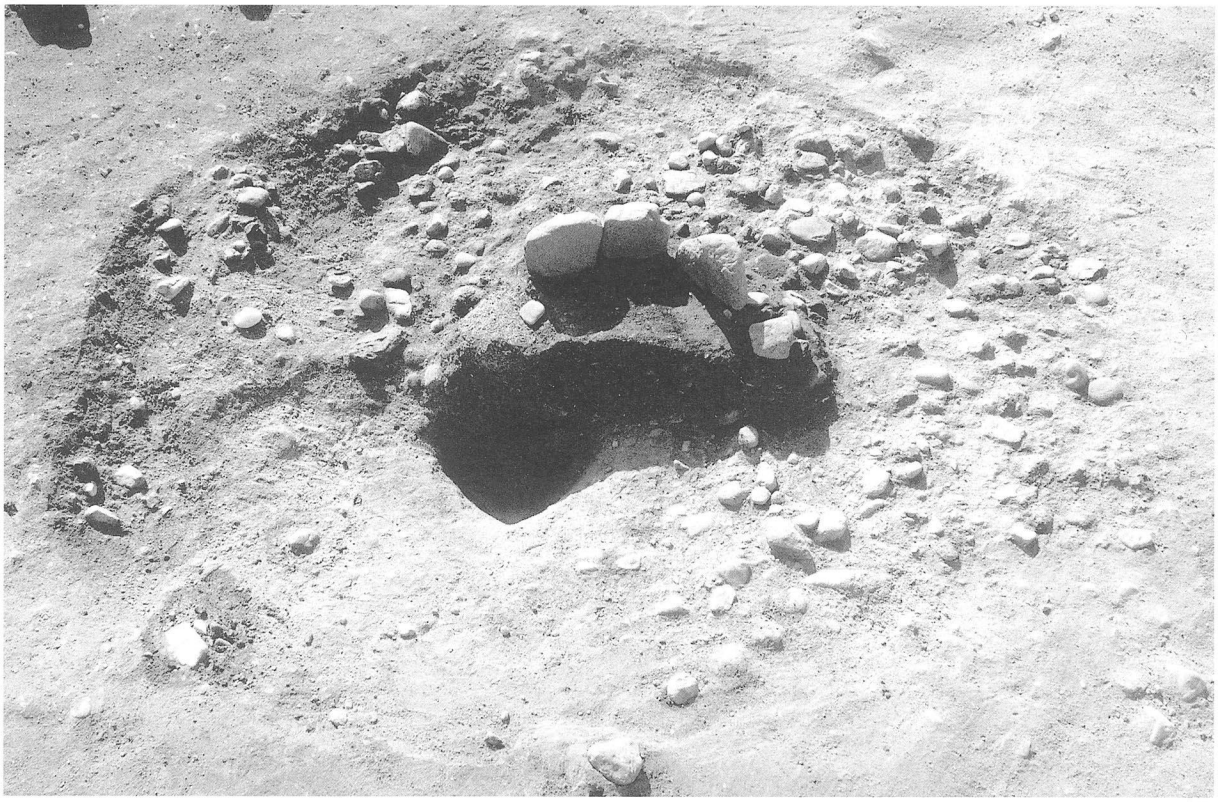
ＳＬ０８・１０と黒凹地（西から）

ＳＬ０８　全景（西から）

ＳＬ１０　全景（北西から）

ＳＬ０８　全景（西から）

ＳＬ１０　下層（東から）

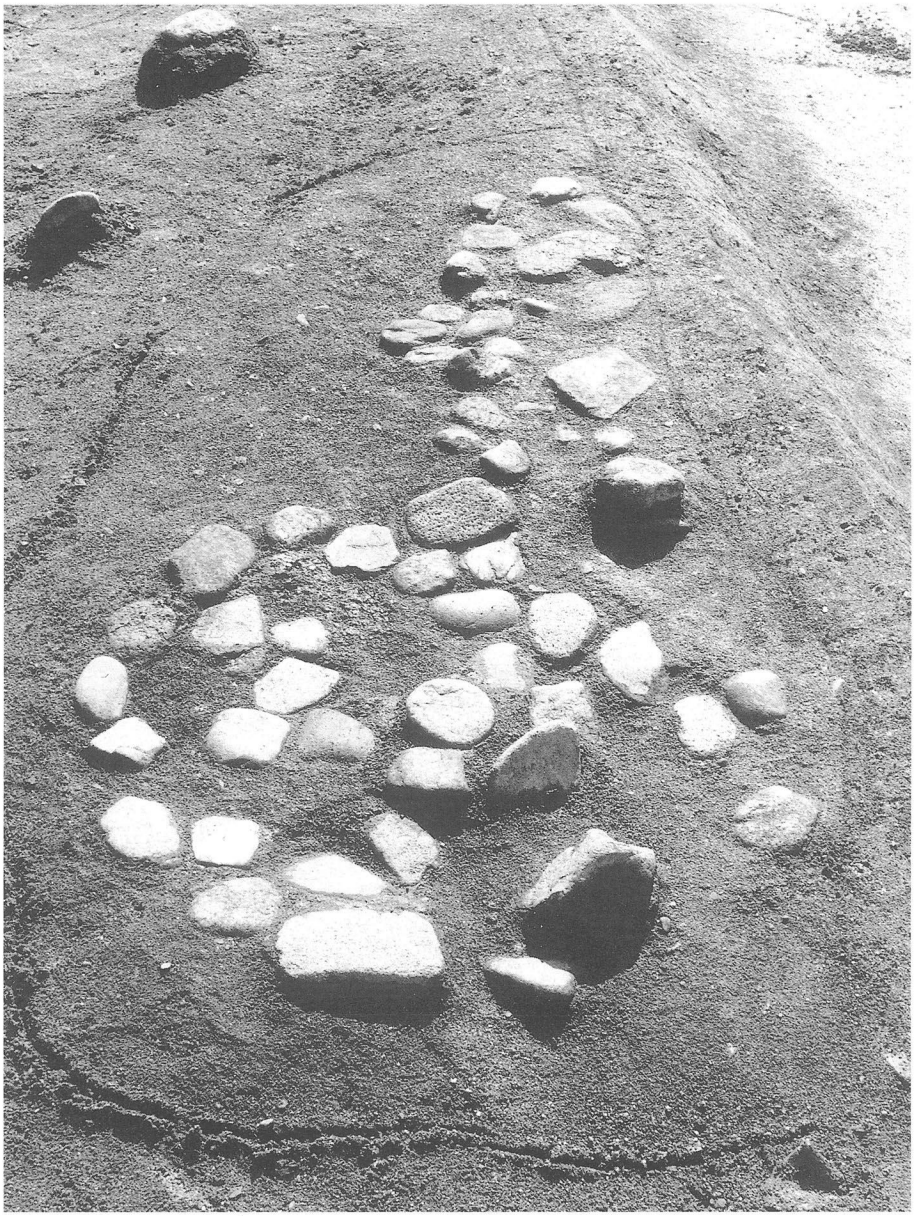


ＳＬ１１と黒凹地（北から）

ＳＬ１１　全景（東から）

ＳＬ１１　断ち割り（北から）

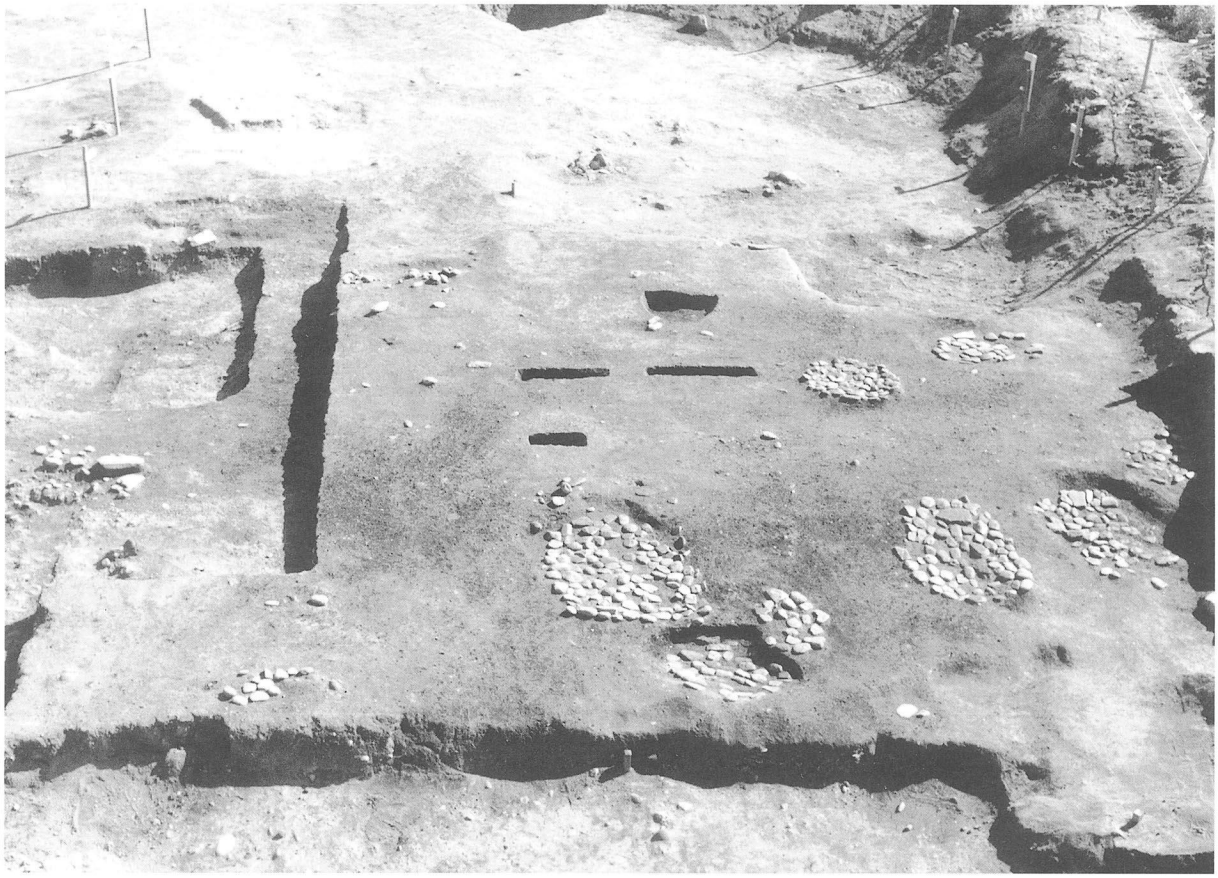
ＳＬ１１　全景（北から）



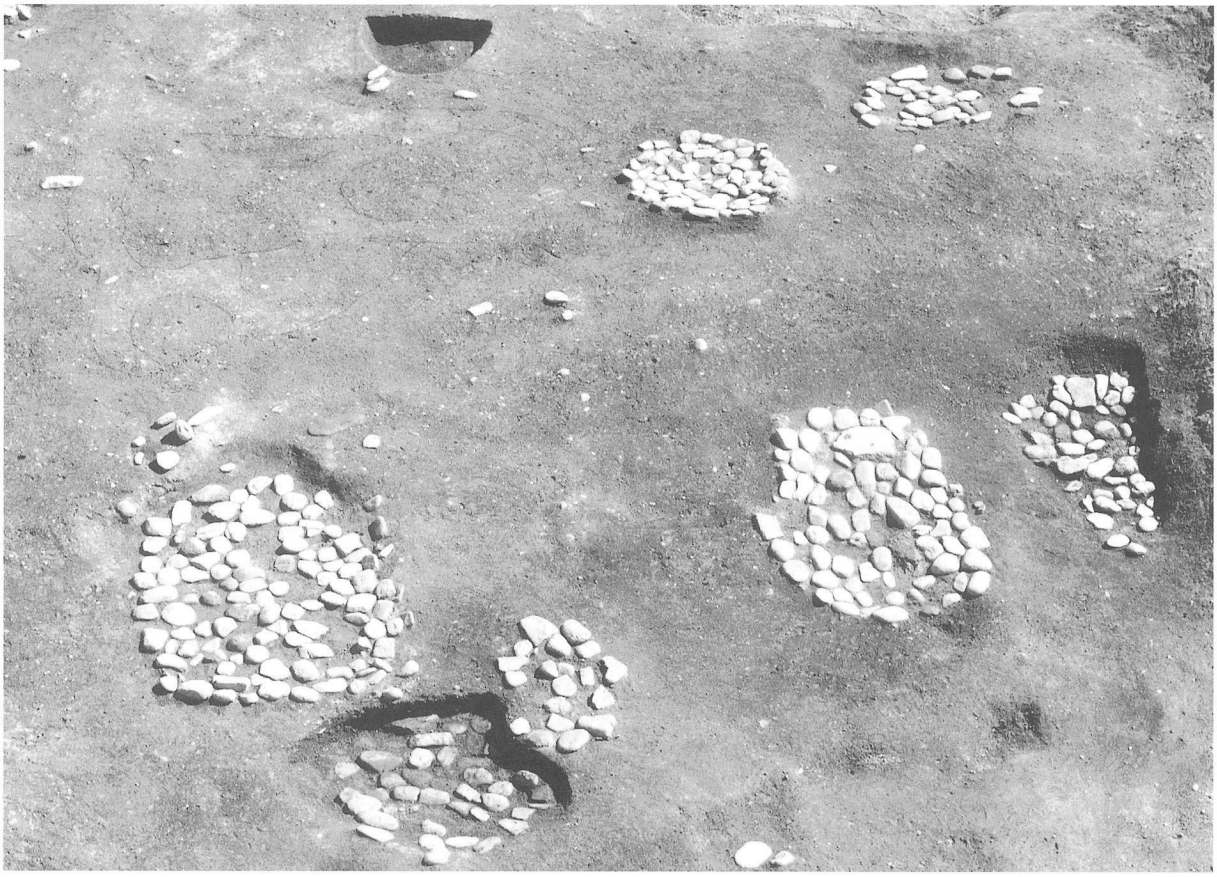
ＳＬ１２・１３　全景
（北から）

ＳＬ１２・１３　全景（西から）

南側炉跡群全景（西から）



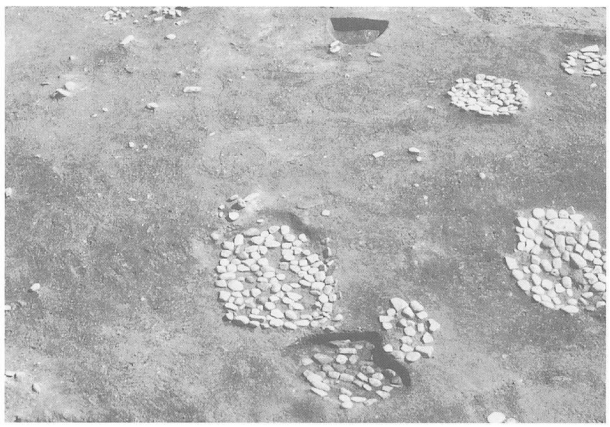
南側炉跡群　全景（西から）



南側炉跡群　全景（西から）

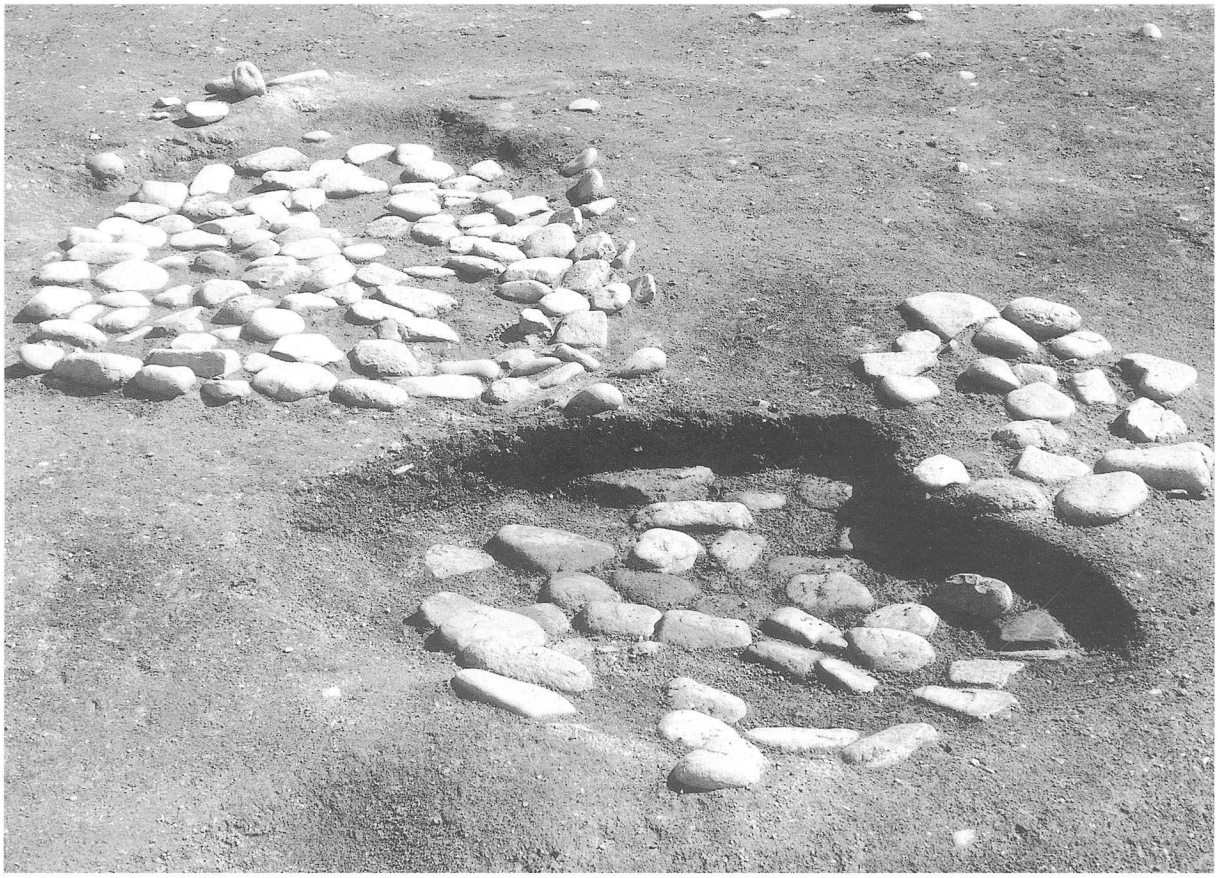
南側炉跡群　全景（西から）

ＳＬ０１とＳＬ１６（南西から）



南側炉跡群　全景（西から）

ＳＬ１５（西から）



ＳＬ１５とＳＬ０２・ＳＬ０３の切り合い（西から）

ＳＬ０１とＳＬ１６（西から）

ＳＬ１７　全景（西から）

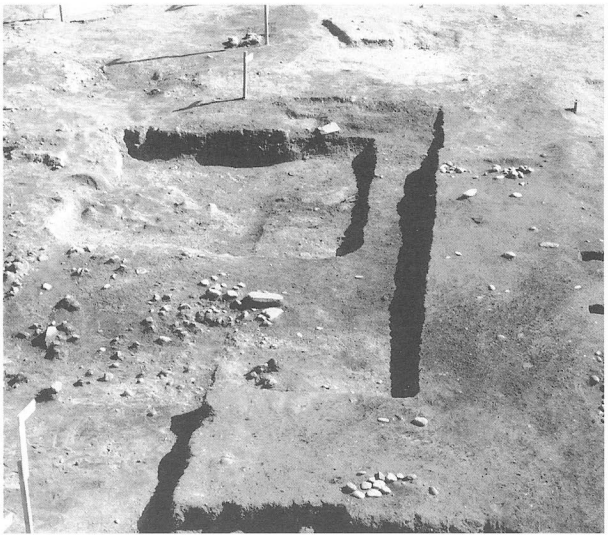
ＳＬ１７　全景（南から）

ＳＬ２２　全景（東から）

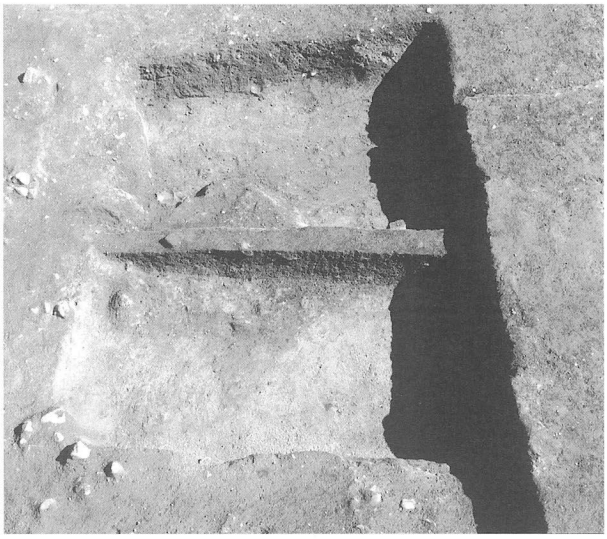
ＳＬ２２　全景（南から）

ＳＬ１４　全景（西から）

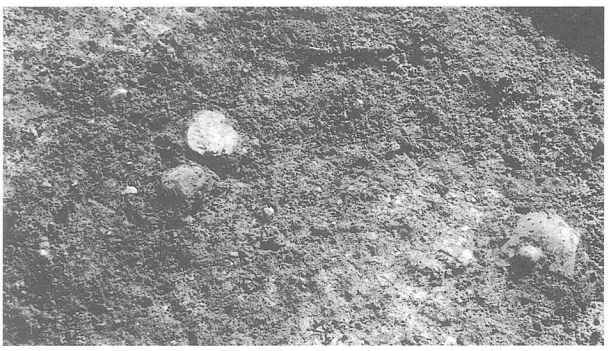
ＳＬ２０　全景（西から）

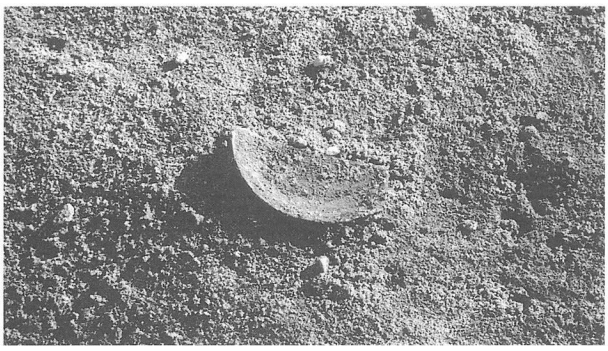


ＳＨ０１と炉跡群（西から）

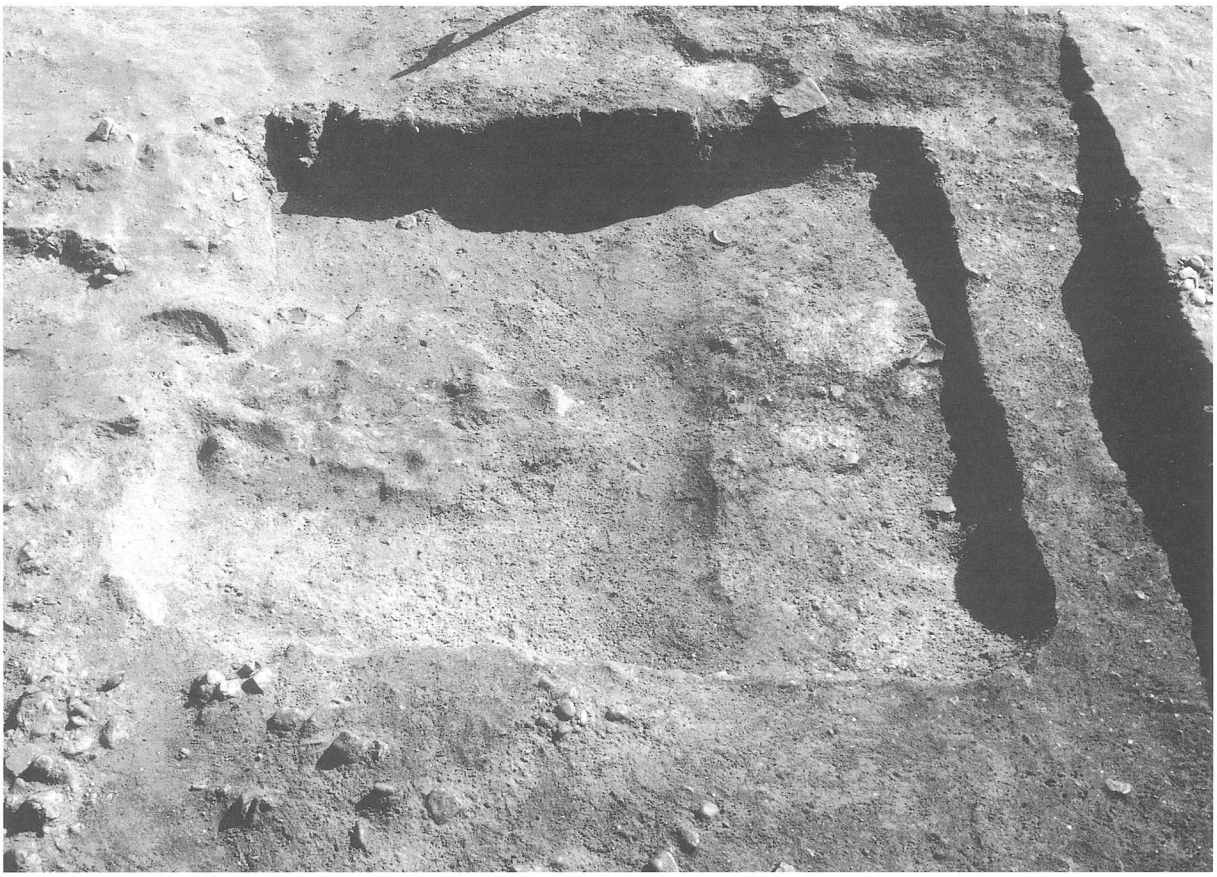


ＳＨ０１　堆積状況（西から）



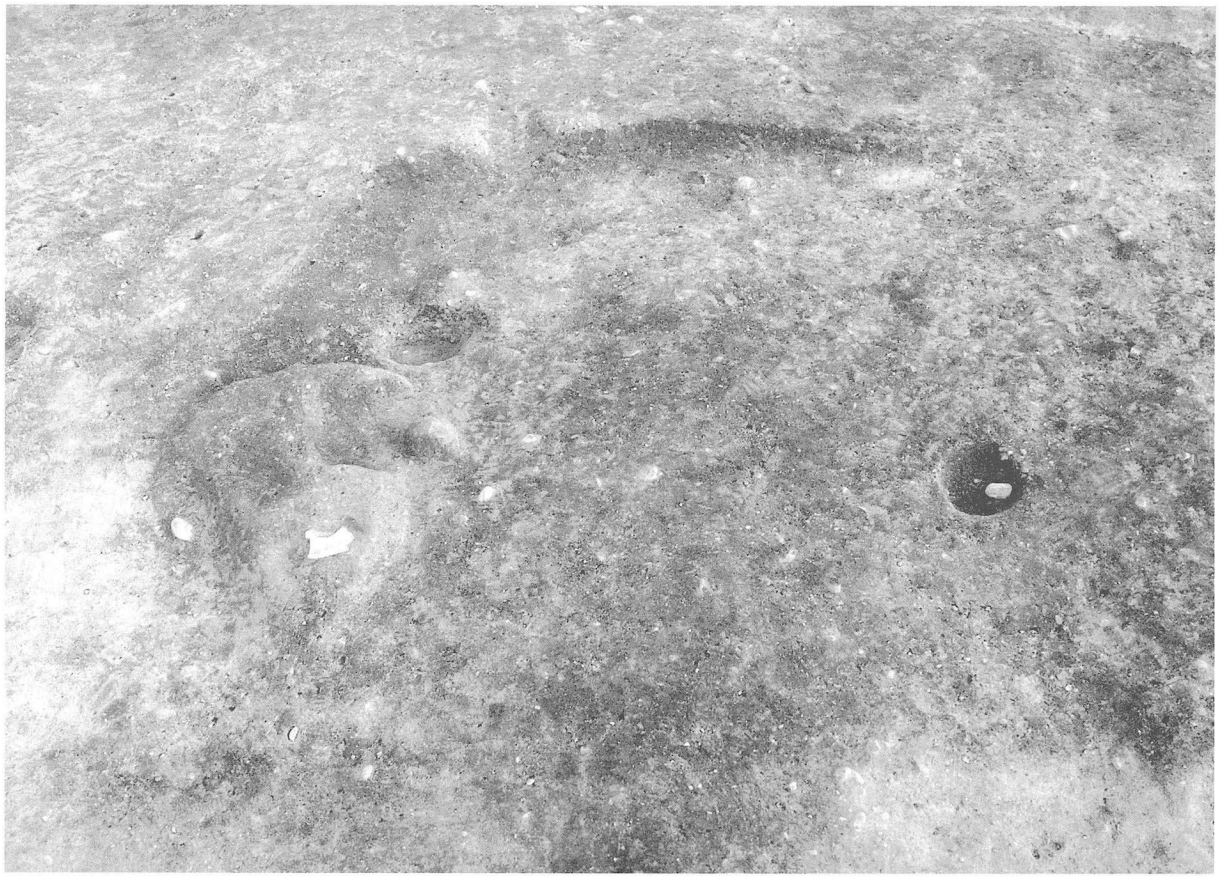


ＳＨ０１　遺物出土状況



ＳＨ０１　全景（西から）

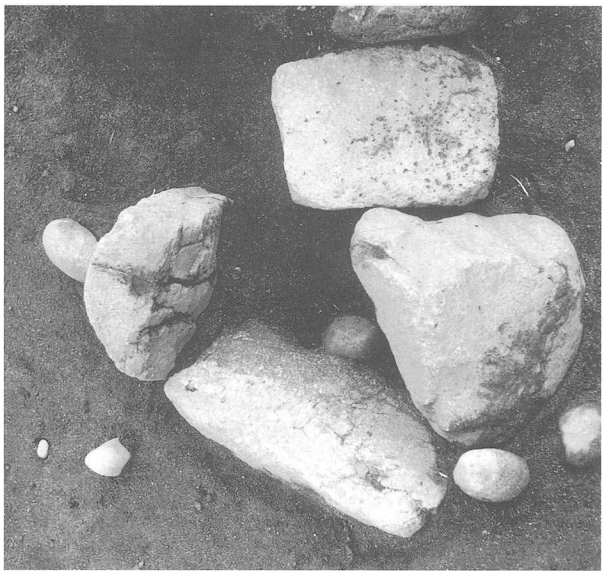
ＳＨ０２　全景（南から）



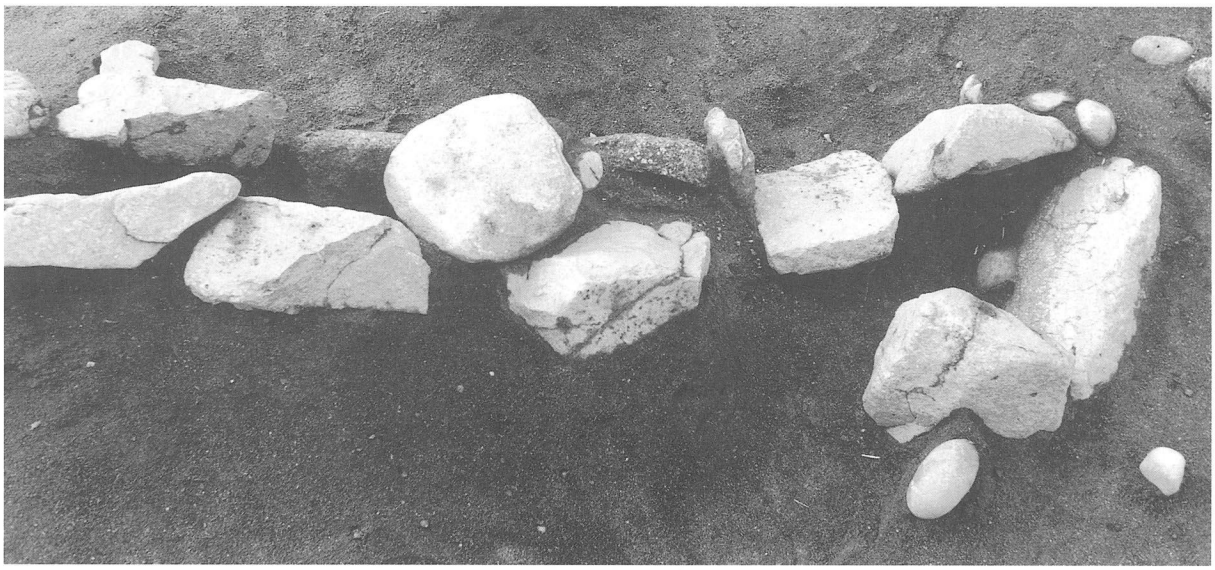
ＳＨ０２全景（西から）

ＳＴ０１　全景（北から）

ＳＴ０１　全景（北から）



ＳＴ０１　遺物出土状態（西から）



ＳＴ０１　全景（東から）

ＳＤ０１　全景（北から）

ＳＫ０１　全景（南東から）

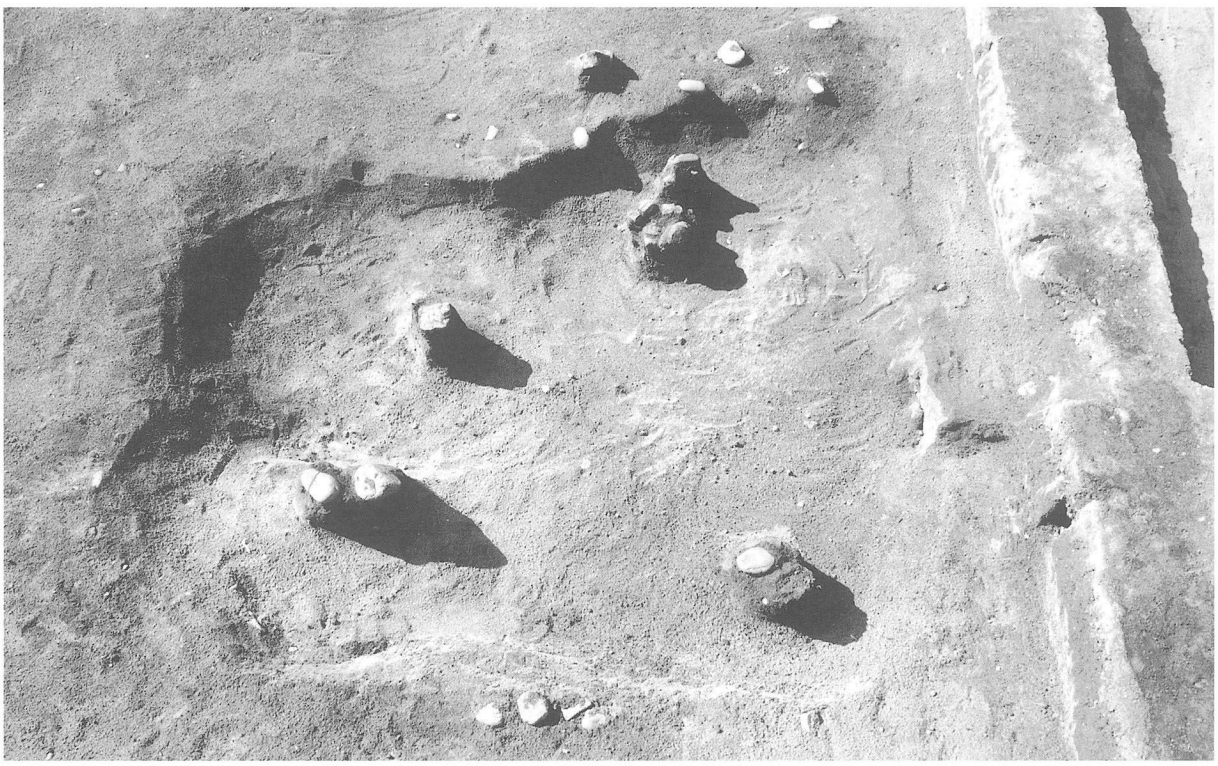
ＳＫ０１　全景（南西から）

ＳＫ０２　全景（西から）

ＳＸ０１　検出状況（北から）

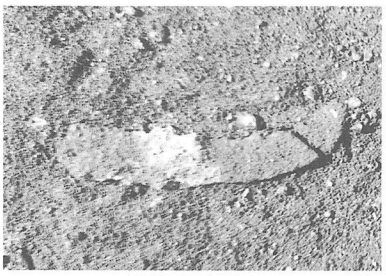
ＳＸ０１　遺物出土状況（西から）

ＳＸ０１　堆積状況（西から）



ＳＸ０２　全景（西から）

ＳＸ０２　堆積状況（東から）



ＳＸ０２　遺物出土状況（西から）

ＳＸ０３　全景（南から）

ＳＸ０５　堆積状況（西から）

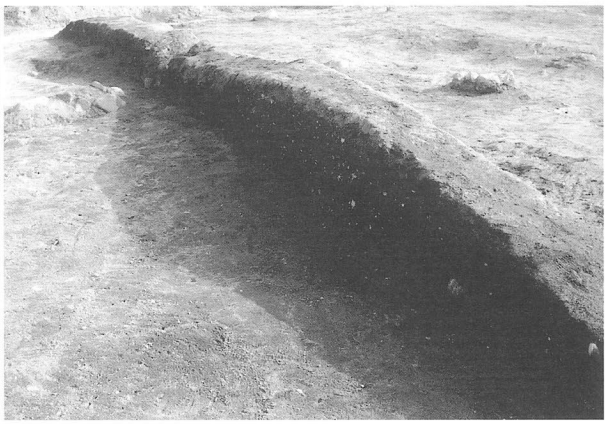
ＳＸ０５　全景（西から）

ＳＸ０６　堆積状況（西から）

ＳＸ０６　検出状況（西から）

A～C間アゼ堆積状況（南西から）

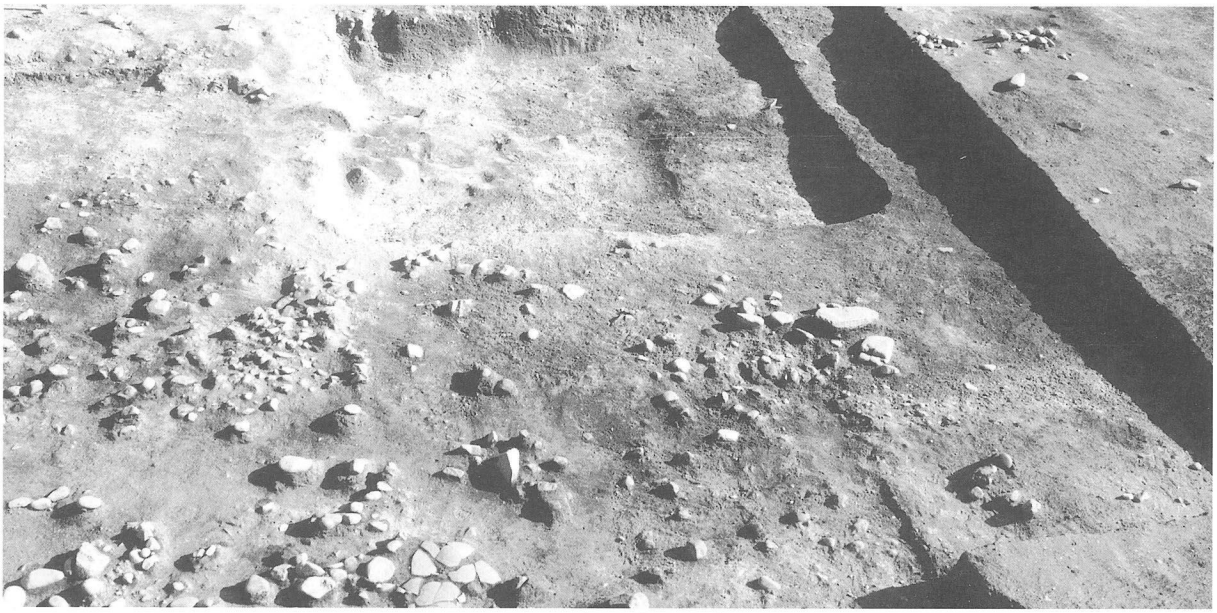
A～C間アゼ堆積状況（南東から）



C～D間アゼ堆積状況（南東から）

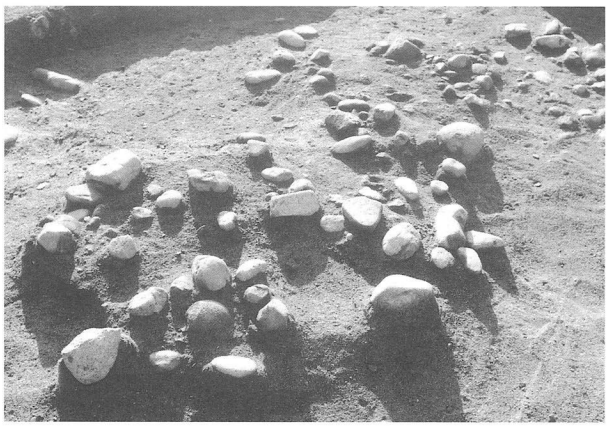
B－3・4　全景（西から）

B－4　全景（西から）

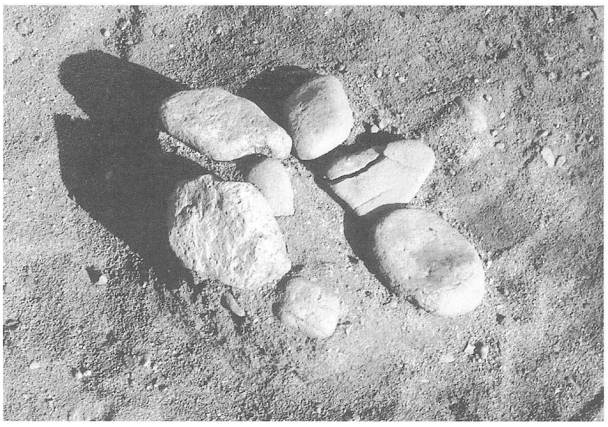


B－5　全景（西から）

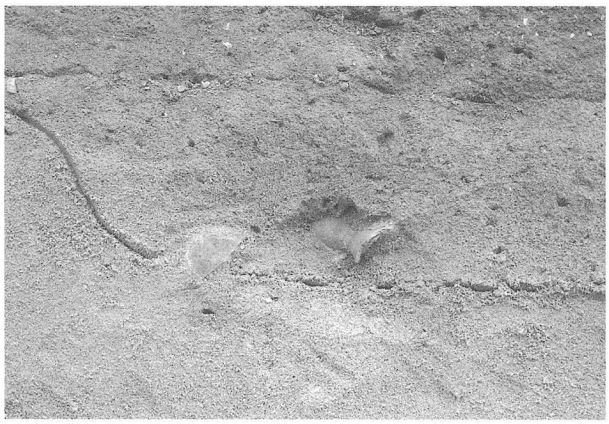
B－4　礫群（東から）



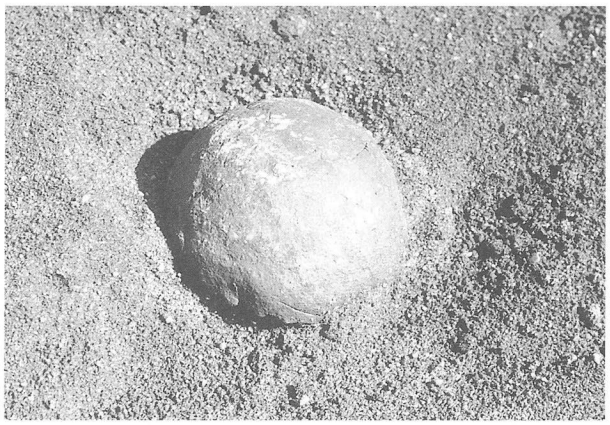
B－4　礫群（北から）



Ａ－２　石組（西から）



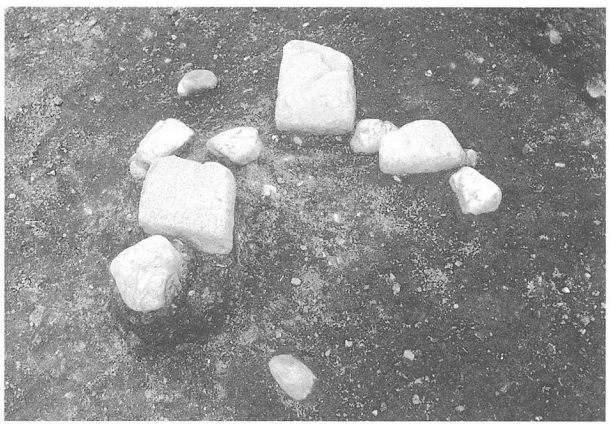
Ｂ－１　弥生土器出土状態（西から）



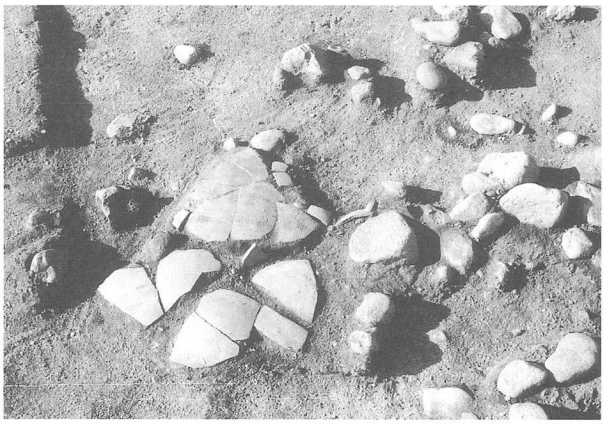
Ａ－３　製塩土器出土状態（西から）

Ａ－１　鉄釣針出土状態（西から）

Ｂ－５　礫群検出状況（南西から）

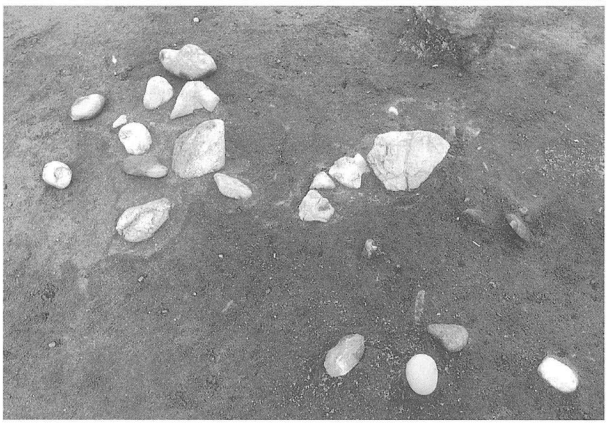


Ｂ－５　石組（西から）

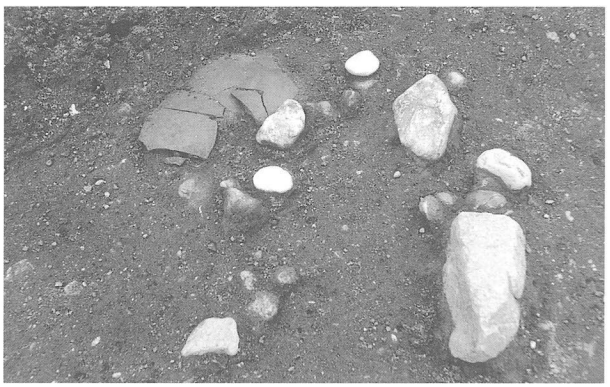


Ｂ－５　土器出土状況（北から）

Ｂ－２　須恵器出土状態（南から）



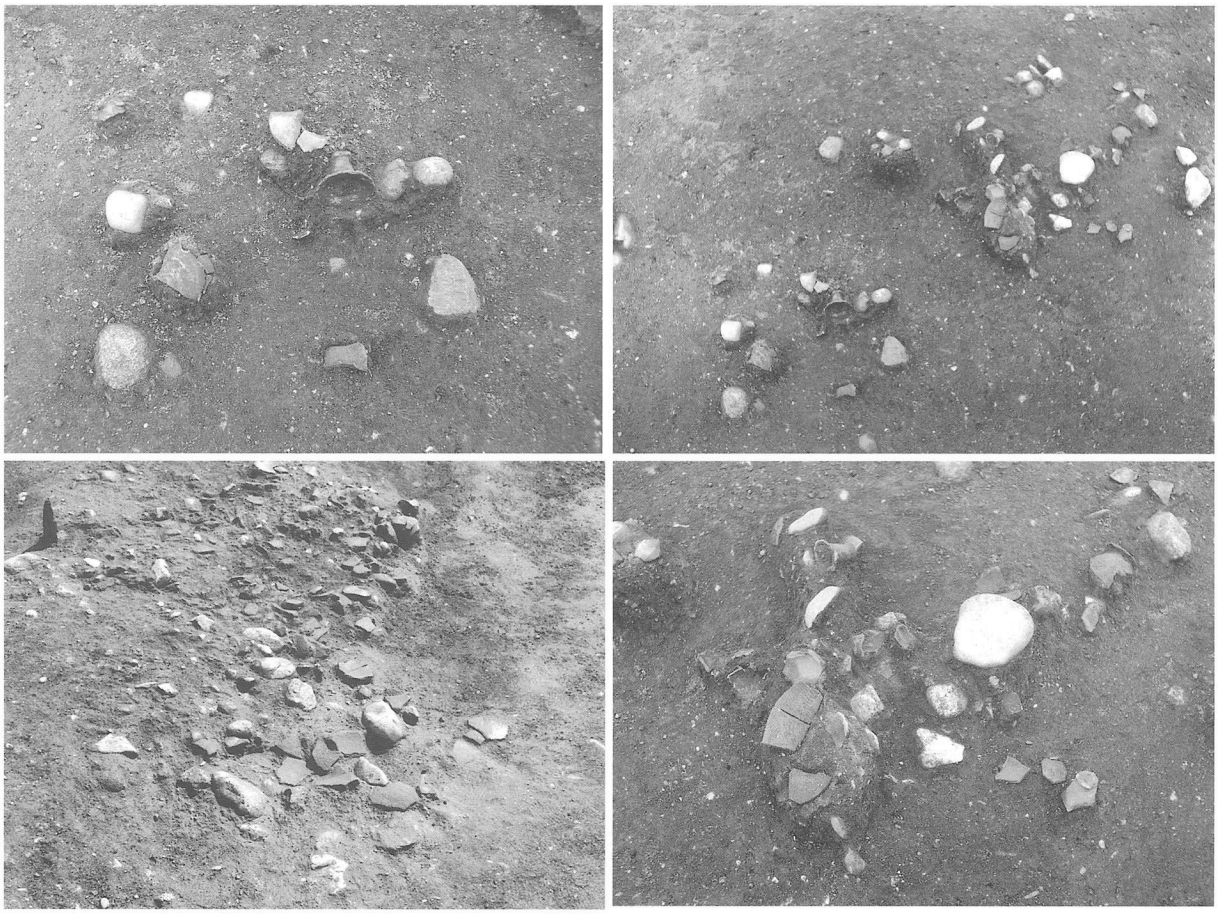
C－2　礫群（西から）　　D－6　礫群（西から）



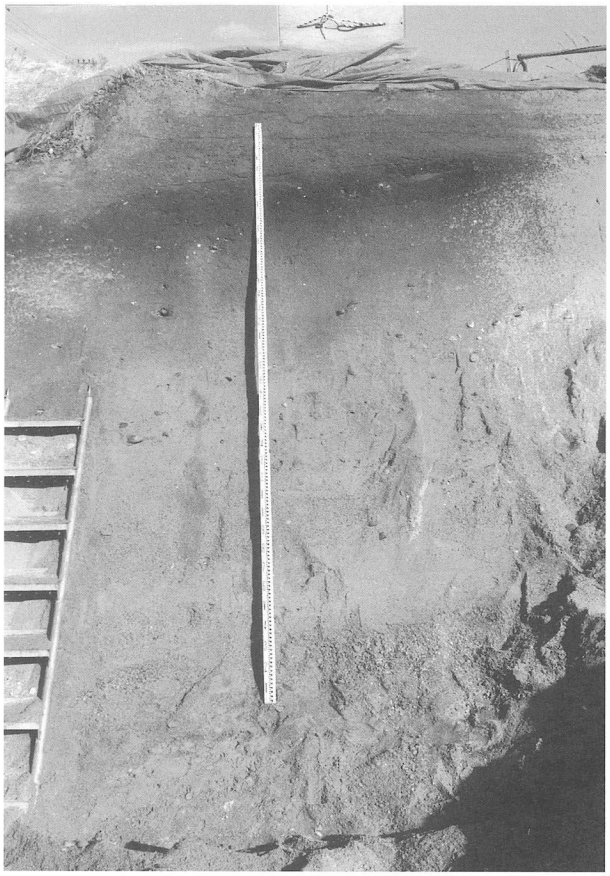
D－5　イイダコ壺出土状態（西から）　　D－5　土師器出土状態（西から）

土　層　断　面

C－5　土器出土状態（西から）



C－5　土器・礫出土状態



断ち割り土層断面

断ち割り土層断面

断ち割り土層断面

下　層　礫